

千葉大学 木下剛研究室

早稲田大学 中谷礼仁研究室

石川初十 福島加津也 十 大高隆 十 元永二郎

持続的環境・建造物群継承地区

# 〈千年村〉研究ゼミナール

Succession Districts for Groups of Durable Environment and Buildings

## 二〇一一年度成果報告

日時 2012年12月20日(木) 18:00~

場所 早稲田大学55号館2棟2階建築学科会議室  
(会議室の使用状況により当日変更の可能性あり)

題目 2012年千年村調査の報告

報告目次 「文化財の確実な継承と地域活性化活用のための防災指針の作成と普及」

1・千年村研究について

2・【疾走調査】報告

房総・南安房疾走調査／九十九里疾走調査／印旛沼疾走調査

3・【詳細調査】報告

海上郡島穴郷／市原市島野 平群郡達良郷／南房総市富浦町多田良

市原市島野詳細調査

4・まとめと今後の展望

お問い合わせⅡ(中谷研究室・外線) 03・5286・2496



# 1 千年村研究について

執筆担当：中谷礼仁／西吉永一

## 1) 研究目的

本研究の目的は、少なくとも千年を超えて集落が存続している可能性のある地域（これを「千年村」と名付ける）を見だし、その地域の生存基盤を分析し、今後の集落一般の自立的存続を支援する情報を提供することである。そのために、以下の方法を取る。

- ① 平安期古文獻（和名類聚抄・931- 938 年成立）に収録された郷名を既往解読成果によって現在の場所へと同定した悉皆的なデータベース構築と地図上へのプロットを行なう。
- ② それらのうち代表的な該当地域に対して実地調査を行なうことにより、集落が持続的に存在していた場合 / していなかった場合の主要因を明らかにする。
- ③ それらによって得られた情報、成果を社会へ発信し、今後の地域アセスメントの方法として提案する。

この研究を行なうに至った経緯には 2011 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災があった。それは特に、内陸においてその復旧が比較的早い段階でなされた事である。例えば岩手県遠野市は、復興活動における物流の拠点として震災の直後から機能した。このような地域が持っている自律的回復力の背後には、立地の妥当性や生活様式の歴史的蓄積等があると考えられる。このような歴史的集落の持つ潜在力は、今後の地域づくりにも十分に参考され、役立てていく必要がある。そのためには地域を、地形や地質といった集落の基盤である「環境」と、それに適応する集落の「構造」、またそこに展開される「コミュニティ」を三位一体のものとして捉え、総合的に評価する必要がある。

現在までに多くの研究者たちが集落研究を行なってきたが、建築史及び建築史の成果が通常の地域アセスメントの方法に直結するには至っていない。本研究はこのような現状を踏まえ、集落及び民家史の蓄積をより総合的価値体系へと連結する役割をもつ、今後の国土全体の持続へ寄与する研究として位置づけたい。

## 2) 研究計画

『和名類聚抄』に記載される千年村は日本全土で約 4000 箇所のにぼる。それを受けて、本研究の研究期間を 5 年と定め、以下の 3 段階を設定した。

### ■ [第 1 期] 基礎研究 対象：日本全国

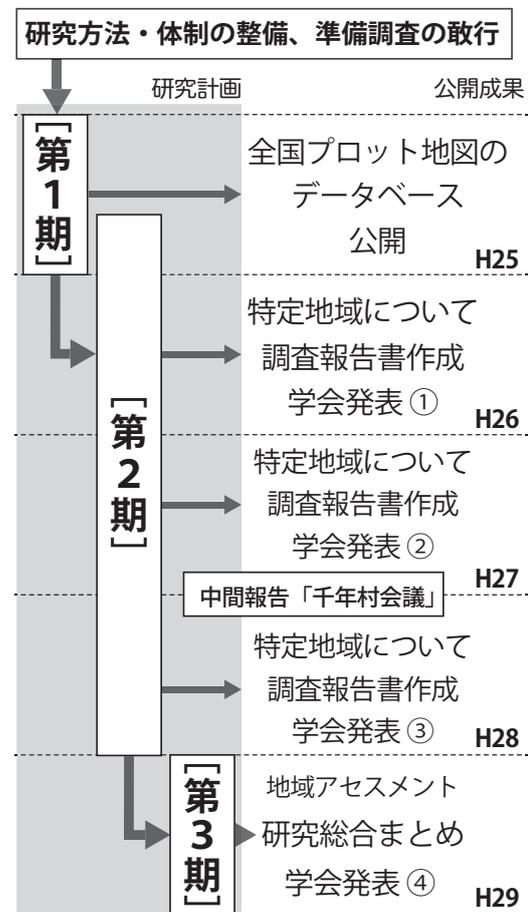
『和名類聚抄』内記載郷名に関する既往成果を照らし合わせることで「千年村」該当地域を客観的に特定し、その分布及び立地要因を明らかにすることを目的とする。各地域の情報は データベース化し、ウェブなど何らかの方法で公開する。

### ■ [第 2 期] 本格的実地調査 対象：関東・関西地域

第 1 期に発見された日本全国に分布する「千年村」のうち、実地調査の対象は、研究者が拠点を置く関東・関西地域とする。調査は広域を実見する悉皆調査と、その中で特に重要な事例となり得ると判断された地域を対象とする詳細調査の 2 段階に分けて行なう。

### ■ [第 3 期] 調査成果まとめ、地域アセスメント構築とその提案

第 3 期は、第 1・2 期までの調査・研究成果のまとめを行ない、各地域の持続における普遍的要因と個別的要因を明らかにする。さらにそれらの成果及び知見を、今後の地域存続のためのアセスメント（評価手法）として構築する。つまり、データベース公開による協力研究機関との連携を視野に入れつつ、未来の自律的生存単位としての「千年村」の発展に寄与する、基礎的な情報ならびに評価方法の提供を目的とする。



### 3) 研究方法

研究方法は、前述の3期に対応してそれぞれ3つの手法を用いる。

#### ■ [第1期] 基礎研究 対象: 日本全国

第1期では、まず千年村を客観的に特定するために、古文献記載地名の同定地を抽出し地図上にプロットする。

- ① 平安期当時の国／郡／郷名が全国規模で網羅されている『和名類聚抄』(931-938年成立)を用いて、当時の郷名(約4000)が同定される現在の場所について、『角川地名大辞典』及び『日本歴史地名大系』など複数の既往研究成果を照らし合わせ、当該地域の一覧表を作成する。この中で古代地名の現在地が特定可能な地域を調査対象地とする。
- ② 精査された地名をデジタル地図上にプロットし「千年村」の分布図を全国レベルで作成する。この分布図に地形図や地質図を重ね合わせることで各地域における集落分布の傾向性に内在する特質を把握する。
- ③ 上記分布図及び郷名の現在同定地一覧表はデータベース化され、ウェブなど何らかの方法で公開される。

#### ■ [第2期] 本格的実地調査 対象: 関東・関西地域

研究者拠点の位置する関東地域(利根川・荒川流域)及び関西地域(紀ノ川・淀川流域)について調査を行なう。まず、関東地域は既に調査研究に着手している千葉県から、同利根川流域である茨城県、東京都、埼玉県と調査地を順次移行する。また、関西地域は京都府、大阪府、和歌山県と調査を行なう。実地調査は、前述の通り悉皆調査と詳細調査の2段階に分けて行なう。

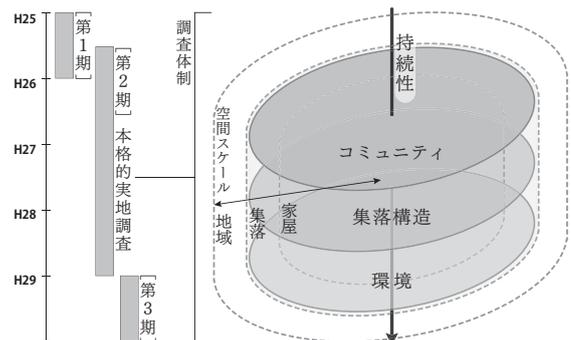
① 悉皆調査範囲として調査対象地を複数取り込む帯域(ゾーン)を設定する。この帯域の設定には、河川流域を参照する。河川流域は、山村、農村、漁村など歴史的集落地域を含む環境単位であり、客観的に設定可能かつ全体的な傾向把握することが可能である。

② 設定された帯域について悉皆調査を行なう。悉皆調査では、帯域中にプロットされた地域全てを実見する。各地域においては居住、生産、交通等の立地及び利用の妥当性を客観的に評価し、詳細調査に足る重要な地域を発見する。

③ 悉皆調査後、特に重要な集落地域について詳細調査を行なう。詳細調査では実測調査、発掘調査資料・地籍図等の現地資料収集、聞き取りなどを行ない、調査地域の持続性を環境、集落構造、コミュニティの見地から総合的に評価する。調査毎に成果は報告書としてまとめ、前述のデータベースへ反映するなど一般へ公開する。

#### ■ [第3期] 調査成果まとめ、地域アセスメント構築とその提案

第3期には、第1・2期までの調査・研究成果まとめを行ない、各地域の持続における普遍的要因ならびに個別的要因を明らかにする。研究成果は前記データベースとともにウェブなどにより公開する。さらにそれらの成果及び知見を踏まえ、今後の地域存続のための方法としてアセスメントを構築、提案する。構築された方法は論文発表等を通して着実に社会へ発信し普及させていく。



### 4) 調査概要

本調査は、2012年に本格的に始動し、現在まで[第1期]と[第2期]を平行して行なっている。本年は、[第2期]調査として以下のように調査を行なった。

#### 0. 調査手法確立調査 対象地: 鳴瀬川流域

- ① 鳴瀬川流域疾走調査—
- ② 三本木詳細調査—

#### 1. 悉皆調査 対象地: 千葉県

- ① 房総・南安房疾走調査—2012/5/11-13
- ② 九十九里疾走調査—2012/6/15-17
- ③ 印旛沼疾走調査—2012/7/21-22

#### 2. 詳細調査 対象地: 千葉県

- ① 海上郡島穴郷／市原市島野—2012/9/28-30
- ② 平群郡達良郷／南房総市富浦町多田良—2012/9/18-21
- ③ 市原市島野詳細調査—2012/11/17-18

各調査の詳細については、本報告書の以降において記述する。

## 第一回〈古凡村〉千葉疾走調査

### 1 目的

本調査は「持続的環境・建造物群継承地区」通称、〈古凡村〉研究のひとつにあたる。

なお、「持続的環境・建造物群継承地区」とは特有の環境条件とそこに存在する建造物群とコミュニティとの間に動的平衡性が古くから持続し現在においても有効に継承されている地区をいう。

本研究は、幾世紀にも渡り存続し、今なお健全な共同体が認められる集落を評価することにより、今後の防災指針を検討する上での基礎資料を提供することを目的としている。

〈古凡村〉は、和名類聚抄に記載されている郷のうち現在地の比定度が高いものとしている。

千葉県においては和名類聚抄に記載されていたのは173郷であり、実際に〈古凡村〉として採用したのはこのうちの51.4%である。

2012年5月11日・13日にかけて行う今回の第一回千葉疾走調査は、千葉に存在する全〈古凡村〉89郷のうち、内房及び安房地域に存在する38郷を調査するものである。

以上から本調査の目的とは、建造物、自然環境、共同体の3つに着目して調査を行うことで、今後も継続していく〈古凡村〉研究において、〈古凡村〉の健全な評価を行うための評価軸を作成することである。

### 2 参加者

(大人)中谷礼仁、木下剛、石川初、大高隆、福島加津也

(千葉大)呉垠錫、楊蓉蓉、高橋大樹、梶尾智美

(早稲田)西吉永一、大村麻衣子、庄子幸佑、小林千尋、堀井隆秀

### 3 調査日程【参加者】

2012年5月11日(金)【中谷、大高、呉、楊、高橋、梶尾、西吉、庄子、大村、小林、堀井】

2012年5月12日(土)【中谷、木下、石川、大高、福島、呉、楊、高橋、梶尾、西吉、庄子、大村、小林、堀井】

2012年5月13日(日)【木下、大高、福島、高橋、梶尾、西吉、庄子、小林、堀井】

## 1 調査地概要

01. 海上郡島穴郷／市原市島野
02. 海上郡馬野郷／市原市姉崎
03. 望沱郡倉戸郷／木更津市瓜倉
04. 望沱郡飢富郷／木更津市十日市場
05. 周准郡凡田郷／君津市大和田
06. 周准郡湯坐郷／君津市下湯江
07. 周准郡山名郷／君津市郡
08. 周准郡三直郷／君津市三直
09. 周准郡額田郷／君津市大井戸
10. 周准郡山家郷／君津市日渡根
11. 長狭郡伴部郷／鴨川市和泉字富部
12. 長狭郡丈部郷／鴨川市大幡
13. 長狭郡丈部郷／鴨川市二子
14. 長狭郡丈部郷／鴨川市江見
15. 朝夷郡御原郷／和田町上三原
16. 朝夷郡満祿郷／丸山町丸本郷
17. 朝夷郡大瀦（ぬま）郷／丸山町杵見
18. 安房郡大井郷／館山市大井
19. 朝夷郡新田郷／千倉町瀬戸字宇田
20. 安房郡白浜郷／白浜町
21. 安房郡神余郷／館山市大字神余
22. 安房郡塩見郷／館山市塩見
23. 平群郡達良郷／富浦町多田良
24. 平群郡砥河郷／三芳村上堀戸川
25. 平群郡石井郷／富山町岩井袋
26. 平群郡川上郷／富山町川上
27. 平群郡狭隈郷／鋸南町中佐久間
28. 平群郡穂田郷／鋸南町保田
29. 天羽郡雨ルウ郷／富津市売津
30. 天羽郡長津郷／富津市加藤
31. 天羽郡讃岐郷／富津市佐貫

- 32. 海上郡倉橋郷／市原市柏橋
- 33. 海上郡佐是郷／市原市佐是
- 34. 市原郡山田郷／市原市山田
- 35. 市原郡海部郷／市原市海士有木
- 36. 市原郡市原郷／市原市門前
- 37. 市原郡湿津郷／市原市潤井戸
- 38. 市原郡菊間郷／市原市菊間

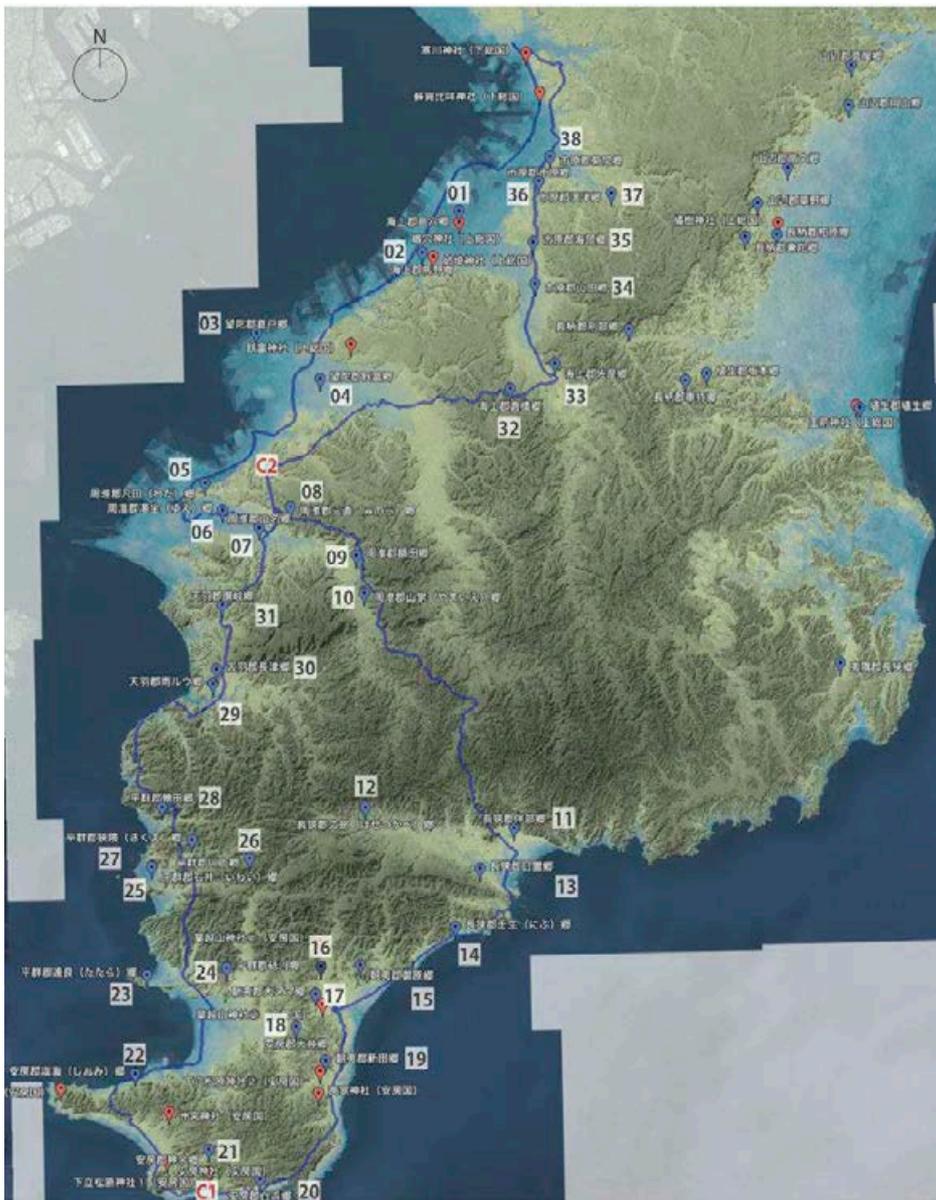


図 ) 本調査における全行程地図（作成：西吉永一）

本調査に際しては、調査前に仮説的な評価基準が構築された。項目は以下の通りである。

1. 古地形による集落存在の有無（前提条件）
  - 1-1. 千年前マップを作成し、プロットされた千年村が本当に陸地であったか
2. 地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無
  - 2-1. 地質・地形からみた集落立地・形態の妥当性
  - 2-2. 地質・地形からみた交通手段・経路の妥当性
  - 2-3. 集落の形態及び交通手段・経路のその後の変容の妥当性

## 2 調査記録

- ・本章では、調査をおこなった千葉県内房・南安房地域 38 村について、その内容を報告する。
- ・調査に際しては、先に述べた通り、対象 38 村を地形的特質等から 3 つのグループに分けた。
- ・本報告書の構成もそれによっている。
- ・

### 2-1 市原市・養老川流域

#### ・01. 海上郡島穴郷／市原市島野

古くから続く農村であったと予想される。評価基準である 1.古地形図による集落存在の有無の妥当性としては、この集落は海拔 2-4m に位置しており、1000 年前の海拔を現在より 5m 高かったと推定すると陸地であったとは必ずしも言い切れない。

地質的には 18000 年前～現在にかけて堆積したと考えられている水の作用を受けてできたと思われる海成層と砂丘の地質が入り組んだ場所に位置しており、今回の対象集落のある場所は砂丘部に限定され、微高地に集中して立地している。また、集落全体に堀が張り巡らされており、水利の面においては整備がされている様子をうかがうことができた。またその際に、微妙な高低差を生かしている点は注目に値する。その豊かな水資源と水系インフラを巧みに利用・管理することで周囲の水田・畑においては豊かな生産力を持つのではないかと予想することができる。

集落の中心に位置する嶋穴神社という式内社は古い歴史を持っている。現在も整備・利用されている様子をうかがうことができ、今もなお対象集落の中心として機能していると言えるだろう。

水田においては圃場整備がなされたのか整序され規則的であったのに対し、集落内の道路はやや不規則で入り組んでおり細かった。また、1946 年、1975 年の航空写真と現在を比較してみても、集落の広がりはそれほど変わっていない。

以上より、評価基準の 2.地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無によく該当していると考えられる。対象集落の近くでは新たな道路が開発されようとしており開発が盛んになってきている様子が見受けられた。これにより集落存続のためのシステムが開発による近代化の影響によってどのように変化していくのか気になった。

また、集落の断面モデル図より、いくつかのパターンはあるものの、道路と水路がセットになっており、集落全体に張り巡らされていた。全体で見た場合、生産の場+水路+道路+宅地のセットになっていることがわかった。交通網と水路網を一体化することで集落内の密度を軽減し効率を良くすることで機能的になるのではないかと考えられる。

01. 海上群島穴郷／市原市島野

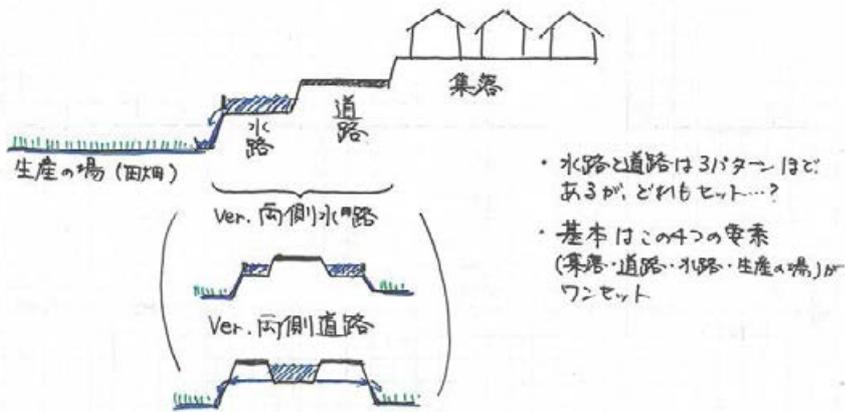


図 ) 集落の断面モデル図 (作成：梶尾智美)



図 ) 集落周辺の交通網 / 図 ) 集落周辺の水路網 (作成：梶尾智美)

(執筆担当：梶尾智美)

・ 02. 海上郡馬野郷／市原市姉崎

評価基準である 1.古地形図による集落存在の有無の妥当性としては、この集落は海拔 2~4m に位置しており、1000 年前の海拔を現在より 5m 高かったと推定すると陸地であったとは必ずしも言い切れない。

姉崎神社という古くからの歴史をもつ式内社の北東には農地があるが、北西には旧海岸線と  
思われる水路が通っており、集落のものと姿を確認することはできない。対象集落は地質的に  
は 18000 年前～現在にかけて堆積したと考えられている水的作用を受けてできたとされる海  
成層の上に位置しており、姉崎神社は川沿いのやや高い所に分布している約 15 万年前～7 万  
年前に形成された段丘層に位置している。

集落と姉崎神社を分断するようにバイパスが通っており、神社そのものは機能しているが、  
日常空間における存在感は薄いのではないかと考えられる。また、東京湾沿いには埋め立て地  
が発達しており、輸送のための大きな道路が隣接している。

以上より、評価基準の2.地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無には該当しないと  
考えられる。しかし、近代化による集落の変遷と集落維持のシステムがどのような要因で断ち  
切られたのかを知るための視点を得られると考えられる。

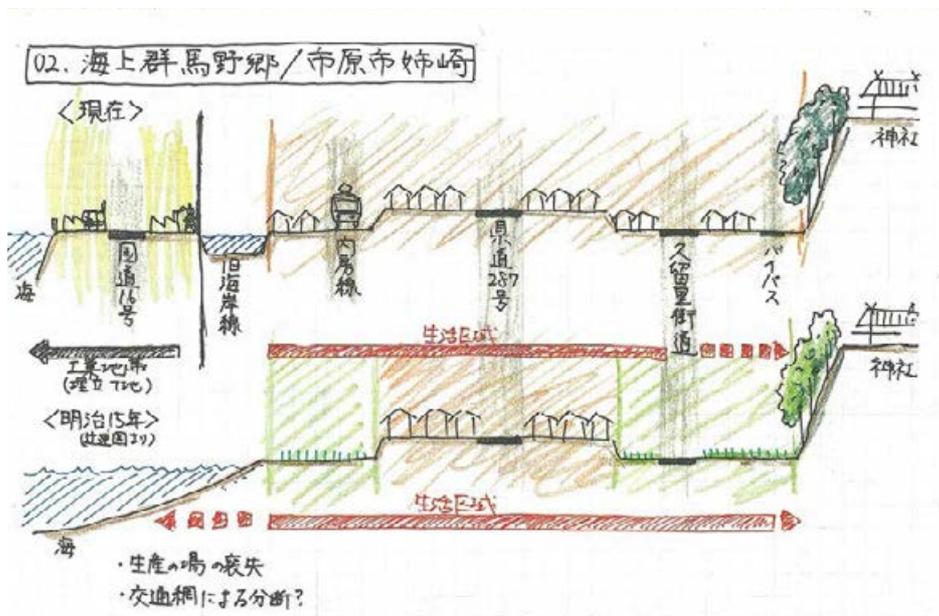


図 ) 集落の変容を示す断面モデル図（作成：梶尾智美）

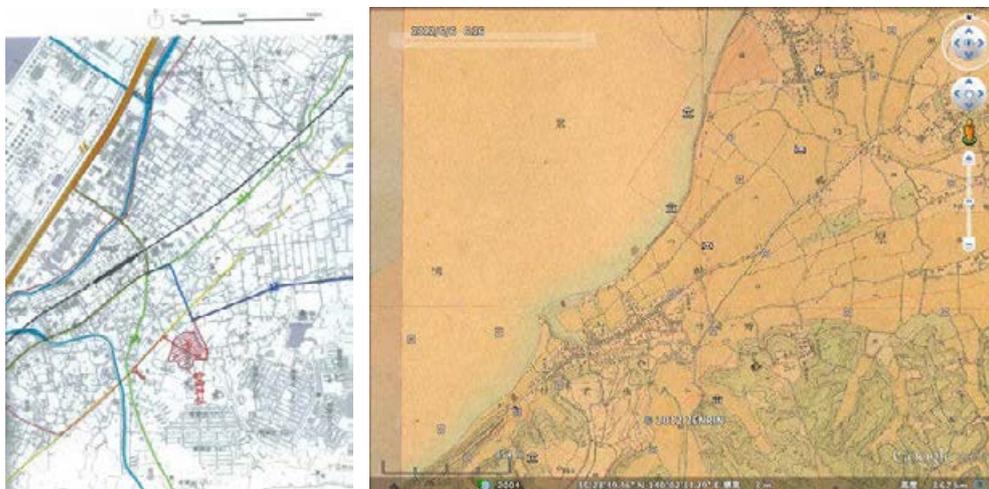


図 ) 集落周辺の主要道路 / 図 ) 迅速測図（明治 15 年）（作成：梶尾智美）

また、等集落の周辺には大きな道路がいくつも通っておりこれらの道路のうちいくつかは迅速測図でも確認できる。道路が整備されたことによる集落の影響とその変遷をたどることで、交通網によって集落が分断される理由の有無を確認できる可能性がある。

（執筆担当：梶尾智美）

### ・03. 望沱郡倉戸郷／木更津市瓜倉

もとは漁村集落であったと考えられる。評価基準である 1.古地形図による集落存在の有無の妥当性としては、この集落は海拔 2~4m に位置しており、1000 年前の海拔を現在より 5m 高かったと推定すると陸地であったとは必ずしも言い切れない。

地質的には 18000 年前～現在にかけて堆積したと考えられている水的作用を受けてできたとされる海成層と砂丘の地質が入り組んだ場所に位置しており、今回の対象集落のある場所は砂丘部に限定され、微高地に集中して立地している。

東京湾アクアラインを挟むようにして東西に古い集落が位置しており、これら 2つの集落はアクアラインが通る前も平面的には少し離れていたことが迅速測図からわかる。このことから、このバイパスによって平面だけではなく視覚的、立体的にも集落が二分されたのではないかと予想される。

主要道に面して家屋が建っており、その奥へと家屋が増築、または他の家が詰め込まれるようにして建てられており建築が高度に密集していた。また、ブイや網、籠といった漁の道具を庭先や共有スペースに見ることができた。迅速測図と 1975 年の航空写真と現在を比較してみても、集落の広がりはそれほど変わっていない。

海岸部に位置するもう一つの集落である瓜倉高須周辺も同様に住宅が密集している印象を受けた。瓜倉の集落と違いこの地域には田畑が広がり、生産する場があり、細い道路が不規則に入り組んでいた。

生産する場である田畑に繋がる水路網も見受けられたが、耕作放棄地と思われる箇所も多く豊かな生産力を伺うことはできなかった。田畑は圃場整備がなされたのか集落内の入り組んだ道とは違い整序され規則的であった。どちらの集落も建築は更新されており新しいものが多かった。

以上より、評価基準の 2.地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無に該当していると考えられるが、上でも述べたように、対象集落を分断するように東京湾アクアラインが通っており、これにより既存集落が分断されてしまっている。集落存続のためのシステムが開発による近代化の影響によって変化した変遷と、空間的に分断されることの影響を確認することで新たな評価基準の視点を得られる可能性があると考えられる。

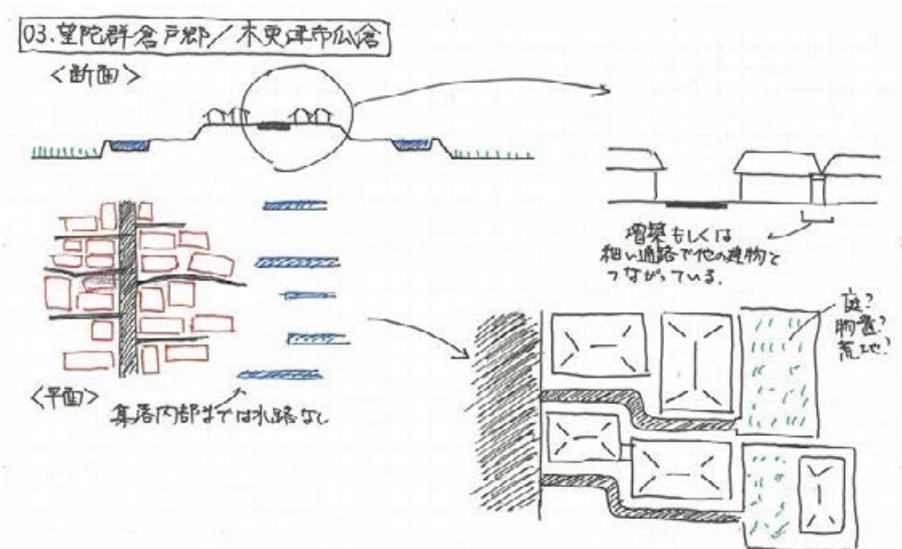


図 ) 集落の断面モデル図（作成：梶尾智美）



図 ) 集落周辺の交通網 / 図 ) 集落周辺の水路網（作成：梶尾智美）

（執筆担当：梶尾智美）

#### ・04. 望陀群飢富郷 / 木更津市十日市場

小櫃川下流の農村。標高6～9mであり、千年前の海拔を現在より5m高かったと推測すると、十日市は陸地ではなかった、または陸地ではあるが海に面していた可能性がある。背後の北部一帯が水田地帯であり、川東には屋敷林がみられる。川東から十日市場までのアクアライン連絡道は集落を避けるように通っていた。飽富神社（旧称：飢富神社）は平安時代初期に記された史書「三代実録」や法令集「延喜式」にその名が記されている式内社であり、千年以上前から存在した古社である。有吉-飯富間の水田は整然と区画されていた。

水の供給における制度や集落間の関係が今後の調査テーマとしてあげられ、十日市のみでなく、飯富まで含めた広域の視点を持つことが望ましい。基準 2-1、2-3 の検討に値する。

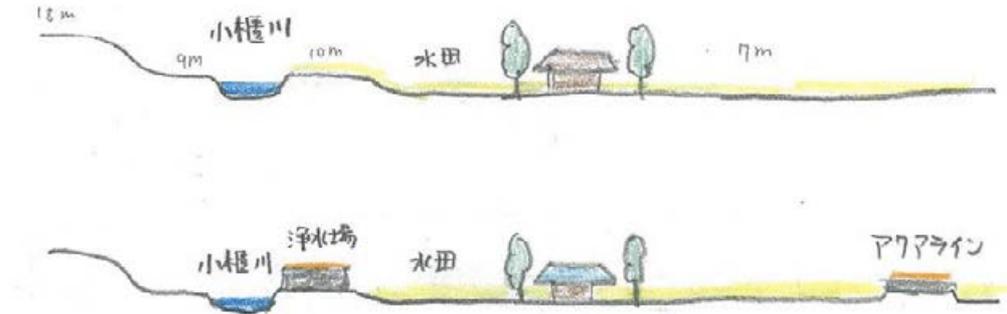


図 ) 十日市場 ダイアグラム (断面) (作成：小林千尋)

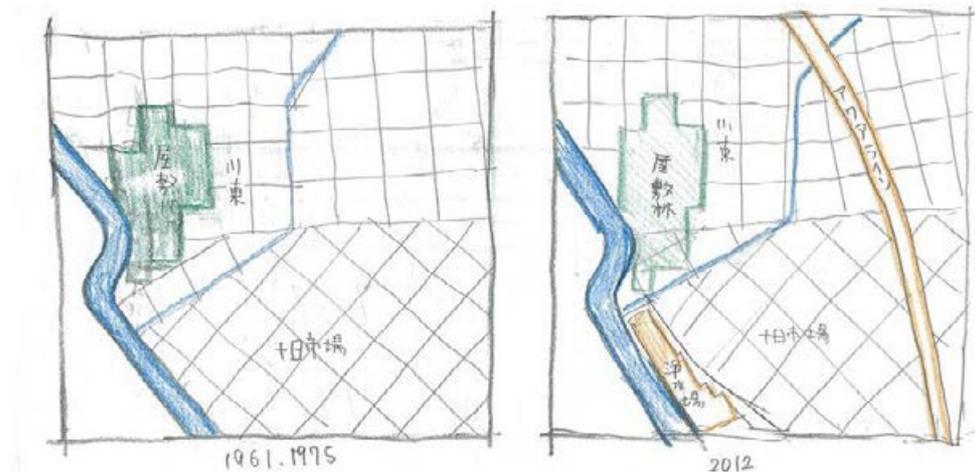


図 ) 十日市場ダイアグラム (平面左 1975 年・右 2012 年) (作成：小林千尋)



図 ) 十日市場 町域図 (作成：小林千尋)

(執筆担当：小林千尋)

・ 32. 海上郡倉橋郷／市原市栢橋

山村集落。養老川上流の谷戸に立地している。集落の規模大きくないが、各個の家が立派で、長屋門と蔵を有している家も多く見られた。田と畑は小規模であり、生産方法が見えにくい。周辺の山々がゴルフクラブ、牧場、レースウェイに利用されているため、土地を売買することによって収入を得ている可能性がある。以上より基準 2-1 の検討に値する。



栢橋 ダイアグラム（断面図）（作成：小林千尋）



図 ) 栢橋 ダイアグラム（平面）（作成：小林千尋） / 図 ) 栢橋 町域図

（執筆担当：小林千尋）

・ 33. 海上郡佐是郷／市原市佐是

養老川左側の沖積地を占め、島のように高くなった微高地に閉鎖的に集落が立地する。集落内の通路は狭く、高い生垣を有する。養老川が大きく蛇行しており、川回りは水田として利用されている。ランドスケープ的な見所が多い。古来からの養老川と村の関係を今後の詳細研究テーマとしたい。評価基準 2-1、2-2、2-3 に値する。



図 ) 佐是 ダイアグラム（断面）（作成：小林千尋）

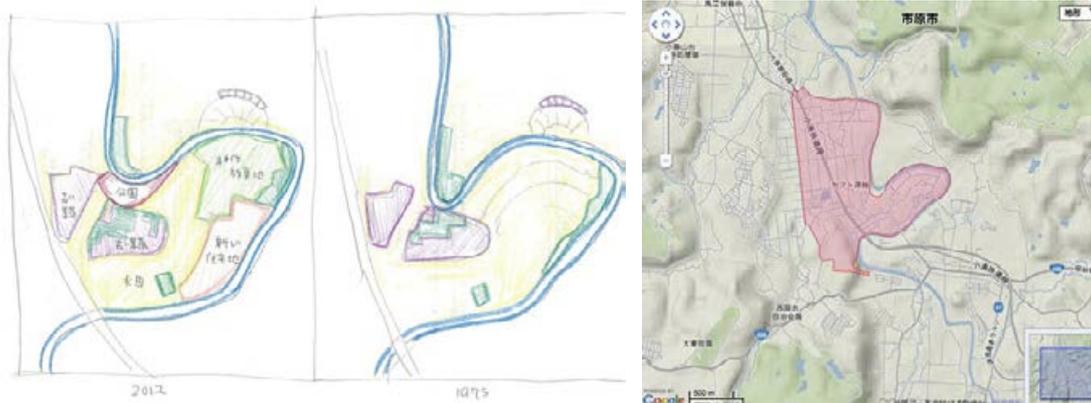


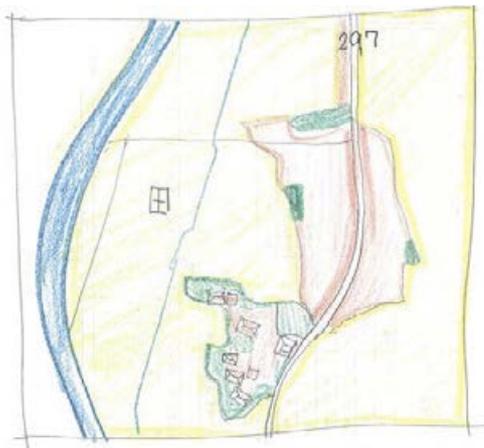
図 ) 佐是ダイアグラム（平面 左 2012 年、右 1975 年）（作成：小林千尋） / 図 ) 佐是 町域図  
（執筆担当：小林千尋）

### ・ 34. 市原群山田郷／市原市山田

農村。国道 297 号線沿いに集落が並び、背後に水田が広がる。千年前は海が近かった可能性が非常に高い。明治時代の農業環境がそのまま活用されている。かつての山田村の集落はそれぞれに屋敷林を持っていて家も立派である。山田の傍に二日市場という地名があり、道（交通）から集落が発展したのではないかと予想される。評価基準 2-4 に値する。



山田 ダイアグラム（断面）（作成：小林千尋）



山田 ダイアグラム（平面）（作成：小林千尋） / 図 ) 山田 町域図

（執筆担当：小林千尋）

## ・ 35. 市原郡海部郷／市原市海士有木

### 1) 集落立地の妥当性の有無

当集落は、海拔 13m に位置し、1000 年前の海拔を現在より 5m 高かったと推定すると、千年前は陸地上であったと考えられる。

また地質的には、後期更新世（7 万年前～1 万 8000 年前）に形成された低位段丘、堆積物と後期更新世から完新世（1 万 8000 年前～現在）にかけて形成された堆積岩類の境に位置し、集落は低位段丘側にある。

### 2) 地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無

大多喜街道沿いに集落がまとまっている。この付近では養老川が大きく湾曲しており、多くの水害があったのではないかと考えられる。大多喜街道と養老川の間には耕地整理された水田が広がっている。海士有木町域を見ると、養老川と並行し、自然堤防上に集落が立地していることが分かる。

海士有木という地名は、海士は海人集落の名残、有木は蟻木城（現在の泰安寺があった地）の名残と考えられている。大坪地区の居住部分と田畑部分を分ける道は養老川や田畑とは無関係に湾曲しており、これは縄文海進期の名残ではないかと考えられる。特に北側の地区は、その道に面するように住宅が配置されている。以上より、評価基準 2-1 及び 2-3 に合致していると考えられる。



図 ) 現在の海士有木町域と 1945 年の航空写真



図 ) 養老川が形成した微高地上の集落とその眼前に広がる水田

（執筆担当：庄子幸佑）

## ・ 36. 市原郡市原郷／市原市門前

### 1) 集落立地の妥当性の有無

当集落は、海拔 9m に位置し、1000 年前の海拔を現在より 5m 高かったと推定すると、千年前は陸地上であったと考えられる。

また地質的には、後期更新世（15 万年前～7 万年前）に形成された中位段丘、堆積物と後期更新世から完新世（1 万 8000 年前～現在）にかけて形成された堆積岩類の境に位置し、集落は中位段丘に立地し、田畑は堆積岩類上にあることがわかる。

### 2) 地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無

大多喜街道沿いに位置する集落。現在は住宅地化している。1945 年の航空写真を見ると、当

時は防砂林によって囲われた部分がひとまとまりの集落であったようだが、現在はその間に住宅がスプロールし、まとまりが不明瞭になっている。昭和30年代から住宅地として開発が進み、1974年の航空写真を見ると、住宅のスプロールや町営住宅など現在に近い集落がみえる。集落は台地上に立地しており、西には耕地整理された田畑、東には水路と整理されていない小さな水田に挟まれる形になっている。集落西側は大多喜街道あたりから下り続け、集落と田畑の堺には大きな高低差があり、そこは林となっている。また東の水田を超え、また上がったところには墓地と変電所が隣接している。以上より、評価基準 2-1 及び 2-3 に合致していると考えられる。

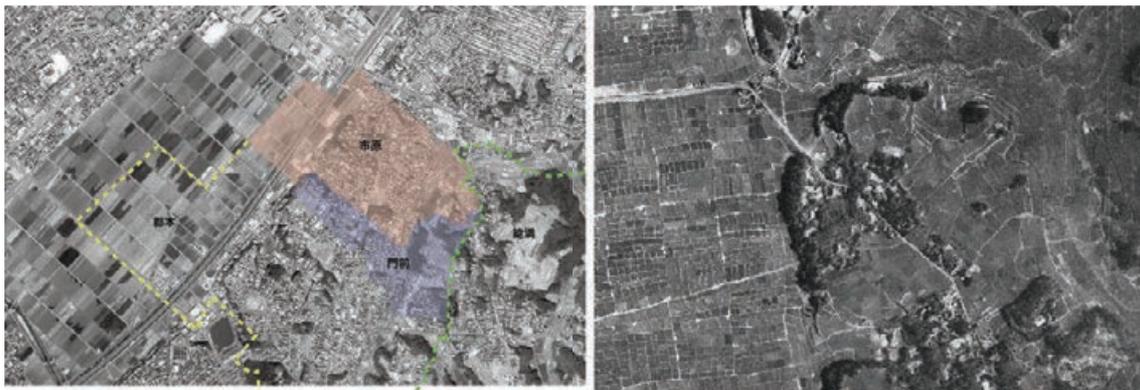


図 ) 市原・門前・郡本・能満の町域 / 図 ) 1945年の門前付近

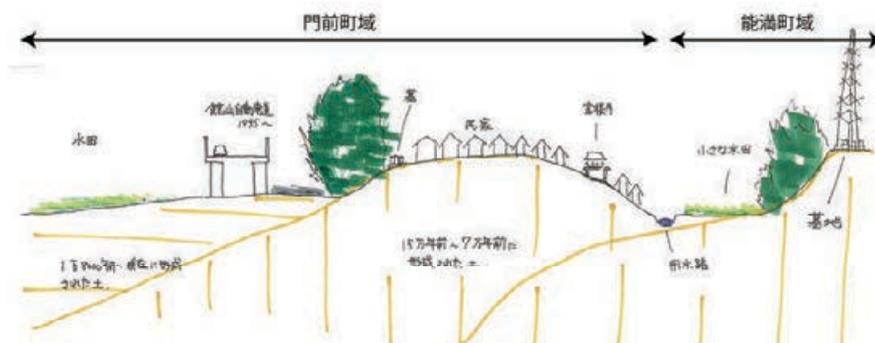


図 ) 門前の集落断面ダイアグラム

(執筆担当：庄子幸佑)

### ・ 37. 市原郡湿津郷／市原市潤井戸

#### 1) 集落立地の妥当性の有無

当集落は、海拔 13m に位置し、1000 年前の海拔を現在より 5m 高かったと推定すると、千年前は陸地上であったと考えられる。

また地質的には、後期更新世（15 万年前～7 万年前）に形成された中位段丘、堆積物と後期

更新世から完新世（1万8000年前～現在）にかけて形成された堆積岩類の境に位置し、集落は中位段丘に立地し、田畑は堆積岩類上にあることがわかる。

## 2) 地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無

潤井戸、喜多地域に住宅がまとまっている。草刈-潤井戸-喜多を結ぶ道に面して住宅が立ち並んでおり、これは1947年の航空写真でも確認でき、潤井戸の中心な場所であったと考えられる。現在、集落を茂原街道が貫いているが、1947年の航空写真では確認できず、集落の形成とは関係がないことがうかがえる。村田川と集落の間には水田が広がる。また居住地南には、市原市潤井戸浄水場やタカラ食品工場、千葉積水工業工場など巨大な施設群が立地している。集落北部に広がる水田は、1961年の航空写真を見ると、特に整備はされておらず、村田川の形も現在とは異なり、湾曲していたもので、近代的な技術によって土地が改変されている。南に立地する近代的施設群は、1970～1974年の間につくられはじめている。

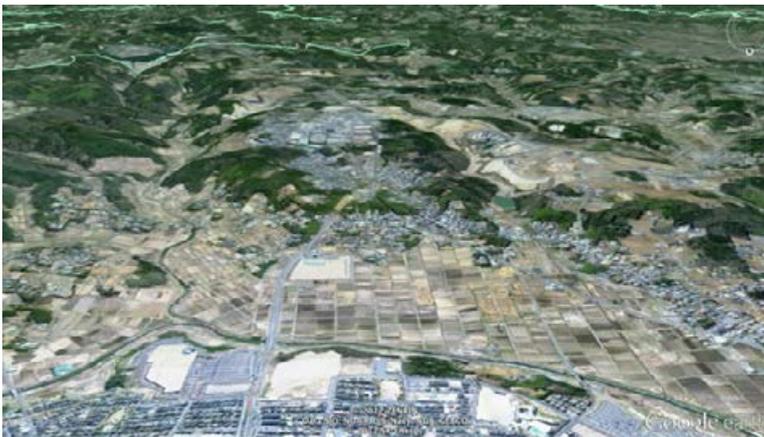


図 ) 潤井戸の集落構成（地形を強調）

潤井戸に位置する白幡神社の裏には、元和2（1616）年～寛永3（1626）年に築造された、大きな湖がある。この湖から水田への水が供給されており、水神宮の碑文によると「源泉湧混混南山崖谷間 玄冥布？徳双渠流不殫 永潤井土民生頼以安 此祠蓋係文化十四年丁丑創立矣今」（下記サイトより）とあり、この湖の水源は台地からの湧き水であることが伝えられている。文化14（1822）年には水神様が祀られ、潤井戸の人々によって管理されていた。この潤井戸は文化元（1808）年に刊行された『四天王剽盗異録』にも登場する。

以上より、評価基準 2-1 及び 2-3 に合致していると考えられる。また評価基準 2-4 についても、新しい交通網や近代的施設群の乱立、近代技術の介入によって、集落がどのように変遷したかを追うことの出来る要素は備えていると思われる。

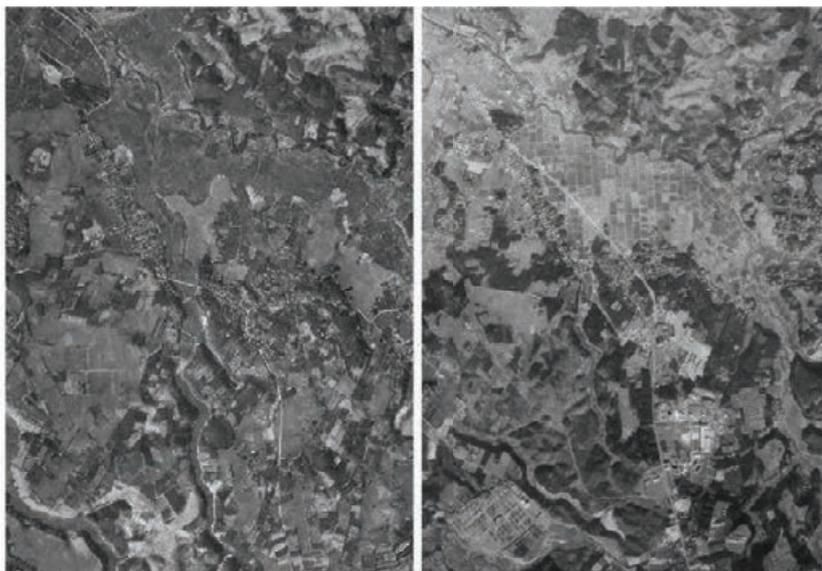


図 ) 潤井戸航空写真（左：1947年 右：1973年）

（執筆担当：庄子幸佑）

## ・ 38. 市原郡菊間郷／市原市菊間

### 1) 集落立地の妥当性の有無

当集落は、海拔 9m に位置し、1000 年前の海拔を現在より 5m 高かったと推定すると、千年前は陸地上であったと考えられる。

また地質的には、後期更新世（15 万年前～7 万年前）に形成された中位段丘、堆積物と後期更新世から完新世（1 万 8000 年前～現在）にかけて形成された堆積岩類の境に位置し、集落は中位段丘に立地し、田畑は堆積岩類上にあることがわかる。

### 2) 地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無

住宅地。明治元年から明治 4 年の間に菊間藩として上総国に存在。藩庁跡は現在、小公園として残されている。集落南に位置する若宮神社について、表層地質図・地形分類図・土壌図を見ると、このあたりで土の性質に変化が見られる。千葉千年前地形図と照らし合わせると、古代では台地上の突端だったところであり、そこに若宮神社が位置していたものと考えられる。若宮神社境内には、千年前から存在したと説明される大木もある。また現在の若宮神社の参道は古代、海へ向かっていたものと考えられるが、現在は道路によって参道が分断されている。菊間団地、菊間終末処理場、大多喜ガス菊間供給所など近代的な施設が集落の際と思われる場所に立地している。町域を見ると、館山自動車道を挟んだ西側部分も含み、菊間の管理下にあるものと考えられる。

1947 年の航空写真を見ると、集落は若宮地区を除き、ほぼ現在と同様。また 1947 年では現在とは村田川の形が異なり、河川改修が行われている。

以上より、評価基準 2-1 に合致すると考えられる。



図 ) 菊間の変遷（左：1945年 中：1988年 右：1996年）

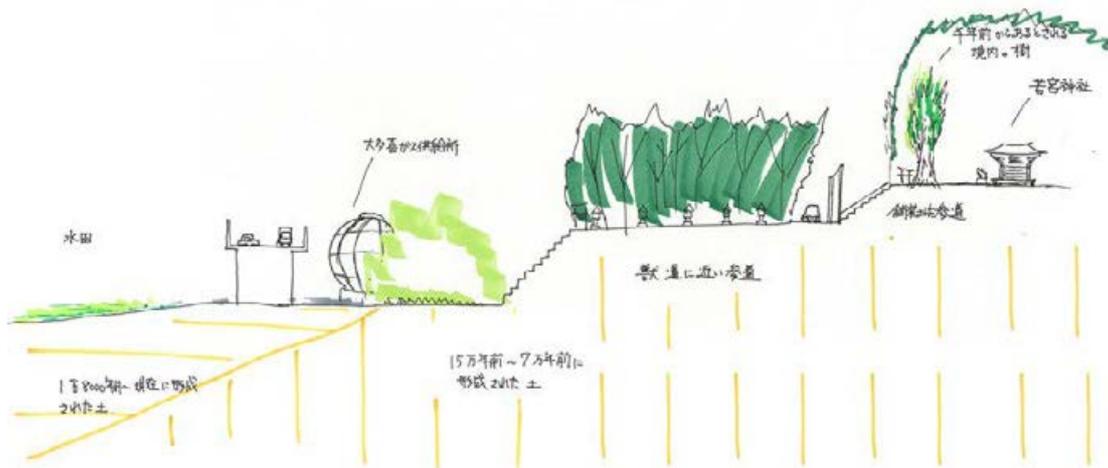


図 ) 菊間の集落断面ダイアグラム

（執筆担当：庄子幸佑）

## 2-2 木更津・

### ・5. 周淮郡凡田郷／君津市大和田

小糸川の下流に広がる平野と、人見山の山頂に存在する人見神社を中心として小糸川沿いを中心とした集落形態が見られた。

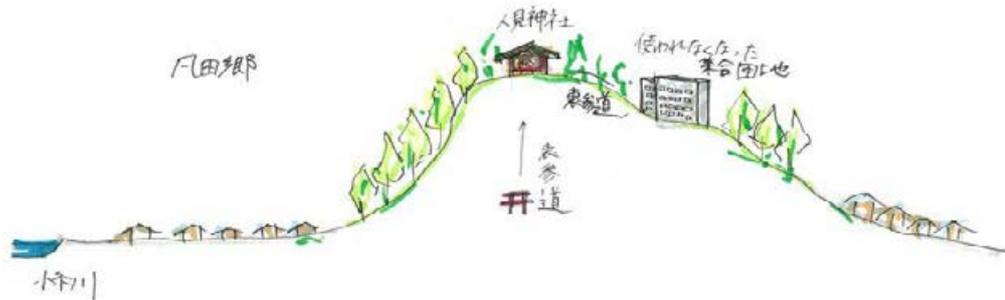


図 ) 大和田概念図（作成：大村麻衣子）

#### 2.地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無

##### 2-1.地質・地形からみた集落立地・形態の妥当性

小糸川の下流に存在する集落は、豊富な水資源を利用できる水田に適した土地であり、河川を基盤とした村落が形成されてきた場所であると推察される。

##### 2-2.地質・地形からみた交通手段・経路の妥当性

##### 2-3.集落の形態及び交通手段・経路のその後の変容の妥当性

人見山はかつて畑として耕された土地であったが、工業化によって団地が開発されるなど大きく変貌した土地である。特に、東京電力発電所・アクアラインの建設によって平野に存在していた水田が住宅地として開発されたと考えられ、現在では存在していた村落の形態が確認出来ない状態となっている。



図 ) 大和田 1946 年（「国土変遷アーカイブス」より） / 図 ) 大和田・現在（google map より）

（執筆担当：大村麻衣子）

## ・ 6. 周淮郡湯坐郷／君津市下湯江

小糸川の支流である江川が流れる平野に存在する集落。

### 2.地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無

#### 2-1.地質・地形からみた集落立地・形態の妥当性

三船山の北沿いや水田に村落が点在している。三船山までも畑として利用されており、また集落もそれぞれに水田を持っている事が伺える。



図 ) Google map より湯江地図

#### 2-2.地質・地形からみた交通手段・経路の妥当性

#### 2-3.集落の形態及び交通手段・経路のその後の変容の妥当性



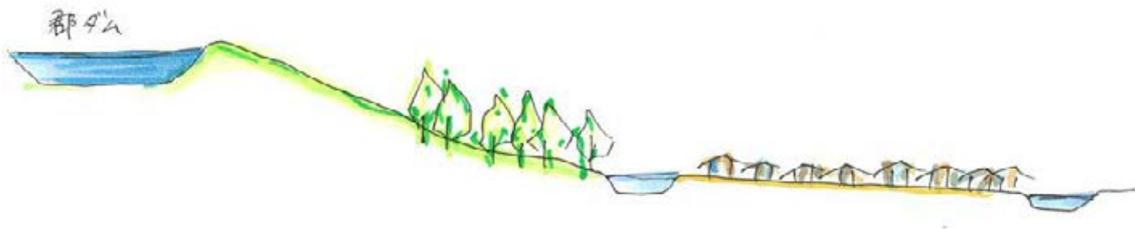
図 ) 国土変遷アーカイブスより湯江（1966年）／ 図 ) Google map より湯江航空写真

小糸川以北は、宅地が増加し都市化が急速に進行した事がわかるが、湯江のある南側には江川を中心とした水田地帯においては村落としての形態が今も保存されている。

（執筆担当：大村麻衣子）

## ・ 7. 周淮郡山名郷／君津市郡

小糸川、宮下川の上流に位置する農村地域。



図郡概念図（作成：大村）

## 2.地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無

### 2-1.地質・地形からみた集落立地・形態の妥当性

小糸川と宮下川に挟まれた平地に存在するため、その豊富な水資源を利用した田を持つ農村である。一方で内房なぎさライン周辺は道が整備され住宅が多く存在するようになった。

図 ) 国土変遷アーカイブスより郡航空写真（1946年） / 図 ) Google mapより郡航空写真

また、1946年の航空写真で確認出来る田畑の一部は現在郡ダムとなっており、そこに至るまでのランドスケープが大きな特徴となっている。

### 2-2.地質・地形からみた交通手段・経路の妥当性

### 2-3.集落の形態及び交通手段・経路のその後の変容の妥当性

郡ダムが建設されたのは1972年であり、これがこの郡の近代的な変容要素の大きな要素を占めている。このダムは郡川を利用したものではなく、ここから約10km南の富津市内を流れる湊川の取水場から導水管によって送られてきている。渇水期にはダムの水を放流するため小糸川下流の君津市人見の浄水場で浄水を行い、工業用水として利用される。



図 ) 郡ダム（撮影：西吉）

そのため地域の近代的要素でありながら、実際には村落生活との関連性は低いと考えられる。

（執筆担当：大村麻衣子）

## ・ 8. 周淮郡山名郷三直郷／君津市三直

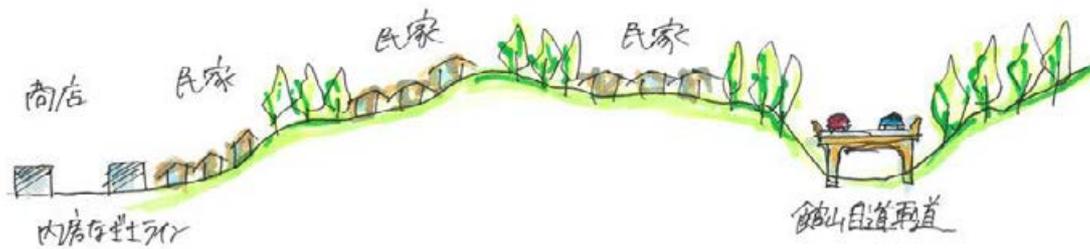


図 ) 三直概念図（作成：大村）

館山自動車道と内房なぎさラインに挟まれ北方に山をもつ。

### 2.地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無

#### 2-1.地質・地形からみた集落立地・形態の妥当性



図 ) 集落と水田（撮影：西吉） / 図 ) 店舗の立ち並ぶ内房なぎさライン（撮影：西吉）

小糸川からの水資源を利用した田をもつ地域が確認できるが、特に内房なぎさライン沿いは都市化によりチェーン店などが存在し、かつての集落の存在は感じられない。

#### 2-2.地質・地形からみた交通手段・経路の妥当性

#### 2-3.集落の形態及び交通手段・経路のその後の変容の妥当性

航空写真で確認出来る範囲内だけでも、住宅の急増と共に交通も大きく変化している。最も大きな変化は八重原周辺において見られる。

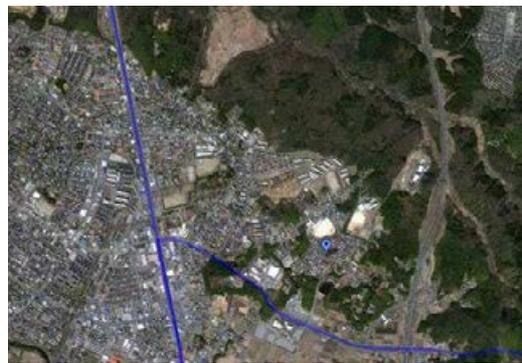
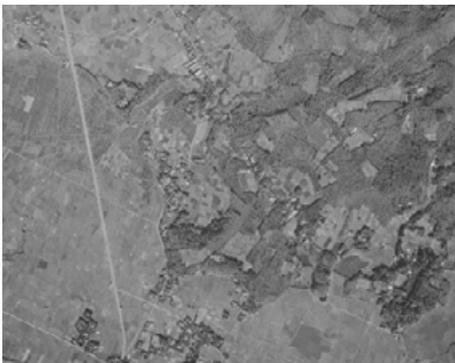


図 ) 国土変遷アーカイブスより三直 (1961 年) / 図 ) Google map より三直

(執筆担当：大村麻衣子)

## ・ 9. 周淮郡額田郷・君津市大井戸

山間に立地する農村地帯。



2.地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無

2-1.地質・地形からみた集落立地・形態の妥当性

集落の西寄を山裾にそって流れる小糸川から田畑が広がる。水田に囲まれる形でいくつかの集落が分布し、東側の山は 100m 以上の高さを誇る。この山の荒地から林業としても生産の場となっていた事が想像される。また、西側の山は畑としても利用されている。

2-2.地質・地形からみた交通手段・経路の妥当性

2-3.集落の形態及び交通手段・経路のその後の変容の妥当性

航空写真で確認される範囲内では、集落の形態に大きな変化は見られない。バイパスや近代的な施設等が少ない事が要因であると考えられ、交通手段に関しても大きな変化はなかったと思われる。

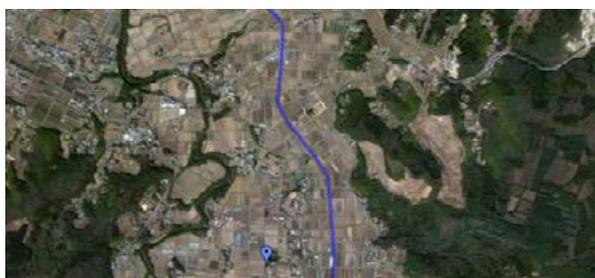
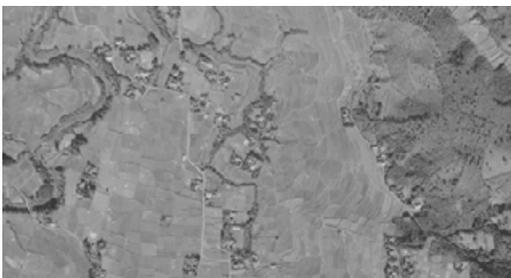


図 ) 国土変遷アーカイブスより大井戸 (1961 年) / 図 ) Google map より大井戸

(執筆担当：大村麻衣子)

## ・10. 周准郡山家郷／君津市日渡根

9. 三直からほど近い南方に立地し、その環境的特徴は酷似している。



図 ) 日渡根概念図（作成：大村）

2.地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無

2-1.地質・地形からみた集落立地・形態の妥当性

日渡根にある神社を中心に村落が広がる。比較的大きな民家が多くある。また、神社同士が向かい合うように配置され、その付近にそれぞれ集落が存在している。民家・水田・周辺の古い樹木の様子が景観的に美しい村である。



図 ) 向かい合うように配置されている上諏訪神社（左）と下諏訪神社（右）（撮影：大村）

2-2.地質・地形からみた交通手段・経路の妥当性

2-3.集落の形態及び交通手段・経路のその後の変容の妥当性

市宿の西には砂取場があるが、村落を変容させるような影響は見受けられなかった。過去の航空写真と比較した限り、交通手段の大きな変容も見られない。



図 ) 国土変遷アーカイブスより日渡根（1961年） / 図 ) Google map より日渡根

### ・23. 平群郡達良郷／富浦町多田良

農・漁村。砂州からなる地形である。多田良北浜海岸から南下するに従い、宅地／田／畑と連なる。砂州部分の微高地に古くからの集落が、砂州間の低地に田・畑が作られている。また、海岸沿いに町営住宅群が建てられている。ここも古くからの集落同様、微高地である。微細な地形変化に対応した集落・生産の立地、人口余剰に応じたものと思われる町営住宅の建設、配置などを今後の研究テーマとして挙げたい。これは評価基準2-1、2-3の検討に該当する。

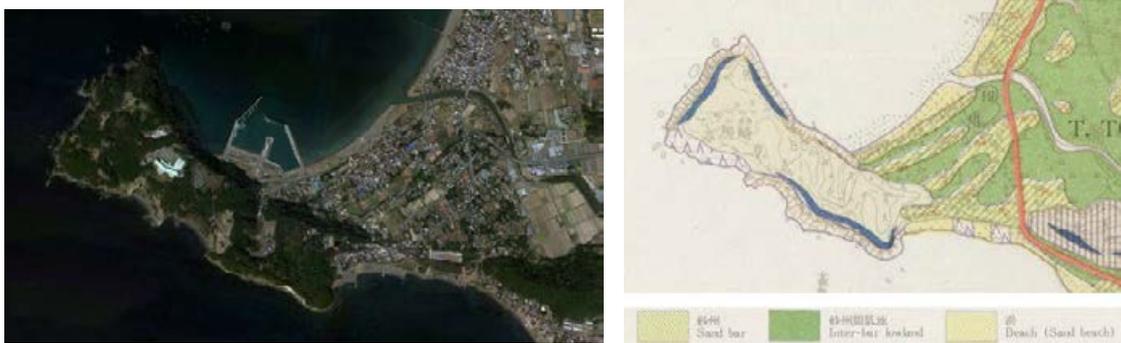


図 ) 衛星写真 / 図 ) 地形分類図（地形分類基本調査より）

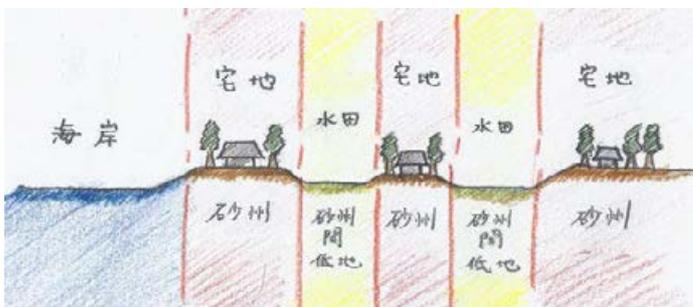


図) 多田良の集落構造（断面スケッチ作成：堀井隆秀）

（執筆担当：堀井隆秀）

### 24. 平群郡砥河郷／三芳村上堀戸川

農村。戸川を北上した山中に溜め池が作られており、その水を低地まで引き入れ、活用している。その水系を象徴するかのよう、山麓に神社が建てられていた。古来からの集落は山裾に集中して立地。また、集落付近に走る河川には、10m はあろうかという巨大な河畔林が並んでいる。一つの溜め池を中心とした集落・生産の水利システム、また、豊富な水を如何に制御するかといった防災面の研究などがテーマとして挙げられる。これらは、評価基準の2-1、2-3によく合致する。



図 ) 上堀戸川と周囲の様子 / 図 ) 高地にある溜め池



図) 用水路の様子 / 図) 平久里の河畔林（撮影＝堀井隆秀）

（執筆担当：堀井隆秀）

## 25. 平群郡石井郷／富山町岩井袋

漁村。砕石業も行う。急迫する山を背にした狭い入江に、集落が形成されている。各住居は、海に直接面して建てられたものと海から離れ奥まったところに建てられたものに大別できる。これは、集落立地の時間的変容を探ることが可能である。また、交通手段の検討も興味深い。江戸時代には両村の間にある日入間が崎の漁業権を巡った、勝山・岩井袋・下佐久間の三村の争い<sup>1</sup>、太平洋戦争末期には日本海軍によって回天などの水雷特攻隊の基地として使用されていたとされる記録も残されている<sup>2</sup>。港には漁業のためのものと砕石業に必要なものがアッセンブルされている。また養殖場の跡地と思われるものが、現在は、プールとして使われているようである。以上のように、これらは、2-1・2-2・2-3・2-4 と全ての評価基準を複合的に検討する

<sup>1</sup> web サイト『町報歴史資料館』より参照。(2012/05/31 現在)  
<http://www.town.kyonan.chiba.jp/kyonan/tyouhou-rekisi/rekisisiryoukan3.htm>

<sup>2</sup> web サイト『安房国再発見』より参照。(2012/05/31 現在)  
<http://ameblo.jp/awabunka1/archive1-201110.html>

良質なサンプルであろう。



図 ) 岩井袋周辺地図 / 図 ) 航空写真



図) 山を背にした港の様子 / 図) 港の砕石業の様子 (撮影：堀井隆秀)

(執筆担当：堀井隆秀)

## 26. 平群郡川上郷／富山町川上

農村。比較的ゆるやかな山の斜面に棚田を形成。山中に大規模な家屋があり、不思議な印象であった。また、山を下ると岩井川が流れ、それに沿ったかたちで集落、田が並ぶ。地形を利用した生産のあり方などが研究対象として挙げられよう。これは評価基準の2-3に合致する。

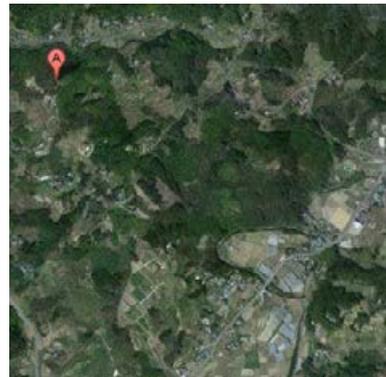


図 ) 川上の立地と町域 / 図 ) 航空写真

(執筆担当：堀井隆秀)

## 27. 平群郡狭隈郷／鋸南町中佐久間

農村。比較的広大な水田に対して少数の住居といった構成の集落。急峻な山に挟まれた谷間に水田が広がる。これらの水田は微細な高低差を利用した棚田となっている。迅速図と現代の航空写真を比較すると、明らかに、集落の規模が減少していることがわかる。この変化の要因の一つに挙げられるのが、1990年の終わりから2000年のはじめにかけて作られた富津館山道路だと思われる。またこの周辺の山々は砕石業の一環として開発が進んでいる。それらに伴い、集落が減少していったものと思われる。以上より、評価基準には該当しないように考える。



図) 鋸南町の町域と中佐久間の立地



図) 現在の航空写真

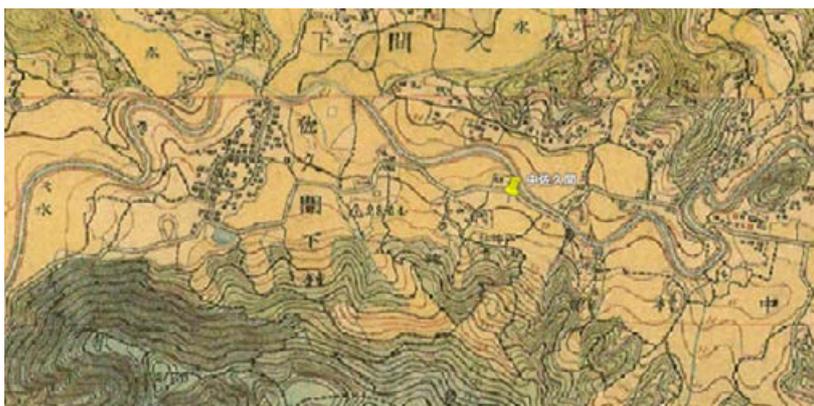


図) 迅速測図（歴史的農業閲覧システムより）

（執筆担当：堀井隆秀）

## ・28. 平群郡穂田郷／鋸南町保田

三方を山に囲まれた海際の集落から伸びる保田川に沿った長狭街道沿いに田畑と集落が点在している。

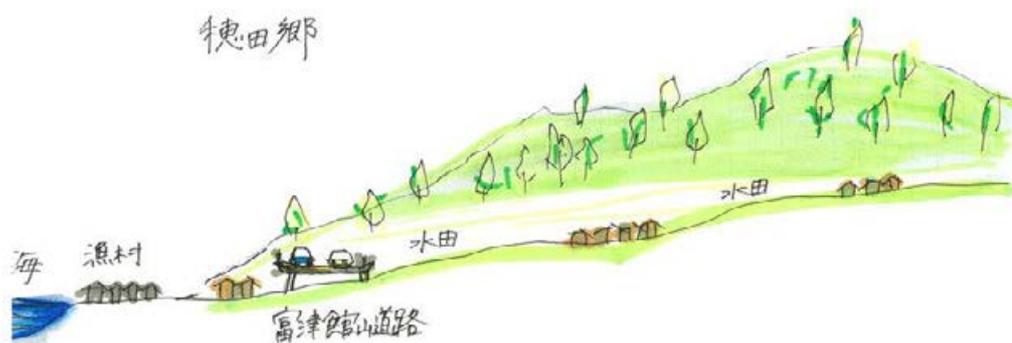


図 ) 保田概念図（作成：大村）

### 2.地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無

#### 2-1.地質・地形からみた集落立地・形態の妥当性

富津館山道路と交差するが、それによる大幅な都市化は見られなかった。山間のかかなり狭い地帯に田畑を持つ集落であり、軒の低い古い民家もいくつか目に付いた地域である。集落はその狭い土地のせい、あまり民家が密集せず少数で点在する形であった。



図 ) 保田周辺の民家（撮影：大村麻衣子）

## 2-2.地質・地形からみた交通手段・経路の妥当性

## 2-3.集落の形態及び交通手段・経路のその後の変容の妥当性

細長い開発しづらい地形に存在する地域である為か、明治36年の迅速図からも富津館山道路以外に交通路の変化は確認されない。また、長狭街道の起源ははっきりとしないがかなり古い道路であることは同じく迅速図から判明している。

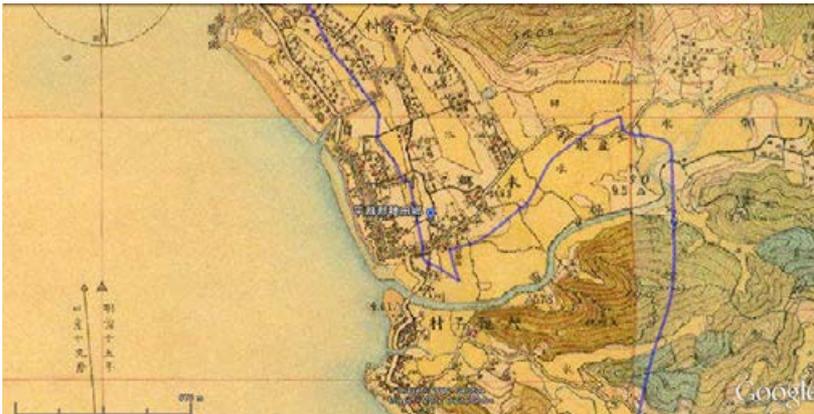


図 ) 保田周辺の迅速図（明治36年）



図 ) Google map より保田周辺

（執筆担当：大村麻衣子）

## ・29.天羽郡雨ルウ郷／富津市売津

湊川に沿って発展したと思われる地域。海際は住宅や商店などで近代的になってきているが、東側である上流には水田が見られる。

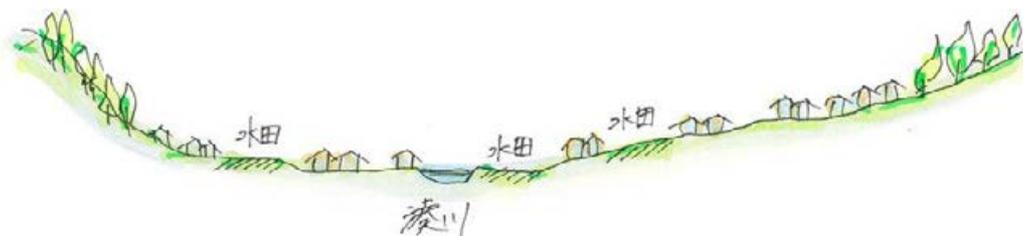


図 ) 売津概念図（作成：大村麻衣子）

### 2.地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無

#### 2-1.地質・地形からみた集落立地・形態の妥当性

売津は南方に山、北側に湊川をもつ自然に恵まれた条件に立地する集落であり、今も盛んに農業が行われている様子が見られた。道に面して家が建てられているが、その背後にも住宅のための設備があり、それらは生垣に覆われた細い路地の奥となっている。集落背後の田は、一部宅地化されていた。



図 ) 民家の裏の空間（撮影：大村麻衣子） / 図 ) 一部宅地化された水田

数馬は半島のような状態となっている地域で、かなり厳しい地形条件にあると思われる。この集落に出入りするためには山を経由する形となる。その地形を利用したゆるい棚田も見られる。



図 ) 数馬の棚田（撮影：大村） / 図 ) 売津の集落構成図（作成：大村）

（執筆担当：大村麻衣子）

### 30. 天羽郡長津郷／富津市加藤

（保留）

### 31. 天羽郡讚岐郷／富津市佐貫

商業地として栄える。醤油などの製造で有名。集落は、山間の谷間に敷かれた道に沿って、立地している。かつて佐貫城があったことでも知られている。佐貫城は中世に建てられ、近世に引き継がれたものである<sup>3</sup>。よって近世的な城の機能も有しており、佐貫城の西部、現在の東佐貫にあたる場所が城下町だったとしている。残念ながら、今回の疾走調査では城跡や城下町跡などは、巡っていない。醤油などに見られる地下水を利用した生産のあり方や、城下町のシステムが集落にいかなる変容をもたらしたのかなどが興味深いテーマである。これらは2-3、2-4の検討によく適合する。



図 ) 佐貫町域ならびに佐貫の立地（赤マーク）、佐貫城跡地（緑マーク）

<sup>3</sup> 平井聖『日本城郭体系 第6系』（1980,新人物往来社）p221-222 参照。



図 ) 航空写真（紫のマークが佐貫、緑のマークが佐貫城跡）



図 ) 宮醤油店（国登録有形文化財） 図 ) 佐貫城俯瞰図<sup>4</sup>

（執筆担当：堀井隆秀）

<sup>4</sup> web サイト『関東地方の城』（2012/05/31 現在）  
<http://www.asahi-net.or.jp/~ju8t-hnm/Shiro/Kantou/Chiba/Sanuki/>より。

## 2-3 南安房地域

### 加茂川流域／鴨川地溝帯（11、12、13）

鴨川市の特徴として、東西に横断する断層が南北に一つずつ存在し、山の囲まれたかたちをしている。

和泉地区は平野部の特徴的な条里構造の後背の山地のかなり奥まで含んでいる。大幡地区は市境である山地の分水界までが範囲となっている。二子地区は嶺岡山系に位置し、尾根の南側が範囲である。

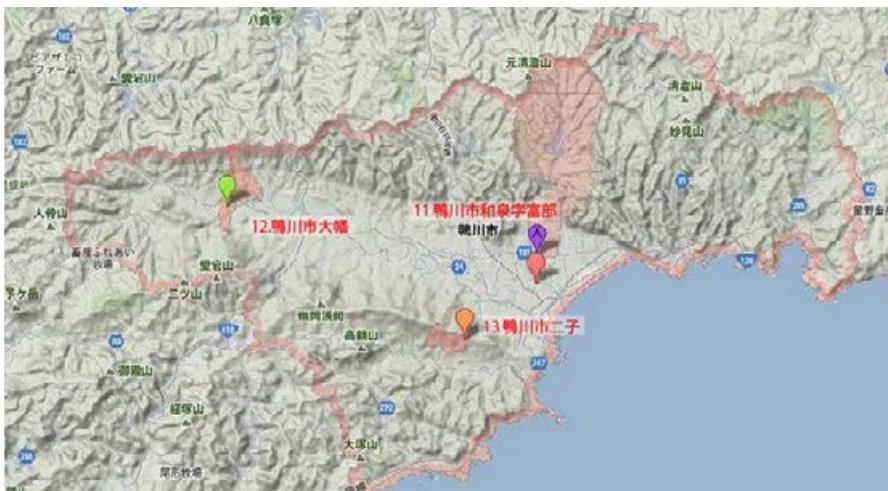


図 ) 加茂川流域・鴨川地溝帯中域図

（執筆担当：高橋大樹）

### 11. 長狭郡伴部郷／鴨川市和泉字富部

鴨川北縁断層の南部の山際から平野にかけての集落である。この集落から根方上ノ芝条里跡という条里跡が発見された。また、奈良時代の掘建柱建物跡も発見されている。

#### 1) 地形・地質から見た集落立地・形態と生産立地の妥当性

地形的特徴では現在も条里の名残として残っている地域は低地の隆起段丘に部類される。一方、和泉地区の南部の条里ではない地域は、被覆砂丘と沖積低地が連続して交互にできている。このことが条里の地区と条理でない地区の違いをつくった可能性がある。かつて砂丘は水田には適しておらずそういった背景から条里が築かれなかったと思われる。

神社の配置はシンボリックな小高い山の上に男金神社が存在し、昔の信仰対象などになっていたと思われる。平野部にも神社、寺は存在する。

各集落の配置は、条里の中では何軒か住宅が集合して集落を形成している。その集落はいく

つか存在するが集落同士隣接していない。また各住宅は条里の街区に沿ってつくられていることが多く、また敷地も広く屋敷林も立派である。背後に山がある地域においては山に沿って住宅が置かれている。



図 ) 現在の街区と住宅 / 図 ) 地形的違い（凡例：赤・山地地形 白・低地地形 青・砂丘地形） / 図 ) 地形分類図

## 2) 集落の形態（及び交通手段・経路）の変容の妥当性

居住地、農地に関しては条里のかたちが現代の住区に影響を与えている。特に南部の非条里だと思われる地域は虫食いのように開発されている。一方、条里の地域の住区は条里のかたちからあまり変化がみられない。



図 ) 1947年の鴨川市周辺 / 図 ) 2005年鴨川市周辺

特徴として条里、非条里がはっきり分かれていることが大変興味深い。また、それが地質的特徴から土地のかたちを分けている可能性があり、今後詳細スケールで調査していくことが望ましいと思われる。

（執筆担当：高橋大樹）

## 12. 長狭郡丈部郷／鴨川市大幡

加茂川上流域に位置し、周辺地域も含め棚田で有名な地域である。米の名産地でありこの周辺でとれる米を「長狭米」といい、ブランド米である。

### 1) 地形・地質から見た集落立地・形態と生産立地の妥当性

清澄山系に向かう水路沿いにある小さい谷戸に多数の棚田が存在する。この棚田周辺には点在して住居があるが、長狭街道沿いには住居が集まって存在している。

### 2) 集落の形態（及び交通手段・経路）の変容の妥当性



図 ) 1975 年の大幡周辺 / 図 ) 2011 年大幡周辺

1975 年の茶色に見える部分は全て水田である。2011 年は若干であるが茶色が減り、緑が増えているように思える。これは耕作放棄地が増えていることの表れだと思われる。

（執筆担当：高橋大樹）

## 13. 長狭郡丈部郷／鴨川市二子

嶺岡山系の南部に位置する集落である。嶺岡山系は鴨川市から西に延び房総半島を東西に横切る標高約 300m の山稜で、北の加茂川、南の曾呂川に挟まれている。この地域はいわゆる嶺岡層群、保田層群からなり、これを貫いて蛇紋岩、玄武岩、一部閃緑岩質岩石が発達している。蛇紋岩は主として嶺岡層群を貫いて東西に長く帯状をなして発達し、山稜の頂部を占め、断続しつつ西へ延びている。この山系では比較的高いところからきれいな水が多量に湧出するため南斜面の標高 200m を越す部分まで人が古くから住みついでおり、水田が作られ、一部で牧畜が行なわれている。集落は曾呂川の左岸、嶺岡山系南斜面に集中する。曾呂川右岸には蛇紋岩はなく、畑部落がある。

### 1) 地形・地質から見た集落立地・形態と生産立地の妥当性

立地の特徴として集落が川を含んでおらず山の中腹から山頂に存在する。他の集落はこの地

域の主要河川である曾呂川の接しているのに対して二子集落は接していない。また地質的には地すべり地形であり、地形を利用した棚田が形成されている。水において嶺岡山系は豊富であり、山稜近くからも良質な水が得られる。これらの湧出する表流水、或いは浅井戸を掘ってこれを飲料などの生活用水或いは灌漑用水としている。このため山腹にある集落も持続できたと言える。



図 ) 二子町域詳細図

## 2) 集落の形態（及び交通手段・経路）の変容の妥当性



図 ) 1975年の二子周辺 / 図 ) 2009年の二子周辺

過去の航空写真と比べて圧倒的に棚田の面積が減っている。おそらく耕作放棄だと思われる。また、航空写真では見られないが、古い住宅に混じって別荘のような住宅が多く作られ始めていた。

キーワードとして、断層・蛇紋岩の地質・地すべり地形・山腹集落など他の集落と比べても特質的な特徴が多く見られる。天水だけで生活を養っていた土地のポテンシャルは高いといえる。古くから住まれていたと考えられ、今後も調査の必要性を感じる。

（執筆担当：高橋大樹）

#### 14. 長狭郡丈部郷／鴨川市江見

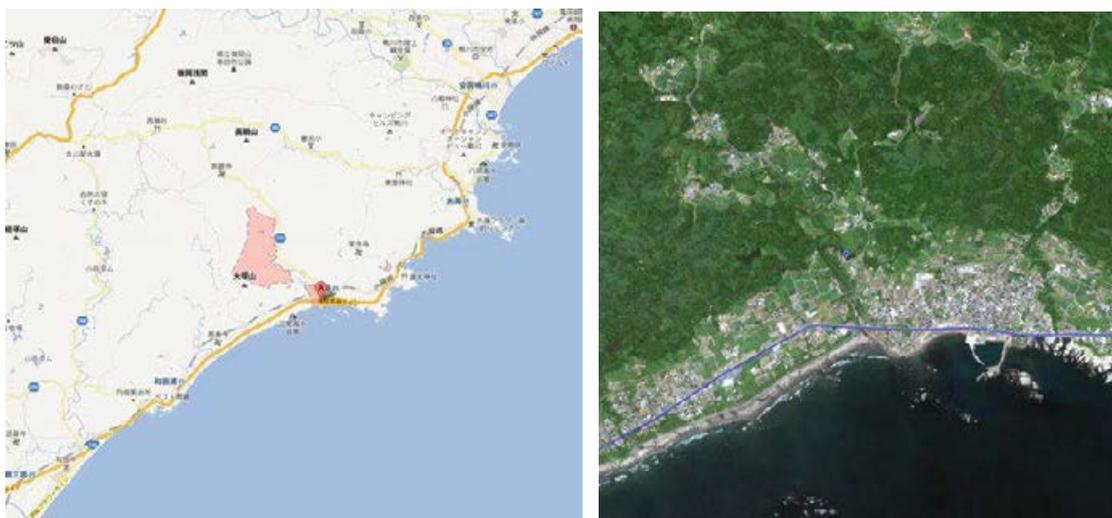


図 ) 鴨川市江見の立地と町域 / 図 ) 衛星写真（現在）

##### 1) 地形・地質から見た集落立地・形態と生産立地の妥当性

江見は千葉県外房の太平洋沿岸に立地する集落である。山地がすぐ迫った海岸段丘に集落が形成され、山頂には城趾の遺構<sup>5</sup>が見られる。半農半漁の集落であり、旧道は湾曲する海岸線に沿って引かれている。



図 ) 江見遠景 / 図 ) 江見の町並み（撮影：西吉永一）

集落の中心を走る街道を進むと、家々の間口が連なっている（図■参照）。外房の海岸段丘上の集落であるが、民家が海に面した純粋な漁村の形態というよりも、むしろ路村の形態をとる集落である。

<sup>5</sup> 江見根古屋城。城としての伝承はないが根古屋の地名から城址としての遺構が発見されている。

## 2) 集落の形態（及び交通手段・経路）の変容の妥当性

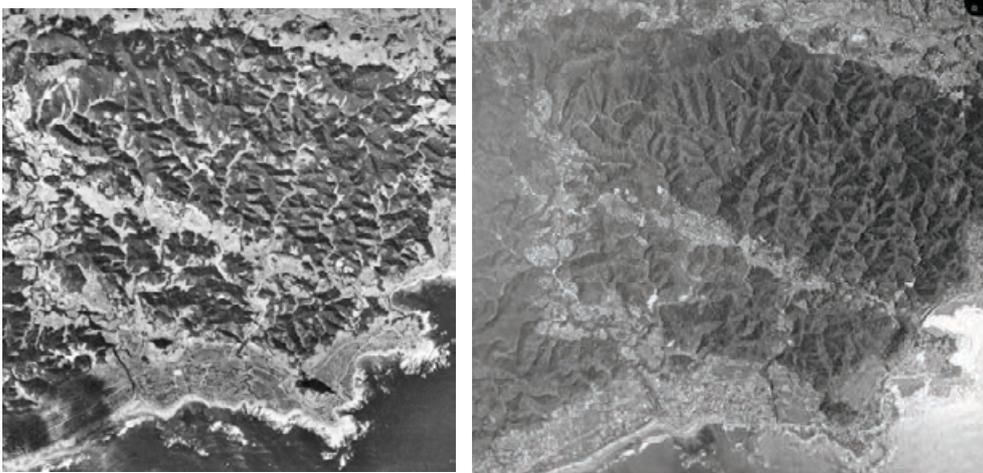


図 ) 江見 1947 年 / 図 ) 江見 1982 年 (国土変遷アーカイブスより)

上図両者を比較すると、1982 年の写真では国道 128 号線（外房黒潮ライン）が敷設されており、直線的に敷かれた国道が集落と海岸を隔てているが、集落全体としてあまり変化は見られない。旧来から使われていた道<sup>6</sup>も集落の中心を貫く形で残存しており、町並みとともに集落の形を決定している大きな要素であることがうかがえる。(図■参照) 先述したよう、海と山が接近している地形であり、開発に適した土地は少なく、それが集落残存の一要因であると考えられる。海に大きく面しているが、海岸線を観察すると、岩礁と砂州の境目に小さな港が整備されているに留まっており、山地と集落の間には田畠の広がり確認されるため、半農半漁の小規模な集落生活がある程度継続していると思われる。



図 ) 江見地質図 (510. メランジュ基質<sup>7</sup>と 6. 沖積層が海岸線で切り替わる部分に江見の港が敷設されている)

(執筆担当：西吉永一)

<sup>6</sup> 現在の県道 272 号線。

<sup>7</sup> 約 4000 万年前～2200 万年前に海溝で複雑に変形した地質。(産業技術総合研究所地質調査総合センター、シームレス地質図サイト参照)

## ・15. 朝夷郡御原郷／和田町上三原



図 ) 和田町上三原の立地と町域 / 図 ) 衛星写真（現在）

### 1) 地形・地質から見た集落立地・形態と生産立地の妥当性

和田町上三原は、三原川流域に立地し、中流、下流に下るに従って地名も中三原、下三原と移り変わることから、古くから流域村落の生活が河川と深く関わっていたことが推察される。集落は三原川の3本の支流が合流する地点に形成され、その中心には山神宮という神社が鎮座している。



図 ) 神社横に植わった上三原の大楠（樹齢推定750年、県指定天然記念物）（撮影：西吉永一）

### 2) 集落の形態（及び交通手段・経路）の変容の妥当性

1972年、三原川流域には、その中・上流部にダム<sup>8</sup>が建設されている。この前後で航空写真を比較してみると（下図参照）、元のダム建設地には、急峻な谷地に沿って棚田が広く分布していたことが分かる。

8 小向ダム。1972年着工、1975年竣工。（参照：<http://dammania.net/?http://dammania.net/tiba/komukai.html>）

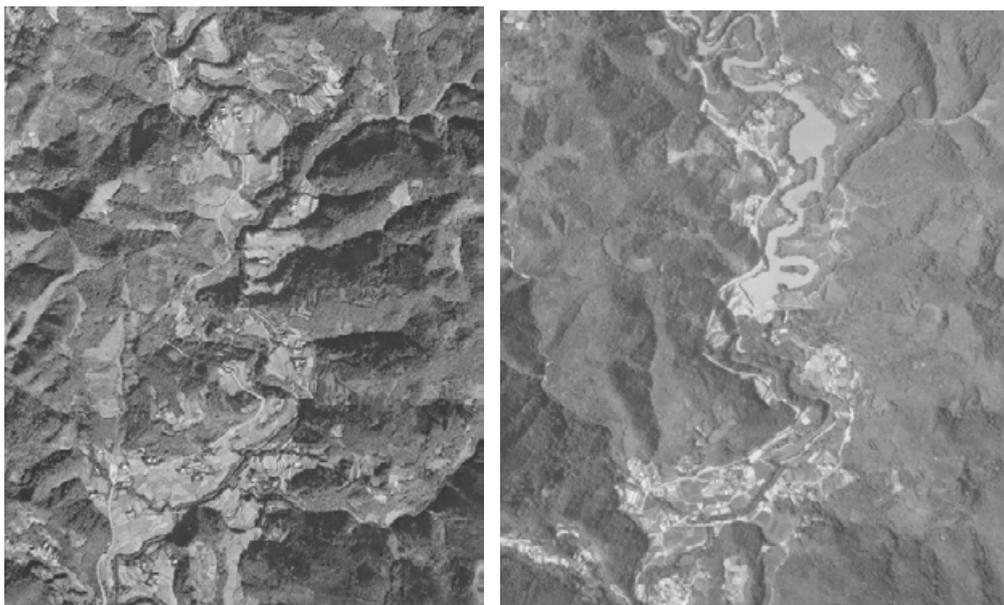


図 ) 丸本郷 1966 年 / 図 ) 丸本郷 1984 年（「国土変遷アーカイブス」より）

双方とも前提となる地形的条件は共通であるが、棚田が集落にとっての極めて自足的な生産用地という性格をもっていたのに対し、小向ダムは三原川下流、極めて広域の上水道用水確保のため建設された施設である。このような事例では、河川がその流域集落にとって個別な、自足的「資源」であったのに対し、近代的な土木事業によって河川が極めて大きなスケールの地域を対象とした「資源」へと転換されている。これは本研究において集落変容の妥当性を考える上で、非常に重要な事例になると思われる。

（執筆担当：西吉永一）

### ・丸山川流域（16、17）

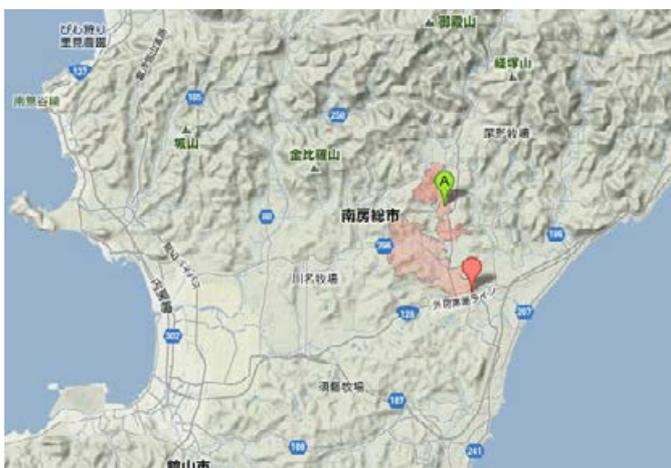


図 ) 丸山川流域・中域図（図中 A が 16. 丸本郷、赤ピンが 17. 沓見）

16. 丸山町丸本郷、17. 丸山町沓見は、巨視的に見れば、丸山川を中心に、その流域内に形成

された、ひとつの村落群であると考えられ、その上・中流域に丸山町丸本郷、下流域に丸山町沓見が立地していることが分かる。また、それら2村に関して、現在の町域に注目すると、下図■のようになり、どちらの村域も丸山川西岸の低地から丘陵地の尾根線までが含まれており、水田、居住地、林地がひとつの村落を形成している。

（執筆担当：西吉永一）

## ・16. 朝夷郡満祿郷／丸山町丸本郷



図 ) 丸山町丸本郷の立地と町域 / 図 ) 衛星写真（現在）

### 1) 地形・地質から見た集落立地・形態と生産立地の妥当性

丸本郷は蛇行河川である丸山川を中心に、氾濫原・自然堤防・後背湿地と、典型的な河川流域の河岸段丘の地形上に立地し、その上に古代条理制の遺構が被さって、その景観の基礎がつけられていると考えられる。

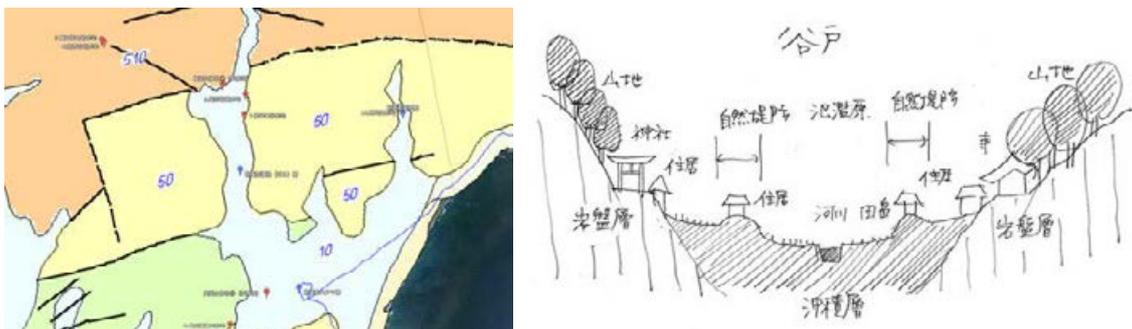


図 ) 地質図<sup>9</sup> / 図 ) 丸本郷・集落構造の断面スケッチ（作成：西吉永一）

また丸本郷に該当する、谷戸が最も幅を狭めた場所（図■中青ピン箇所）では、その西側丘陵地に城趾<sup>10</sup>もみられる。

<sup>9</sup> 図中番号10は堆積岩類（18000年前～現在）、50は堆積岩類（700万年前～170万年前）、510はメランジュ基質（4000万年前～2200万年前）

<sup>10</sup> 中世この地を治めた丸氏の城であったと考えられている。丸山町史（丸山町史編集委員会編 1989年）参照。

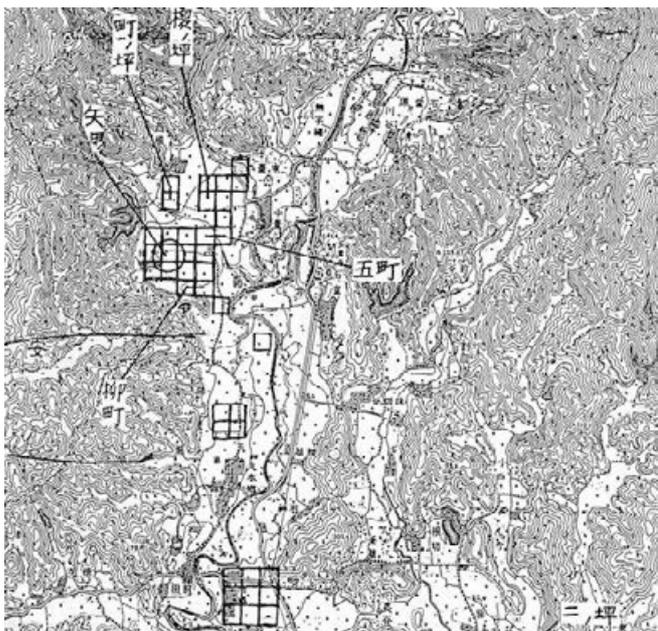


図 ) 条里制の残存（『丸山町史』より）

## 2) 集落の形態（及び交通手段・経路）の変容の妥当性

南房総一帯は近代に入って広く圃場整備がおこなわれ<sup>11</sup>、下図航空写真で確認すると、丸本郷も例外でない。しかし、上図■で示したような河川・水田・住戸・社寺・山林という対応関係は基本的に変更なく現在に至っている。

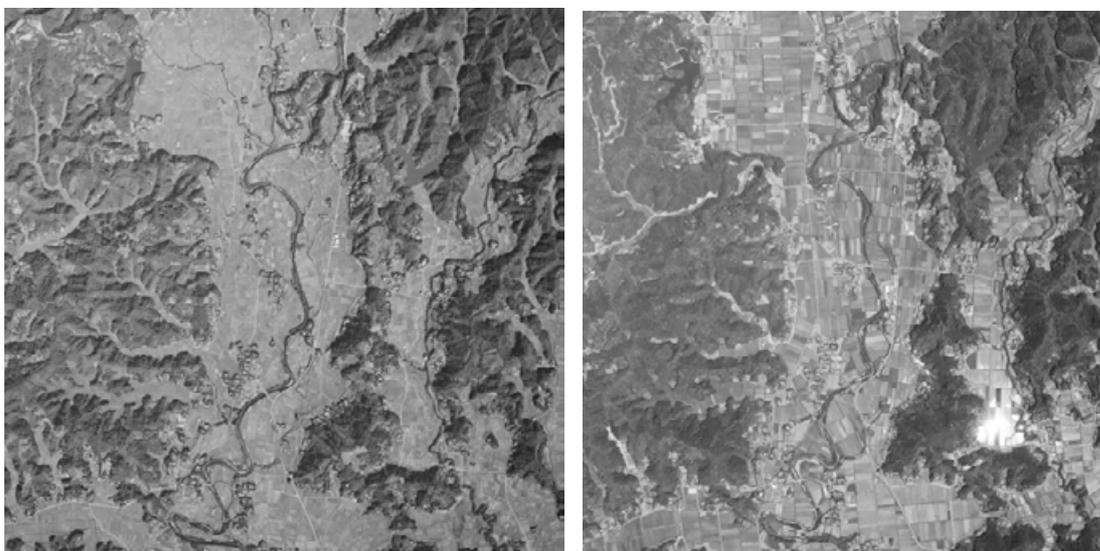


図 ) 丸本郷 1966 年 / 図 ) 丸本郷 1982 年（「国土変遷アーカイブス」より）

（執筆担当：西吉永一）

<sup>11</sup> 『丸山町史』（丸山町史編集委員会編 1989年）参照。

## ・17. 朝夷郡大漕（ぬま）郷／丸山町沓見



図 ) 丸山町沓見の立地と町域 / 図 ) 衛星写真（現在）

### 1) 地形・地質から見た集落立地・形態と生産立地の妥当性

小さな谷戸地形が連なった中に田畠と集落が分布する。丸本郷より下流域であるが河岸段丘上の集落であることに変わりはない。村域の中心にある沼は、沓見の古代地名である「大漕」の由来になったのではないかと考えられている<sup>12</sup>。



図 ) 沓見 / 図 ) 集会所の裏（撮影：西吉永一）

### 2) 集落の形態（及び交通手段・経路）の変容の妥当性

沓見は、丸本郷と同じく耕地整理がおこなわれており（図版参照）、水田の形状は過去の輪郭を全く残していないが、谷戸が幾重にも入り組んでいる地形のため、その谷戸地形ごとに小集落がつくられており、その構成と集落ごとに営まれる生活の形式は、現在もある程度継続していると考えられる。

<sup>12</sup> 『日本地名大辞典 12 千葉県』参照。

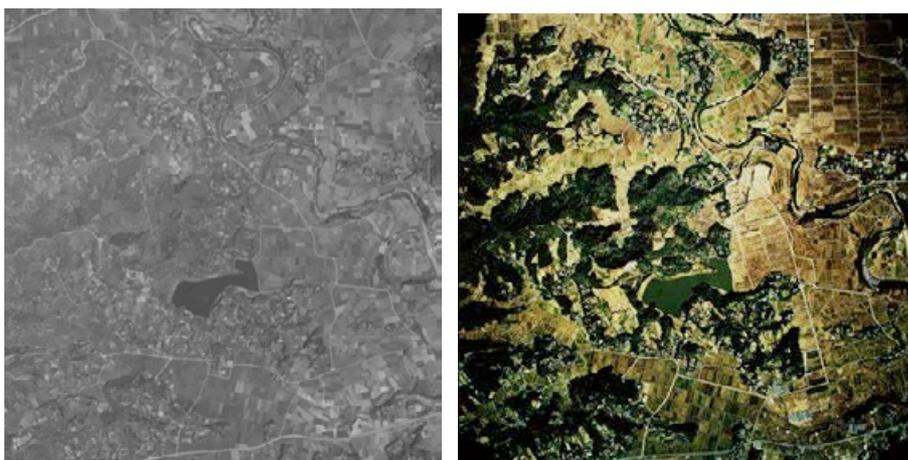


図 ) 丸山町沓見 1968 年 / 図 ) 1975 年

(執筆担当：西吉永一)

## (18,19)



図 ) 18 館山市大井、19 千倉町瀬戸字宇田の立地と町域

特徴として小さい谷戸集落が複数集まり形成したといえる。この地域は小さい谷戸が多く、昔から人が利用しやすかったといえる。

(執筆担当：高橋大樹)

### ・ 18. 安房郡大井郷／館山市大井

約 30 個の横穴古墳群がみられ、南部の丘陵頂上には灯籠塚古墳がある。平安時代以前から人が住んでいたと思われる。

#### 1) 地形・地質から見た集落立地・形態と生産立地の妥当性

地形的には、台地地形に分類され、比較的高低差の少ない谷戸に対応して細かい集落が形成されている。住居は谷戸地形の斜面部を削ってつくっていると考えられる。(図参照) 考察として谷戸の谷底を有効活用したと思われる。

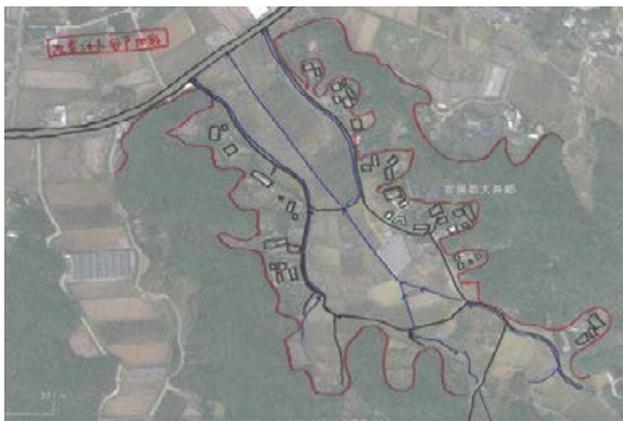


図 ) 集落平面図

## 2) 集落の形態（及び交通手段・経路）の変容の妥当性



図 ) 1975年の大井周辺 / 図 ) 2009年の大井周辺

小さい集落であるがゆえに大規模な宅地開発は免れ、時代による変化は少なかった。開発の影響がないことから、昔の景観が残っている超優良古凡村であるといえる。開発を免れる一因として、集落の程良いサイズ感・地形的要因があると思われる。

（執筆担当：高橋大樹）

## ・ 19. 朝夷郡新田郷／千倉町瀬戸字宇田

### 1) 地形・地質から見た集落立地・形態と生産立地の妥当性

地形的特徴として、いっけん普通の谷戸集落に思えるが、航空写真を見ると居住エリアの奥の細い谷戸で水田を行っていることが分かった。



図 ) 耕作放棄地が目立つ / 図 ) 住居の背後の森はしっかり管理されていた

## 2) 集落の形態（及び交通手段・経路）の変容の妥当性



図 ) 1975年の宇田周辺 / 図 ) 2009年の宇田周辺

集落のかたちにはほとんど変化は見られないが、生産面においてはかなり耕作放棄地が見られた。耕作放棄の理由は分からないが、住宅と農地のセットという観点からは今後持続していくかは不明な集落である。

（執筆担当：高橋大樹）

## ・20. 安房郡白浜郷／白浜町滝口



図 ) 白浜町滝口の立地と町域（図中下赤ピンが白浜町滝口） / 図 ) 衛星写真

### 1) 地形・地質から見た集落立地・形態と生産立地の妥当性

房総半島の最南端に位置し、南は太平洋に面する。町域は带状に展開し、3つの海岸段丘から

なる。房総南部丘陵、最南部の海食による急崖を北壁とする古い海岸段丘はその南端を走る主要道に沿って古くからの集落が立地している。その南方の一段低い台地は1703年の元禄地震により形成された元禄段丘で、ここには漁師町が発達している。野島崎が島から岬になったのもこの隆起による。この段丘よりもさらに海岸寄りの低平な海岸段丘は関東大震災時に形成された大正段丘で、飲食店などが並んでいる。

## 2) 集落の形態（及び交通手段・経路）の変容の妥当性

白浜は上述の通り、災害を契機として段階的に土地が生成された場所であり、その土地ごとに用途も異なっている。また内陸へ進むほど土地の歴史は古く、それが幅の短い帯状に展開しており、集落の断面がそのまま編年的な集落の変容も体現しているようで大変興味深い。

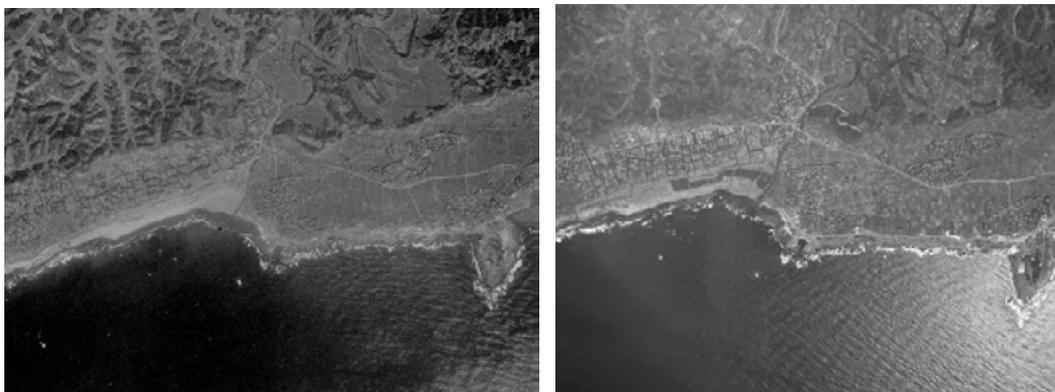


図 ) 白浜 1948 年 / 図 ) 白浜 1968 年（「国土変遷アーカイブス」より）

また、内陸へ奥まっていくと、式内社である下立松原神社<sup>13</sup>の建つ高地へと繋がっている。この神社は、現在は植栽が自然に繁茂し眺望が開けないが、空間の軸線は海岸線、野島崎（上図航空写真右下に見える半島形の岬）の方へ伸びており、さらにこの神社から北東へ垂線を引けば、下立松原神社ミカリ神事<sup>14</sup>がおこなわれる鹿倉山頂の祠へと繋がっている。



図 ) 下立松原神社

<sup>13</sup> 下立松原神社は

<sup>14</sup> ミカリ神事は



図 ) 下立松原神社とミカリ祭が行われる山頂の祠の配置（作成：西吉永一）

（執筆担当：西吉永一）

## ・21. 安房郡神余郷／館山市大字神余

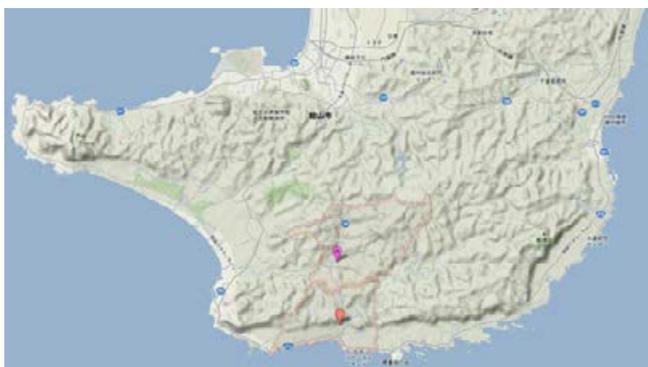


図 ) 神余の立地と村域（図中Aピン） / 図 ) 衛星写真

### 1) 地形・地質から見た集落立地・形態と生産立地の妥当性

神余は低山性の丘陵地だが、中央部に谷津状の低地が緩やかに展開する。全体が山がちで耕作地が少ないため、以前はタバコ栽培が、現在ではシイタケの生産や養鶏、酪農、また大工・左官など建設業を営む家も多いという<sup>15</sup>。

### 2) 集落の形態（及び交通手段・経路）の変容の妥当性

谷津地形に住戸と田畠が張り巡るように展開している姿は、1947年と1982年を比較しても大差はない。しかし、1947年当時の方が耕作地の分布が谷戸の奥部まで進んでいるように思われる。

<sup>15</sup> を参照

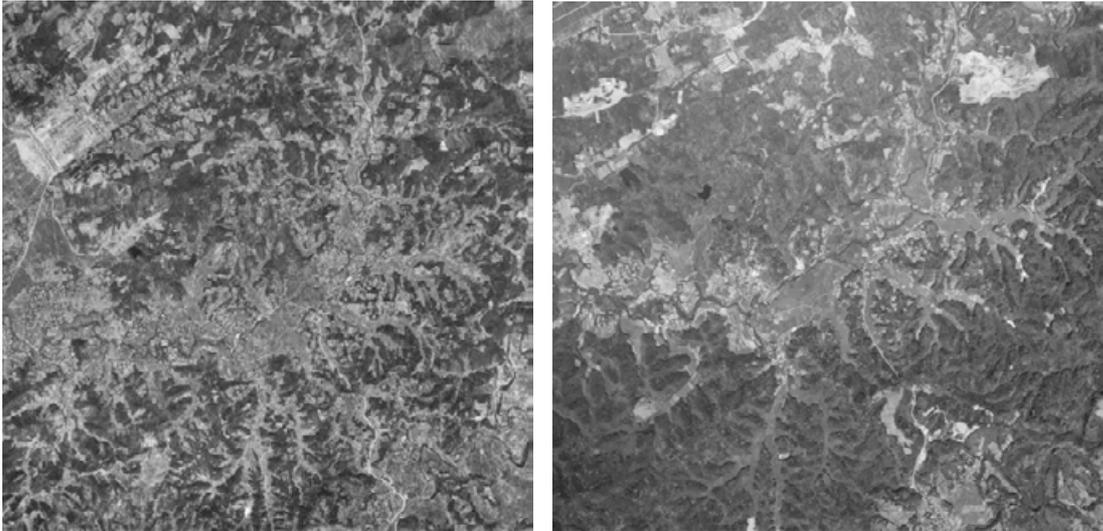


図 ) 神余 1947 年 / 図 ) 神余 1982 年

（執筆担当：西吉永一）

## ・ 22. 安房郡塩見郷／館山市塩見

浜と後背の山とのセットのかたちがかうかがえる。

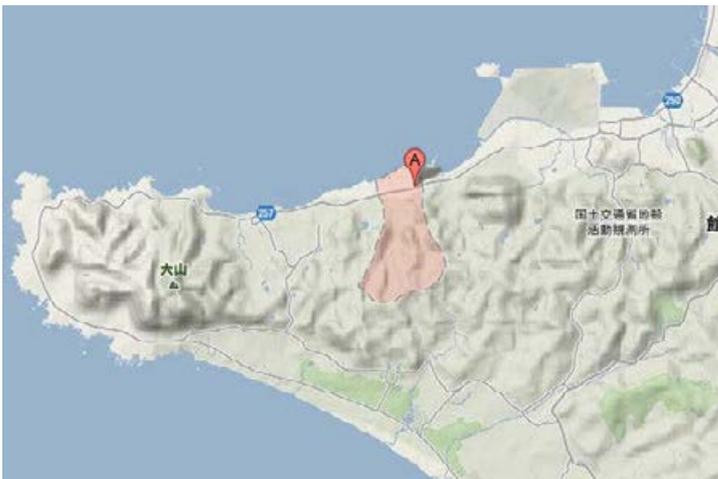


図 ) 塩見町域図

1) 地形・地質から見た集落立地・形態と生産立地の妥当性

2) 集落の形態（及び交通手段・経路）の変容の妥当性

（執筆担当：高橋大樹）

### 3 分析と考察

#### 3-1 （石川初）

今回は短時間の調査だったが、今後の更なる詳細調査の対象を絞り込むうえで、また調査に当たっての地区環境の持続性の評価の項目、切り口の設定の獲得として、有効なフィールドワークであった。以下、典型的だと思われた二つの集落について報告する。

##### ・25. 安房郡鋸南町岩井袋

岩井袋は浦賀水道に面した小規模な漁村である。江戸時代には、両村の間にある日入間が崎の漁業権を巡って、勝山、岩井袋、下佐久間の三村が争ったという記録がある。原地形は急峻な地形に挟まれて周囲から隠れるように奥まった入江をなしている。その特徴的な地形と、掘削が容易な岩盤のために、太平洋戦争末期には日本海軍によって回天などの水雷特攻隊の基地としても使われていた。



図 ) 岩井袋調査の際に記録した GPS 軌跡（作成：石川初）

現在の漁港は、護岸や防波堤、漁船溜り、漁船引き上げのスロープ、砂利の積み出しのための接岸施設などがパッチワークのように増設されていた。多くは、この地域に特有の凝灰岩か、泥岩・砂岩互層と見られる露頭した岩の上に、天然の磯に被せるように作られている。港の一角には、養殖場の跡地と見られる長方形のプールがあるが、現在では夏季に水泳用プールとして地元の小学生らに実際に使われているということだった（図版参照）。現況の植生は、トベラ<sup>16</sup>、シャリンバイ<sup>17</sup>など海岸性の常緑樹林が主体で、一部の沿道の空き地に侵入していたナガミ

<sup>16</sup> トベラ科トベラ属の常緑低木。東北以南、韓国、台湾、中国南部までの海岸に自生。海岸では海浜植物などの草本につづく海岸性森林の最前線に位置し、低くて密な群集を形成、海岸林の中では高木層を形成する場合もある。また、潮風や乾燥に強い。雌雄異株。枝葉は切ると悪臭を発するため、節分にイワシの頭などとともに魔よけとして戸口に掲げられた。そのため扉の木と呼ばれ、これがなまってトベラとなった（学名もこれによる）。

<sup>17</sup> シャリンバイはバラ科の常緑低木。東北地方南部以南～韓国、台湾までの海岸近くに野生する。海岸に多く、日向の岩の上などに見られる。乾燥や大気汚染に強い。

ヒナゲシ<sup>18</sup>などの帰化植物の繁茂がほとんど見られず、長く安定した環境が持続していることを窺わせた。



図 ) 養殖場跡地がプールへ転用された例 / 図 ) 岩井袋接岸施設の様子（撮影：石川初）

## ・ 29. 富津市売津

上総湊を河口とする湊川の段丘に位置する農村である。1970年代に撮影された空撮では、蛇行する川に沿って発達した段丘を利用した棚田が印象的である。平安期の古道が通っていたとされ、「売津古道」を整備、再現しようとしている市民グループの活動もある。地図上で境界を見ると、村域は水田化された段丘の南の山に広がっていて稜線に達し、流域を描いていることがわかる。一次環境として、水源をもち、段丘を利用した水はけも良い乾田であって、稲作の条件は良好だったと思われる。



図 ) 棚田地域の変容（作成：石川初）

現在は、集落の中心の道路とそれに面した屋敷群、屋敷林はほぼ維持されているが、集落の山側にバイパス状の農道が通り、棚田の上部が宅地に転用されている。また、川沿いに、堤防の建設によって生じた余地に、製材所のような工場が建設されていた（現在は操業を停止し、

<sup>18</sup> ナガミヒナゲシはケシ科の一年草。花卉は基本的に4枚だが、多少の変動がある。開花時期は4・5月。日本では帰化植物として自生。1961年に東京都世田谷区で初めて確認され、以後群馬県、福岡県などにも分布が広がり、現在では温暖な地方の都市周辺を中心に繁殖する。アルカリ性土壌を好むと考えられ、コンクリートによってアルカリ化した路傍や植え込みなどに大繁殖しているのがよく見られる。

倉庫として使われていた)。集落中心部の農道に面した民家の周囲にはイヌマキの生け垣などがよく維持されていた。

いずれの集落も、単に古い村が凍結したように存続しているのではなく、集落を構成する建物や道路や生産地が、部分的に改修され、入れ替わりながらも、集落の輪郭や構造、地形などを根こそぎ改変するような整備が行われず、施設の単位の規模でいわば新陳代謝を繰り返している様子が特徴的であり、印象的であった。これらの周囲によく見られた、大規模な圃場整備や漁港整備が施された地区との違いも参照すると、以下の特徴が挙げられるだろう。

- ・ いずれも、生産の基盤となる一次環境が良好である（天然の良港、天然の良質な棚田）。
- ・ 一方で、大規模な整備によって、大幅な増収や開発が見込めない程度に「開発しにくい」土地である。

これらの条件が重なって、漁港整備や圃場整備など近代的な大規模な土地の改変を免れる。つまり、言うなれば「中途半端に良好な基盤」であることが、生産地を含む地域環境の存続に寄与するようである。加えて、いずれの集落でも、基盤環境への働きかけ方において以下のような特徴が見られた。

- ・ 茅葺のいわゆる古民家に限らず、比較的近年に建てられた民家にあっても、周囲の環境への依存度が高く、そこにうまくはまり込んでいるものが多い。
- ・ 道路や利水、港などの施設において、小規模な改修や更新の積み重ねである様子が見て取れる。

これらの特徴は、既存の環境の持続的な利用という意味で、集落がその環境の構成要素や構造のうち何を利用してきたかを調査するうえで重要な観点であると思われた。今後は、こうした「手作りで補修しながら存続している村」に注目し、

- ・ 流通、地域経済など、その環境の持続を成立させているより広域の条件
- ・ 住宅や水路、農地などの施設の、より小さい規模の改修の実際

といった、異なるスケールでの調査を行うことで、集落の環境の持続性について多角的な理解を得たいと考えている。

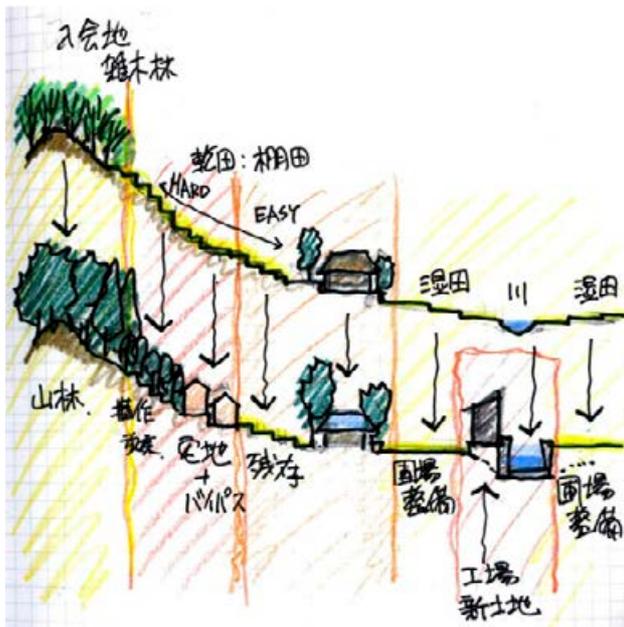


図 ) 集落の変容を示す断面モデル（作成：石川初）

（執筆担当：石川初）

### 3-2 （木下剛）

千年村／古凡村の持続性を支える要因については、建造物群のみならずその環境に備わる特性も含めて理解すべきであると考えられた。そのため、今回の疾走調査では、環境班を立て、集落の立地基盤をなす地形・地質・水系と、その上部に展開する生産手段や植生に着目した。環境班の役割は、建造物群とその環境が取り結ぶ構造的関係に加えて、千年村の持続性を支える環境条件について検討することである。疾走調査に先立ち、千年村／古凡村の持続性を評価するための基準を仮定し、この基準に照らして現地を検分した。その結果、千年村／古凡村における建造物群とその環境、あるいは生活エリアと生産エリアとの関係が密接であり、一体のものとして捉えるべき事例が数多く存在するものと推察された。以下、そのような関係が典型的に現れたと考えられる具体例をあげる。

#### 3-2-2 持続性を支える建造物群と環境との関係

##### ・23. 平群郡達良／富浦町多田良

多田良は、建造物群と環境との関係がとても明快で、特徴的な景観を有している。南北を海に挟まれた半島上に位置する集落で、集落は海岸線に平行して畝のように連なる砂丘（微高地）の上に展開している。砂丘の最高部に道路を通し、その両側に住居が立地する沿道型の集落である。集落内の南北方向の移動は路地による。路地に接道する家屋多数あり。路地沿いの敷地境界はよく管理されたイヌマキの高生垣で整然と区画される。各道路の西端部には神社が置かれ、北浜の集落と西浜の集落の独立性が想定される。砂丘と砂丘に挟まれた低湿地には水田が

開かれ、水田と砂丘最高面の比高は 3~4m にもおよぶ部分もあり、地形・地質と土地利用が明快に対応している（評価基準の 2-1 に該当）。

西浜の集落が標高的には最も高く、北に向かって緩やかに下る地形により、高潮・津波等は大房岬と西浜に吸収され、北浜は波静かな立地なのかもしれない。また西浜集落は大房岬や船形方面の山林と同様、周辺の地層よりも古い中新世・鮮新世の堆積岩類上にある（評価基準の 2-1 に該当）。北浜と西浜との関係、生産立地や生業の持続性を支える要因についての情報収集が今後の課題（評価基準 2-3 に該当）。また、元禄地震で 1-2m の隆起、関東地震でも隆起（逢島の陸化）しており、地殻の変動と集落の持続性との関係についても分析していく必要がある。

#### ・ 24. 平群郡砥河郷／三芳村上堀戸川

谷津田の山際に集落が立地する戸川地区と川沿いの沖積低地に展開する上堀地区からなる純農村。戸川地区上流部の溜池は迅速測図でも確認できる。溜池上流部の天水利用による水田と溜池下流部の溜池灌漑による水田、さらにその下流部の河川灌漑による水田の 3 種類が確認できる。面積的には溜池灌漑の水田が最も広いと思われる。溜池の集水面積は比較的広く水田の収量は安定していたとみられる。安定的な水田の収量を支えるために集水面積の拡大とそれによる水田自体の拡大が本村の持続性の要であったと考えられる（評価基準の 2-3 に該当）。河川灌漑による水田は洪水リスクが高いため、洪水調節機能を期待したと思しきメダケの河畔林が〇〇川の蛇行部にある。上堀地区は圃場整備がされており、前近代のフィールドパターンは残存していない。水利システムの歴史的展開過程を空間的に把握することが今後の課題となる。

#### ・ 31. 天羽郡讃岐郷／富津市佐貫

北上川と染川の分水嶺をなす尾根上に展開する集落（評価基準 2-1 に該当）。江戸時代に佐貫藩の城下町となり明治時代を迎える。連郭式山城で、集落の中心部から 500m 以上東の尾根上標高 50m 付近にあった。最初の築城は応仁年間。染川左岸に複数の寺院、両河川沿いの低地に水田がみられる。14 世紀、讃岐郷は内海（現・東京湾）を挟んで対岸の金沢称名寺領であり、年貢米は富津湊を経由するかまたは八幡浦（染川河口部の鶴峰八幡宮門前）から直接輸送された。八幡浦は鎌倉や相模国への木材の積み出し港でもあり渡航地でもあった（鹿野山との関係？）。戦国期は里見氏による西上総支配の要衝、佐貫城の城下港として重視された。さらに近世になって、城下町システムに組み込まれ、その際にどのような空間構造の変化が起きたかも興味深い。讃岐郷は以上のような生産立地、地政学的要衝にあったと考えられる（評価基準の 2-3、2-4 に該当）。

### ・33. 海上郡佐是郷／市原市佐是

養老川中流の川廻し残存区間の自然堤防上に築かれた集落で、迅速測図では川廻し内部は畑と果樹（評価基準の 2-1、2-3 に該当）。八幡神社のある北側の集落（迅速測図で佐是村の表記があるあたり）と佐是河川公園付近で養老川に流れ込む用水路東側の集落はいずれも自然堤防上にある。用水路西側の集落も高台にあることは間違いないが、自然堤防上かどうかは地質図を用いて詳細に調べる必要がある。また、川廻し内部にある集落は戦後の開発だが、ここも自然堤防上である。迅速測図では「桃」の表示がある。佐是河川公園南側の集落の地盤最高位面と周囲の水田との比高は 10m 以上あると思われる。市原市の洪水ハザードマップを見ると、川廻し内部の低地部分や佐是河川公園南側の用水路周辺は 0.5～2m 未満の浸水が想定されているが、集落はいずれも浸水想定区域から外れている。

集落内部に目を転ずると、例えば、佐是河川公園南側の集落では、住戸はいずれも正面を南方向に向け、入り組んだ細街路（自動車での各住戸へのアクセスは不可）に「にわ」を介して接道している。接道部分は土塁や生垣で整然と区画されている。なお、迅速測図をみると、現在よりも住戸数が少ないが、その後の充填過程においては低地部分へのあふれ出しがほとんど見られないこと、また、戦後の佐是団地の開発も正確に自然堤防上をねらって実施されていることから、何らかの認識や配慮があったと考えられ（評価基準の 2-1 に該当）、今後詳しく調査したいところである。

その他、集落を通過する旧大多喜街道との関係、街道筋の牛久村との関係、R297（現大多喜街道）および小湊鉄道のルート選定（評価基準の 2-4 に該当）、入会地の所在と近代における処遇、川廻しの残存理由、佐是河川公園の設置経緯等々についても今後の調査が必要。

### 3-2-3 詳細調査に向けて

疾走調査前に仮定した評価基準群は概ね妥当と考えられるが、詳細調査を通じて事実関係を明らかにしていくことが今後の課題である。また、今後の課題や調査の視点について、思いつくままに列記する。

- ・ 千年村／古凡村の空間的範囲の特定：当該集落の生活エリアおよび生産エリアを含めた空間的範囲全体の把握、あるいは「大字」の空間的範囲の特定。
- ・ 水利に代表される、資源利用（入会を含む）の実態とその変化（要因）の把握。
- ・ 住民の地形・地質に対する認識、災害に対する認識。
- ・ 広域的な交通システム、生産・流通ネットワークの中に千年村／古凡村を位置づける作業。
- ・ 房総的関心事項として、海との関係（交通、生産）の把握。度重なる大地震による地殻の変動、地形の変化（土地の隆起と海岸線の後退、多段階に及ぶ砂丘や段丘の形成）と集落立地、生産手段の変化についての理解。

・その他

（執筆担当：木下剛）

### 3-3 （中谷礼仁）

以降当方の報告にあつては、疾走調査における建造物群的視点について述べる。報告者は2012年5月11、12日の二日間を疾走調査に同行し、報告書中1から29（19、22、23、24、26を除く）を同行した。なお、対象地区の訪問は必ずいずれかの複数のメンバーによって行われることになっている。

疾走調査においては、集落の存立する一時的条件である環境を把握することの比重が大であり、具体的な集落・建造物群の評価は、今後の詳細調査によってなされると判断した。その予備としていくつか千年村集落の評価基準を導きださうる事例について以下報告する。なお疾走調査前に仮説的に構築された基準は以下の通りである。

1. 古地形による集落存在の有無（前提条件）
  - 1-1. 千年前マップを作成し、プロットされた千年村が本当に陸地であったか
2. 地質・地形による集落・交通決定の妥当性の有無
  - 2-1. 地質・地形からみた集落立地・形態の妥当性
  - 2-2. 地質・地形からみた交通手段・経路の妥当性
  - 2-3. 集落の形態及び交通手段・経路のその後の変容の妥当性

#### ・01. 旧海上郡島穴郷／現市原市島野

農村。過去より沖積層の堆積した低地であり、古い集落は微高地に集中して立地している。わずかな高低差を近代技術以前からの水位管理によって宅地化していると想定される。「島」と名付けられているように集落には堀がめぐらされ、宅地の排水がはかられている。

その生態学的集落構造成立をさかのぼること、地域共同体による集落維持がどのようになされているかを今後の詳細研究テーマとしてあげておきたい。これは評価基準2-1、2-3によく該当する。近年村落周囲の開発が盛んになってきているが、その開発の方針等も併せてヒアリングするとさらによいと思われる。



図 ) 島野（撮影：中谷礼仁）

### ・07. 旧周准郡山名郷／現君津市郡

農村。常代から郡ダムに南下する道筋に様々な集落形態がみられる。常代、郡一、郡二地区は完全に再開発化され、水田が宅地化されている。しかしながら道路計画は規則的ではなく、圃場整備をへなかつたまま郊外住宅化された可能性がある。谷戸にある郡地区は戦後の空撮写真との比較によっても旧来からの景観を保っており、谷戸における生活のための家屋、敷地、生産地規模をみやすい。また郡ダムはその壁面が緑化され一見ダムと見えないランドスケープデザインがなされている。様々な要素が、その適合性において地区毎に変転した結果と考えられ、編年的変化を追うべきと考える。地目の転用の妥当さ（機能、敷地形態、インフラ）について検討しうるであろう。これは特に基準2-2、2-3の検討によく適合する。



図 ) 郡（撮影：中谷礼仁）

### ・09. 旧周准郡額田郷／現君津市大井戸

### ・11. 旧長狭郡伴部郷／現鴨川市和泉字富部

いずれも条里的な古代的水田計画がなされ、その後大きな開発もなく持続してきた山間の村落である。屋敷林で囲まれた大規模な家屋も多く、生産力も豊富な印象を受けた。また、社寺の配置計画も古代的である。大きな変化があったか、なかったとすればその長期的安定をもた

らした要因が何であるかを詳細研究テーマとしたい。これは特に基準 2-1、2-2 の検討によく合致する。



図 ) 和泉字富部（撮影：中谷礼仁）

### ・ 13. 旧長狭郡日置郷／現鴨川市二子

山間の農村。広大な棚田が残存している。その運営方法など現地ヒアリングの対象になりうる。これは特に基準 2-1 の検討によく合致する。



図 ) 二子棚田（撮影：中谷礼仁）／図 ) 棚田に付属する施設

### ・ 20 旧安房郡白浜郷／現安房郡白浜町

漁村。おそらく千葉県下において、歴史的にも最も古い集落の一つと考えられる。宗教的、海上交通的にも要所と考えられていた痕跡が、宗教建築、宗教的場所として多数残っており、そのような古代的要素の残存と近代的要素との関連性を検討するのに適した場所と考えられる。これは特に基準 2-1、2-2、2-3 の検討によく合致する。



図 ) 下館松原神社ミカリ祭がおこなわれる山頂祠（撮影：中谷礼仁）

（執筆担当：中谷礼仁）

### 今後への展望 「持続的環境・建造物群継承地区（通称・千年村）」の啓蒙活動についての試案

以上のような疾走調査を行い、その後詳細調査に至り、評価基準の確立に至るのが本年の目的であるが、同時に後期においては「千年村」の啓蒙活動についても検討してみたい。その理由として

- ・千年村が多数であること
- ・今回の千葉千年村において限界集落が存在せず、それなりの文化的活動がすでに行われていること（地方史の研究者の存在、ウェブサイトでの自発的報告）

があげられる。

このような意味で、日本の持続的集落の持続力を高めるためにも、客観的な評価基準の確保とともに、千年村に存する人々が、彼ら自身をアイデンティファイし、日常的に村自体の自尊心を向上させる草の根からの運動の受け皿が必要と考える。

具体的には

- ・研究機関を主体にした「千年村委員会」を設置し「千年村マップ」、千年村の意義、評価基準を公開。委員会側が主体的に対象集落を表彰。
- ・ウェブ上で情報公開するとともに、草の根活動からのリンクをも併合、共有するような機能をつくる。これによって多くの人々が「千年村」運動に参加できるような間口を作る。
- ・委員会主導による千年村以外の千年村の発見報告と委員会の交流訪問の窓口を作る。
- ・これをもととして「千年村の生き方」等の一般向けのエッセイ等も作成し、それ以外の地区の居住者にも持続的集落の魅力を知ってもらうこと、新しい街区デザインの考え方として普及させる。

このような段階を後期においてはぜひ検討したく、このような作業に実績のあるウェブデザイ

ナーと SE の参加を検討させていただきたい。

（執筆担当：中谷礼仁）

## 巻末資料

### ・調査日誌

5月11日

- 9:33 千葉駅出発 快晴 11名、乗用車3台で出発
- 10:39 市原市島野 島穴神社に到着 近辺を散策
- 11:33 市原市姉崎 姉崎神社を散策 班編成を変える。のちに昼食をコンビニエンスストアで購入。これより車三台で別々に移動。(以後 庄子、小林、梶尾 班)
- 13:22 木更津市瓜倉
- 15:21 木更津市十日市場
- 16:38 加茂川流域を通過。外房方面へ
- 17:30 鴨川市江見 到着
- 18:14 丸山市丸本郷 を散策。日が落ちてきたため、調査を切り上げ宿へ向かう。19時頃 別車（中谷・大高・西吉・高橋）より脱輪の報告を受ける。
- 19:13 白浜の民宿「白根の宿」に到着。15分後に大村、堀井、呉、楊到着。  
呉 中谷車を迎えに行く。宿にいる学生で先に夕食をとる。
- 21時頃 中谷・大高・西吉・高橋到着
- 22時 反省会を行う。今日行った村をレビュー、反省点などをまとめる。その後簡単に打ち上げ。
- 24時 就寝

5月12日（庄子、小林、梶尾）

- 7:30 朝食 出発前に当日行く村の着目点のあたりをつける
- 8:00 出発 初日に見逃した村（19千倉町・20白浜町）を見てから内房方面へ
- 10:53 下立松原神社にて（中谷、大高、西吉、高橋）車と遭遇。
- 11:09 安房神社到着 安房神社にて（呉、大村、楊、堀井）と遭遇。
- 11:59 鋸南町に到着。安房勝山駅前にて石川、福島を待つ。
- 12:30 石川、福島と合流
- 12:50 「活魚料理 なぎさ」にて昼食
- 14:51 富山町岩井袋 到着 自然の豊かな漁村を探索。先生方が揃い、また村の小学生のガイドもあり充実した調査になる
- 15:50 岩井袋出発 帰宅組（中谷、石川、呉、楊、大村）と別方向へ。
- 16:05 富浦町多田良到着 フィールドワーク中に木下班、福島班、庄子班 合流
- 17:48 三芳村上堀戸川 到着 菅原神社付近の棚田の集落にて生垣と背後の杜が一体化した

民家を発見。一同息を呑む。

19:46 木更津市 「栄楽旅館」到着 夕食後ミーティング。

24:00 就寝

5月13日

7:30 朝食 事前にカーナビに行き先住所を入力。移動にスムーズに。

8:30 出発

9:27 富山町川上 到着 周辺を散策

10:49 富津市佐貫到着 周辺を散策。宮醤油店の旦那に店内を案内していただく。醤油倉の中に入れてもらう貴重な体験をする。その後コンビニエンスストアで昼食を購入。

12:35 佐貫を出発

13:09 市原市栢橋 到着

14:34 市原市佐是 到着 ランドスケープの見どころが多く、長時間歩く。

16:14 市原市門前 到着

17:10 同 出発 を潤井戸を木下班、菊間を福島、庄子班に分担

18:40 千葉中央マツダレンタカー前に到着。車を返却し解散

（執筆担当：小林千尋）

## 第二回〈古凡村〉千葉疾走調査

### 1 目的

本調査は「持続的環境・建造物群継承地区」通称、〈古凡村〉研究のひとつにあたる。なお、「持続的環境・建造物群継承地区」とは特有の環境条件とそこに存在する建造物群とコミュニティとの間に動的平衡性が古くから持続し現在においても有効に継承されている地区をいう。本研究は、幾世紀にも渡り存続し、今なお健全な共同体が認められる集落を評価することにより、今後の防災指針を検討する上での基礎資料を提供することを目的としている。

〈古凡村〉は、和名類聚抄に記載されている郷のうち現在地名との比定精度が高いものとしている。千葉県においては和名類聚抄に記載されていたのは173郷であり、実際に〈古凡村〉として採用したのはこのうちの51.4%の89郷である。

2012年6月15日~17日にかけて行う今回の第二回千葉県〈古凡村〉疾走調査は、千葉に存在する全〈古凡村〉89郷のうち、九十九里周辺地域に存在する26郷を調査するものである。以上から本調査の目的とは、建造物、自然環境、共同体の3つに着目して調査を行うことで、今後も継続していく〈古凡村〉研究において、〈古凡村〉の健全な評価を行うための評価軸を作成することである。

### 2 参加者

(大人)中谷礼人、木下剛、石川初、大高隆、福島加津也

(千葉大)呉、高橋大樹、梶尾智美

(早稲田)西吉永一、大村麻衣子、庄子幸佑、小林千尋、堀井隆秀

### 3 調査日程【参加者】

2012年6月15日(金)【中谷、大高、呉、高橋、梶尾、西吉、大村、庄子、小林、堀井】

2012年6月16日(土)【中谷、木下、石川、大高、福島、呉、高橋、梶尾、西吉、大村、庄子、小林、堀井】

2012年6月17日(土)【中谷、木下、大高、福島、呉、高橋、梶尾、西吉、大村、庄子、小林、堀井】

## 千年村千葉疾走調査②（2012年6月16日、17日）

担当：福島加津也

## 対象

二回目の疾走調査は九十九里地域である。一回目の調査で平面ダイアグラムと境界面の現れを対象とすることによって短時間でも成果を得られたので、今回もこの2点を中心に調査を行った。（図版、データなどは別図資料、写真を参照のこと。）

## 1) 集落の平面ダイアグラム

ほとんどの集落が明快な空間構造をしており、畑と田（高地と低地）の2種類の生産地を持っていた。これは、一回目の内房地域と共通している。

相違点として、内房地域には異なる複数の空間構造が見られたのに対し、九十九里地域は谷戸型とアイランド型の2つにまとめられることがある。

## a. 谷戸型

民家は線状に並び、地形が田方向に開けているため、集落が拡張・変容している事例が多い。10. 東金市東金（写真1）のようにダムや鉄道駅など著しく近代化の進



図 東金 撮影=福島加津也

んだ集落や、2つの同じ規模の集落が隣接する双子型の16. 下吹入（写真2）、元の集落よりも田地域に拡張した新しい集落に豪邸が多い（逆）兄弟型の25. 石井（写真3）、山から海へ岡、新田、納屋集落と発展した親子型の26 横根（写真4）など、発展の種類がいくつか見られた。これらの発展には地質や地形などの環境条件だけでなく、集落間の相対関係も影響していると考えられるので、詳細調査の対象として面白いのではないだろうか。

## b. アイランド型

集落は周辺を人が歩けないほどの斜面と森に囲われているため、密閉感が強く（写真5）あまり拡張・変容していないように見える。民家はその中に塊状にまとまっている。しかし、見た目ではわからない飛び地などを持っている可能性もあり、村域や土地所有などを調べる必要があるだろう。かつて海の中の砂洲だったような（砂が他地域と違うとの情報あり）18 目篠（写真6）や、石を産出していた可能性がある22 玉造（写真7）のように、特殊な成立要因を持つと思われる集落もこのタイプの中



図 石井 撮影=福島加津也



図 下吹入 撮影=福島加津也



図 横根 撮影=福島加津也

に含まれる。

地形的には上記2つの特徴を併せ持つ集落も多いが、開放系の谷戸型と密閉系のアイランド型は、実際の空間体験として異なる印象を強く感じさせる。

## 2) 境界面の現れ (領域の表示)

前回の内房と同じように、イヌマキの立派な生垣 (写真8) や、民家の豪華な門 (写真9) などが常に見られた。これらの大きな構築物に加えて、今回は道祖神 (写真10) や辻札など小さなものによる境界面の現れが新しく発見された。道祖神の中には防火水槽や排水設備と一体化したもの (写真11) や、鳥居を追加して神社に変容したもの (写真12) などもあり、土着の信仰が形を変えて現代に生き延びているような事例が数多くあっ



図 上大蔵 撮影=福島加津也



図 目籾 撮影=福島加津也



図 玉造 撮影=福島加津也

た。

表示の方法は、門や辻札のように境界を表示するタイプと、神社のような (精神的) 中心を表示するタイプの2つに分けられる。

集落の各領域を保持する力の種類や強弱、その表示の方法や変容のシステムは、千年村を継続させてきた重要な要素であると思われ、詳細調査が楽しみである。

## 3) 母屋

棟の方向は各集落内で統一されている事例が多く、決定のルールとしては次の2点が挙げられる。

- a. 山を背にして稜線と棟の方向を平行にする (写真13)。
- b. 南に面するように棟の方向を東西にする。

aはほとんどの集落で適応されている。bはaより優



図 イヌマキの生垣 撮影=福島加津也



図 民家の豪華な門 撮影=福島加津也



図 道祖神 撮影=福島加津也

先順位が低い、谷戸型の線状に並ぶ民家が地形の影響で西や東に面していても、北に面している事例は見られなかった。アイランド型は山から距離があるからか、ルールの適応度が谷戸型より弱いように感じられた。

敷地入口との位置関係は、直入り、横入り、斜め入りの3種類があり、これも各集落内で統一されていることが多い。決定のルールはまだよくわからない。

### 考察

平面ダイアグラムが谷戸型とアイランド型の2つにまとめられるのは、共通の地質や地形などが九十九里地域の広範囲に広がっているからと考えられる。これらの環境条件の同一性が高かったからこそ、16下吹入や25石井、26横根などから、通常ではわかりにくい集落間の相対関係が浮かび上がってきたのではないだろうか。この相対関係は双子や兄弟、親子などの血縁関係に類推することができる。同様に、砂洲の18目籬や石と関係がありそうな22玉造のような特殊な成立要因も、同一性の中ではさらに際立って見えてくる。また10東金のように、谷戸型の集落構造を保持しながら景観がまったく変わってしまった集落も興味深い。

今回の調査では、相対関係による繊細な差異や、時間的変容の多様な事例を発見できたことが大きな収穫であったように思う。疾走調査は短時間のため見た目の印象が強くなってしまいう傾向は否めないが、ここではその表層性と事例の多さに注目し、現地での体験や感覚を出発点とすることを心がけた。足りない部分は詳細調査での補完を期待したい。



図 鳥居が追加された道祖神 撮影=福島加津也



図 排水設備と一体化した道祖神 撮影=福島加津也



図 山を背にして稜線と棟の方向を平行 撮影=福島加津也

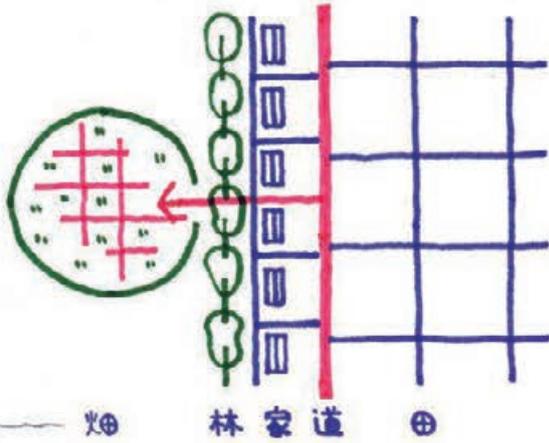
千葉千年村疾走調査②

16.17. Jun. 2012



耳面ダイアグラム

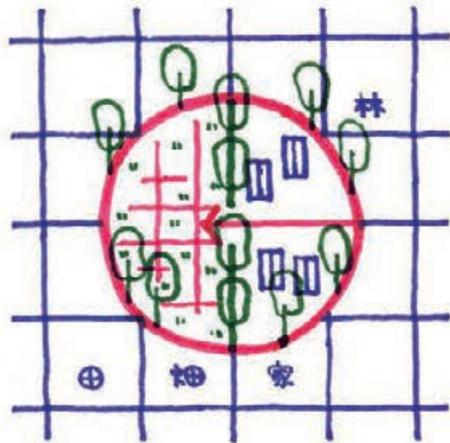
明快な空間構造 2つの生産地を持つ



谷戸型

※変容率高

- 13 14 24 17 塵村
  - 10 近代化
  - 11 15 畑から家までゆるい斜面
  - 16 双子型
  - 25 畑・田にも集落が拡張  
田の家が立派 父系型
  - 26 岡・新田・納屋集落
- 親子型 → 相対関係  
地形地質 ← 環境条件

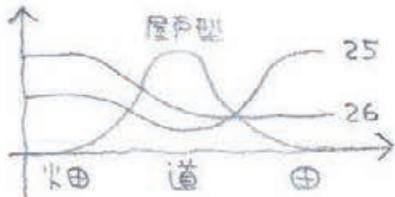


アイランド型

※変容率低

集落はゆるい傾斜地

- 12 19 23
  - 9 18 20 石州 微高地 砂が特別?
  - 21 宗教
  - 22 畑の集落化 玉=石?
- 土地が狭く変容しにくい  
→ 飛び地? 村域、土地所有ネットワーク



高印度

領域

境界表示 生垣内  
道祖神 → 防火水槽  
中心表示 道祖神の神社化



棟方向 [山を背にする  
南面

入○ [直入  
横入  
斜入  
→ 集落で統一

図 九十九里ダイアグラム 作成=福島加津也

## 下総台地・九十九里平野における抄郷の地形および水系立地

木下 剛（千葉大学大学院園芸学研究科）

### 1. 下総台地・九十九里平野における抄郷の地形立地

当該地域に比定される抄郷の地形立地は、図に示すように、Ⅰ．谷戸または中位段丘面、Ⅱ．台地のふもと、Ⅲ．低地の砂丘上または自然堤防、Ⅳ．海岸後背の砂丘上に概ね分類できる。加えて、この図には明示されていないが、台地上に比定される抄郷も存在する。このうち、タイプⅠおよび台地上に比定される抄郷は、千葉県内の当該地域以外でも確認できるが、タイプⅡ～Ⅳについては当該地域特有の地形立地とみなせる。これは、九十九里平野という千葉県内でも特有の地形ゆえ、生活・生産の観点からみた立地の妥当性についても固有の評価を要するからである。以下にその概要を述べる。

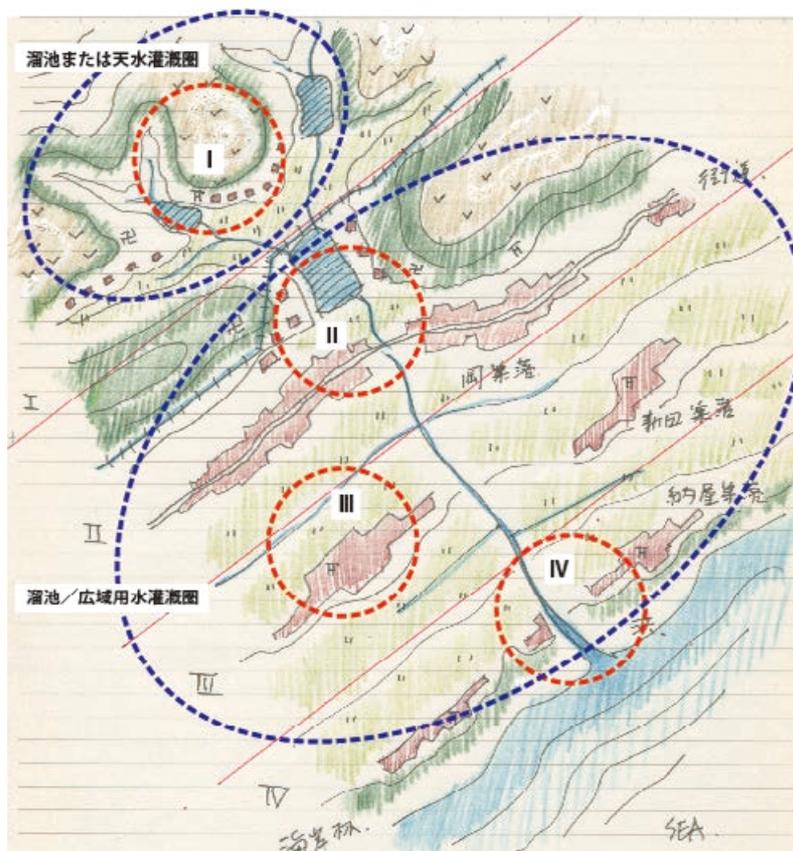


図 下総台地・九十九里平野における抄郷の地形立地類型 (Kinoshita, 2012)

## 2. 台地上の抄郷

現行集落の大部分が台地上に存在するタイプで、#21 匝瑳郡中村郷（現在の多古町南中・北中に比定される）、#22 匝瑳郡玉造郷（現在の多古町南玉造・方田・東松崎付近に比定される）などがこれに該当する。ただし、現行の字界・町村域には谷戸の水田部分も含まれる。つまり、生活エリアは台地上にあるが、生産エリアは低地も含み、したがって水系と無関係ではないが、生活エリアから生産エリア（水田）への接近性は悪い。台地上の水利は井水によると考えられる。また、#21 は、近世以降の大寺院の開山と集落の持続性との関連について、#22 は、「玉造」という抄郷名の由来について調べる必要がある。

## 3. 谷戸または中位段丘面における抄郷（タイプ I）

現行集落の枢要部分が、下総台地の浸食谷や谷平野、それらに隣接する中位段丘面に立地するタイプで、栗山川流域の#23 匝瑳郡田部郷（現在の栗源町西田部を含む同町全域に比定される）、#19 匝瑳郡石室郷（現在の八日市場市飯倉・時曾根から光町篠本・二又・小川台・母子の一带に比定される）、#16 武刺郡押熊郷（現在の横芝町牛熊、芝山町高谷・大台・上吹入・下吹入の付近に比定される）、木戸川流域の#13 武刺郡新居郷（現在の芝山町南部の新井田・牧野・高田・小池などの一带に比定される）、#12 武刺郡大蔵郷（現在の松尾町上大蔵・下大蔵付近に比定される）、南白亀川流域の#02 山辺郡草野郷（現在の大網白里町萱野・砂田・神房・小中などに比定される）、一宮川流域の#04 長柄郡兼陀郷（現在の茂原市太田・下太田付近に比定される）、#05 長柄郡刑部郷（現在の長柄町刑部・金谷・大津倉・田代から徳増・長富などの一带に比定される）、#06 長柄郡車持郷（現在の長南町長南・笠森深沢などの一带に比定される）、#07 長柄郡坂本郷（現在の長南町坂本・今泉・本台・千田および茂原市中禅寺・石神などに比定される）などが該当する。

これらの集落のうち、浸食谷や谷平野に立地するものは、台地のふもとに張り付くように、等高線に沿って家屋が立地しており、いわゆる谷底部分への家屋の立地は確認できない。谷底は水田として利用されている。このような地形立地は、生産エリア（水田）への接近性と生活エリア（家屋）の水害リスクを軽減する意図があったものと考えられるが、その一方で、台地上の生産エリア（畑）への接近性は水田と比べるとやや劣る。台地と低地の間の段丘崖にはスギ林が発達しているが、林相は荒れており、竹林が広がるところも多い。

中位段丘面に立地する集落は、上位段丘面（畑）と低地（水田）との間にあって、両生産エリアへの接近性を確保しつつ、水害リスクから逃れた安定性の高い立地といえる。一戸あたりの敷地面積も広く、家屋も立派な集落が多い。現村域は低地と台地を含み、台地上は畑として利用されている。段丘崖はやはりスギ林が発達している。

このタイプにおける水田の灌漑は、河川灌漑、溜池灌漑を中心とし、上流部では天水灌漑がみられる集落もある。台地上は天水・深井戸によると考えられ、中位段丘面に立地する集落には防火水槽が多くみられ、水の確保が重要事項であったことがうかがえる。

#### 4. 台地のふもとにおける抄郷（タイプⅡ）

下総台地と九十九里平野の境界部に散見される抄郷で、ほとんどが河川を伴う。下総台地を開析した河川が九十九里平野に流れ出すところに立地するタイプで、栗山川流域の#15 武刺郡長倉郷（現在の横芝町長倉付近に比定される）、#14 武刺郡片野郷（現在の松尾町八田猿尾付近に比定される）、作田川流域の#11 山辺郡菅屋郷（現在の東金市松之郷・家之子から武勝・極楽寺一带に比定される）、真亀川流域の#10 山辺郡岡山郷（現在の東金市東金付近が当郷の遺称と思われる）、南白亀川流域の#01 山辺郡高文郷（現在の大網白里町金谷郷・南玉・池田から大網・仏島にかけての一带に比定される）、#03 長柄郡柏原郷（現在の茂原市本納から清水にかけての一带に比定される）、新川流域（椿海干拓地）の#24 海上郡神代郷（現在の東庄町大久保・舟戸・神田から干潟町桜井・萬歳にかけての一带に比定される）、#25 海上郡石井郷（現在の海上町石井付近に比定される）などがこれに該当する。

これらの集落は、河川が運んだ土砂の堆積により生まれた中小の湖沼や谷津田を開拓してできたもので、現在見られる溜池の多くはかつての湖沼をもとに造られたものと考えられる。溜池灌漑・河川灌漑による水田と台地上の小規模な畑、段丘崖はスギ林といった土地利用が一般的である。現行の字界・町村域は台地と低地をまたぐように設定されており、抄郷域もそのようであったと考えられる。

#### 5. 低地の砂丘上または自然堤防上の抄郷（タイプⅢ）

九十九里平野の砂丘上または自然堤防上に集落が立地するタイプで、タイプ

Ⅱと異なり、現行の字界・町村域が台地部を含まない。また、次項で述べるタイプⅣとの違いは、現行の字界・町村域が海岸部を含まず、臨海集落が確認されないことである。当該地域では、#20 匝瑳郡須賀郷（現在の八日市場市蕪里・高野・高・横須賀などの一帯に比定される）が唯一このタイプに該当する。

『和名類聚抄』が編まれた平安時代中期の九十九里平野はすでに陸地化されていたが、下総台地から遠く離れた平野部での抄郷の分布は極めて稀である。これは、陸地化されたといっても、ほとんどが湖沼や潟湖（ラグーン）が広がる湿地帯・荒れ地だったため、農耕はもとより、居住にも不適な土地環境であったためであろう（そのため、現在、この地で確認できる集落のほとんどは中世末から江戸中期にできた新田村である）。タイプⅡとタイプⅢの抄郷数の極端な差は、このような水利条件、生産条件（稲作）の違いが露骨に反映された結果と考えられる。

では、稀少事例とはいえ、#20 はなぜこうした悪条件下に立地しえたのか。一般に、抄郷は水系立地を重視するが、近在の河川はいずれも流路延長・流域面積ともに小さく、本抄郷の立地条件については、確たる理由があったのか、あくまでタイプⅡの拡張として理解すべきなのか、現時点では不明であり、今後の検討を要する。

## 6. 海岸後背の砂丘上の抄郷（タイプⅣ）

このタイプは、砂丘上に集落が立地する点ではタイプⅢと同様だが、現行の字界・町村域が海岸部を含み、臨海集落が存在する点でタイプⅢと異なる。#18 匝瑳郡幡間郷（現在の光町木戸・尾垂・原方・上原・目篠から野栄町川辺・堀川など九十九里浜沿岸に比定される）、#26 海上郡横根郷（現在の旭市横根を中心とする旧飯岡町全域に比定される）、#09 埴生郡埴生郷（現在の長生郡一宮町一宮・東浪見・網田・田町の一帯に比定される）がこれに該当する。

ただし、#09・#26 は、現行の字界・町村域が台地も含んでいる点で、むしろタイプⅡに近いともいえる。九十九里平野・下総台地の抄郷として、臨海集落を含む点では稀少であるが、台地と低地にまたがり、かつ河川を伴う（#09 は九十九里平野最大の流域面積をもつ一ノ宮川の間接地河道・河口域に位置し、#26 も規模は小さいがやはり河川沿い）という点では典型的な立地ともいえる。これは、両郷が九十九里平野の南北端に位置し、台地が海岸に迫り、平野の規模が小さいゆえ稀少な地形立地になっているといえる。また、現行の集落は臨

海部と平野部（海岸線に平行して数列）、台地の足元にみられるが、タイプⅡとの類似性に鑑みれば、台地の足元の集落が最も古く、そこから臨海部へと展開していったのではないかと思われる。台地上の土地利用はタイプⅡと同様、畑地である。

#18 は、現行の字界・町村域に台地上及び台地足元の集落が含まれず、純粹に砂丘上の集落から構成され、かつ臨海集落を含む点で、九十九里平野では唯一の事例である。水利・稲作に不適かつ水害（高潮や津波を含む）のリスクの高いこのような場所になぜ抄郷が分布しているのかについては、詳しい検討が必要であるが、同地区からは縄文時代の遺物（丸木舟など）も発掘されていることから、居住の歴史は古かったものと思われる。その理由として、九十九里平野でも最大級の流域面積をもつ栗山川の河口域に位置していることから、古来多くの堆積が進み、九十九里平野臨海部の他地域と比べれば、相対的に居住・農耕を可能とする条件が整っていたのかもしれない。

## 7. 流域の視点

以上、地形立地から抄郷の類型的特徴をみてきたが、多くの抄郷は水系との関わりが深かったことから、流域単位で抄郷の分布を捉えることからみえてくることもあるように思われる（表「各流域における抄郷とその地形立地」参照）。例えば、流域面積の上位を占める3河川（一宮川・栗山川・南白亀川）の各流域における抄郷数は、九十九里平野の他河川のそれを凌いでおり、流域面積と抄郷の分布数は比例関係にあるといえる。特に栗山川の流域は、下総台地の開析が進み、広い谷平野を擁するためか、上流部にまで抄郷の分布が確認され、九十九里平野～下総台地最多の抄郷数を誇ると同時に抄郷の地形立地の多様性でも突出している。

特に、前節で述べたように、#18の地形立地を可能とさせた理由については、流域的な視点で考えないと解けないように思われる。相対的に大きな河川（流域面積）ほど、集落を台地際から平野部さらには臨海部に押し出す可能性が高いのではないか。

表 各流域における抄郷とその地形立地(Kinoshita, 2012)

流域名	流域面積 km <sup>2</sup>	抄郷名	台地上	谷戸または中位段丘面 (タイプ 1)	台地のふもと (タイプ 2)	低地の砂丘上または自然堤防 (タイプ 3)	海岸後背の砂丘上 (タイプ 4)
栗山川	340	#21 匝瑳郡中村郷	✓				
		#22 匝瑳郡玉造郷	✓				
		#23 匝瑳郡田部郷		✓			
		#19 匝瑳郡石室郷		✓			
		#16 武刺郡押熊郷		✓			
		#15 武刺郡長倉郷			✓		
		#14 武刺郡片野郷			✓		
		#20 匝瑳郡須賀郷					✓
		#18 匝瑳郡幡間郷					✓
木戸川	72.1	#13 武刺郡新居郷		✓			
		#12 武刺郡大蔵郷		✓			
		#02 山辺郡草野郷		✓			
作田川	111.7	#11 山辺郡菅屋郷			✓		
真亀川	82.2	#10 山辺郡岡山郷			✓		
南白亀川	169.7	#01 山辺郡高文郷			✓		
		#03 長柄郡柏原郷			✓		
一宮川	440	#04 長柄郡兼陀郷		✓			
		#05 長柄郡刑部郷		✓			
		#06 長柄郡車持郷		✓			
		#07 長柄郡坂本郷		✓			
		#09 埴生郡埴生郷					✓
新川	?	#24 海上郡神代郷			✓		
		#25 海上郡石井郷			✓		
その他	?	#26 海上郡横根郷					✓

参考資料

農林水産省関東農政局両総農業水利事業所ホームページ,

<http://www.maff.go.jp/kanto/nouson/sekkei/kokuei/ryoso/index.html>

## 第三回〈古凡村〉千葉疾走調査

### 1 目的

本調査は「持続的環境・建造物群継承地区」通称、〈古凡村〉研究のひとつにあたる。

なお、「持続的環境・建造物群継承地区」とは特有の環境条件とそこに存在する建造物群とコミュニティとの間に動的平衡性が古くから持続し現在においても有効に継承されている地区をいう。

本研究は、幾世紀にも渡り存続し、今なお健全な共同体が認められる集落を評価することにより、今後の防災指針を検討する上での基礎資料を提供することを目的としている。

〈古凡村〉は、和名類聚抄に記載されている郷のうち現在地名との比定精度が高いものとしている。

千葉県においては和名類聚抄に記載されていたのは173郷であり、実際に〈古凡村〉として採用したのはこのうちの51.4%の89郷である。

2012年7月21日～22日にかけて行う今回の第二回千葉県〈古凡村〉疾走調査

は、千葉に存在する全〈古凡村〉89郷のうち、印旛沼周辺地域に存在する18郷を調査するものである。

以上から本調査の目的とは、建造物、自然環境、共同体の3つに着目して調査を行うことで、今後も継続していく〈古凡村〉研究において、〈古凡村〉の健全な評価を行うための評価軸を作成することである。

### 2 参加者

(大人) 中谷礼仁、木下剛、石川初、大高隆、福島加津也

(千葉大) 高橋大樹、梶尾智美、桃井佳奈子

(早稲田) 西吉永一、大村麻衣子、庄子幸佑、小林千尋、堀井隆秀

### 3 調査日程【参加者】

2012年7月21日(土)【中谷、木下、大高、高橋、梶尾、西吉、大村、庄子、小林、堀井】

2012年7月22日(日)【中谷、木下、石川、大高、福島、高橋、梶尾、桃井、西吉、大村、庄子、小林、堀井】

No.	古代郷 / 現在市町村	執筆担当者
01	山辺郡高文郷 / 山武郡大網白里町大網	庄子幸佑
02	山辺郡草野郷 / 大網白里町萱野	大村麻衣子
03	名柄郡柏原郷 / 茂原市本納	大村麻衣子
04	長柄郡兼陀郷 / 茂原市上太田	大村麻衣子
05	長柄郡刑部郷 / 長柄町刑部 <sup>おさかべ</sup>	高橋大樹
06	長柄郡車持郷 / 長柄郡長南	西吉永一
07	埴生郡坂本郷 / 長南町坂本	高橋大樹
08	夷隅郡長狭郷 / 大原町上布施 <sup>かみぶせ</sup>	西吉永一
09	埴生郡埴生郷 / 長生郡一宮町	大村麻衣子
10	山辺郡岡山郷 / 東金市東金	高橋大樹
11	山辺郡菅屋郷 / 東金市家之子	西吉永一
12	武刺郡大蔵郷 / 松尾町上大蔵	西吉永一
13	武刺郡新居郷 / 芝山町新井田	高橋大樹
14	武刺郡片野郷 / 松尾町八田猿尾	西吉永一
15	武刺郡長倉郷 / 横芝町長倉	西吉永一
16	武刺郡押熊郷 / 芝山町下吹入	高橋大樹
17	武刺郡加毛郷 / 芝山町大里	高橋大樹
18	匝瑳郡幡間郷 / 横芝光町原方	梶尾智美
19	匝瑳郡石室郷 / 横芝光町小川台	梶尾智美
20	匝瑳郡須賀郷 / 匝瑳市横須賀	梶尾智美
21	匝瑳郡中村郷 / 多古町南中	庄子幸佑
22	匝瑳郡玉造郷 / 多古町南玉造	庄子幸佑
23	匝瑳郡田部郷 / 栗源町西田部	庄子幸佑
24	海上郡神代郷 / 東庄町大久保	小林千尋
25	海上郡石井郷 / 旭町岩井	小林千尋
26	海上郡横根郷 / 飯岡町横根	小林千尋

## 01 山辺郡高文郷／山武郡大網白里町大網

担当：庄子幸佑

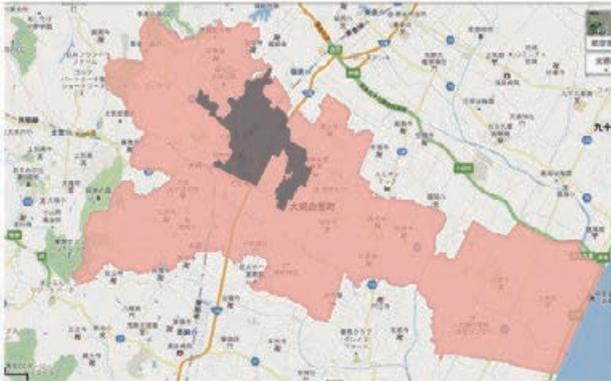


図 01-1 大網白里町の町域と大網・仏島の村域



図 01-2 街道沿いに立地する商店（撮影：庄子幸佑）



図 01-3 半鐘（撮影：高橋大樹）



図 01-4 街道に平行する集落生活道路（撮影：庄子幸佑）

## 1) 村域の分析

抄郷は、現在の「大網白里町金谷郡・南玉・池田から大網・仏島にかけての一带に比定している」と述べる。抄郷として比定された現在地は、九十九里平野と台地の際部に位置している。現在地を含む大網白里町全体の市域は、台地上から海岸部までを含んでいる。大網白里町の市域の変遷を追うと、現在の市域の中心となっているのは、大網と仏島である。<sup>1</sup>とくに大網について見ると、台地部と平地部を含む。町域内の水系は、台地部にはいくつものため池があり、低地部に水田のためと思われる水路が広がっている。<sup>2</sup>

## 2) 実見した際の概要

調査に際して中心的に実見したのは、大網宿あたりである。街道沿いに集落が形成されており、そこには大正期ころに建設された建物も見られた。（デザインやガラスの使われ方などから）ただ現在は宿場町もしくは街道沿いの集落として繁栄しているとは言えず、どちらかというところでは廃れている印象であった。街道沿いの集落の裏には、生活道路が通っており、また小学校および寺・墓地が立地している。また集落中央部には、半鐘がつくられており、集落全体を見通せる位置にあった。街道を中心として集落はまとまっている。明治期に宮谷県庁があった本国寺周辺また水田部は実見していない。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

集落はおもに約 1 万 8000 年前～現在までに形成された堆積岩類（後期更新世 - 完新世）上に立地している。台地は約 70 万年前～15 万年前に形成された堆積岩類である。低地部には砂丘・堆積物で形成される地質も点在しており、現在、宅地として開発されている部分がその地質状にあっていると思われる。土地利用としては、台地と低地の際に集落が立地し、低地部は水田および宅地となっている。台地部に関しては、不明である。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図と 1952 年の航空写真を見ると、大網から仏

1 「1889 年（明治 22 年）4 月 1 日 - 町村制施行により、大網宿、仏島村が合併して山辺郡大網町（初代）が発足。1897 年（明治 30 年）4 月 1 日 - 山辺郡、武射郡が統合して山武郡が発足。山武郡大網町になる。1951 年（昭和 26 年）4 月 1 日 - 大網町、瑞穂村、山辺村が合併し、改めて大網町（2 代目）を新設。1953 年（昭和 28 年）4 月 1 日 - 大和村のうち小西、養安寺、山口の一部を編入。大和村の残部は東金町（現東金市）へ編入。1954 年（昭和 29 年）12 月 1 日 - 白里町、増穂村と合併して大網白里町を新設。同日大網町廃止」（註）とある。大網・仏島を中心に市域が広がっていったと考えられる。昭和 29 年には 2 町 1 村の合併により大網白里町が誕生し、丘陵（旧大網町）・田園（旧増穂村）・海岸（旧白里町）の 3 つの特徴ある風土をもつまちが形成されている。

2 大網の本国時には明治初期、宮谷県庁が置かれており、木更津県が設置されるまでの 2 年 9 ヶ月の間、旧安房・上総を中心として、下総（匝瑳・海上・香取）および茨城の一部までを管理していた。本国寺には江戸期、宮谷檀林があり、最盛期では 800 名ほどの学僧がいた。



図 01-5 1952年の航空写真 国土変遷アーカイブより



図 01-6 1979年の航空写真 国土変遷アーカイブより

島へ向かう街道沿いに集落がスプロールしている様子を見ることができる。それ以外の部分は特に大きな変化はない。1952年と1974年を比較すると、圃場整備が行われ、水田が均一的なグリッドになっているだけでなく、水田部に宅地が開発されているところも散見される。さらに1979年を見ると、水田部の開発が進行し、その後も開発が進んでいくと考えられる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

#### ・2-1 集落地・形態の妥当性

低地と台地の際部に位置し、妥当と言える。

#### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

台地の際部に街道が通り、またその背後には生活道路が設えられている。妥当。

#### ・2-3 生産立地の妥当性

低地部は、以前は水田として利用されている。妥当。

#### ・2-4 その後の変容の妥当性

集落は、生産地へスプロールしている。交通経路としては、鉄道の発達により、東京へのアクセス性が工場。生産地は水田だったものが、宅地として開発されている。全体としての妥当性については要検討。

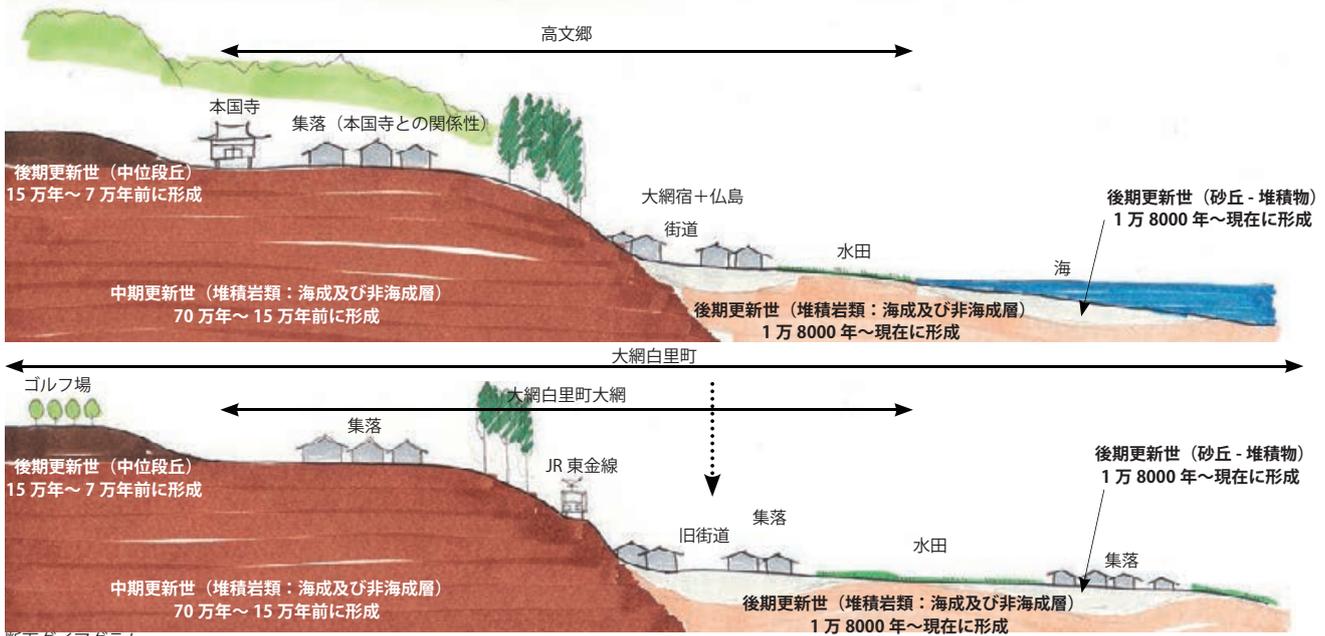
### 参考文献

3 大網白里町 HP (<http://www.town.oamishirasato.chiba.jp> 20120819 閲覧)

Wikipedia (山辺郡・武射郡・大網町 20121201 閲覧)

3 大網白里町 HP 内では、**福田保存会**という組織が紹介されている。掲載ページには、以下のような文章が載せられている。

「時期は不明ですが、大網宿の飲屋に「おさん」という美人の女中がおりました。「おさん」は多くの学僧たちに慕われていたそうです。やがて、修行を終え故郷に帰る僧が「おさん」に未練を残して歌ったのが、この宮谷坂です。福田保存会では、この歌に戦後の頃から踊りを付けて現在に伝えています。近年では歌と踊りだけでなく、学僧とおさんの別れをテーマにした劇も取り入れて評判を得ています。」とあり、郷土史家などいることが予想される。



断面ダイアグラム

## 02 山辺郡草野郷／大網白里町萱野

担当：大村麻衣子



図 02-1 村域図 googleMap より



図 02-2 衛星写真 googleMap より 筆者加筆



図 02-3 ゆるやかな傾斜を利用した棚田 撮影＝大村麻衣子



図 02-4 上熊野神社 撮影＝大村麻衣子

## 1) 村域の分析

南白亀（なばき）川支流の小中川上流の右岸に位置する。大網白里町萱野・砂田・神房・小中などに比定される。本村域はそのほぼ全てが谷戸及び山林であり、西側の一部にはゴルフ場を含む。北西側の境界は昭和の森と接している。

谷戸には水田が作られ、ゆるやかな傾斜を利用した棚田も一部で見られた。（図 02-3）村域内には複数の溜池があり、農業用水の確保のために用いられている。

低地の水田と、斜面林、山頂部の台地にある畑の構成は、典型的な谷戸集落であると言える。

## 2) 実見した際の概要

集落は、小さく複雑な谷戸地形に沿う形で配置されている場合が多く、一部は小さな谷戸の全てが集落で覆われている場所も見られた。比較的大きな民家が多く、他の農村と同様集合住宅は見られない。

集落の北東にはみずほ台<sup>3</sup>という新興住宅地がある。これと集落は一本道で接続されているにも関わらず関係性は全く見出されなかった。

谷戸の中心部を東西に走る一本道を西に向かって進むと、集落に到着する手前で建造中の圏央道（首都圏中央連絡自動車道）と交差した。圏央道はかなり高い位置を通す予定のようで、巨大な陸橋が建設されようとしていた。

そのまま進むと主に左手に水田、右手に集落が見える。この道は谷戸地形に沿うように北側へ大きく曲がるが、一方で延長されるように車の通れない道が続く。この細い道は上熊野神社<sup>4</sup>の参道であり、この神社は谷戸の先端に位置することから、さながら水田の中の浮き島のようなだった。（図 02-4）

宅地には比較的細い道が多く、それぞれの家の間は生け垣が配置されているものが多かったが、中にはブロック塀で仕切られている場合もあった。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

- 1 東急セブンハンドレッドクラブ。東急電鉄グループ系のゴルフ場のひとつ。
- 2 千葉県千葉市緑区に存在する総合公園。敷地は約 100ha あり、千葉市内では最大の公園。開園は 1975 年。公園の西側は、標高 60m～90m の下総台地に連なり、東側は九十九里平野と下総台地を分ける高低差約 50m の崖地（海蝕崖）に接している。公園の一部は県立九十九里自然公園に指定されており、自然の植栽が多く残されている公園のひとつである。
- 3 土地区画整理事業のひとつで、1983 年から 1998 年にかけて建造された。事業主体は土地区画整理組合である。施行面積は 69.7ha にも及び、当初の計画によれば 1,775 戸、7100 人の新興住宅となる予定。この計画以前には、この土地の人口はたった 143 人であった。
- 4 成立年、読み方（うえ熊野、かみ熊野か）不明。「おびしゃ」と呼ばれる千葉県で多く行われる新年行事が行われているらしく、その的があった。この「おびしゃ」は流鏝馬に対して立って弓矢を放つもので、その命中率でその年が豊作かどうかを占う。



図 02-5 抄郷付近の地質図 シームレス地質図より



図 02-6 萱野 1965 年 国土変遷アーカイブより



図 02-7 萱野 1975 年 国土変遷アーカイブより

村域は全て堆積岩類によって作られており、集落を構成する背後山林、畑、宅地、水田全てが同じ地質の上に存在している。しかし地形的に見てみると、等高線によって明確に区別がなされている事が伺える。主に最も低地に水田が作られ、そこから約 0.5 ~ 1m 程高くなった位置に道が通る。その道から谷戸の際までが宅地となり、背後山林、台地の畑地となっている。(断面ダイアグラム参照) また、ここは街道から離れた場所に過去も現在も位置しているため、街道などとの関わり合いは見られない。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1965 年と 1982 年の空撮写真を比較してみると、集落立地などほとんど変化が見られない。しかし 1965 年と現在の地図を比較してみると、最も大きな変化があったのはみずほ台であるとわかるが、すでに述べたように変化は無いため相互の関係性は薄いと考えられる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 妥当性の検討

##### ・2-1 集落立地・形態の妥当性

はっきりとした妥当性が感じられた。

##### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

しっかりと地形を読んだ道が配されていた。

##### ・2-3 生産立地の妥当性

畑、水田の使い分けが理にかなっている。

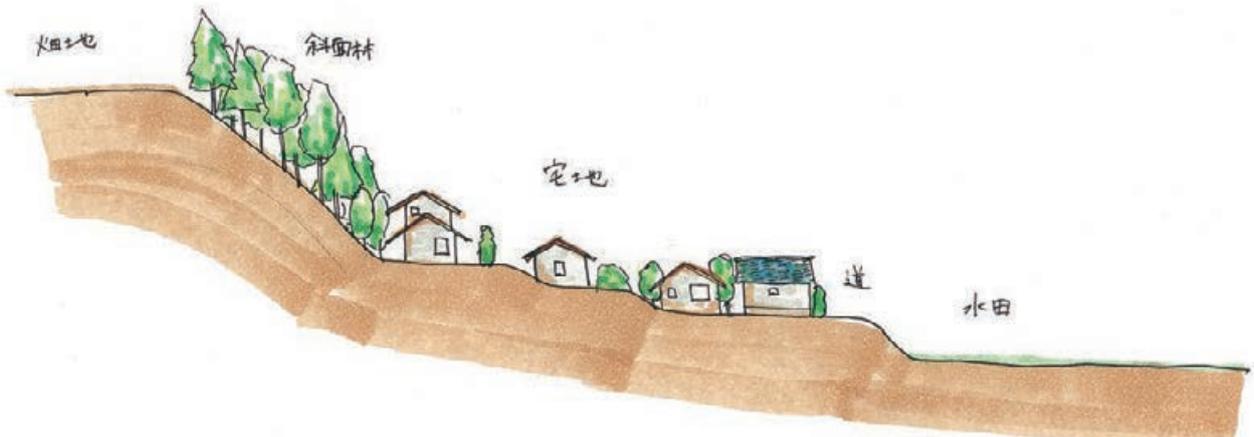
##### ・2-4 その後の変容の妥当性

いい発展の仕方、新旧の共存がなされている交通としては、最も奥まった場所にあるため自立して続いている印象を持った。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984 年  
千葉市ホームページ, <http://www.city.chiba.jp/>, 2012 年 7 月 4 日閲覧

1 住民お手製のカーブミラーなど、畑に行くための台車が通る道が木でつくられていたり、暖かみがあった。



断面ダイアグラム

## 03 名柄郡柏原郷／茂原市本納

担当：大村麻衣子



図 03-1 村域図 googleMap より



図 03-2 衛星写真 googleMap より 筆者加筆



図 03-3 旧街道沿いの様子 撮影＝大村麻衣子



図 03-4 背後に存在する農地の様子 撮影＝高橋大樹

## 1) 村域の分析

読み方は定かではなく、便宜のために角川地名辞典では「かしわはらのごう」とされている。現在の茂原市本納から清水にかけての一角が比定される。村域の西側にトヨタの工場を含み、東側は線路及び用水路で境界が定められている。また、飛び地となり東側に 400m 程離れた東神社<sup>2</sup>付近村域を持つ。しかし神社自体は村域に含まれていない。この飛び地した村域には水田と宅地のみであり、なぜここに飛び地しているのかは判明しなかった。

村域を南北に旧街道（現千葉県道 226 号線）が通っている。この街道のため江戸時代には塩や農具、日用雑貨の取引される市が立ったとされている。この地を納めていた大久保忠佐<sup>4</sup>の山城は城趾は現在の蓮福寺にある。

## 2) 実見した際の概要

街道（現千葉県道 226 号）のクランク部分には商店建築（文房具店、薬局、呉服屋など）が見られ、かつて栄えていた事が予想されるものであった（図 03-3）。このクランクを境にして、北側には商店が多く目立ち、南側には住宅が多い。

クランク、兜造りの民家など本調査 01 の高文郷と似通った村であるが、そちらと比較してみると商店が豊かな印象を受けた。これは背後に農地を持つという特性からくるのだと考えられる。背後の農地となっている部分は、更に本調査 02 の草野郷と近い印象を受けた。（図 03-4）それは同じように谷戸に存在している事や、谷戸の際に宅地が配置されていることによる。その宅地の裏に斜面山林があることも酷似していた。しかし、畑地は見受けられず、この村は街道沿いにあったことで発達したこともあり、集落の機能として農地はあまり重要視されていないようであった。

また、高文郷と比較して豊かであるとは言っても、駅の東側を通るバイパス<sup>6</sup>により商店街の活気は随分と失われていた。

1 千葉トヨタ茂原新車点検整備工場のこと。

2 茂原市法目 1057-4 にある神社。「あずま神社」か「ひがし神社」と読むのかは不明。

3 六斎市のこと。六斎日にちなんだ、ひと月に 6 回行われる定期市。室町時代から各地で行われるようになった。

4 大久保忠佐（おおくぼただすけ、1537-1613）江戸時代の駿河沼津藩（現在の静岡県沼津市大手町）の藩主。1590 年に幕府は江戸に移ったのを期に、ここ茂原に 5000 石を与えられた。藩主となったのは更にその後 1601 年の事である。

5 日本の家屋の屋根の形態の 1 つ。かつて日本の武士が冠っていた兜に似ている事から名付けられている。

6 千葉県道 128 号線。長生郡長柄町長富から千葉市緑区誉田町までを結んでいる。



図 03-5 柏原郷 1952 年 国土変遷アーカイブより



図 03-6 柏原郷 1975 年 国土変遷アーカイブより

### 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

村域は全て沖積層で構成されているが、谷戸側の方が成立時期が古く、線路周辺は比較的新しい沖積層である。多くの商店はこの新しい沖積層上に存在している。街道がある事がこの地域に商店街を形成させ、特徴を造り出していたが現在においてはその繁栄もバイパスに塗り替えられており、街道と集落の関係性は見出しづらくなっている。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1952年と1975年の集落の範囲に大きな変化は見られない。若干1975年の空撮写真の方が住宅が多くなっているように見える。また、最も大きな変化は千葉県道128号線が建設された事である。建設年は判明出来なかったが、これによるためか現在の航空写真においては1975年当時よりも一層住宅が増加している。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

#### ・2-1 集落地・形態の妥当性

様々な場所でそれぞれに適したものが配置されているため、高文郷と比較してより妥当性が高い<sup>1)</sup>。

#### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

様々な時代の交通手段が見え、妥当な配置がされ経路が明白。バイパスに活気があるのは車社会である事が大きい。

#### ・2-3 生産立地の妥当性

生産的には恵まれていないのかもしれない。

#### ・2-4 その後の変容の妥当性

旧道には車が入ってこないため(クランクなどが原因)バイパスが現在に大きな変化を及ぼしている。

### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年

1 萱場は他の村域にあり、生産の地は谷戸のみであるのではないか。そのため高文郷とは背後に広大な村域を有していることが対照的である。今後はこの相違点に着目するということを行っていくのもよいかもしれない、という意見もあった。



断面ダイアグラム

## 04 長柄郡兼陀郷／茂原市上太田

担当：大村麻衣子



図04-1 村域図 googleMapより



図04-2 衛星写真 googleMapより 筆者加筆



図04-3 芝崎神社の参道

## 1) 村域の分析

九十九里平野南部に位置する。現在の茂原市上太田・下太田に比定される。村域の南半分の多くがゴルフ場となっており、北側は千葉県道21号線と接している。また、谷戸地形であるのが特徴で、主に南側が標高が高くなっており、この南側には水源となる溜池も複数確認出来る。村域の北東から流れる水路は、一宮川の支流のひとつである。

## 2) 実見した際の概要

千葉県道21号線から西に曲がり、村域を目指す道の途中北側には芝崎神社があり、本殿は明治13年に再建。拜殿は明治29年に造られているが、起源は神話上に基づくがここに神社が造られたのは天和2年のことである。(図04-1) 芝崎神社は草野郷の上熊野神社と立地が似ているという共通性が見られた。

上太田の集落には、長屋門を有する大きな屋敷が目立ち、豊かな生活を彷彿とさせた。また、聞き取りによっては神道・仏道共に大切にしている集落であり、上太田と下太田の両集落を守る神社が存在することがわかった(神社の名称は不明)。更に集落を左手にして道を進むと、圏央道(首都圏中央連絡自動車道)が建設途中であった。

先に触れたゴルフ場は、集落から離れていることもありあまり大きな影響は無いように感じられた。また、現在茂原市には茂原工業団地があり、この団地は周囲からは見えないように作られている。おそらく入会地に建造されているのではないかと想像されるが、今後更に工業団地が建設予定であることが聞き取りによって判明した。(図04-1,4)

これによれば、下太田の有する農作地のほぼ全域が失われることとなり、今後集落としてどのように存続されていくのかが不安となると予想される。

## 3) 地形(地質)と街道・集落の関係

典型的な谷戸集落の一例のようであるが、この村は背

1 真名カントリークラブ。1976年に設立されている。茂原市以外にも、本調査において多くのゴルフ場を目にした。千葉県は日本国内で3番目にゴルフ場の多い県であり、2005年の記録によれば158カ所であった。更にその利用者数は、全国で1番であった。これらのゴルフ場の半数はバブル期以降に建設されており、まさにゴルフ場開発ラッシュであった。千葉県では「千葉県におけるゴルフ場等開発計画の取扱い方針」という条例を施行しており、1984年の制定以降数回の所要見直しを行っている。ここでは、自然環境の保全を念頭に置き優良な農地及び山林の保全を主眼としており、現在ではこの目的に沿って開発を当分受け付けないとしている(特例もあり、その場合には開発可能)。当然、この乱開発を受けて反対運動も起きており、「ゴルフ場問題千葉県連絡会」というものが存在する。この会が結成されたのは、1990年であった。この会がゴルフ場開発に反対する理由は、芝生整備のための農薬の使用による影響を懸念している事である。現在千葉県は、ゴルフ場での農薬の使用を基本的に禁じてはいるが、業者からの届け出のみの検査であって実際に調査は行われていないままである。

2 千葉県茂原市本納に位置する工業団地。



図 04-4 聞き取りの様子



図 04-5 兼陀郷 1947 年 国土変遷アーカイブより

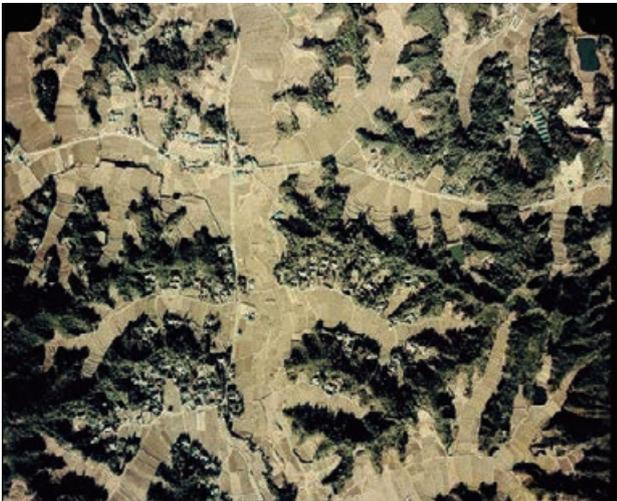


図 04-6 兼陀郷 1975 年 国土変遷アーカイブより

後にある斜面林の先をほとんどゴルフ場として売り渡しているために畑があまり多く無い。村域内の地質は二種存在し、中位段丘と堆積岩類に分けられる。殆どは堆積岩類であるが西側と北側の一部に中位段丘が見られ、地質によって機能が分けられている様子はない。むしろ地形によって低地から高地に至るまでに水田、道路、宅地、斜面林となっている。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1947 年と 1975 年の空撮では集落の配置、農地などに変化は見られず、ゴルフ場建設以外の大きな外的要因が少ないために保たれて来た集落であることが伺える。なお、現在の空撮と 1975 年当時の空撮では道が延長された事と、宅地が増加しているという変化が見られる。しかし集落としての範囲を拡大したりする程の変化ではない。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 妥当性の検討

##### ・2-1 集落地・形態の妥当性

谷戸の山との間に家屋が並び、典型的で妥当性が高いのではないかと。神社などの宗教的施設が強く、伝説的場所のようである。

##### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

大きな問題はない。

##### ・2-3 生産立地の妥当性

農村の生産の場として豊かである。

##### ・2-4 その後の変容の妥当性

芝崎神社のに出来た道による影響は不明。今後、現在建設中の高速道路がどういった影響を及ぼすのかが懸念されるが、それ以前までは変化があまり感じられず、新しい交通手段は集落をあえて避けて通っているようである。<sup>3</sup>

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984 年  
 ちばぎん総合研究所, <http://www.crinet.co.jp/>, 2012 年 7 月 4 日閲覧  
 千葉県, <http://www.pref.chiba.lg.jp>, 2012 年 7 月 4 日閲覧

<sup>3</sup> 聞き取りに協力頂いた男性は、「意識的に神様を売っている」と言っており、神様のための土地を売るなどしながらも集落としての形を存続させてきたのではないだろうか。



断面ダイアグラム

## 05 長柄郡刑部郷／長柄町刑部

担当：高橋大樹



図 05-1 村域図 googleMap より



図 05-2 衛星写真 googleMap より



図 05-3 集落の様子 撮影＝高橋大樹



図 05-4 八重垣刑部神社 撮影＝庄子幸佑

## 1) 村域の分析

小さな谷戸を複数含む町域となっている。各谷から流れ出る小川は一宮川の源流をなす。主要地方道市原茂原線が中央を東西に走り、これに沿って水上郵便局・農協倉庫・医院・商店が連なり、村の中心を担っている。村域内に寺が4つ、神社が3つあり、それぞれ小さな谷戸ごとにある。

## 2) 実見した際の概要

集落の中央部に八重垣刑部神社が位置する。この神社は近世まで天王宮と呼ばれ、京都八坂神社の系統を引く牛頭天王信仰が行われている。神社は台地の突端部にあった。また、河畔林が発達していたが、タケや他の樹木が乱立していたのであまり手入れがなされていない印象を受けた。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

一宮川の最上流部に位置していることから谷戸の谷底低地部が狭く、谷戸頭まで続く長い形状をしている。その中で刑部はそれぞれの谷戸の結節点に位置し、昔からこの地域の中心地であったと地形から読み取れる。また、谷戸の斜面は急峻で尾根部に平坦な場所を持たないため、畑地としては利用せず谷底低地部の水田による稲作が主産業だったと思われる。

一方、古代交通の観点からは刑部はかなり歴史が深い。大和政権が上総進出・支配のルートは東京湾から古養老川を遡って、分水嶺を越え太平洋に注ぐ一宮川に沿って九十九里平野へと進出していった。その様子は、上総に設置された名代<sup>1</sup>（なしろ）の分布によって確認できる。刑部<sup>2</sup>は市原郡海部郷と江田郷、長柄郡刑部郷に分布する。つまり古養老川と一宮川の流域に集中している。また、刑部と関係の深い名代が長谷部である。上総においては、市原郡、海上郡、倉橋郷、長柄郡谷部郷に分布している。海上瀨から古養老川へ入った五世紀末の雄略朝の大和政権は、右岸の市原郡と中流左岸の海上郡倉橋郷（市原市栢橋、支流戸田川流域か）に長谷部を定め、

1 名代（なしろ）、御名代（みなしろ）は、古墳時代の部民制において、一定の役割をもってヤマト王権に奉仕することを義務づけられた大王直属の集団である。『官職要解』には、「王族の功業を後世に伝えるために置かれた部民」と記す。『日本書紀』には、646年（大化2年）の「改新の詔」によって廃止されたと記述されている。

2 名代の部名は、ヤマト王権の大王が宮を営んだ場所の名にちなんで命名されている。上総で最も古い名代は、応神天皇の皇子額田大中彦の名代と伝えられる額田部である。額田部が集团的に設定された周淮（すえ）郡額田郷は、君津市糠田周辺に比定できる。つぎに古いのは、刑部（おさかべ）である。刑部は允恭天皇の皇后忍坂大中姫（おしさかのおおなかつひめ）の名代であり、允恭天皇は五世紀中葉の倭王済に比定できる。刑部と関係の深いのが、忍坂大中姫所生の雄略天皇の名代長谷部（はつせべ）である。忍坂大中姫と雄略天皇は親子の関係にあるため関係が深い。

下野	上野	常陸	下総	上総				安房	武蔵			相模	国	
河内	茨城	猿嶋	葛飾	未詳	武射	長柄	夷漕	海上	市原	未詳	豊島	橘樹	多磨	郡
刑部郷	刑部直・刑部	刑部	刑部	刑部直	刑部郷	刑部郷			刑部直・刑部	刑部直・刑部	刑部	刑部直	刑部直	
			長谷部			谷部郷		長谷部	谷直	長谷部				名
					春日部		春日部直							代

図 05-5 刑部・長谷部・春日部の分布 道楽悠々より

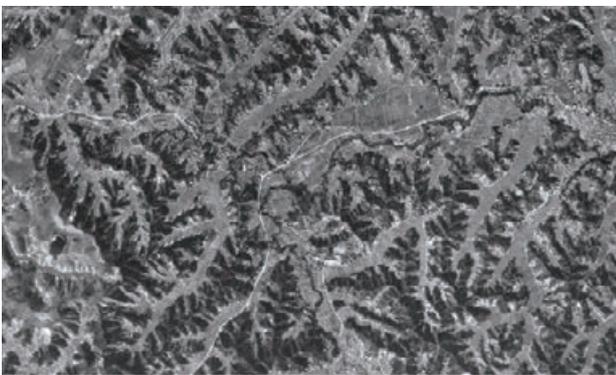
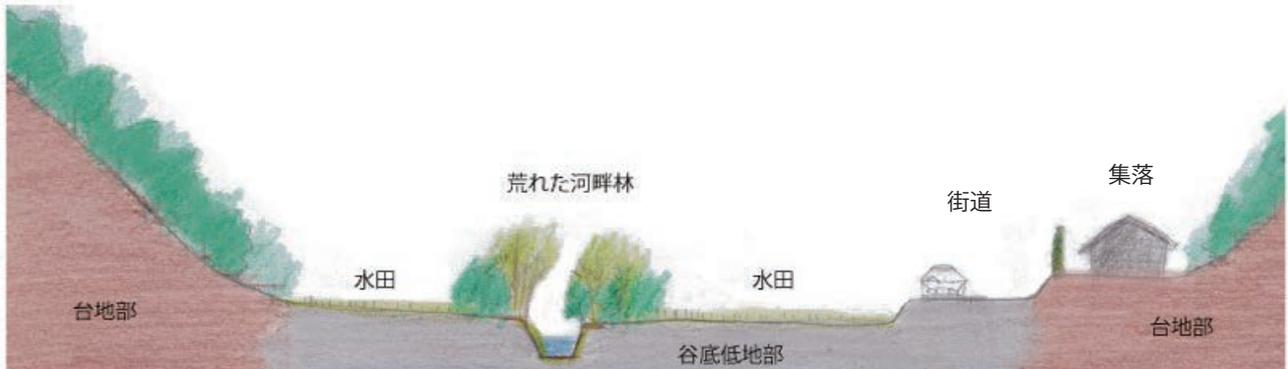


図 05-6 刑部 1958 年 国土変遷アーカイブより



図 05-7 刑部 1963 年 国土変遷アーカイブより

断面ダイアグラム



江子田古墳群のある市原市江子田付近に上陸し分水嶺を越えて長柄郡刑部郷へ至り、そこからさらに一宮川沿いに下って、一宮川が九十九里平野にさしかかる中流左岸の長柄郡谷部郷（茂原市長谷一带）の人民を広く長谷部に設定し、ここにも房総東岸部への進出拠点を置いた。ここに至って大和政権は、東京湾に注ぐ古養老川と太平洋に流れこむ一宮川とを連結するルート、すなわち房総半島の中央部を横断する支配ルートを開拓したといえる。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1961 年の空撮や迅速測図と比べてもほとんど変わっていないことがわかった。これは谷戸の細長い形状や集落立地が山奥にあることが大規模な開発を妨げていると考えられる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 妥当性の検討

##### ・2-1 集落立地・形態の妥当性

妥当である。

##### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

大和政権の関係性から妥当である。

##### ・2-3 生産立地の妥当性

妥当である。

##### ・2-4 その後の変容の妥当性

ほとんど変化がなく、平衡化され印象が薄く驚異的である。

#### 参考文献

道楽悠々（郷土史家による WebSite 古代の上総の水陸交通に関する研究が紹介されている） [http://douraku-yuyu.net/f\\_shinkou22.html](http://douraku-yuyu.net/f_shinkou22.html) (20120701 閲覧)

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984 年

## 06 長柄郡車持郷／長柄郡長南

担当：西吉永一



図 06-1 村域図 googleMap より

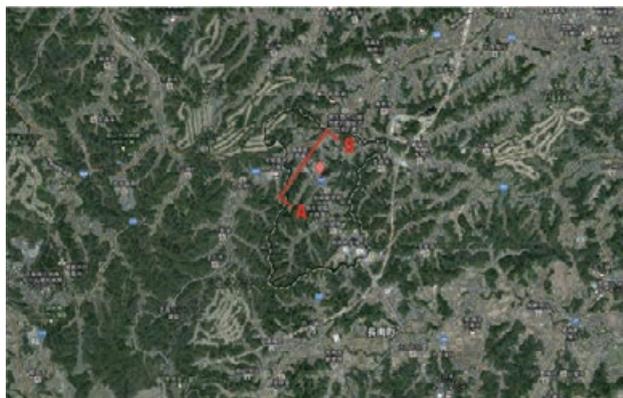


図 06-2 衛星写真 googleMap より 断面線を筆者加筆



図 06-3 谷戸奥部から街道側を眺める 水田の一部が畑地や新興住宅地化している撮影＝高橋大樹



図 06-4 旧街道 現在の房総横断道路 409 号線 撮影＝高橋大樹

## 1) 村域の分析

現長南町の北部。村の周辺にゴルフ場や工場がある。農業用水を確保するための溜池が多く散在している。房総横断道路 409 番線が町を通っている。村域はその中央を抜ける街道を中心に東西の丘陵、谷戸へ長くのびている。

## 2) 実見した際の概要

長南は、街道沿いの民家（これらは街道に接して店舗を構えている例が多い）と、その東側山林の奥に立地する神社、集落中央を通過する街道、また街道西側に展開する小学校、寺院などの施設、その裏の谷戸につくられた水田という構成をとる。

まず民家であるが、街道の往来がにぎやかであった頃を忍ばせる米穀店、酒屋、衣服店など商店が多い。しかし今では街道も国道化し、自動車の行き来は多いものただ通り過ぎるだけである。商店も未だに看板など残っているが実際は勤めに外へ出ている家が大半であるという。民家敷地は街道から奥へ細長く伸び、奥には母屋や蔵がある、分棟の家がほとんどである。

小道が街道から民家敷地の横に伸びており、辿ってみると山林崖地に階段がつくられ、その奥に祠や神社が祀られている。街道沿いに大小さまざまな形態の神社、祠が同じような動線で作られており、住民に尋ねたところ、組ごとにひとつそのような神社、祠があるらしい。しかし現在ではきちんと管理されているものとそうでないものがあり、集落の共同性が薄まっていることを端的に示している。

また街道西側には水路を挟んで、小学校や寺院など公共的な性格を有した施設が点在する。また寺院に隣接して墓地が広がっており、特に水路を挟んで東側とは明らかに土地利用の形態が異なる。さらに奥には谷戸に水田が展開しており、貴重な生産地であるようだ。しかし現在では一部が新興住宅地化し、外部から新しい住民が流れ込んでいる。住民の方に聞き取りをすると、だんだんと水田が開発業者に売られて宅地化しているということだった。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

比較的少ない沖積層低地が余すところなく宅地、生産地として利用されている。また生産地はそれほど多くないものの、古くから街道が通っており、房総において交

1 房総横断道路（ぼうそうおうだんどうろ）は 1988 年（昭和 63 年）度に制定された千葉県道路愛称名。木更津市長須賀から長生郡一宮町東浪見までの道路を指す。国道 409 号と国道 128 号にあたる。近年では圏央道が並走すると決まったことで、幹線道路としての位置付けが向上したと思われる。



図 06-5 迅速図



図 06-6 地質図

通の要所という立地が集落持続に大きく寄与していると考えられる。街道の歴史の変遷についてはさらに調査分析を深める必要があるだろう。

#### 4) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 5) 妥当性の検討

##### ・2-1 集落地・形態の妥当性

丘陵地に囲まれており、房総半島へ続く交通の要所である。古くからその機能を有していたと考えられ、その立地には妥当性がある。

##### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

交通と深い関係にある集落と言える。今も国道が通り、要所としての機能自体は失われていない。妥当である。

##### ・2-3 生産立地の妥当性

生産地は比較的少なく、現在も宅地化が進んでいる例である。さらなる検討を要すだろう。

##### ・2-4 その後の変容の妥当性

変容は大きく、さらなる検討を要す。

#### 参考文献

町田貞『地形学辞典』二宮書店、1981年／竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年

#### 平面ダイアグラム

平面的には西側に谷戸が入り込み、そこに段丘上の水田が展開している。また樹林との境界段丘面には寺院や小学校などが立地、また水田の一部は宅地化し新興住宅地が建ち並んでいる。古くからの民家は街道沿い、あるいは谷戸の中腹に農家が数軒建っている。



#### 断面ダイアグラム



## 07 埴生郡坂本郷／長南町坂本

担当：高橋大樹



図 07-1 村域図 googleMap より



図 07-2 衛星写真 googleMap より



図 07-3 集落を俯瞰的に見る 撮影＝西吉永一



図 07-4 集落際にある開発中の道路 撮影＝高橋大樹

## 1) 村域の分析

村域全体に谷戸が入り組んでおり、村域の範囲としては長南町の中でも比較的面積が大きいといえる。ほぼ中央を長南に通じる町道（長南～茂原間バス路線）が走り、並行して一宮川支流の鶴枝川（上流域）が東流する。集落は町道沿いと丘陵下に散在し、近代農村のたたずまいをみせる。

## 2) 実見した際の概要

谷戸の北斜面沿いに大きい民家が多く列状に配置されていた。これは、北斜面側が日の光が当たりやすいことが関係している可能性がある。民家の形状は屋根が大きく立派で各家庭が裕福である印象を受けた。また、民家の前のスペースでは小さな畑作をしている家庭が多く見られ、生垣はイヌマキが多くしっかり管理されていた。昼間でも集落内の人の行き来が活発であり、農村として健全あると思えた。

東西に広がる大きな谷戸の谷底低地部では大規模な水田が広がっており、水田耕作を主とする集落であることが伺えた。また、現在建設中である首都圏中央連絡自動車道（木更津東～木更津）が集落内を通っていることが確認できた。集落の中央部の斜面地に小さな神社があった。外観は小屋のような形式であり、神社の機能を有しているか不明である。しかし、小屋で人の活動した形跡があり、現在でも何らかの形で利用していることが分かった。神社がある場所に半鐘があり、集落の中心部であったと思われる。また、南側斜面には住居はあまりなく代わりに斜面の突端部分に小規模な墓がいくつか見られた。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

地形の特徴として 05 刑部と同じく、谷戸の谷底低地部が狭く、谷戸頭までは長い形状をしている。谷戸の斜面は急峻で尾根部に平坦な場所を持たないため、畑地としては利用せず谷底低地部の水田による稲作が大規模に行われている。これは、05 の例と二つ見る限りでは、河川の最上流部で見られる谷戸の形態であると思われる。また、室町時代には坂本城が集落内に位置しており、上総本一揆の際に一揆軍の本拠地でもあったため激戦があったとされる。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1 上総本一揆（かずさのはんいっき）とは、応永 25 年（1418 年）から翌年にかけて発生した上総国の武士達による一揆。15 世紀に入ると、室町幕府の政治体制に動揺が生じ、全国各地で乱や一揆が起こった。1416 年（応永 23 年）に、鎌倉公方・足利持氏と関東管領・上杉氏憲（禪秀）の対立から起こった「上杉禪秀の乱」はその初期の例である。乱は鎮圧され、禪秀は滅ぼされるが、禪秀の地盤であった上総の国人連合が「上総本一揆」（1418 年）を起こして、抵抗した。



図 07-5 大型の伝統的民家四方をまわる垣 撮影=高橋大樹



図 07-6 坂本 1954 年 国土変遷アーカイブより

過去の空撮と比較して見ても、集落の配置に関しては全く変化が見られない。また、迅速測図と比較しても変化がなかった。しかし、集落の一部がゴルフ場に転用されていた。今後の外的要因として、現在首都圏中央連絡自動車道の建設が進んでいる。また集落付近にインターチェンジ（茂原長南 IC）も併設される予定である。今後この交通の変化によって集落内外で様々な変容が生まれる可能性がある。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

- 2-1 集落立地・形態の妥当性  
妥当性が高い。
- 2-2 交通手段・経路の妥当性  
大和政権の関係性から妥当である。
- 2-3 生産立地の妥当性  
妥当性が高い。
- 2-4 その後の変容の妥当性  
新しい高速道路との関係性が今度どうなるか次第である。

### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984 年



断面ダイアグラム

08 夷隅郡長狭郷／大原町上布施 かみぶせ

担当：西吉永一



図 08-1 村域図 googleMap より



図 08-2 衛星写真 googleMap より 筆者加筆 内側点線内は集落奥部の畑地



図 08-3 畑地へ続く私道 撮影＝高橋大樹



図 08-4 台地内奥の畑地、墓地点在 撮影＝西吉永一

## 1) 村域の分析

長狭郷域は現在の大原町上布施、下布施、御宿町上布施付近に比定され、本調査では大原町上布施集落を中心に実見を行った。上布施は落合川の上流域に当たり、農村地域である。

## 2) 実見した際の概要

集落北から集落内を抜ける道路を南に進んでいくと、台地上に立地する上布施集落が見てとれる。台地へ入る道は緩やかに高低差を繋いでおり、台地中心までのぼるとまた下がっていく。その道脇に建つ民家は土塁の上に建ち(図 08-3)、脇に台地奥へ繋がる小道が伸びている。幅員 1m ほどで、車は乗り入れられないし、部外者にとっては入ることを少しためられる。その道を進むと生け垣に囲まれた宅地を抜け、開けた畑地へ出る。(図写真、図中点線囲い部分) 畑地の中には小規模にさまざまな作物が栽培されており、集落の中庭が菜園となっているという印象である。そのなかに墓が散在しており、おそらく周囲の家のもつ墓であろう。きわめて私的な性格の場所である。調査では、路上で上布施村民である男性に簡単な聞き取りを行うことができた。集落南東に位置する布施小学校は組合立小学校であるということである。

## 3) 地形(地質)と街道・集落の関係

河川流域の村落であるが集落が立地する台地は、これまでの例に多い自然堤防ではなく、侵食による台地と考えられる。舌状の急斜面は林地、比較的緩やかな部分には宅地に付随する植栽があり、閉じた集落空間が形成されている。

舌状台地上に展開する集落としては、同千葉県内に城下町、佐倉<sup>4</sup>があり、両者を比較すると類似点が多数見つかると。図写真を参照すると、まず道が台地下からつづくため宅地に対して一段低く、民家は盛られた土塁の上に生け垣で囲んで建っている。台地上の構成としてもそ

1 推定 60 歳～70 歳前後か。一日の農作業を終えたような格好をしていた。当時時刻 17:00 頃であった。実見中にわれわれが見慣れない顔からか、興味津々に声をかけられた。気さくな方でこちらの質問に親身に答えてくださった。特に三島神社の由来を尋ねると、不明ながら自身も日頃から非常に関心があり、いろいろな憶測(周辺の地形が入り組んだ台地で三つの島に見えるから等)をたてているということだった。

2 学区がいすみ市と御宿町にまたがる。1955 年の町村合併前の布施村がそのまま学区となっている。いすみ市と御宿町の町議会議員代表者による布施学校組合議会有り、布施学校組合教育委員会も設置。学校関係の予算もいすみ市と御宿町で負担。

3 硬い地層のあいだに軟らかい地層があり、両層の境界が盆地状をなす。軟層部分の削割が早く進んで盆地となった。地層に硬軟がある場合差別侵食によって形成される。(参照:『地形学辞典』二宮書店、1981 年)

4 佐倉は、1590 年久能宗能が入封し、後に土井利勝が改築城した城下町。町は舌状の台地の上に形成され、西の台地突端に本丸、そのすぐ東側に武家屋敷が配置された。



図 08-5 上布施の民家外観  
撮影=西吉永一



図 08-6 佐倉  
撮影=西吉永一



図 08-7 上布施 1966 年 国土変遷アーカイブより



図 08-8 上布施 1982 年 国土変遷アーカイブより

の突端に、上布施集落では三島神社が鎮座しているのに対し、佐倉では佐倉城あるいは寺院（大聖院）など、両者とも地域の中心的場所となっている。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

まず、1966 年、1982 年の空撮写真を比較しても、集落自体に変化は見られない。ただ、集落の周辺に視野を広げれば、その東方谷戸が名熊ダムとして 1976 年に整備されている。この集落域の水田の直接の水源と考えられる。また水田に耕地整理がなされ、1982 年の段階では集落北に方形の整った水田地帯が見られる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

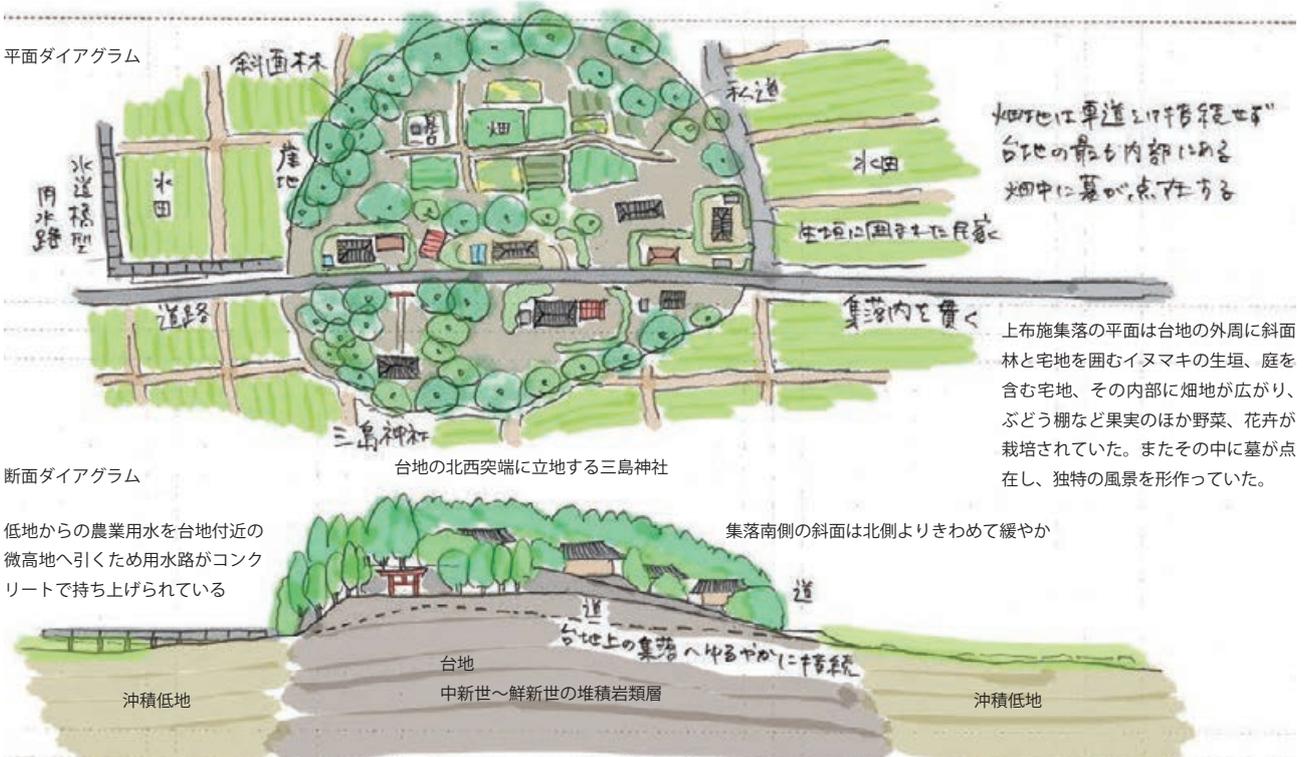
#### 6) 妥当性の検討

- ・2-1 集落立地・形態の妥当性  
妥当と考えられる。
- ・2-2 交通手段・経路の妥当性  
検討を要す。
- ・2-3 生産立地の妥当性  
台地の突端にあり、生産、自足できるようになっているため妥当性は高いと考えられる。
- ・2-4 その後の変容の妥当性  
平衡性が保たれ、妥当性は高いと考えられる。

#### 参考文献

町田貞『地形学辞典』二宮書店、1981 年／竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984 年

5 また落川上流には上水道用水のダムとして御宿ダムが、名熊ダムと同時期、1977 年に竣工している。



## 09 埴生郡埴生郷／長生郡一宮町

担当：大村麻衣子



図 09-1 村域図 googleMap より

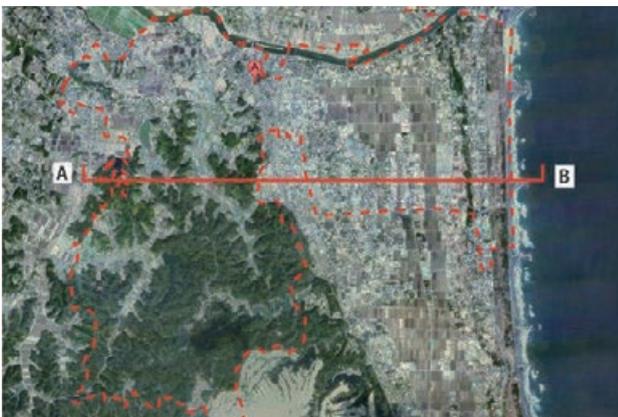


図 09-2 衛星写真 googleMap より 筆者加筆



図 09-3 下村の集落内の様子 撮影＝梶尾智美



図 09-4 一宮川ぎりぎり沿って作られた宅地 撮影＝西吉永一

## 1) 村域の分析

現在の長生郡一宮町一宮・東浪見・綱田・田町の一带に比定される。村域は千葉県道 226 号線とほぼ平行に走る道路及び一宮川によって定められた海側と地形的に区切られた山側、そしてそれらを繋ぐ上総一宮駅周辺によって形成。東部には砂質の平坦地が続き、九十九里浜臨海では松林と砂丘が連なる。この村域内の中央部には式内社である玉前神社<sup>1</sup>があり、神社のすぐ東側には旧東金街道（現国道 128 号線）が通る。付近には一宮貝塚<sup>2</sup>や待山古墳群<sup>3</sup>などがある。加納氏が八代にわたり居城していたこともあって、政治の中心地であった。

## 2) 実見した際の概要

海側の村域は比較的グリッド状の道が引かれ、整理されている印象を受ける。下村周辺は車の通行を考慮していない幅 3m 程度の道路が目立った。（写真 1）上総一宮駅よりも内陸、玉前神社付近の道は入り組み、微地形が影響しているのではないかと考えられる。玉前神社は周囲よりも数 m 高い位置に位置し、この立地と神社は少なからず関係があると思われる。<sup>5</sup>上総一宮駅以東は平地で、大きな津波の際に本神社は避難場所のひとつになる。下村はアイランド型の集落で、他の古い集落も同様の傾向があった。新しい集落はグリッドで区切られた地割りをもつ。一宮川の河川敷付近は入会地だったようだが、水利機能の向上により川岸まで宅地開発がされている。（写真 2）下ノ原は大きな屋敷が多く、水田はグリッドで区切られるが、集落の内部はかつての道割が残されている印象を受けた。更に一宮川に沿って海に向かうと、宅地が少なくなり防潮林である松林の植林の列が見える。海際にはサーファーのための宿なども存在した。以上からこの埴生郷は、西から農地、街道、鉄道となっており、時代が西から東へと移ってきているよう

1 玉依姫を祀る上総国にまつられる古社。『延喜式神名帳』では名神大社として記載されている。その頃から朝廷・豪族・幕府の信仰を集め、上総国一宮の格式を保つ一要因となってきた。しかし永禄年間の大きな戦火によって、社殿・宝物・文書の多くを焼失している。創建年は明らかではない。毎年九月十日から十三日に例祭があり、少なくとも千二百年の歴史があるとされている。例祭は、「上総の裸まつり」「十二社まつり」と呼ばれ、房総半島に多く見られる浜降り神事の代表として知られている。

2 貝殻貝塚とも。千葉県長生郡一宮町一宮貝塚に位置している。町指定遺跡であるが、調査後宅地造成され現在は一部消失している。

3 千葉県長生郡一宮町一宮待山に位置する。埴輪なども出土しているが、古墳群の多くは現在の方墳 1 基、円墳 2 基を残して消失している。

4 紀州徳川家に仕えた江戸時代の大名。紀州家出身の吉宗（1684-1751）が将軍となった際には、加納久通（1673-1748）も江戸城へと上った。

5 玉前神社が祀っている玉依姫（たまよりびめ）は、神話によると綿津見大神（海神）の娘であり海と関係している。玉前神社より東は海拔 5m 以下の平坦な地が続いており、海岸線まで約 3km もあるが数 m の津波であってもここまで到達する可能性があるようである。そのため、津波と神社の立地が関係しているのではないかと考えられる。



図 09-5 抄郷付近の地質図 シームレス地質図より



図 09-6 埴生郷 1952年 国土変遷アーカイブより



図 09-7 埴生郷 1986年 国土変遷アーカイブより

に思われた（断面ダイアグラム参照）。

### 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

前期更新世の堆積岩類による山側と、後期更新世から完新世の堆積岩類による駅周辺、後期更新世から完新世の砂丘による海側、3種の地質によって形作られている。水田は山側も海側も、比較的新しい堆積岩類の上に形成され、砂地は畑地や宅地として使われている。旧東金街道はこの村域内では山の際に沿って作られ、JR外房線もこれに沿うように作られている。街道が通ったことにより、住民の意識が農地からそちらに移ったようで、比較的現在の駅周辺と、そこから直接アクセスできる道沿いに小さな集落が複数形成されている。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1952年と1986年の空撮を比較してみると、旧東金街道にへばりつくように宅地が拡大しているのがわかる。更に、西側の野中は農地から宅地へと転用されている場所が目立つ。そのため、山の西側も東側も宅地はアイランド型になっている集落が特徴的である。迅速測図と現在の航空写真を比較すると、その集落は位置の傾向は大幅な違いが見られはしないが、先に述べたアイランド型集落が更に拡大しており全体として、農地が大きく減少しているのがわかる。

### 5) 断面ダイアグラム

（図版参照）

### 6) 妥当性の検討

#### ・2-1 集落立地・形態の妥当性

自然堤防への集落立地は妥当と考えられる。住宅地は見たが、玉前神社との関係性は不明なため、今後調査が必要である。

#### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

東金街道、一ノ宮川のつながりは、現段階では不明である。

#### ・2-3 生産立地の妥当性

妥当と考えられる。

#### ・2-4 その後の変容の妥当性

変容している点は圃場整備など。中ノ原周辺の短冊状の住宅地の変容については、不明。

### 参考文献

角川地名辞典／一宮町役場 <http://www.town.ichinomiya.chiba.jp/> / 玉前神社 <http://www.tamasaki.org/>



断面ダイアグラム

## 10 山辺郡岡山郷／東金市東金

担当：高橋大樹



図 10-1 村域図 googleMap より



図 10-2 衛星写真 googleMap より



図 10-3 街道沿いのまちなみ 撮影＝高橋大樹



図 10-4 八鶴湖と集落

## 1) 村域の分析

市域の中央部である。JR 東金線が南西から北東へ走り、中央に東金駅がある。その西側を鉄道に並行して国道 126 号線が走る。東金の村域として大きく占めるのは八鶴湖を中心とした規模が大きめの谷戸である。また背後の斜面林までを村域に含み、台地上の新興住宅地、東金ダムは別の村域に含まれる。低地部では東金線東金駅や駅の北側の東金街道沿いの主要部を村域に含み、また飛び地として南方に位置する国道 126 号線のロードサイドの施設も一部村域に含まれる。

## 2) 実見した際の概要

街道沿いに発展している集落である。東金街道沿いには多くの店舗が並んでいる市街化区域となっており、商店は並んでいるがあまりにぎわいがなく中心市街地の空洞化が起きているようであり、東部を走る国道 126 号バイパス沿いに新市街地が拡張されつつある。一方、谷戸内にある八鶴湖周辺には八鶴亭などの歴史ある建造物を何軒か確認することができた。八鶴湖は実見した際には水が抜かれていた。周囲にはサクラが多く植えられておりサクラの名所として知られる。また、東金御殿の跡地である県立東金高校や古くから続く寺も何軒か八鶴湖周辺に見られ、江戸時代の家康公のゆかりの地であることが現在まで引き継がれている様子があった。江戸期の歴史、近代化の歴史、そして現在の時代が何層もの時代が積層しているように思えた。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

八鶴湖を含む谷戸地形は、住環境および生産基盤として適切な規模と考えられる。その北側の小さな谷戸は迅速測図でも確認できる集落があり、昔から住んでいたと思われる。現在も何軒か古い民家が確認できた。一方、北西側の谷戸は迅速測図で確認するとかつて水田があり八鶴湖は現在よりも広範なものであった。しかし、時代とともに宅地へと変遷していき、現在では谷戸の大部分が住宅地となっている。

また、現在の東金は市街地として発展しており下流部の農業地帯との関係が見えづらくなったが、かつての八鶴湖は現在より小さい「とき池」というため池であったため、低地部の水田の水源を賄うための機能を有していた。現在もため池としての機能があるかどうかは不明である。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

かつて東金街道沿いに密集していた住宅は東金線の建設や国道 128 号バイパスの完成から時代と共に低地部



図 10-5 山際に建つ新興住宅地へとつづく道 撮影=梶尾智美

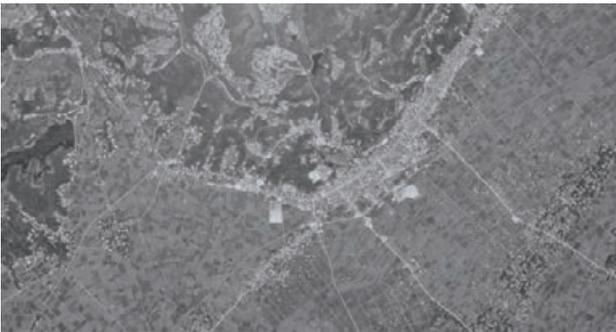


図 10-6 東金 1961 年 国土変遷アーカイブより



図 10-7 東金 1971 年 国土変遷アーカイブより

へ拡大している。他の東金線沿線の駅周辺に比べても市街化が顕著でかつて水田だった場所も住宅地となっている。

また、台地上には、谷戸を一部利用してつくった東金ダムが 1994 年に完成し、両総用水を一部貯水したことで上水として利用している。九十九里平野は昔から水不足が深刻であり、東金も両総用水の完成が地域の水を賄う上で重要な転換点となったと思われる。また東金ダムの近くには山を削って開発された新興住宅地もみられ、千葉などへの都心部へのアクセスの良さなどの理由から大きく面的に開発されている。

## 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

## 6) 妥当性の検討

### ・2-1 集落立地・形態の妥当性

妥当と考えられる。

### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

徳川家康がなぜここに御殿を建てたかとの関係性が強い。(一説によると戦国時代に安房を支配していた里見氏を牽制するために東金に御殿を置いたとされる。)

### ・2-3 生産立地の妥当性

水不足への対応において妥当と思われる。

### ・2-4 その後の変容の妥当性

集落の変化としては、八鶴湖の北西の団地が見られる。

## 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984 年

## 11 山辺郡菅屋郷／東金市家之子

担当：西吉永一



図 11-1 村域図 googleMap より

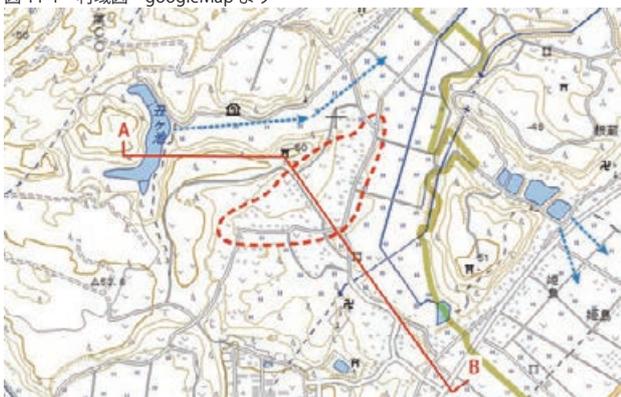


図 11-2 地形図 ウォッチ図より 筆者加筆



図 11-3 畑地のなかに建つ新興住宅 撮影＝西吉永一



図 11-4 段丘下手に建つ伝統的型式の民家 撮影＝福島加津也



図 11-5 辻札 撮影＝庄子幸佑

## 1) 村域の分析

家之子集落は、下総台地上に位置、当方に東金街道<sup>1</sup>（現在の国道 126 号線）をひかえ、遠く九十九里平野を望む。公平丘陵上、丑が池の周囲に家之子古墳群がある。村域をみると、砂州、低地と台地の境、後背の山林がひとつの村域としてみられる。

## 2) 実見した際の概要

ゆるやかな斜面状台地への立地が特徴的な集落である。各民家の配置は、周辺の集落に散見されるような谷戸地形に沿った配置と異なり、半月型の斜面台地上に伝統的な大型民家が建ち並ぶ塊村である。

集落中央の道を下から上っていくと、水田から生け垣に囲まれた宅地へはいる。道路は細く入り組んでおり、斜面地に平たく造成された宅地のあいだを、両側にイヌマキの生け垣が迫る中、縫うように通る。民家は生け垣の中に広い庭地をかかえ、門構えも立派なものが多い。（図写真参照）その先の畑地へ至ると視界がひらけ、所々宅地に転用された部分が見える。畑地のなかに建つ家屋は先例の伝統的形式とは著しく異なり、比較的あたらしい。畑地をぬければ山林斜面地に突き当たる。コンクリート製の鳥居が建てられ、そこから村社の惣社神社へと向かう石段の参道が続いている。

台地の際部に注目すると、北東端、三叉路のわきに辻札<sup>2</sup>が立てられている。（地図中▲印、図 11-2 写真参照）その状態もあたらしく、集落の領域性が、地形と対応して認識され、それが今もある程度残存していると考えられる。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

集落を構成する後背山林、畑地・宅地、田地在、それぞれ集落域に含まれる 3つの地形（丘陵地、砂州性の低台地、沖積低地）と対応して、明快な土地利用がなされている。また、村域に注目すると、その領域はひろく南は東金街道に達している。江戸以降、街道に接した集落となったが、それ以前、古代においては海上交通が主要な手段であったと考えられる。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

東金街道以南の圃場整備の完了した水田では、主たる水源のひとつとして両総用水<sup>3</sup>が利用されている。両総

1 東金街道は、古くは船橋から東金に通ずる御成街道を東金街道と称していたが、現在は千葉県道路愛称名により国道 126 号の千葉市中央区本町 1 丁目の広小路交差点～東金市台方の県立東金病院前間を指し示す。

2 集落の辻に竹竿などでさしてあるお札。これが魔除けとなり、集落に災いのもとが訪れないよう、入ってこられないようにするもの。

3 両総用水は、昭和初期の大干魃を契機に、水源に恵まれず水争いが繰り返された九十九里地域と、長年に渡り冠水被害に悩まされ続けた利根川沿岸の両地域が一体となって、利根川に水口を求め、用排水改良のため、1943 年に農地開発



図 11-6 抄郷付近の地質図 シームレス地質図より



図 11-7 家之子 1946年 国土変遷アーカイブより

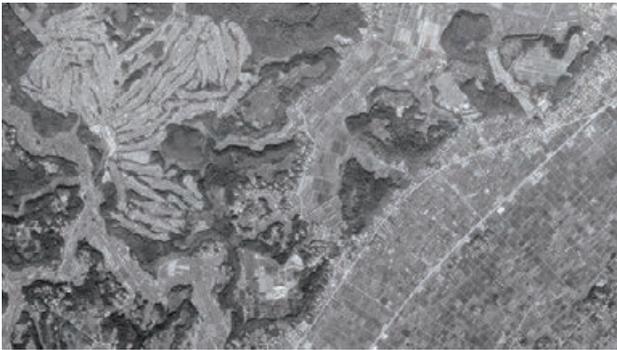


図 11-8 家之子 1979年 国土変遷アーカイブより

用水は 1943 年、戦時下の食料増産計画の一環として用水不足解消と排水改良のため計画・施工された。

それ以前の九十九里平野は、海岸線と平行に砂州とそのあいだの低地が列をなし、低地には縄文時代からのラグーンが湖沼群として残されていた。しかし、そのような湖沼群のある景観は、明治以降の両総用水を含む一連の開発により次第に消滅し、現在は一部にその痕跡らしき沼池が残るのみである。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

- ・2-1 集落地・形態の妥当性  
妥当と考えられる。
- ・2-2 交通手段・経路の妥当性  
妥当と考えられる。
- ・2-3 生産立地の妥当性

北側は天水、南側は溜池、それでも不十分なものは両総用水から水を引いていると考えられる。地形を生かした水源の確保が進んでおり、妥当性は高いと考えられる。

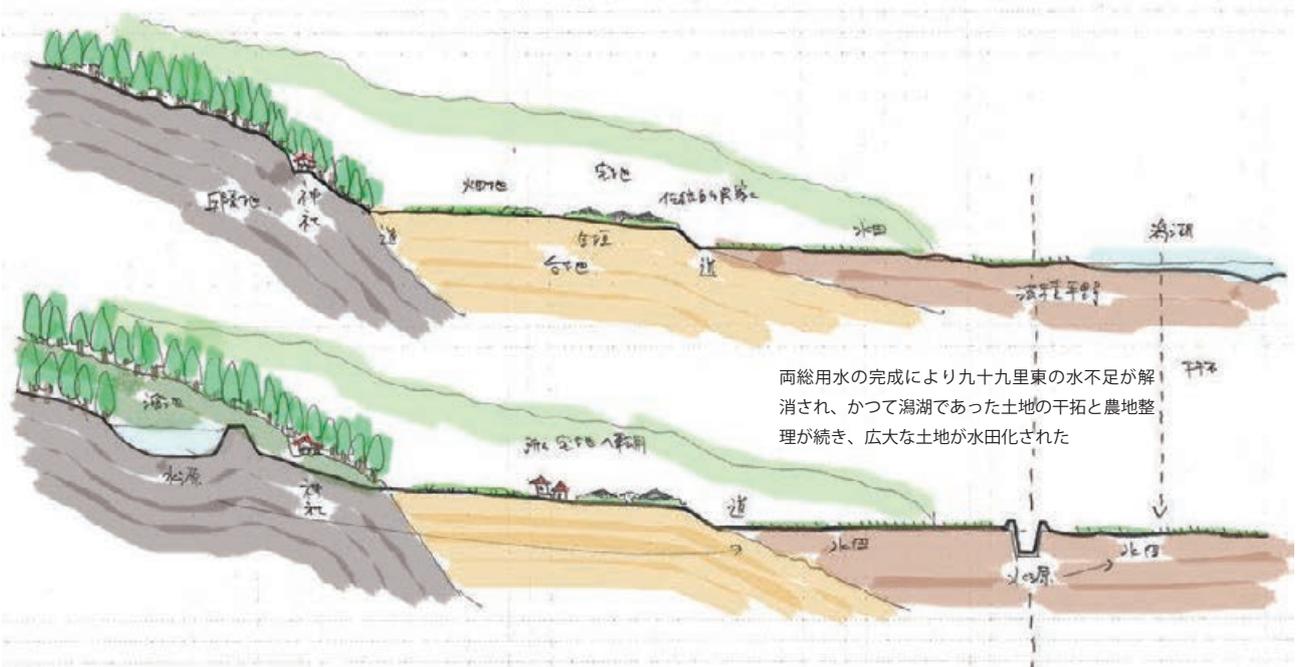
- ・2-4 その後の変容の妥当性

生産に対応した水の確保など、必要に応じた変容は妥当と思われる。

### 参考文献

福田アジオ、新谷高紀他編『精選 日本民俗辞典』吉川弘文館、2006年／関東農政局 website (<http://www.maff.go.jp/kanto/index.html>) ／竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年／高橋日出男他編『自然地理学概論』朝倉書店、2008年

営団事業として着工された。その後、太平洋戦争終結直後の 1947 年に国営事業として引き継がれながら、1973 年には県営 15 支線(全延長 155km)他の施設が完成した。両総用水は、同地域を千葉県でも有数の農業地帯へと発展させ、地域農業にとって不可欠な施設となっている。また、1975 年からは水資源機構と施設共同利用を行い、工業用水や家庭用水の通り道ともなった。



断面ダイアグラム

## 12 武刺郡大蔵郷／松尾町上大蔵

担当：西吉永一



図 12-1 村域図 googleMap より



図 12-2 地形図 ウォッチ図より 筆者加筆



図 12-3 台地上の畑地 撮影＝高橋大樹



図 12-4 長屋門 撮影＝西吉永一



図 12-5 畑地の端に建つ祠 撮影＝西吉永一

## 1) 村域の分析

ほとんどが山林の過疎地であり、畑地在散在している。県道成田成東線から木戸川までの東部が水田地帯である。集落は西部、山本の丘陵を取り囲むように立地する。上大蔵の南方には下大蔵という集落があり、そのあいだに大蔵神社がある。地内314番地の台地に正和3年銘の武蔵式板碑があり、上大蔵の板碑と称される。南郷に南郷播磨守の築城と伝える大蔵城址がある。

## 2) 実見した際の概要

水田が広がる谷戸の脇に両側を山林の迫る道がのびている。そこを上っていけば、台地上に上大蔵の集落がある。小さなふたつの谷戸が中央の小山を巻きこんでいるような地形の上に、民家が建ち並んでいる。実見すると特に大きな民家がいくつか見られ、図12-4のような大変立派な長屋門をもつ。

前述のふたつの谷戸の片方の斜面地を上れば、開けた台地が広がり、そこで畑作がおこなわれている。とうもろこしなど野菜が中心に植えられていた。畑地を囲む山林にも多少人間の手が入っている。歩いて回ると山林の中に小さな祠があり、(図写真)集落の人間によって祀られているようである。

## 3) 地形(地質)と街道・集落の関係

本調査のなかでも、当集落は民家配置が地形と極めて密接な関係をもつ集落のひとつである。四方を丘陵山林に囲まれていることが集落の閉鎖性を高め、それが文化的、経済的な自立へも繋がっているのではないかと考えられる。集落へ繋がる道路は一本のみであり、集落全体が地形と相まって城塞のような空間をつくりだしている。巨視的には台地上に乗った集落であるが、台地状地形を詳細に見るとふたつの小さな谷戸地形と言え、その微地形の等高線上に正確に沿うような向きで民家が建ち並んでいる。谷戸が湾曲して寺院の建つ小山を囲い込んでいるため、鳥瞰すると、集落がまとまりをもった塊村のように見える。

1 板碑は中世仏教で使われた供養塔。分布地域は主に関東だが、日本全国に分布。設立時期は、鎌倉時代～室町時代前期に集中している。分布地域も、鎌倉武士の本貫地とその所領に限られ、鎌倉武士の信仰に強く関連すると考えられている。形状や石材、分布地域によって武蔵型板碑、下総型板碑などに分類される。武蔵型とは秩父・長静地域から産出される緑泥片岩(青みがかった石材)で造られたもの、主に関東平野に流通する緑泥片岩製の板碑を武蔵型、四国近辺に流通していたものを阿波型と分類。また下総型とは主に茨城県筑波山産出の黒雲母片岩製の板碑をさす。戦国期以降になると、急激に廃れ、既存の板碑も廃棄されたり用水路の蓋などに転用されたものもある。現代の卒塔婆に繋がる。

2 長屋門はもともと武家屋敷をとりまく長屋(家臣の住居)と門の屋根を共通にした建物で、中央を出入口、左右を部屋とした。周辺の集落においても立派な長屋門はいくつか見られたが、写真にあるような家紋つきの極めて大型の長屋門は今回調査の中ではこの集落においてのみであった。



図 12-6 抄郷付近の地質図 シームレス地質図より



図 12-7 上大蔵 1947年 国土変遷アーカイブより



図 12-8 上大蔵 1970年 国土変遷アーカイブより

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

空撮写真の比較からもほとんど大きな変容は見られない。これは前述したように、地形的な要因が大きいように思われる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 妥当性の検討

##### ・2-1 集落地・形態の妥当性

谷戸の中央、台地の地形をうまく生かしており、妥当性は高いと考えられる。

##### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

自給自足可能なほどの十分な面積の畑地を持っており、集落は空間的に閉じられ、交通はあまり発達していない。

##### ・2-3 生産立地の妥当性

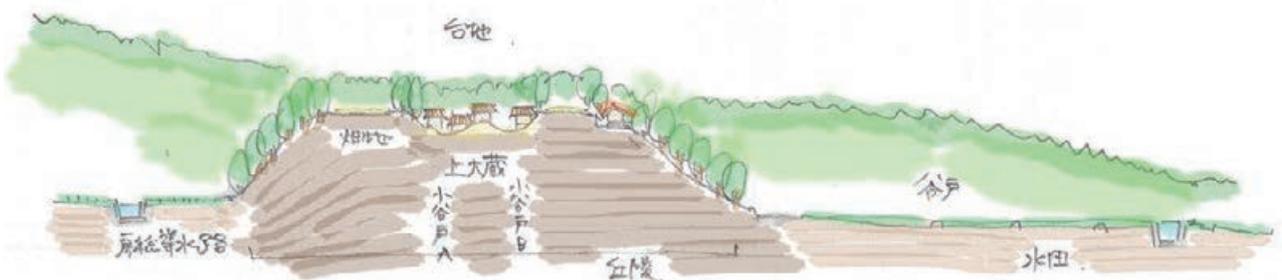
丘陵地の上に開墾されたであろう畑地を持つ。畑地は集落の戸数に比較して、極めて広大であるように思われる。

##### ・2-4 その後の変容の妥当性

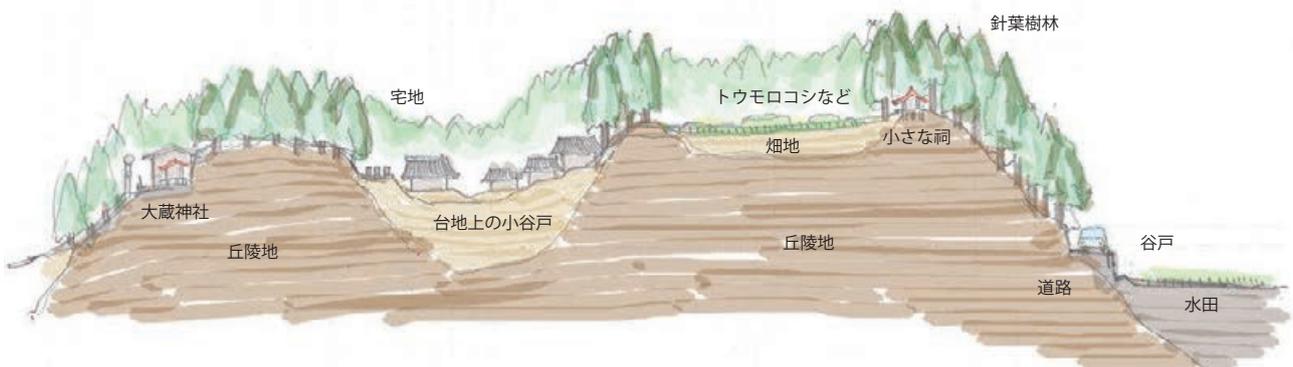
集落に大きな変容は見られない。これは山林丘陵地に囲まれた台地形の中に集落が立地していることが閉鎖的な交通状況を長く保ち、外的な影響をあまり受けずに今日に至ったことが考えられる。

#### 参考文献

日本民俗建築学会編『図説 民俗建築大辞典』柏書房、2001年



断面ダイアグラム (広域)



断面ダイアグラム (詳細)

## 13 武刺郡新居郷／芝山町新井田

担当：高橋大樹



図 13-1 村域図 googleMap より

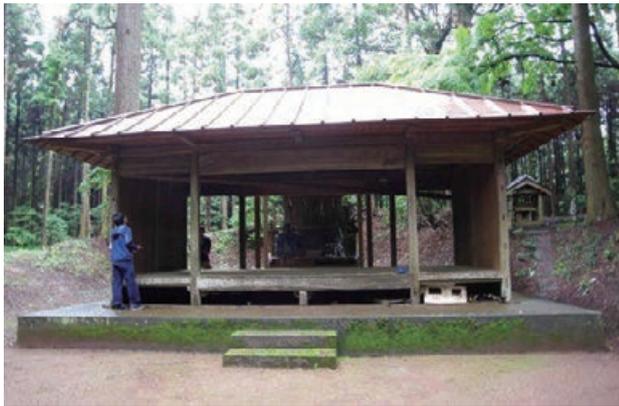


図 13-2 面足神社の神楽殿 撮影＝庄子幸佑



図 13-3 面足神社参道 撮影＝梶尾智美



図 13-4 集落の様子 撮影＝庄子幸佑

## 1) 村域の分析

新井田の特徴として、村内中央を流れる河川を中心に東西方向に伸びる谷戸の存在が挙げられる。集落は帯状に密集している純農村である。木戸川水系に位置し、一部台地の上も村域に含まれる。また、南東の台地平坦部には新興住宅地が広がっている。

## 2) 実見した際の概要

まず北斜面に多くの巨大な民家が並ぶような列状集落の形態が見られた。これは日照を獲得しやすい北斜面を意図的に住居としたものと思われる。南斜面は斜面林として活用し、谷戸の谷底低地部では水田が行われていた。民家は巨大なものが多く、現在も更新されている様子が伺えた。また斜面を家庭菜園のように活用していた。

一方、台地上の尾根部の平坦地には広大な畑が広がっていた。畑地灌漑やビニールハウスによる栽培が盛んである。台地の一部に工業団地があり、村の大切な収入源になっていると思われる。村域と重ね合わせてみると台地上を走る道路がちょうど村域になっており、広大な台地の境界として機能していた。

また、斜面には神社が立地していた。この神社は大きな神楽殿を持ち、集落の祭事で使われていると思われる。神社は伊勢神宮の来訪者のために建造されていることから、他の集落と比べても神社や信仰に重きを置いている可能性がある。斜面林は、植生図で確認したところ多くがスギ・ヒノキ・サワラ植林群集でそこに細かく竹林群集が入り込んでいる植生であった。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

新井田は谷底低地部：水田—台地と低地の際：大規模な住居—台地上平坦地：大規模な畑と典型的な谷戸集落のセットを確認することができた。台地部の広大な畑地は村域などで確認するといくつかの集落で分割して使われていることがわかった。また南東の台地上の平坦地は新興住宅地であるはにわ台団地が造成されている。これは成田空港建設や芝山第1工業団地の造成に伴う住宅確保のためにつくられ、1971年に造成が完成した。この場所は村の入会地が活用されたものと思われる。またかつてこの地には新井田城が存在していた。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

新井田がある地域ではほとんど過去の航空写真と変わっていないことが分かる。一方、新井田以外の台地上の集落では変化が多く見られる。1947年の時には台地上に散村型で集落が形成されているが、時代とともに新興住宅が見られる。これは前述のように成田空港の建設



図 13-5 民家側から道路を挟んで立地する水田（奥に水源の川が流れる）  
撮影=小林千尋



図 13-6 新井田 1947年 国土変遷アーカイブより



図 13-7 新井田 1979年 国土変遷アーカイブより

や工業団地の建設が大きな要因だと言える。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

#### ・2-1 集落地・形態の妥当性

各方位の斜面への立地なども見られ、妥当と考えられる。

#### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

交通としての変化は少ない。

#### ・2-3 生産立地の妥当性

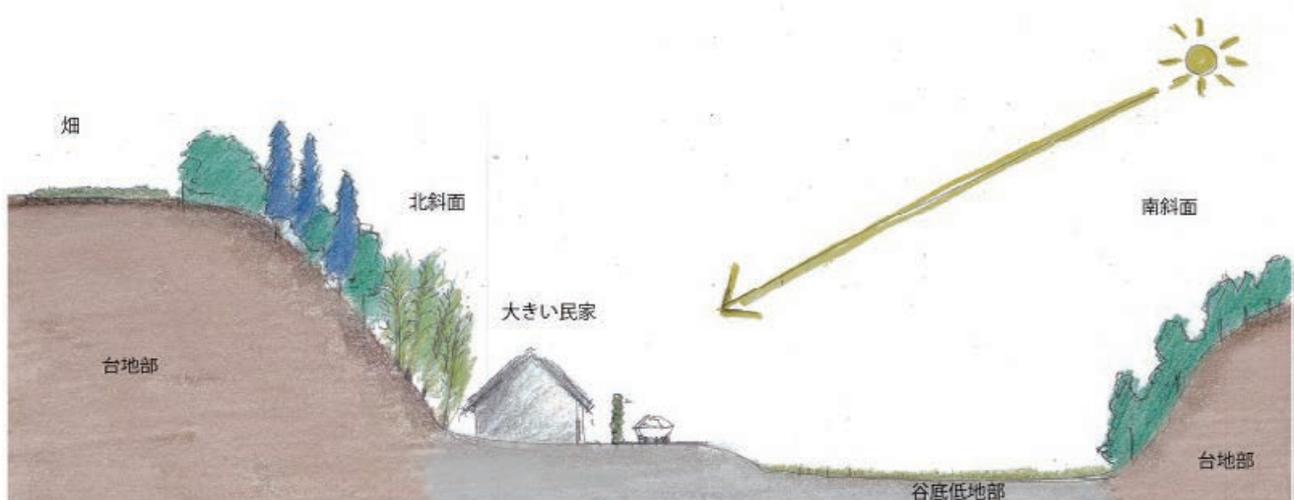
各地に田、畑、工場立地など見られ妥当である。

#### ・2-4 その後の変容の妥当性

交通手段には変容なし。生産の変容は妥当である。

### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年



断面ダイアグラム

## 14 武刺郡片野郷／松尾町八田猿尾

担当：西吉永一



図 14-1 村域図 googleMap より



図 14-2 地形図 ウォッチーズより 筆者加筆



図 14-3 猿尾 宅地、道路、水路、水田 撮影＝庄子幸佑



図 14-4 宅地を囲む生垣 撮影＝庄子幸佑



図 14-5 迅速測図 歴史的農業景観閲覧システムより

## 1) 村域の分析

北部のほとんどが山林で畑地も散在する。国道 126 号線が中央を走り、南部の水田地帯を JR 総武本線が並走する。集落は国道の両側に集中し、台地には旧家が多い。水田中心の農業地域である。低地から国道へ接続する成田空港関連道路の陸橋が建設された。迅速側図を見ると集落東部に、かつてのラグーンであったと思われる鳥喰沼がある。しかし現在に至るまで広く干拓され、産業形態に大きな変化あったと考えられる。集落北西の山地に神明神社がある。

## 2) 実見した際の概要

集落南東、JR 総武線路を挟んで先には圃場整備のなされた田地が広がる。東金街道は猿尾で旧道と現在のバイパスが交差しており、旧道へ入れば民家が並ぶ穏やかな通りとなる。さらに北西の山側へ進めば台地をのぼって次第に林道となり神社への参道が見つかる。参道は最近整備が為されたようであった。また車道をそのまま上ると南西の丘陵の上は開発されて開けており、松尾中学校と団地が建っている。

南方の松尾町五反田辺り、微高地に大型の民家が建つ。垣根も高く、屋敷林があり、その奥に母屋、敷地の外側に畑、母屋、アプローチ、道路、畑が個人の生活圏内にあり、そこからさらに、水田が広がる。所々で植木もつくられている。東金街道沿いは、全般に大きい民家が多い印象を持つ。街道沿いの一部は畑地であった。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

集落北西の山地に近い台地上から徐々に海側へ発展していったものと思われる。その意味で、この地域周辺の集落と同様の型式をもっているといえる。

ただ、近世から近代にかけて、交通の発達が村域内において多く見られ、その影響による集落の変容が見られる。県道 62 号線から接続する県道 58 号松尾蓮沼線が村域の中央を北西から南東方面へ通る。また、126 号線（東金街道）が南西から北東へ抜け、八田猿尾は両道が交わる場所である。ただ、62 号線は成田空港開港（1978

1 浅海の一部が砂嘴や砂州、または沿岸州によって外海と絶縁され、浅い湖沼となったもので、潟または潟湖ともいう。一般に一または数箇所の狭い湖口から海水が入りし、湖内は波の活動が弱く陸上から流入する淡水によって運ばれた浮遊土砂が堆積する。浅瀬には塩水や汽水のみの特殊な植物が生育し、最後にはラグーンは塩分に耐える植物の生い茂った塩性湿地となる。全体として低緯度の潮差の小さい場所に多い。

2 鳥喰沼は横芝町から松尾町にかけて、現在の JR 総武線の南にあった沼。砂州間の後背湿地に湛水してできた沼。寛永 21 年に農業用水となって以降約 300 年間にわたって近郷 12 村約 300 万平米の唯一の用水源となっていた。（横芝町史）水深 30 ～ 60 センチと浅く、日照りには枯れて灌漑の用をなさなかった。元禄 12 年、天明 5 年には用水をめぐる紛争が起きている。明治 45 年に干拓工事が着工、大正 9 年には耕地整理が完了して沼全域が水田化した。



図 14-6 抄郷付近の地質図 シームレス地質図より



図 14-7 猿尾 1947年 国土変遷アーカイブスより



図 14-8 猿尾 1975年 国土変遷アーカイブスより

年) ののちに整備された新道であり、特に 126 号線以南の地域では近年の交通整備に伴った沿道の開発<sup>3</sup>が多く見られた。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

東金街道以南、特に農地であった場所の変化が大きい。空撮写真両者を比較すると、1947 年の段階では干拓によって新しく出来た新田と、それ以前からの微高地につくられたのであろう水田が地割の形式の違いからはっきりと見て取れる。しかし 1975 年の段階では、見られる限り全ての水田に圃場整備が為されている。また、東金街道以南の部分に宅地化が進んでおり、現在では県道 126 号線の整備によって、より多くの農地が開発され、商業施設などの進出がすすんでいる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 妥当性の検討

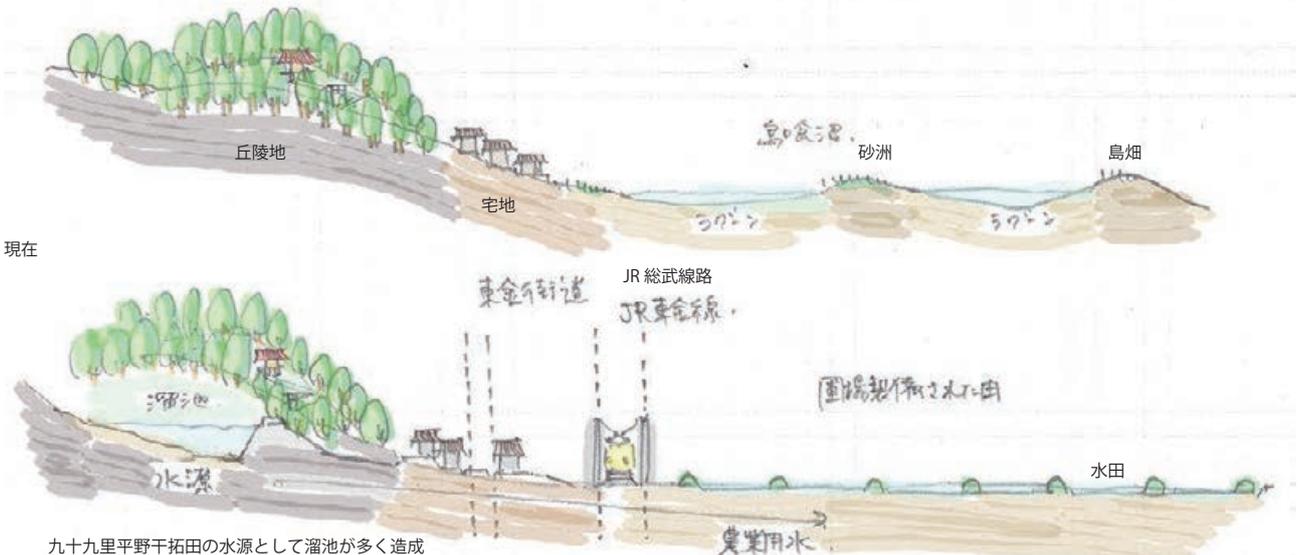
- ・2-1 集落立地・形態の妥当性  
妥当であると考えられる。
- ・2-2 交通手段・経路の妥当性  
妥当であると考えられる。
- ・2-3 生産立地の妥当性  
豊かな生産地に恵まれていると考えられる。
- ・2-4 その後の変容の妥当性  
集落自体の変容は不明な部分が多く、今後検討を要す。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984 年／町田貞『地形学辞典』二宮書店、1981 年

3 大型商業施設、図書館の新設など、以前の農地が宅地、商業用地へと転用されている例が多く見られる。今後も継続した変容が考えられる。

図 断面ダイアグラム



## 15 武刺郡長倉郷／横芝町長倉

担当：西吉永一



図 15-1 村域図 googleMap より

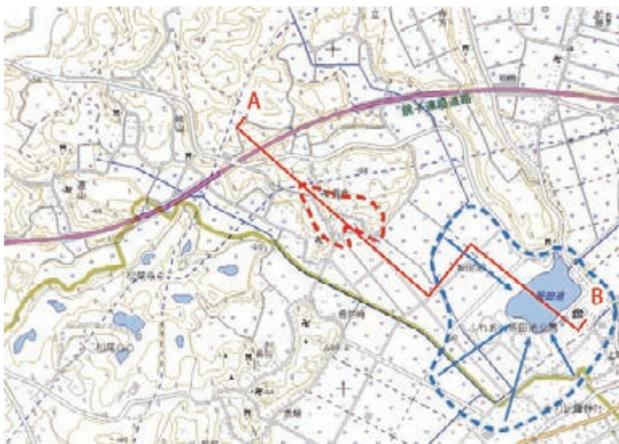


図 15-2 地形図 ウォッチャーより 筆者加筆



図 15-3 集落配置 googleMap より



図 15-4 ある民家の門構え 撮影＝福島加津也

## 1) 村域の分析

純農村地帯である。南部台地上に大塚古墳や中世の長倉城址がある。迅速測図から、かつてのラグーンが変化してであろう坂田池という池がある。村域は北からゴルフ場（飛び地）、畑地を含んだ後背山林、宅地、水田と明快に四区分される。

## 2) 実見した際の概要

道路は谷地形の等高線に沿って曲がり、各民家の高い生垣に囲まれているため、見通しが悪い。道路から一本入ると、5メートルほどの短いアプローチの先に、図 15-4 のような立派な門が斜めに構えている。各民家は比較的大きい。北西の谷戸頭に近づくにつれ、民家は大きくなり、構えが立派になってくる。農家であるが、倉が各民家に隣接して複数存在している。何を貯蔵する倉であるのかは不明だが、欄間が通風の機能をもたせた格子になっており、中の貯蔵品との関係と思われる。

集落の最奥には恵光院という寺院が位置し、さらにその寺院後背に墓地がある。道を挟んで北側は宅地、南側は畑地と新興の住宅が入り混じる。斜面地を上った台地上には畑地が広がり（図 15-3）、ここは斜面下の水田とちがって耕地整理がなされていない。集落の際へ進むと、辻に消防用ホースをかけた塔が建っており、消防団の所有であると思われる。この例に限らず、今回調査のなかで、馬頭観音と防火水槽が並置された例など、消防施設と古来からの信仰対象が並んで立地した光景が幾度か見られた。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

谷戸におさまった集落である。丘陵斜面林をのぼった台地上には畑地が立地し、沖積平野には水田が広がるという土地利用も周辺地域と同様の典型的な集落形態といえる。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図、1946 年空撮写真、1986 年空撮写真と比較してみると、まず坂田池の縮小と干拓水田化の進行が顕著である。明治期坂田池の輪郭は水路として残り、1946 年の段階では池であった部分がいち早く方形の整備された水田となっている様子がわかる。その後、1986 年に至ると全ての水田が整備され、坂田池輪郭を

1 坂田池は、千葉県山武郡横芝光町坂田にある池。現在は房総導水路の「坂田調整池」として利用されている。縄文時代後期に砂州が延び海岸線が後退した頃、栗山川から流出する水が北東の海流に押され出口を失い河口の南西に作られたラグーンであったと推定される。栗山川水系の河川は丸木舟が多数発見されていることでも知られており、坂田池でも何艘か出土している。現在の坂田調整池は、利根川から取水し栗山川を経て横芝揚水機場でポンプアップした水の一部を一時的に貯え、調整しながら下流導水路へ送水するための施設として利用されており、下流導水路には東金ダムや長柄ダム等バフファとなるダムが設けられている。

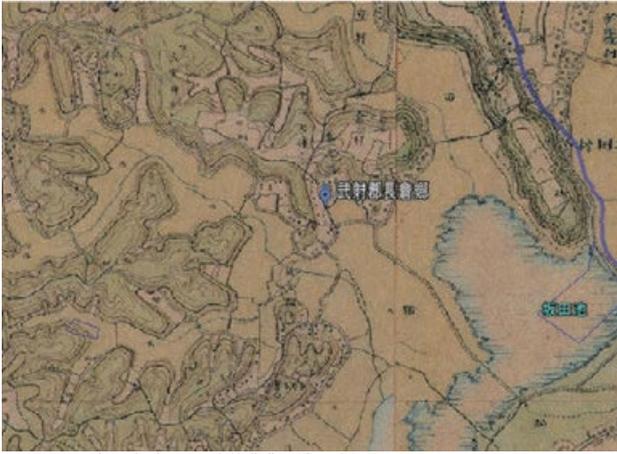


図 15-5 長倉迅速測図 歴史的農業環境閲覧システムより



図 15-6 長倉 1946 年 国土変遷アーカイブより



図 15-7 長倉 1986 年 国土変遷アーカイブより

かたどった水路のみが水田の格子を南北に貫いている。一方、谷戸の際部に展開する集落には大きな変化は見られない。道路南側の小さな畑地に新しい住宅が疎らに建っているくらいである。

集落の周囲を広範囲に見ると、銚子連絡道路<sup>2</sup>が集落後背の丘陵地を東西に貫いている。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

#### ・2-1 集落地・形態の妥当性

妥当であると考えられる。

#### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

交通にかかわる事項として、銚子連絡道路の開発があるが、集落の形態にどれほどの影響が及んでいるかは不明であり、さらなる検討を要す。

#### ・2-3 生産立地の妥当性

集落の戸数に対して生産地も広く、その立地も地形環境と合致しており、妥当性は高いと考えられる。

#### ・2-4 その後の変容の妥当性

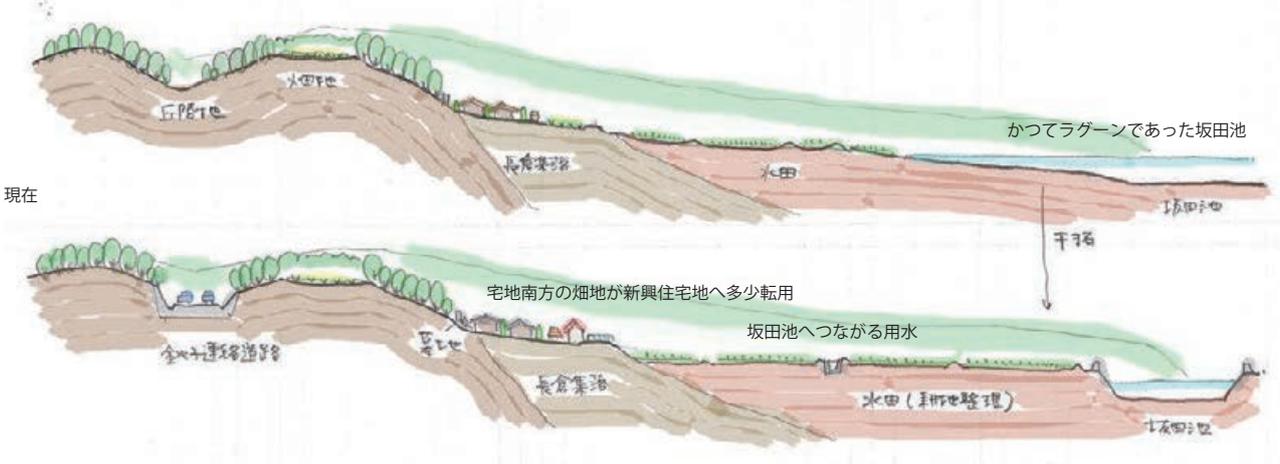
集落の形態自体に大きな変化はない。集落後背の丘陵地には銚子連絡道路が建設されたが、集落を構成する環境に変化はあまりないと考えられる。

### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984 年

<sup>2</sup> 千葉県山武市と銚子市を結ぶ延長 30km の地域高規格道路(国道 126 号バイパス)。1994 年計画路線に指定された。銚子市を中心とする東総地域から千葉市までを往來を 1 時間以内に短縮する事を目的とした「県都 1 時間構想」に基づくものであり、同時に国道 126 号現道の混雑緩和など交通環境改善という役割を担っている。

図 断面ダイアグラム



## 16 武刺郡押熊郷／芝山町下吹入

担当：高橋大樹

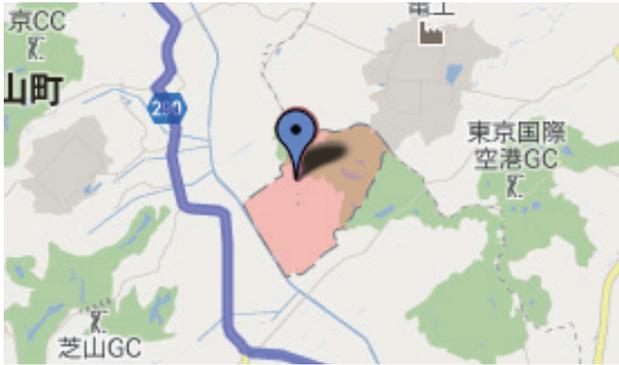


図 16-1 村域図 googleMap より



図 16-2 衛星写真 googleMap より



図 16-3 集落を鳥瞰する 撮影＝堀井隆秀



図 16-4 集落際の神社 撮影＝高橋大樹

## 1) 村域の分析

西部は水田が開け、東部は畑、山林からなる下総台地に位置する。畑作よりも水田を生産基盤とした純農村。下吹入の村域は、栗山川の支流である高谷川沿いに立地する水田と台地と低地部の際に集落が形成され、また現在ゴルフ場になっている後背地も村域に含まれる。

## 2) 実見した際の概要

まず印象的な地形として小島型の台地がある。この小さな台地のサイズは小ぶりながらも台地上の平坦地は墓地と畑に利用されていた。また、台地上には神社が二つ建造されている。一つの神社は、アプローチが神社の向いている斜め後ろからで神社の方向性的に隣の集落を向いており台地へ登る道が村の境界になっていることから一種の境界の目印となっていると考えられる。

またもう一つの神社は浅間神社であった。また、集落内には隣高神社という神社もあり、こちらも小島状の台地の上に形成されている。台地の植生はスギ林となっていた。本殿は立派に造られていて、小屋で覆い被さっていた。

集落内の民家はどれも大きく、何軒か長屋門を有する家もあった。生垣はイヌマキがほとんどで、一部マツで門冠りをしている家もあった。集落背後の斜面林の多くは竹林であり、人の手でしっかり管理されている様子が伺えた。集落の住宅の向きに着目すると低地と台地の接点に位置する住居は斜面を背後に南東向きに配置されているのに対して小島状の台地の部分は住居の左側面が台地と接するような形で南西向きに配置されていた。

また、小島状の台地に立地する浅間神社と地域の寺である正徳院と隣高神社は一直線につながっており、集落内で何らかの空間の秩序があったと思われる。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

マクロな視点からみると栗山川水系の高谷川が生み出した大きな低地部が周辺地域も含め水田として活用されている。これは昔から川の水が豊かであったといえる。また、集落内の小さな谷戸はゴルフ場に転用されている。谷戸がゴルフ場に転用されるケースは今回の調査では全く見られなく、台地を村域に持たない地域が経済的理由から転用した可能性がある。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

下吹入集落での編年変化は、谷戸にゴルフ場ができたことが大きい。また、村域ではないが台地上の畑作地の

1 浅間神社は、富士信仰に基づいて富士山を神格化した浅間大神、乃至は浅間神を記紀神話に現れる木花咲耶姫命と見てこれを祀る神社で、日本各地に約1300社が鎮座するが、主として富士山麓を始めとしてその山容が眺められる地に多く所在する。



図 16-5 鉄骨造の囲い屋の付いた神社本殿 撮影＝西吉永一



図 16-6 長屋門 撮影＝梶尾智美

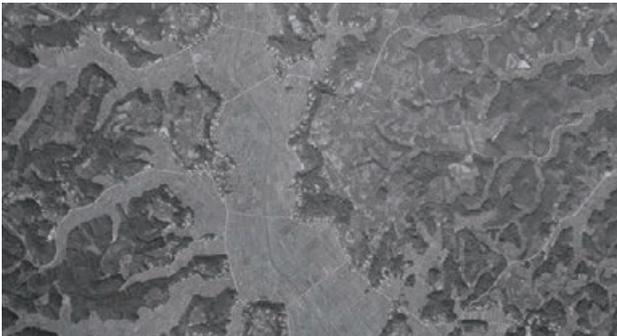


図 16-7 下吹入 1965年 国土変遷アーカイブより

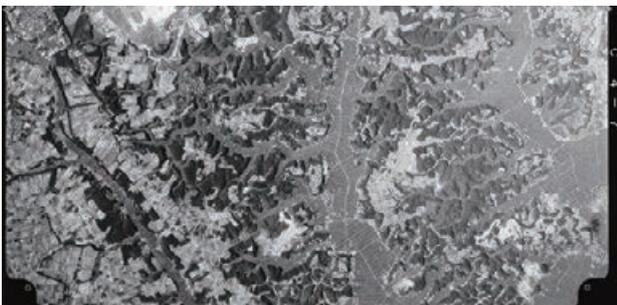


図 16-8 下吹入 1979年 国土変遷アーカイブより

隣に巨大な工業団地ができています。この工業団地には古谷乳業など計 8 つの企業の工場がある。このため村域の近くに工業団地への動線と思われる道路ができています。しかし、集落の形態自体に大きな変化が見られないことから集落に直接的な影響は少なそうである。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

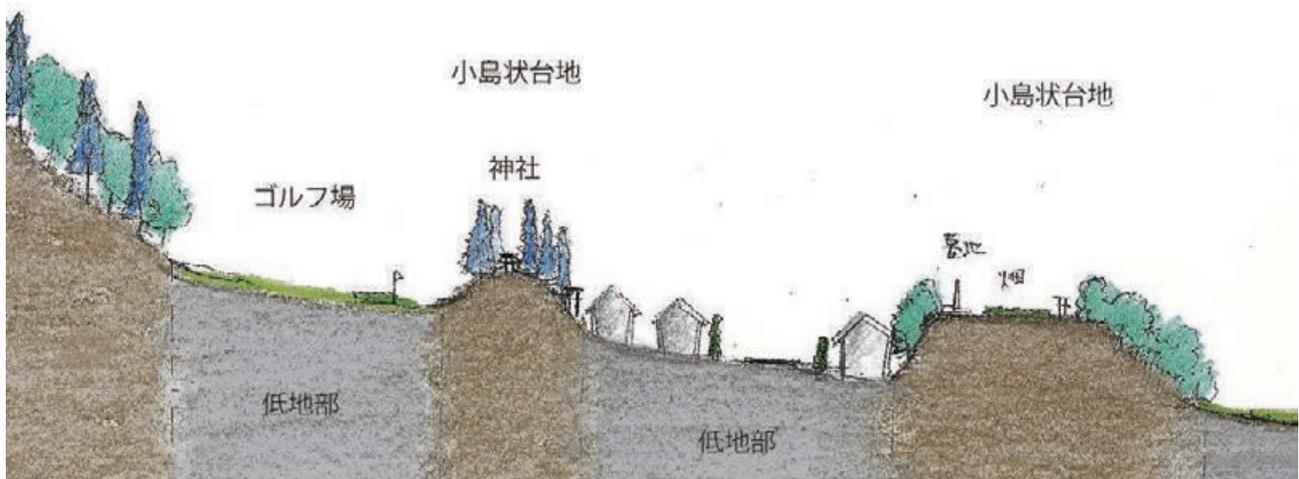
### 6) 妥当性の検討

- ・ 2-1 集落立地・形態の妥当性  
突き出た台地等の立地は妥当であると考えられる。
- ・ 2-2 交通手段・経路の妥当性  
工業団地によって、山を下る道ができるなど妥当と考えられる。
- ・ 2-3 生産立地の妥当性  
妥当である。
- ・ 2-4 その後の変容の妥当性  
巧みに生き抜いている様子が見え、妥当である。

### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年

### 断面ダイアグラム



## 17 武刺郡加毛郷／芝山町大里

担当：高橋大樹



図 17-1 村域図 googleMap より



図 17-2 衛星写真 googleMap より



図 17-3 移転された神社 撮影＝高橋大樹



図 17-4 成田空港建設に反対する運動の跡 撮影＝高橋大樹

## 1) 村域の分析

町の北部に位置する。水田より畑の多い純農村。菱田の村域の特徴として、一部成田空港の敷地がふくまれることである。現在は滑走路になっているところも村域で歴史的な争いがあったことがわかる。また、村域が非常に広く、台地の上と谷戸の低地部を一体とした村域となっている。

## 2) 実見した際の概要

成田空港近くでは大型の航空会社の建物が多く建っている。一方、隣接する集落である菱田地区は一戸も住宅が存在せず、廃墟もなくただ何も無い住居の敷地だけが残されていた。また、地区の寺には移動してきたと思われる墓を何点か確認した。現在人が住んでいる形跡はないが、谷戸の谷底の低地部には健全な水田が維持されていた。住んでいる人がいないのに農業を持續させている点から集落外から農業を行っている人がいると思われる。斜面林は人の管理が行き届いておらず、かなり荒れているように思えた。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

栗山川水系の高谷、川の最上流部に位置する。谷戸の中央に谷底低地部の水田が南北方向に形成している。水田の東西は畑と山林の下総台地である。台地上の畑の土地利用が見られ典型的な谷戸地形の土地利用と言える。かつて成田空港だった場所には宮内庁下総御料牧場があり広大な台地が広がっているとされる。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

大きな変容として成田空港の建設がある。空港建設にあたり元々近くに住んでいる農村の住民と政府で複雑な歴史がある。それは三里塚闘争<sup>1</sup>としても有名である。比定されている菱田地区では反対派の集落で形成される三里塚芝山空港反対同盟<sup>2</sup>に属していた。同盟の中でも反対住民が多くいて活発に反対運動が行われていた集落であった。

しかし芝山町菱田中郷地区は成田空港の平行滑走路直下に位置するため今から 10 年前の 1995 年（平成 7 年）に集落集団移転が起こっている。移転先は旧集落か

1 三里塚闘争とは、千葉県成田市の農村地区名称である三里塚とその近辺で行われた（行われている）、成田国際空港建設に反対する闘争およびこれに関連する事柄のことを指す。

2 三里塚芝山空港反対同盟とは、1966 年より、新東京国際空港建設およびそれに伴う土地収用などの活動に反対して結成された地域住民の団体である。略称は「空港反対同盟」「反対同盟」ともいう。空港予定地内に土地を持つ地主の農民を中心に、成田市三里塚および芝山町の農民らが結集し、『青年行動隊』をはじめとして『老人行動隊』『婦人行動隊』『少年行動隊』を組織し、投入された機動隊と対峙してきた。



図 17-5 宅地跡と水田 撮影=高橋大樹



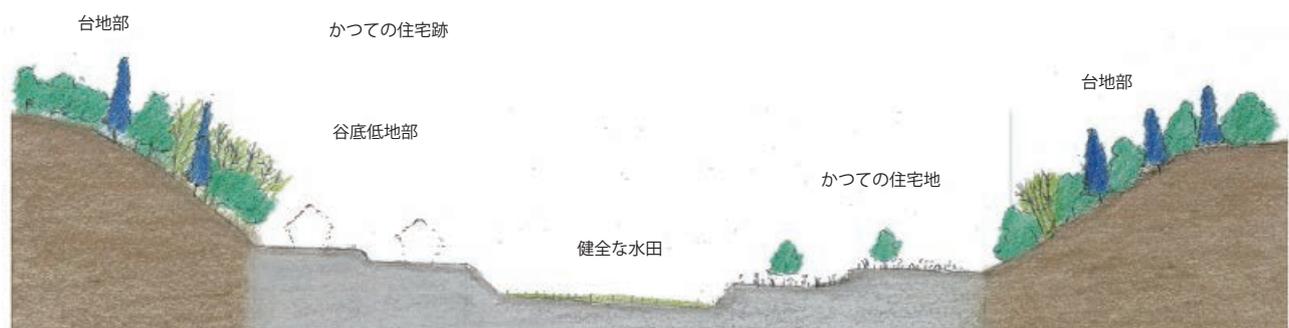
図 17-6 墓地 撮影=西吉永一



図 17-8 大里 1948年 国土変遷アーカイブより



図 大里 1979年 国土変遷アーカイブより



断面ダイアグラム

ら1 kmほど北東に寄った所にあり、「梅之木」と呼ばれている地区である。中郷では当時23戸あった家のうち10戸がこの梅之木に集団移転し、のちに梅之木近くに移転した家、そのまま中郷に住む家などを合せて13戸が集落としての付き合いをしている。10戸は町内外へ個別移転した。10戸はもともと農家だったが、専門は当時ですでに3戸しかなく、一部は空港など働いている方もいる。ある家庭は移転前から通勤農業を行っており、遠くに移転した家は家の近くに畑や山も買ってもらったケースもある。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

- 2-1 集落立地・形態の妥当性  
かつては妥当だったと考えられる。
- 2-2 交通手段・経路の妥当性  
かつての交通手段の妥当性は疾走調査では判断しかねる。更なる調査と検討を要す。
- 2-3 生産立地の妥当性  
生産は維持されており、妥当である。
- 2-4 その後の変容の妥当性  
集落形態の残存はゼロである。

### 参考文献

『成田空港地域共生委員会報告書46号』2005年／竹内理三他編『角川日本地名大辞典12 千葉県』角川書店、1984年

## 18 匝瑳郡幡間郷／横芝光町原方

担当：梶尾智美



図 18-1 村域図 googleMap より



図 18-2 地形図 図中赤線は断面線 ウォッチ図より 筆者加筆



図 18-3 集落を囲む道 水田よりも集落が高い位置にある 撮影＝梶尾智美



図 18-4 集落内の入り組んだ道 撮影＝梶尾智美

## 1) 村域の分析

九十九里平野の北東部に位置しており、集落の西に栗山川、東に太布川が流れており、交通網としては県道 108 号線と県道 45 号線に挟まれている。

村域を見るとやや分裂しており、一部は栗山川のほとりに位置する。

## 2) 実見した際の概要

栗山川という水源に支えられた、砂州上の微高地に位置する集落である。集落自体は神社、水田、宅地で構成されている。

各戸は住居、庭、生け垣、畑地で構成されており、畑は各戸内ではなく敷地の外で行なわれていた。

集落内の道はやや大きめの道路が集落を囲むようにして走っており、各戸を結ぶ家と家との道は細く入り組んでいた。また、大きな道路と、各家を結ぶ細い道はコンクリートやアスファルトといった舗装部分に違いが見られ、異なる時期に整備されたと推察される。

集落内には八坂神社という神社がひとつあり、神社内には貯水槽があった。神社の奥にはいくつかの墓と思われるものがあり、集落と太布川の間にも墓地があり、神社、寺、宅地、墓地、生産地というセットが見られた。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

栗山川のほとりに位置することと、地質図より砂丘上に位置すること、海際に位置することから、河川活動による、砂質土壌が堆積してできた自然堤防の微高地上に集落が存在しているか、海岸線の後退跡の砂丘に位置していると考えられる。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

集落の形態は 1947 年、1979 年、現在の航空写真から変わっていないことがわかる。また、1947 年から 1975 年の間に太布川ができ、その間に田圃が整備され、現在のような整然とした水田となったと考えられる。また、迅速測図で確認すると集落の北側に湖沼がある。（1947 年の航空写真にもその存在を見て取れる。）そのため、この湖沼は 1947 年から 1979 年の間に埋め立てられたものと考えられる。

## 5) 断面ダイアグラム

（図版参照）

1 栗山川：源は佐原権現前地先の下総台地にあり、途中支川栗山川、借当川、多古橋川、高谷川に合流する。昭和 49 年に河川改修事業に着手し、広域河川改修事業などにより改修が進められている。河道は利根川を水源とする農業用水（両総用水）都市用水（房総導水路）の動脈として利水上も重要な役割を担っている。『千葉県河川の河川—県土の保全と整備—』p.48.49 平成 17 年 1 月 発行：千葉県県土整備部河川計画課・千葉県県土整備部河川環境課



図 18-5 神社の貯水池 撮影=梶尾智美

## 6) 妥当性の検討

### ・2-1 集落立地・形態の妥当性

自然堤防の微高地上に立地しており妥当であると考えられる。

### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

妥当

### ・2-3 生産立地の妥当性

主な水源は両総用水<sup>2</sup>である栗山川と太布川であり、そこから水を引いていると考えられる。

### ・2-4 その後の変容の妥当性

太布川を新たに作ったり圃場整備を行うなど、生産に対応した水の確保が行われているため妥当であると考えられる。

### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年



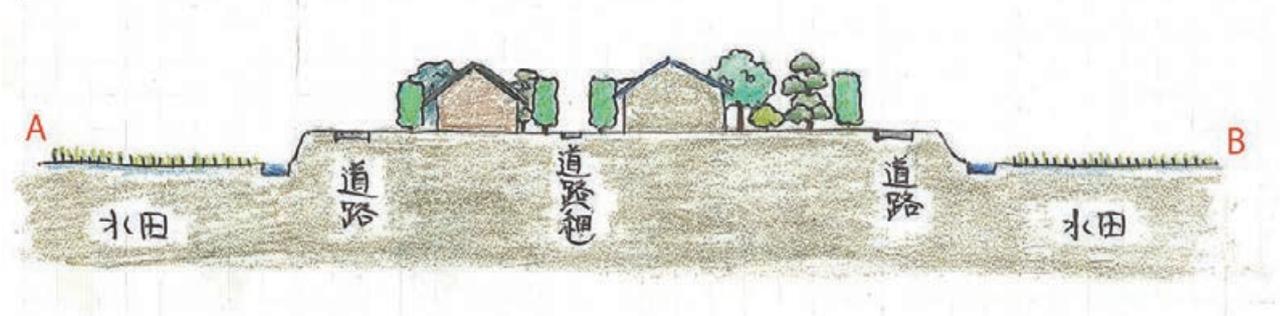
図 18-6 木戸目録 1947年 国土変遷アーカイブより

<sup>2</sup> 両総用水：昭和8,9年に続く昭和15年の大干ばつを契機に用水不足の解消と排水改良を同時に行なう「両総用水事業」が樹立されたことが始まりである。昭和18年、工事が始まり40億円あまりの費用をかけ昭和48年に完成した。千葉県ホームページ：両総用水の概要 <http://www.pref.chiba.lg.jp/ap-sanbu/sanbu/ryousouyousui/gaiyou/keii.html>



図 18-7 木戸目録 1979年 国土変遷アーカイブより

断面ダイアグラム



## 19 匝瑳郡石室郷／横芝光町小川台

担当：梶尾智美



図 19-1 村域図 googleMap より

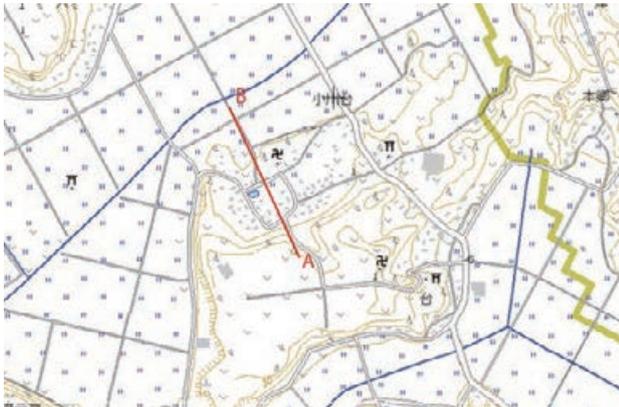


図 19-2 地形図 図中赤線は断面線 ウォッチ図より 筆者加筆



図 19-3 集落下の水道橋 撮影＝梶尾智美



図 19-4 南北方向の傾斜 撮影＝梶尾智美

## 1) 村域の分析

飯倉駅の北西部、九十九里浜中央部の栗山川中流東側の下総台地が細長く伸びた舌状台地に位置している。丘陵上には6世紀頃のものと思われる小川台古墳群がある。また、村域は一つの舌状台地を領域としてみることができ、台地上には集落と後背林、その上の畑地を含んでいる。低地の北部東西に走る水路によって村域を分断されている。

## 2) 実見した際の概要

台地上に立地する集落であり、集落内部にも緩い傾斜が存在する。集落内部の斜面は西に行くほど下がり、それに伴い家の大きさや見た目からの裕福さは下がっていくように感じられた。集落内部に存在する寺がちょうど分水嶺となり、集落の東西での違いが生まれているようであった。

また、東西だけではなく南北にも緩やかな傾斜があり、水田、宅地、畑地の三段から構成されている。

集落下の台地と低地の境界には水道橋のようなものがあり、水利において工夫が見られた。

集落の中心には隆台寺という寺があり、墓や半鐘があり、墓については無縁の方のものと思われる墓も存在し、全体的にきちんと管理されている印象を受けた。

また、やや大きめの防火水槽があった。そこには「郷中安全」と彫られた石碑のようなものがあり、集落を維持するための防災意識のようなものを見て取ることができた。

集落内には神社なく、一本道を挟んだ所にある。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

台地上に宅地、山林、畑地が存在し、水田は集落下の低地に存在する。2つの地形によって土地利用が分かれている。

交通という視点から見ると、集落西側に県道109号が、北側から東側にかけて県道45号が走っている。また、台地を分断するように南北に道路が走っている。

迅速測図からも県道と同様の道を確認することができるが、大きな街道ではなく、交通面ではやや閉鎖的であると考えられる。

台地を分断する道路については迅速側図には見られず、近代以降に整備されたものと思われる。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

上述した台地を分断する道路は1947年の航空写真には見られず、1975年の航空写真では確認できることから、この期間の間、最近になって整備されたものだ



図 19-5 郷中安全の石碑 撮影=梶尾智美



図 19-6 小川台 1947年 国土変遷アーカイブより



図 19-7 小川台 1975年 国土変遷アーカイブより

とわかる。したがって、道で分断された神社も当集落に属するものであったと考えられる。

迅速測図では斜面林は松と描いてあるため、現在の照葉樹が主な植生である状態とは景観も異なっていたと推察される。

集落の形態、畑地の形態は大きくは今とは変わっておらず、貯水池の位置もそのままである。

迅速測図と 1947 年の航空写真の比較から、この期間に圃場整備が行われ、今のような整えられた形になったと考えられる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

#### ・2-1 集落立地・形態の妥当性

下総台地の細長く伸びた舌状台地に位置しており、妥当であると思われる。

#### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

妥当

#### ・2-3 生産立地の妥当性

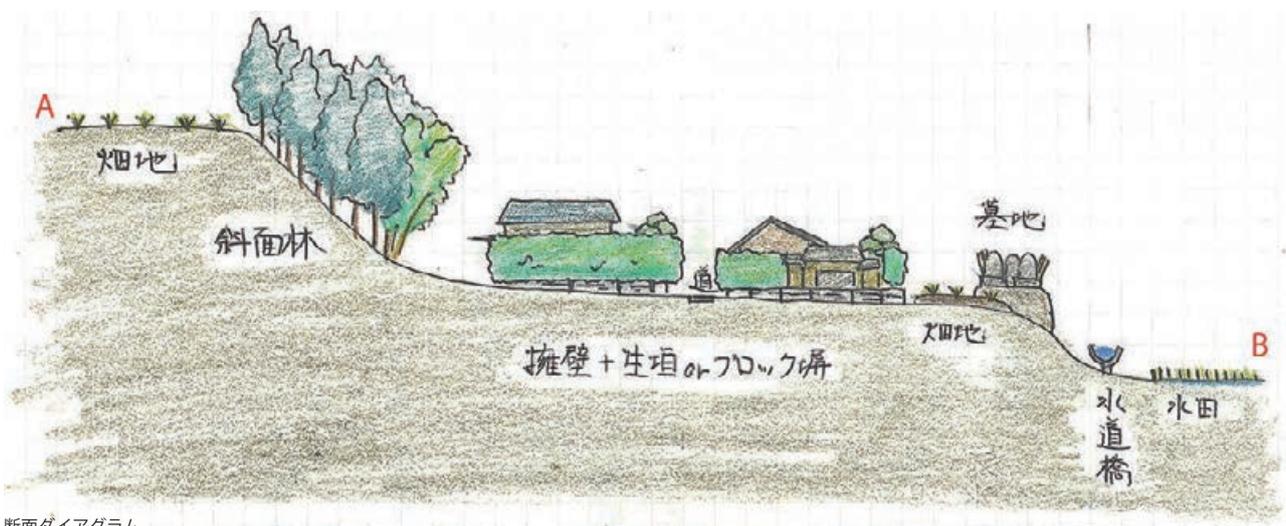
水道橋の整備などから畑地と水田では利水の方法が違うと思われる。地形を生かして生産地が確保されており、妥当であると考えられる。

#### ・2-4 その後の変容の妥当性

集落と神社を分断する道路の建設が気になるが、集落形態や水田、畑地、集落内の道路は持続されており、妥当であると考えられる。

### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年



断面ダイアグラム

## 20 匝瑳郡須賀郷／匝瑳市横須賀

担当：梶尾智美



図 20-1 村域図 googleMap より



図 20-2 地形図 図中赤線は断面線 ウォッチ図より 筆者加筆



図 20-3 集落内の大きな道 撮影＝庄子幸佑



図 20-4 集落内の細い道 撮影＝梶尾智美

## 1) 村域の分析

九十九里平野に位置し、北西部には下総台地が迫っており、JR 八日市場駅、東金街道（国道 126 号）を控えている。

村域から見るとその大部分が低地に位置しており、砂州と比較的新しい地層の上を集落と水田として利用している。集落北側の水路によって村域が決定されていることがわかる。

## 2) 実見した際の概要

集落全体としては神社、寺、宅地、水田がセットになっており、寺の近くの墓地はしっかり管理されている印象を受けた。

宅地沿いの道は入り組んでおり、極端に道が狭く幅が 250cm ほどしかない。古い家が多く存在しており倒壊している部分などがあり、やや貧相な印象を受けた。生け垣の樹種はイヌマキが主であった。集落部分と生産地の水田はほぼ同じ高さであり、明確な微高地上に存在しているとは言い切れない。

大利根用水工事完成の石碑が建っており、用水が引かれるまでは度々水争いがあったことがわかる。また、雨水利用が積極的にされており、雨樋が農地まで引かれているといった水に対する工夫が見られた。このことから、水不足に悩まされていたと推察される。

また、水田部分に新しい家が散見されたことから、農地から宅地への価値の転換が起きているのではないかとと思われる。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

集落の立地している部分は主に砂丘地形であり、水田のある部分は比較的新しい時代に作られた海成層と砂丘が混在する場所に立地しており、地質によって土地利用がある程度左右されていると考えられる。

また、東金街道と近いだけではなく集落を横断するように県道 48 号が通っている。これは、迅速側図と比較してみてもその存在が確認でき、東金街道と JR 八日市場駅辺りで接続していることから、古くからの交通手段は確立されていたのではないかと推察される。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1947 年の写真からは集落北側に短冊上に並んだ畑のようなものが見られ、南側には水田を見ることができるが現在のように整備された状態ではなく、不規則に並んでいる状態を見ることができる。1975 年の航空写真からは北側、南側両方の地域が整備され水田が規則正しく並んでいることから、この期間の間に圃場整備が行われ



図 20-5 大利根揚水工事完成の石碑 撮影=梶尾智美



図 20-6 横須賀 1946 年 国土変遷アーカイブより

たのではないかと推察される。

集落北側、東金街道の間に大利根用水がひいてあり、それが 1950 年に完成したことから、畑が整備された理由には用水の歴史的背景もあるのではないかと考えられる。迅速測図によれば、集落の北側は昔湖沼であり、それが 1947 年までの期間に埋め立てられ、干拓地が畑として利用されたと考えられる。

生産の場の形態や生産性の変容は見られるものの、集落中心部に置ける民家を中心とした部分の形態は大きくは変わっていない。

## 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

## 6) 妥当性の検討

### ・2-1 集落地・形態の妥当性

集落の宅地が集まっている部分は砂丘上に位置しており、妥当であると考えられる。

### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

旧街道やその他古くからある交通網を生かしているため妥当と考えられる。

### ・2-3 生産立地の妥当性

妥当である。

### ・2-4 その後の変容の妥当性

周辺環境に関しては大きな違いが見られるが、集落部分の形態はほとんど変化しておらず、また、時代やインフラに応じた変化を容認してきたことから、妥当であると考えられる。

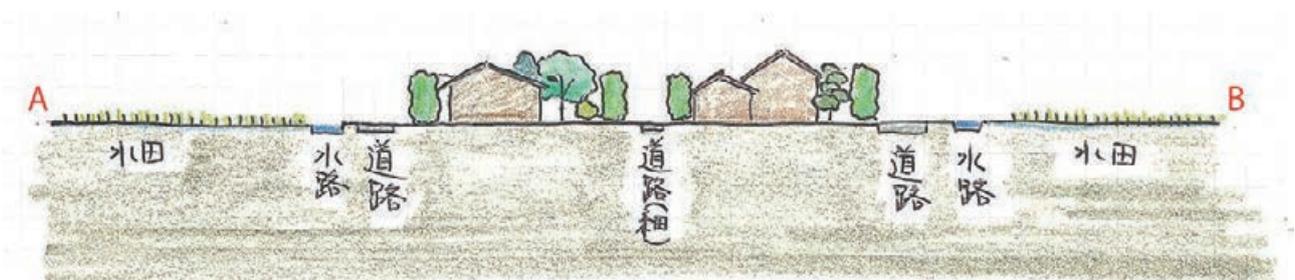
## 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984 年

1 大利根用水：樺海の干拓により、農業用水の確保が困難であったことを受け、昭和 10 年のことに利根川の揚水機上と幹線用水路の施工が行われたことが始まりである。工事は昭和 25 年に完了したものの、老朽化を受けて昭和 45 年から国営事業により全面的な改修が実施された。

関東農政局ホームページ

[http://www.maff.go.jp/kanto/nouson/sekkei/kokuei/tonecho/rekishi/02\\_9.html](http://www.maff.go.jp/kanto/nouson/sekkei/kokuei/tonecho/rekishi/02_9.html)



断面ダイアグラム

## 21 匝瑳郡中村郷／多古町南中

担当：庄子幸佑



図 21-1 南中村域 googleMap より



図 21-2 南中衛星写真 googleMap より 筆者加筆



図 21-3 六所大神と日本寺 撮影＝左 - 庄子幸佑 / 右 - 大村麻衣子

## 1) 村域の分析

栗山川の東側の台地上に位置する。栗山川と借当川が結節する場所であり、台地と川の間は水田が広がっている。県道 74 号線と 106 号線が集落を横断し、これは八日市場へ達する。集落中央付近で県道 127 号線と交差する。南中の中心には江戸期日蓮宗の檀林であった日本寺が立地している。北中と南中は、「旧郷名（中村郷）を南北に分けた時にそれぞれ地名が付けられた。」<sup>2</sup>その境には、旧村社の延喜式式内社六所大神が立地しており、現在の北中・南中の村域から考えると、旧中村郷の中心であったことが伺える。

## 2) 実見した際の概要

栗山川という水源に支えられた水田－谷戸集落と台地上に立地する集落が村域内に含まれている。谷戸集落は水田－街道－家屋－斜面林－神社－台地上の畑で構成されている。この集落の各戸は、主屋（－馬屋）－庭－生垣で構成されている。ただ他の集落と異なり、日本寺の東側にも台地上集落が形成されており、この集落は家屋自体の規模も大きくなく、活気があるといえる状態ではなかった。迅速側図を見ると、明治頃からすでに群として集落を形成していたことが見える。生産地である畑の規模から考えると、この集落は日本寺と関係したものと考えるのが、合理的であろう。また調査中に排水溝の清掃中の「多古」と書かれた法被を着た地元消防団に遭遇した。その消防団員は 20 代後半から 30 代前半と見え、共同体内の組織が循環していることが考えられる。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

低地の集落は丘陵地と沖積平野の際に家屋が集まり、丘陵地の斜面を斜面林として、沖積平野を水田として利用している。典型的な谷戸集落と言える。台地上の集落は水源など見当たらず、その運営がどのようにして行なわれてきたかは不明である。注目すべき点として、台地上の畑がほかの集落に比べ、圧倒的に広大であることが挙げられる。しかも迅速側図によると、これは明治頃から続いている。

1 日本寺：「正東日本寺」と称する日蓮宗の古刹。『中村寺院明細帳』によると、「天正十五年（一五八七）日門創立ニテ日蓮一派ノ元学校ニテ伝来セリ…」とあり、日蓮宗僧侶が勉強するための檀林であった。各地の本山寺歴代としての交流が深く、宗門学府として多くの碩学・巨匠を輩出した。徳川幕府より与えられた御朱印地や寺内行事への参加などで地域住民とも関係があったと考えられる。（『多古町史 下巻』 p.48-75）

2 匝瑳郡内の中心であったことから「中村」の名が起ったであろうとは、谷津出身の歴史学者村岡良弼の説である。（『多古町史 下巻』 p.9）（『角川日本地名大辞典 千葉県』 p.814）



図 21-4 調査中に出くわした消防団のポンプ車 撮影=庄子幸佑



図 21-5 台地上の土地利用の様子 撮影=庄子幸佑

り近世からは中村檀林であった日本寺を中心にした集落というように集落の性格、位置づけが外的な要因によって決定、変更されている。その変容の妥当性については、検討が必要である。<sup>2</sup>

**参考文献**

多古町史編纂委員会『多古町史 上・下』多古町、1985年／竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年

<sup>2</sup> その変容を可能にした根底に八日市場と多古宿を結ぶ街道沿いの集落立地が考えられる。

当町域を横断する県道 74 号線及び 106 号線は、多古宿と八日市場に続いており、その陸運が考えられる。<sup>1</sup>

**4) 空撮写真を主体とした編年比較**

迅速側図と 1947 年の航空写真を比較すると、まず谷戸集落では集落立地や生産地、斜面林に大きな違いは見受けられない。地形環境とも良好な対応関係にあるため、長く存続していると考えられる。また台地上の集落に関しては、集落立地や生産地に大きな変容は見られない。県道 74 号線及び 106 号線は迅速側図でも確認できる。また 1998 年及び現在の航空写真も 1947 年から中村小学校が出来ている以外、特に変化もなく、古くからそのままの形で存続しており、台地上の集落も豊かなものではないが存続しているため、生産と居住の関係が良好であると考えられる。

**5) 断面ダイアグラム**

(図版参照)

**6) 妥当性の検討**

・2-1 集落地・形態の妥当性

谷戸集落にかんしては妥当。台地上集落に関しては更なる検討を要す。

・2-2 交通手段・経路の妥当性

街道は八日市場と宿場多古を結んでおり、その街道沿いに集落があり、妥当である。

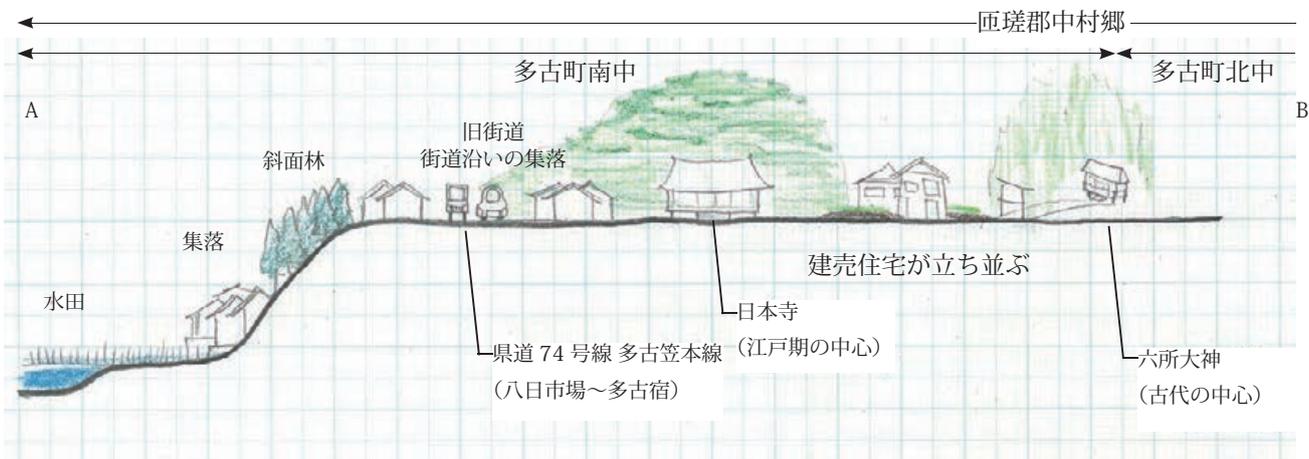
・2-3 生産立地の妥当性

沖積平野を水田とし、栗山川から供給を受けている。台地上を畑としている。水の供給は天水しか考えられないが、それにしても畑が広大なので、更なる検討を要す。

・2-4 その後の変容の妥当性

古代では式内社六所大神を中心とした匝瑳郡の中心であ

<sup>1</sup> 近世初頭、多古から下総東部へ向かう、後の銚子道と、多古から西部へ向かう江戸道とはすでに街道として開かれていた。多古村は古くから要的な宿場であった。寛文年間(1661-73)の椿海の干拓にあわせ武家の交通が増えた。それによって、東西だけでなく南北へも交通経路が開けた。(『多古町史 上』p300-317)



断面ダイアグラム

## 22 匝瑳郡玉造郷／多古町南玉造

担当：庄子幸佑

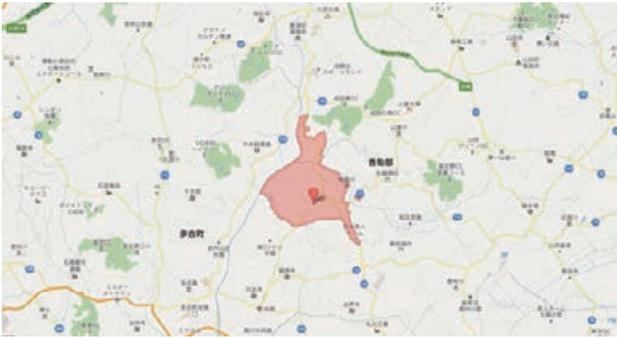


図 22-1 南玉造村域図 googleMap より



図 22-2 南玉造村域と水系 googleMap より 筆者加筆



図 22-3 半鐘からの眺め 撮影＝高橋大樹

## 1) 村域の分析

栗山川左岸の丘陵地上に立地。台地上に立地する集落と低地の水田、栗山川が町域を構成している。ここでは谷戸集落の典型的な立地である丘陵地沿いに家屋が立地していない。その理由として、北斜面であることが考えられるが、ここでは確定し得ない。小字南台・志代地・宿<sup>1</sup>・南玉造が立地する台地の北には柏熊<sup>2</sup>という谷戸集落が立地しておりそこまでが町域。柏熊には前長71.5m、高さ6.6mの前方後円墳がある。

## 2) 実見した際の概要

台地に谷戸が侵入してくることで、台地上の集落と水田が併存する特異な景観を生み出している。集落自体は台地と成長した斜面林、及び県道が集落を迂回していることによって閉鎖的な印象を受けた。水田を挟んだ柏熊<sup>3</sup>には斜面を削ったような跡があり、玉造<sup>4</sup>という地名が示すように玉の製作を生業とした玉造部の住んでいたところかと推定される。同様な集落立地をしている21中村郷と比較すると、当集落は家屋に立派なものが多く、生け垣・庭なども手入れされていた。巨大な長屋門をもつ住戸もあり、現在でも比較的豊かな集落と考えられる。畑の他に畜産や園芸なども行っていた。

南玉造を見下ろすことの出来る場所に、石碑があり、そこへのアプローチには鳥居が設えられていた。また椿神社は集落から上がった畑の奥に立地しており、前面に神楽殿、背面に本殿という形式で、現在でも管理されている印象であった。

台地上の集落として水の取得には苦労していたようで、近代になって常磐地区簡易用水が設置されていた。<sup>5</sup>防火水槽や消火栓が至る所で見られ、それには石組みで整えられたものなどもあった。町内の掲示板では消防団主催の行事が告示され、防火には注意が払われていると考えられる。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

柏熊付近は典型的な谷戸集落の様相を呈しており、地

1 宿にある蓮華寺は江戸初期に玉造檀林が開かれていた。

2 柏熊付近は寛文年間（1661-73）に開発された新田であり、幕府によって新たに農民が入植させられている。『角川日本地名大辞典』p1268

3 玉造郷：勾玉や管玉など玉の製作を職掌とした玉作部の住んでいた所。玉は古墳の副葬品として出土しているようかなり古くから尊重され、普通は碧玉やめのうなどの原材料の山地に玉造部は分散居住していた。『和名抄』記載の玉造（作）部は下総ほか陸奥・駿河・土佐などにある。

4 『多古町史 上』p50 『多古町史 上』p50でも同様のことは述べられているが、確認は得られていないとしている。

5 「多古町の水道は、昭和35年に多古地区簡易水道の創設を初めとして、中・東條・常磐と順次創設後、昭和57年度に多古・東條の統廃合並びに未整備地区の北部・久賀地区を含めて広域化として多古町上水道を創設し」とある。多古町HP「[http://www.town.tako.chiba.jp/topics/master\\_43.html](http://www.town.tako.chiba.jp/topics/master_43.html)」



図 22-4 防火水槽が植栽に囲われている / 防火水槽と祠 撮影=梶尾智美



図 22-5 集落背後の里山の中に鎮座する神社 撮影=庄子幸佑



図 22-6 集落の北西部の山林 撮影=高橋大樹

形と土地利用が明快な対応関係にあると考えられる。南玉造のあたりは台地上集落と檀林と関係した集落とが混在している様相であった。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速側図、1946年、1979年、現在の航空写真を比較しても、生産地、居住地、街道に大きな変容は見られない。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 妥当性の検討

##### ・2-1 集落立地・形態の妥当性

台地上集落に関しては要検討。

##### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

他集落との交通があったのか不明。<sup>1</sup>

##### ・2-3 生産立地の妥当性

沖積平野を水田とし、栗山川から水の供給を受けている。また台地上を畑としているが、そこに対する水の供給は天水しか考えられないが、それにしては畑が広大なので、要検討。

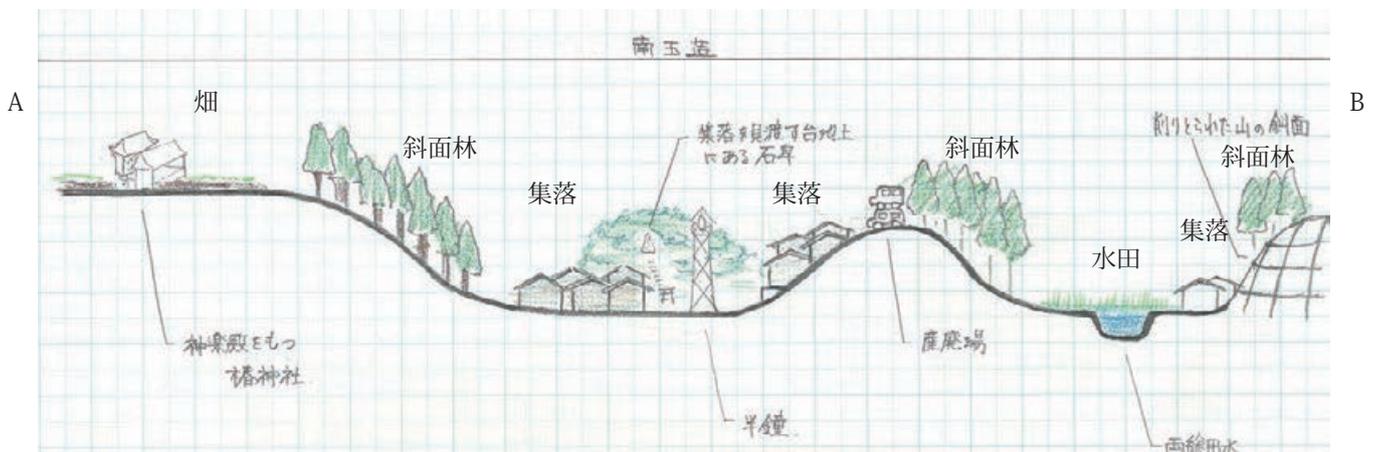
##### ・2-4 その後の変容の妥当性

集落形態、生産立地ともに特に変容が見られない。

#### 参考文献

多古町史編纂委員会『多古町史 上・下』多古町、1985年  
竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年

<sup>1</sup> 当町域から丸木舟が出土しており、古代では栗山川を通路とした水運が交通としてあったのではないかと推察される。



断面ダイアグラム

## 23 匝瑳郡田部郷／栗源町西田部

担当：庄子幸佑



図 23-1 西田部町域  
(左：現在の衛星写真 googleMap/ 右：迅速測図 歴史的農業環境閲覧システム)

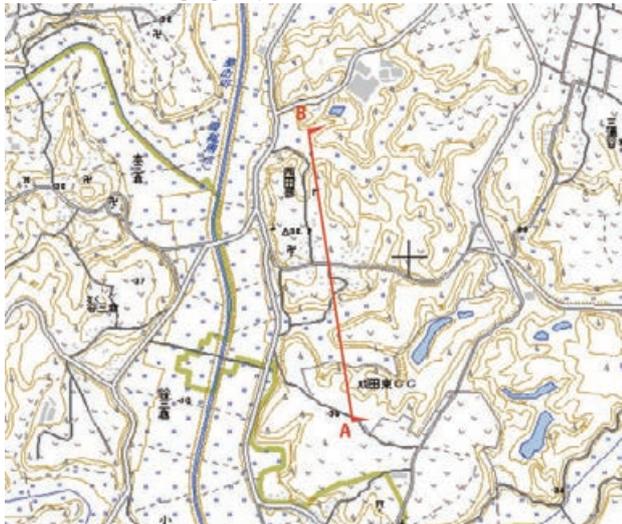


図 23-3 地形図 ウォッチ図より 筆者加筆



図 23-4 街道沿いの民家 撮影＝庄子幸佑

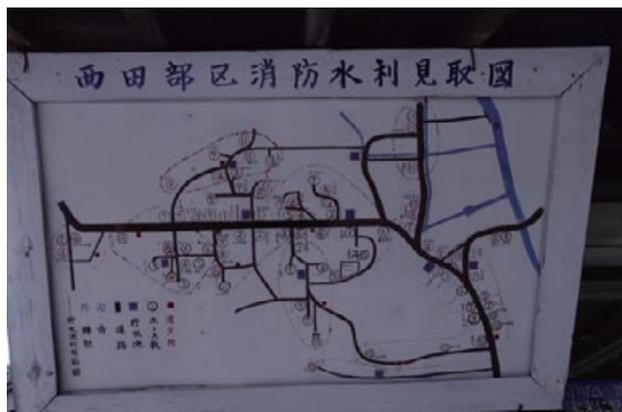


図 23-5 「西田部消防水利見取図」 撮影＝庄子幸佑

## 1) 村域の分析

西田部町域には、栗山川・水田・街道（県道 16 号線）・家屋というセットと台地上に街道（県道 125 号線）・家屋・畑・共有林というセットが存在している。<sup>2</sup>中世の御砦（字御城）および字馬林・新鹿台・浅間台・向台地先古墳が台地上にある。また集落後背の共有林が現在ではゴルフ場となっている。

## 2) 実見した際の概要

台地と低地の縁に立地する集落と台地場に立地する集落が併存する。主に台地場上の集落を実見した。街道に面する家は、広い敷地奥に設えられた主屋は街道に正対していた。またその背後にも家は点在しており、計画されたというよりも住宅地を求めてスプロールしたような印象を受けた。敷地同士は主に生垣と微細な地形によって区画されていた。街道（県道 125 号線）より北側に大きな敷地と民家が多く、南側には比較的小さな民家が多かった。南側は地形に併せてつくられた民家と畑が混ざっているような状態であった。

この集落でも 22 玉造郷と同様に水の供給には大きな問題を抱えていたことが考えられる。街道沿いには「香取市消防団栗源支団第 1 分団第 3 部機具庫」があり、そこには「西田部区消防水利見取図」（図 23-5）が掲げられていた。この図は、西田部の町域全体をベースに、消火栓／ホース数／貯水池／道路／寺／神社／貯水利用範囲を示し、貯水利用範囲として囲まれた部分には一つの貯水池が含まれている。（例外として集落の東はずれの利用範囲には貯水池が記載されていない）水利見取図と地形を重ねて見ると（図 23-6）、主にこの貯水池利用範囲が地形によっていることが分かる。しかし、街道沿いの家屋に対しては、明確な地形的な違いがないため、その利用範囲決定の根拠については不明。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

町域は 3 つの地層にまたがる。集落はおもに堆積岩類の上に形成されており、約 70 万年～ 15 万年前に形成された地層である。背後の共有林

1 「西田部の浅間大牧場の南側狭小な谷津田の奥の「京田部」や、西田部の坂下県道沿いの「部田」その他「大部田部田野」などと云われている所は、大和朝廷が各国々に置いた直轄農地の一つであり、これに従事した農民が「田部」であり、それが現在地名となっているわけです。農耕と大和朝勢力とが、栗山川上流流域にすっきり定着して、田部、大伴部のように多く部民を率える指導者も現れ前方後円墳や大畑の大塚のような古墳も構築されるようになりました。」（栗源町史、p175-177）

2 「台地では野兔、鹿、猪、野鳥類の狩猟の外、山芋、山百合、栗、どんぐり、山菜等が豊富であったろうし、台地から一步辺麓へ下れば、栗山水系の水辺へ出られた」（栗源町史、p174）



図 23-6 「西田部消防水利見取図」と地区の鳥瞰図を重ねた図  
googleMap より 筆者加筆



図 23-7 村域と地質図を重ねた図 googleMap, シームレス地質図より

は 15 万年～7 万年前に形成された段丘層である。また水田部分は約 1 万 8000 年前～現在にかけて形成された新しい地層である。これら異なる地質層が近接する所に集落は立地しており、とくに家屋は一番古い地質上に立地している。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

水田および谷戸集落は迅速測図を見ても、現在とほぼ集落立地や規模は変わらない。台地上の集落は、迅速測図を見ると、その当時は街道沿いにのみ民家が連なる集落で、その背後は畑として生産に使われていた。それに対し、現在ではその畑であった所を住宅地として利用していることが見受けられる。<sup>1</sup>

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 妥当性の検討

##### ・2-1 集落地・形態の妥当性

防水見取り図の掲載などから水の供給は大きな問題だったと考えられるので、要検討。

##### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

他集落との交通があったのか不明。<sup>2</sup>

##### ・2-3 生産立地の妥当性

水田は妥当。台地上の畑は水の供給は天水しか考えられないが、それにしては畑が広大なので、要検討。

##### ・2-4 その後の変容の妥当性

台地上の土地利用に関しては要検討。共有林をゴルフ場として転売してはいるが、その場所は集落と関係なくかつ生産地でもない。この変容は妥当と言える。

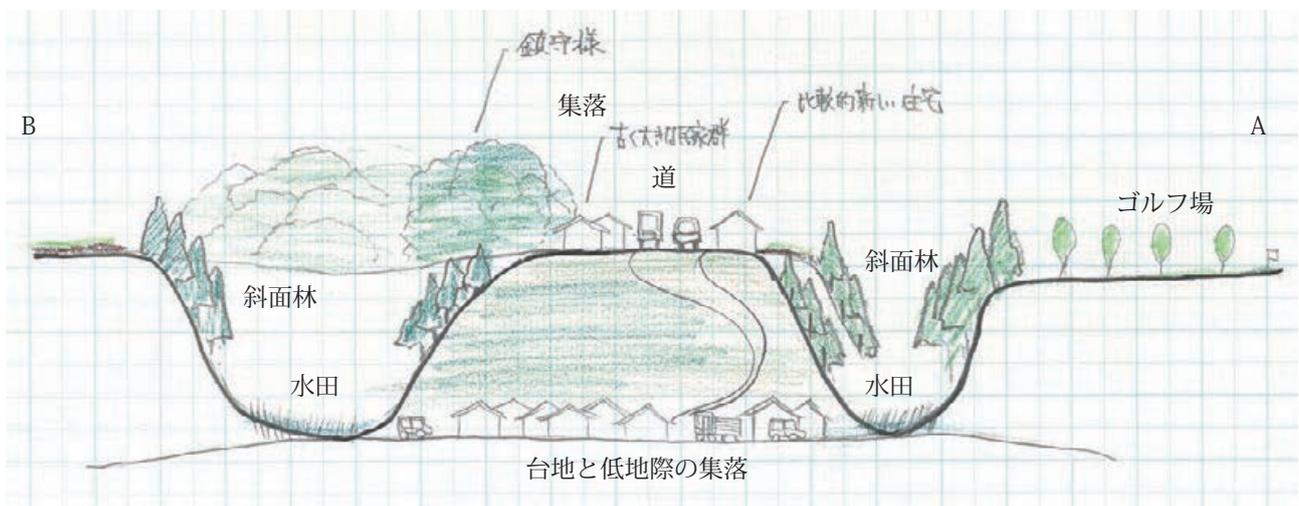
#### 参考文献

石橋武男編『栗源町史』栗源町役場、1974 年

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984 年

<sup>1</sup> この辺は台地上で微細な高低差がある。その制約の下に開墾された畑と住宅地のスケールが近似していることが現在の景観形成の要因と考えられる。

<sup>2</sup> 当町域から丸木舟が出土しており、古代では栗山川を通路とした水運が交通としてあったのではないかと。



断面ダイアグラム

## 24 海上郡神代郷／東庄町大久保

担当：小林千尋



図 24-1 村域図 googleMapより



図 24-2 地形図 ウォッチ図より 筆者加筆



図 24-3 谷戸に張り付くように分布する典型的な民家 撮影＝小林千尋



図 24-4 東穂寺から南方を望む 右に舟戸の集落と後背の山林 撮影＝高橋大樹

## 1) 村域の分析

神代郷は、現在の地名において東庄町大久保、舟戸、神田から旭市櫻井、萬歳に比定されている。村域を（上から各ピンは紫色：大久保、桃色：神田、橙色：舟戸、赤色：櫻井、緑色、萬歳）見ると、平野部の水田地帯から谷戸状の斜面林、後背地の山林（現在はゴルフクラブ）を有していることが伺える。ゴルフクラブは村域にかかっている。また、兼田貯水池は萬歳の飛地であり、水田と水源の関係が明快に村域に見てとれる。

## 2) 実見した際の概要

九十九里平野に面する谷戸集落である。集落は切り立った山際に立地しており、大型の民家が多く見られた。門から主屋へのアプローチが長い民家が多くあり、中には長屋門を有する立派なものも数戸見られた。大久保唯一の寺院である東穂寺は台地上に立地し、寺の上からは干拓されたかつての椿海を展望することができる。大久保の東側に面する水田は谷戸頭に立地する兼田貯水池と利根川水路の両方を利用するが、今は水を必要としない時期なのか、流れていなかった。集落の東に面する水田には昭和44年の耕地整理の記念として石碑が立てられていた。また反対側の山沿いは崖がきつく、一部が崩れ、集落も見られなかった。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

寺社、ゴルフクラブが丘陵地に、山林が谷戸の斜面地に、宅地が台地の際に、水田が椿海の干拓地に立地しており、集落を構成する要素が地形に対応した、明快な土地利用がなされている。国道267,74号線に接しているが、村域付近に鉄道は通っていない。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1949年の航空写真と1979年の航空写真を比較すると、1949年次では兼田貯水池は見られず、また耕地整理も行われていないが、両総用水の水路を確認することができる。1979年には耕地整理が行われており、兼田貯水池の姿も確認することができるが、現在のような整備には至っていない。1979年当時も、東庄町GCの姿は見られない。また1949年、1979年、現在の航空写真を比較して集落の数は大きく変化していないことが伺える。

## 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

- 1 椿海：江戸時代まで、現在の旭市・海方町・干潟町・八日市場市にまたがって存在していた湖。寛文年間（1661-1673）に湖が干拓され、33348町歩に及ぶ干拓面積は近世前期の干拓地の面積としては日本最大のものであった。
- 2 兼田貯水池：千葉県香取郡東庄町窪野谷に位置する灌漑用の湖。迅速測図からもその姿が確認できる。



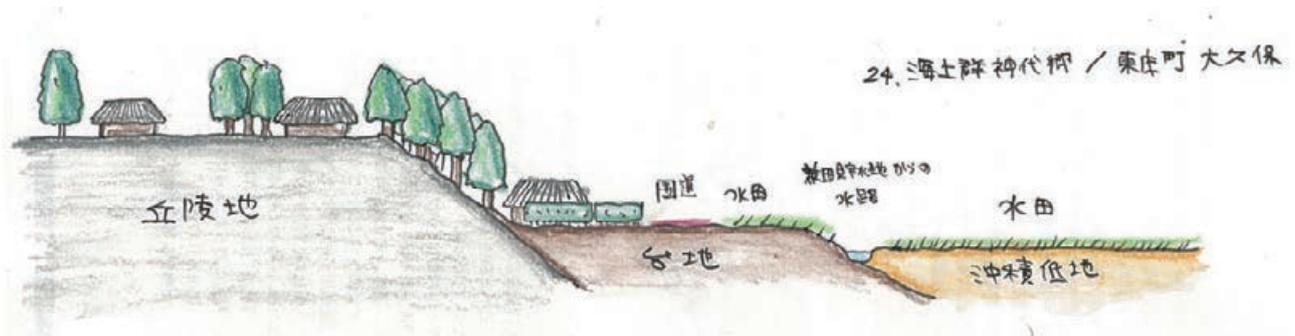
図 24-5 谷戸頭の兼田貯水池 撮影=高橋大樹



図 24-6 大久保 1949年 国土変遷アーカイブより



図 24-7 大久保 1979年 国土変遷アーカイブより



断面ダイアグラム

## 6) 妥当性の検討

### ・2-1 集落立地・形態の妥当性

妥当であると考えられる。

### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

現段階では判断できない。さらなる詳細な調査と検討を要す。

### ・2-3 生産立地の妥当性

水源と水田の関係が明快であり妥当性が見られる。

### ・2-4 その後の変容の妥当性

耕地整備、背後の山林のゴルフクラブの造成を行うなど妥当である。ゴルフクラブの土地の売買について更なる調査を必要とする。

## 参考文献

竹内理三編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年／三浦茂一編『図説 日本の歴史 13 千葉県の歴史』河出書房新社、1989年

## 25 海上郡石井郷／旭市岩井

担当：小林千尋



図 25-1 村域図 googleMap より

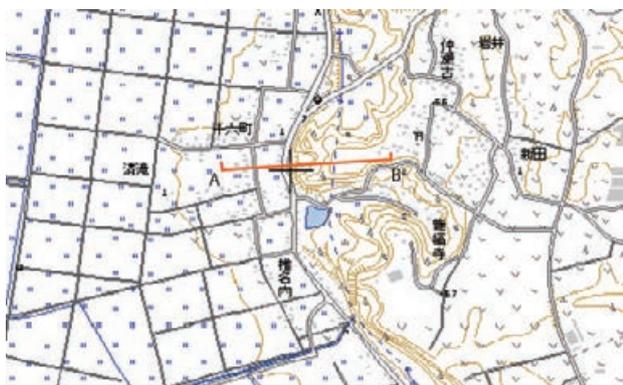


図 25-2 地形図 ウォッチ図より 筆者加筆



図 25-3 丘陵上から新田集落、水田地帯を望む 撮影＝高橋大樹



図 25-4 丘陵上の畑 撮影＝高橋大樹

## 1) 村域の分析

石井郷は現在の旭市岩井付近に比定され、村域は図 25-1 のような領域をとる。下総台地の際の部分が必要な村域であり、国道 265 号線を西側の境界とし、国道 73 号線が村域中央を東西に通っている。村域東部が根のように伸びているのは谷戸の谷であり、谷戸に囲われた地域がひとつのまとまりとなっていることが見て取れる。台地上に畑が多く、航空写真から村域北部の畑が最も大規模なものと確認できる。また台地上にもまとまった集落が存在している。従来の村と比べて特徴的な点は村域に水田地帯が含まれていないことである。

## 2) 実見した際の概要

九十九里平野上の集落、街道沿いで台地の境界に立地する集落、台地上の集落という 3 つの要素を持っている。従来の集落は地形の際に立地する集落が最も豊かであったが、岩井においては地形の際に立地する集落はさほど立派ではなく、むしろ九十九里平野上の集落、台地上の集落が大きな民家を持ち、豊かな印象を受けた。実際の村域には平野上の集落は含まれておらず、これらの集落が岡集落 - 新田集落という親子関係があるものなのか、全く別の集落なのかは更なる調査・考察が必要である。北部の水神社は、岩の割れ目の湧き水が出る場所を祀るもので、水と集落の重要な関係性が伺えた。丘の上からは 24 神代郷と同様にかつての樺海であった九十九里平野の水田地帯が一望できる。その水田地帯の集落は立派な民家が多く、更新もよく行われており、環境として良好な印象を受けた。水田上に見られる鳥居は何かを祀るためではなく、不法投棄防止のために設置されているのではないかと推測された。背後に見えるのは農協のライスセンターである。現在の村域だけをみると、水田が含まれていないため、生産と生活の体系をどのように捉えるのか、またその変遷を追う必要性があるように感じられる。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

上から台地上に集落と畑が、傾斜地に雑木林が、平地に水田と集落が立地しており、明快な土地利用がなされている。現在の国道 265 号線に沿って集落が立地しているため、街道と集落は重要な関係にあったと考えられる。地形の異なる 3 つの部分に 3 つの集落が存在していることと集落の関係が主な調査テーマになると考えられ、集落の成立年代を追いたい。

1 丘集落、新田集落、納屋集落の集落移動説は青野寿郎博士（1901-1991）が『漁村水産地理学研究』（古今書院、1953 年）で提唱し、通説とされている。



図 25-5 水田地帯の鳥居と背後に見える農協の建物 撮影=高橋大樹



図 25-6 岩井 1947 年 国土変遷アーカイブより



図 25-7 岩井 1975 年 国土変遷アーカイブより

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1947 年、1975 年の航空写真の比較によると、集落の数に大きな変化は無く、水田地帯にも集落は変わらず存在している。大きな違いは耕地整理が行われていることである。明治初期に作成された迅速測図を見ても集落は水田地帯に現在とほぼ変わらない分布で存在している。

#### 5) 断面ダイアグラム

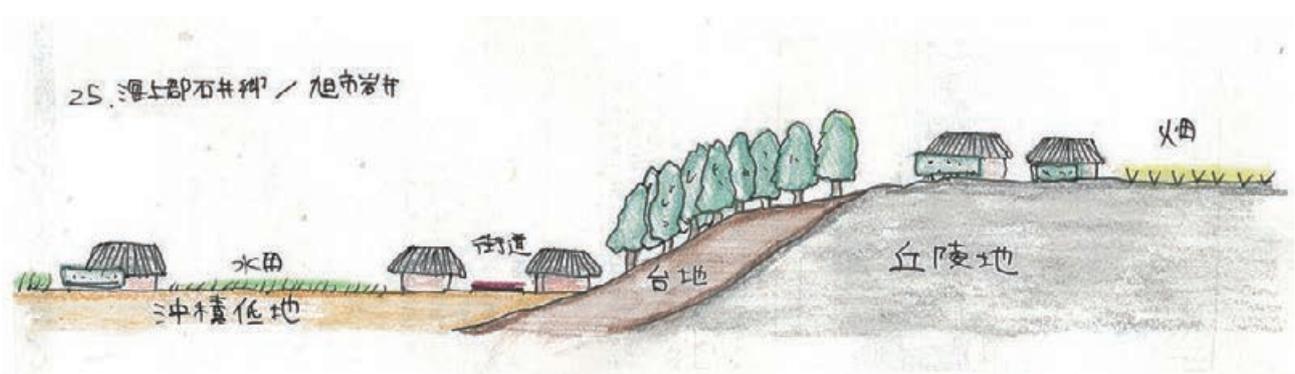
(図版参照)

#### 6) 妥当性の検討

- 2-1 集落地・形態の妥当性  
妥当であると考えられる。
- 2-2 交通手段・経路の妥当性  
街道沿いに集落が発生していることから重要であったと考えられ、妥当と考えられる。
- 2-3 生産立地の妥当性  
妥当であると考えられる。
- 2-4 その後の変容の妥当性  
街道沿いに発達した集落は道の交通量にその発展または衰退が影響されている。平野部の集落、台地上の集落は変容が見られなく、安定している。

#### 参考文献

菊地利夫「九十九里浜における臨海集落の発達の歴史地理学的研究」1959 年／竹内理三編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984 年／三浦茂一編『図説 日本の歴史 13 千葉県の歴史』河出書房新社、1989 年



断面ダイアグラム

## 26 海上郡横根郷／飯岡町横根

担当：小林千尋



図 26-1 村域図 googleMap より

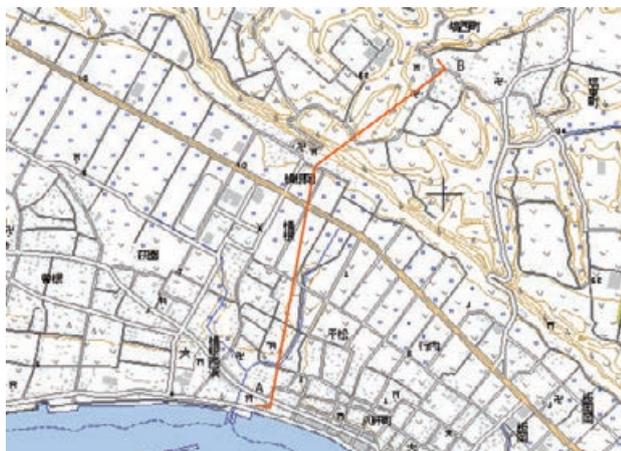


図 26-2 地形図 ウォッチ図より



図 26-3 海岸背後の砂丘の微高地に立地する三峰神社 撮影＝小林千尋



図 26-4 低地の砂丘上から地形境の集落と背後の山を望む 撮影＝小林千尋

## 1) 村域の分析

九十九里平野の北端に位置し、村域は図 26-1 のように、複数の飛地を有しながら南から北まで約 7 キロに及んで分布している。太平洋に面する納屋集落から街道を含んだ新田集落、下総台地上の丘集落までひとつの村域に含まれている。これにより、村域からも複数の集落の関係性が伺える。

## 2) 実見した際の概要

今回の疾走調査では、海岸背後から北上し、低地の砂丘または自然堤防地帯、台地と低地の境界部分、そして谷戸または中位の段丘面と順に見ていった。

海岸背後の砂丘は納屋集落と呼ばれる漁村集落であり、住宅地は海岸に沿って約 200m 幅の帯状に広がっている。街道沿いの魚屋では水揚げされた魚介類が販売されていた。納屋集落の神社と思われる三峰神社は砂州性の微高地上に立地していた。迅速測図（明治初期から中期に作成）と比較すると、集落の密度は現在より低いものの既に納屋集落が確認できる。そこから北上し、低地の砂丘、自然堤防の地域は主に水田として利用されており、納屋集落から台地の境界面まで約 500m の帯状に広がっている。旧干潟地帯であるため砂質土壌で、八幡神社の参道には液状化の跡が見られた。また、防風林として高いイヌマキの生垣が見られた。今調査で最も集落立地が多かった台地と低地の境界部の集落は、台地を開析する谷の入り口に立地し、台地に沿って走る街道筋の集落である。横根地域のお集落の中では最も小規模であった。地福院の鳥居は中央に装飾が見られた。村域の最も北部にある、中位段丘面に立地する丘集落は民家の畑の規模ともに大きく、豊かであり、酪農の様子も見られた。村域には入っていないものの、西部の畑作地帯には風車が 4 基設置されている。台地斜面では林業も見られ、生活資源の多様さが特徴的。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

納屋集落では低地の砂州上の微高地に集落、沖積低地に水田が立地している。丘集落では台地上に畑と集落が立地しており、基本的に明快な土地利用がなされている。平野部はバイパスに対応してうまく市街地していた。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

台地の際や丘集落の分布は現在と比べても大きな変化は見られない。1947 年は街道沿いを中心に発達していた納屋集落が広範囲に拡大している。1979 年ではバイパスが通っている。通説として、九十九里浜の臨海集落は内陸から海岸に向かって丘集落、新田集落、納屋集落

## 第三回〈古凡村〉千葉疾走調査

### 1 目的

本調査は「持続的環境・建造物群継承地区」通称、〈古凡村〉研究のひとつにあたる。

なお、「持続的環境・建造物群継承地区」とは特有の環境条件とそこに存在する建造物群とコミュニティとの間に動的平衡性が古くから持続し現在においても有効に継承されている地区をいう。

本研究は、幾世紀にも渡り存続し、今なお健全な共同体が認められる集落を評価することにより、今後の防災指針を検討する上での基礎資料を提供することを目的としている。

〈古凡村〉は、和名類聚抄に記載されている郷のうち現在地名との比定精度が高いものとしている。

千葉県においては和名類聚抄に記載されていたのは173郷であり、実際に〈古凡村〉として採用したのはこのうちの51.4%の89郷である。

2012年7月21日～22日にかけて行う今回の第二回千葉県〈古凡村〉疾走調査

は、千葉に存在する全〈古凡村〉89郷のうち、印旛沼周辺地域に存在する18郷を調査するものである。

以上から本調査の目的とは、建造物、自然環境、共同体の3つに着目して調査を行うことで、今後も継続していく〈古凡村〉研究において、〈古凡村〉の健全な評価を行うための評価軸を作成することである。

### 2 参加者

(大人) 中谷礼仁、木下剛、石川初、大高隆、福島加津也

(千葉大) 高橋大樹、梶尾智美、桃井佳奈子

(早稲田) 西吉永一、大村麻衣子、庄子幸佑、小林千尋、堀井隆秀

### 3 調査日程【参加者】

2012年7月21日(土)【中谷、木下、大高、高橋、梶尾、西吉、大村、庄子、小林、堀井】

2012年7月22日(日)【中谷、木下、石川、大高、福島、高橋、梶尾、桃井、西吉、大村、庄子、小林、堀井】



図 26-5 中位段丘面に立地する集落から畑地と風車を望む



図 26-6 横根 1947 年

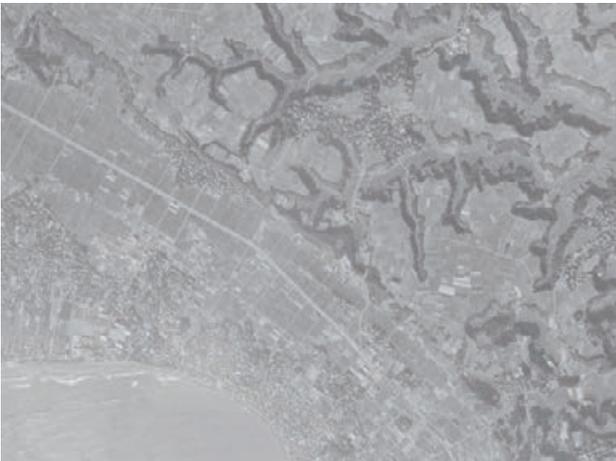


図 26-7 横根 1979 年

の三列に発達し、納屋集落の成立と相互関係については丘集落からの集落の移動現象とされているが、歴史地理学者の菊池利夫はこの集落移動説に幾つかの疑問を唱えている。簡潔に言えば、より古い納屋集落は別に存在していたのではないかと、というのが菊池の論旨である。九十九里浜の納屋集落はイワシ漁業を生業とした漁村集落であるため、イワシ漁業の盛衰を精密に調査するのが解決の根本的資料になると菊池は述べる。以上よりイワシ漁業と納屋集落の関係、また水利関係について調べることが横根地区の集落間の関係に重要な役割があると考えられる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

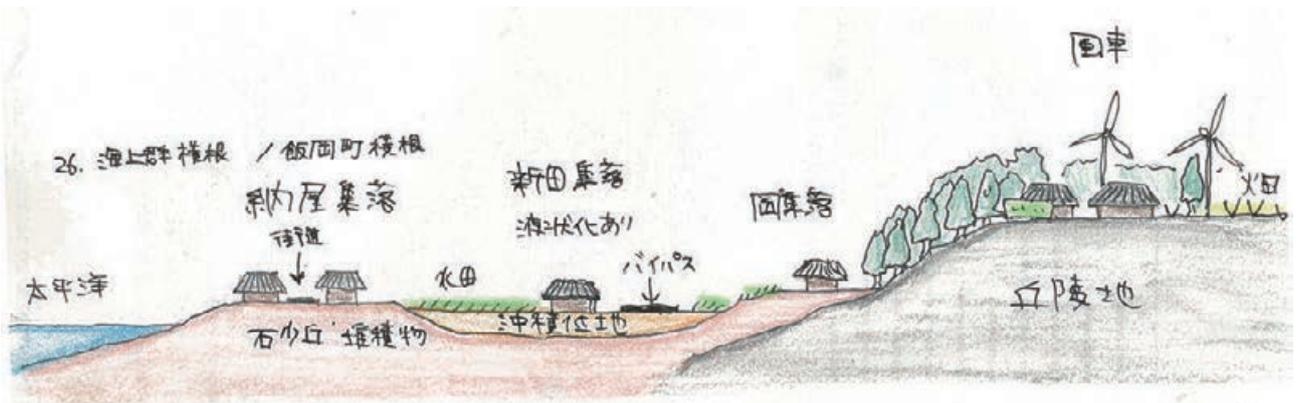
### 6) 妥当性の検討

- ・2-1 集落地・形態の妥当性  
妥当であると考えられる。
- ・2-2 交通手段・経路の妥当性  
妥当と考えられる。黒潮が交通に大きな役割を果たし、明治初期には街道も発達している。
- ・2-3 生産立地の妥当性  
妥当であると考えられる。
- ・2-4 その後の変容の妥当性  
妥当。

### 参考文献

菊池利夫「九十九里浜における臨海集落の発達の歴史地理学的研究」  
1959年／竹内理三編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、  
1984年／三浦茂一編『図説 日本の歴史 13 千葉県の歴史』河出書房  
新社、1989年／関東農政局 website <http://www.maff.go.jp/kanto/nouson/index.html>

1 九十九里浜のイワシ漁業が本格化したのは徳川家康が天下を統一し、全国的な政治的安定がもたらされてからである。イワシ漁は大地引網漁業であり、漁業開拓には関西漁民の進出が大きな役割を果たした。



断面ダイアグラム

## 01 葛飾郡栗原郷 / 船橋市本中山

担当：高橋大樹



図 村域および村域図 googleMap より



図 明治初期迅速測図より

## 1) 村域の分析

葛飾郡栗原郷 / 船橋市本中山は、船橋市の最西端に位置し、周囲を市川市に囲まれている。村域内に総武本線下総中山駅、京成本線京成中山駅、地下鉄東京メトロ東西線原木中山駅の合計3つの駅があり、また村域南部には京葉道路が通っており、近隣地区には市川インターもあることから東京方面へのアクセスが非常に良い場所である。そのため船橋市において高齢化の進んでいない地区の一つとなっており、村域のほとんどの部分は住宅地で構成され、新興住宅地が多く見られることから元々本中山に住んでいた旧住民よりこの地に移り住んできた新規住民が多くいると考えられる。また、本中山の北部の現市川市の中山や若宮に位置する法華経寺は日蓮宗大本山の寺院であり、船橋の同じ西部でも他と別の歴史的な経緯をたどっている。1889年（明治22年）の町村制施行時に周辺の村々と合併して葛飾村（のち葛飾町）となり1937年（昭和12年）の船橋市成立の際に同市の一部となったが、葛飾村成立以前は現市川市の中山や若宮などの法華経寺周辺に位置していた集落との親交が深く、連合町村などを形成した。

## 2) 実見した際の概要

集落立地を見ても、東京にアクセスしやすい点から村域のほとんどが住宅地として改変されてしまった集落であると言える。集落構造に関しては、千葉街道よりも北側と南側で激変しており、街道が一つの境界となっている。また、法華経寺の影響が非常に強く、その参道には寺町が形成されている。駅から山門に向かう道は少し傾斜のある坂になっており、道路を挟んで両側に商店が形成されていた。また、商店の裏には地形コンシャスに配置された住宅が立ち並び、古くからの歴史を感じた。また法華経寺は実見してみるとかなり大きく、国宝が2点、重要文化財が6点あるなど日蓮宗の大本山としての佇まいが感じられた。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

集落が立地する場所は、砂州の始まりでかつての海岸線だった。また、その砂州上に沿うように現在の千葉街道が存在する。千葉街道はかつて房総往還や江戸道と呼ばれ、昔から重要な街道として存在していたと思われる。また、法華経寺が位置する場所はスリバチ状の地形をしており、かつて日蓮は布教の際に多くの迫害を受けたことから敵が攻め入りにくくするためにこのような地形立地になったと考えられる。



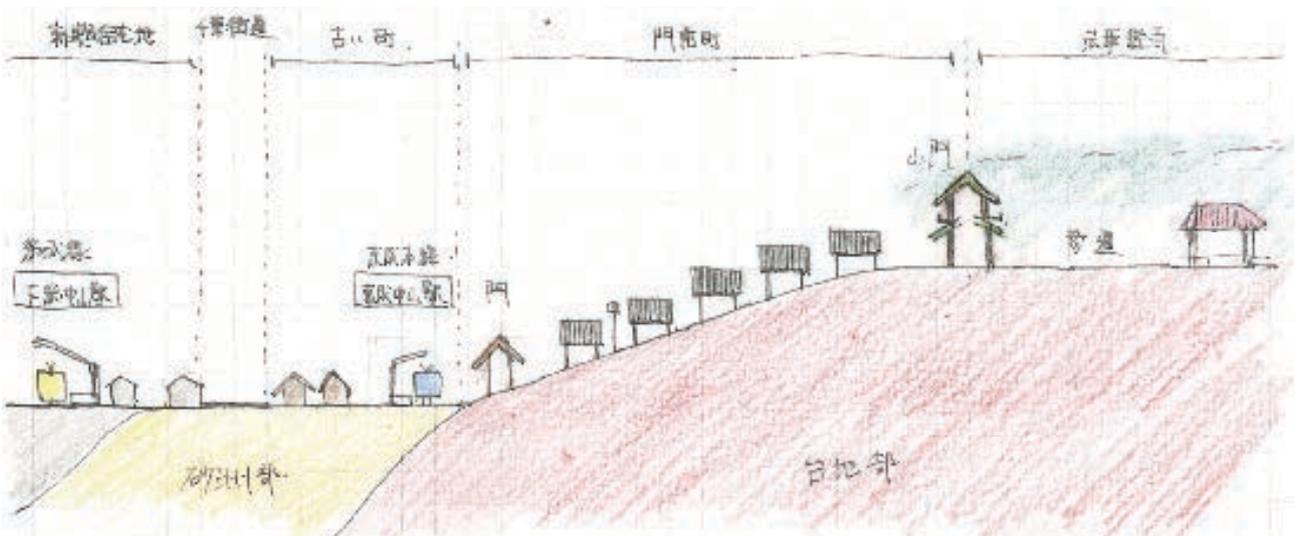
図 法華経寺の祖師堂 撮影：高橋大樹



図 門前町の景観 撮影：梶尾智美



図 シームレス地質図で砂州に立地する



#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

編年比較でまず挙げられるのは、鉄道網である。三線の電車が通るこの地区で京成本線とJR総武線は1910年代に開通しており、時代の古さが伺える。一方地区の南部を走る東京メトロ東西線の原木中山駅は1969年に開設された。そのため、時代とともに千葉街道南部の開発が活発に行われている。1948年の空撮では一面水田が広がる景観であったが、1978年では少しずつミニ開発が駅の近くから始まっている。1978年にはまだ確認ができた水田であるが、現在の空撮ではほとんど確認できず宅地や工場用地に転用している。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 妥当性の検討

##### ・2-1 集落地・形態の妥当性

砂州の先端に集落が位置していた点からも妥当であるといえる。

##### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

千葉街道の存在からも古代から交通の要所として栄えていた可能性は高い。

##### ・2-3 生産立地の妥当性

砂州周辺を水田として活用していた点からも妥当であったと言える。

##### ・2-4 その後の変容の妥当性

東京への立地の良さから変容は多く見られた。特に生産地は激減しており現在ほとんど農地は存在していない。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年

## 02 印旛郡三宅郷／印西市浦部

担当：梶尾智美

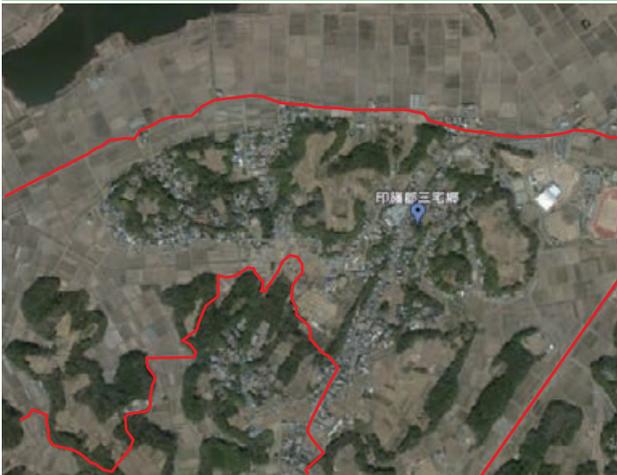


図 村域および村域に関わる水系図 googleMap より



図 低地から見にある観音寺 撮影：梶尾智美



図 集落内の入り組んだ細い道 撮影：梶尾智美



図 鳥見神社の神楽殿 撮影：梶尾智美

## 1) 村域の分析

印西市の西部、南部手賀沼である下手賀沼に位置する。また、下総丘陵の北端に位置しており、台地北部には利根川が流れている。

村域の北部には浦部新田があり、手賀沼を干拓したものだと思われる。

村域東部には松山下公園という大規模公園施設がある。また、村内にある鳥見神社では十二座神楽が行われており、県の無形文化財に指定されている。

## 2) 実見した際の概要

集落内は複雑な地形になっており、常緑樹が発達した鬱蒼とした細く入り組んだ道であり、台地の斜面を縫うように通っていた。台地の上に鳥見神社があり、台地の裾の中腹部分には観音寺がありその横には墓地があった。観音寺は集落を見下ろすような形で立地していた。また、台地の入り組んでいるところにできたわずかな谷の低地部分に密集して集落が立地しており、さらにその北部には大きな水田が広がっていた。迅速測図と比較すると当時は現在より戸数が少なく、谷地の宅地は近年になってから密集していったものと考えられる。そして台地の上には畑地があったものの、ごく小規模なものであり、常緑樹が生い茂っていた。また、台集落内には2カ所井戸のようなものがあり、片方が「月影の井」という市野指定史跡に指定されていた。そして鳥見神社は管理がしっかりなされている様子をうかがうことができ神楽殿があった。さらにその正面はひな壇になっており、そこで今も県の無形文化財に指定されている神楽が行われている様子をうかがうことができた。社務所のような建物が参道を横切るように建てられていたのが気になった。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

台地上に畑地と山林と神社、中腹に寺と墓、低地部分に宅地が立地しており、地形を活用した集落の立地携帯となっている。また、台地の寺社や畑などがある場所は中位段丘、集落のある場所とその北部の水田は沖積低地に分類される。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図と1949年の空撮を比較すると、台地の谷部分の宅地の密度が上がっている確認できる。また、集落の北部は迅速測図では手賀沼であることがわかる。そのため、明治初期から1949年までの間に大規模な干拓が行われたと推察される。手賀沼は江戸時代から干拓事業が行われていたが、度重なる水害により中止となり第二



図 集落内にあった井戸 撮影：梶尾智美

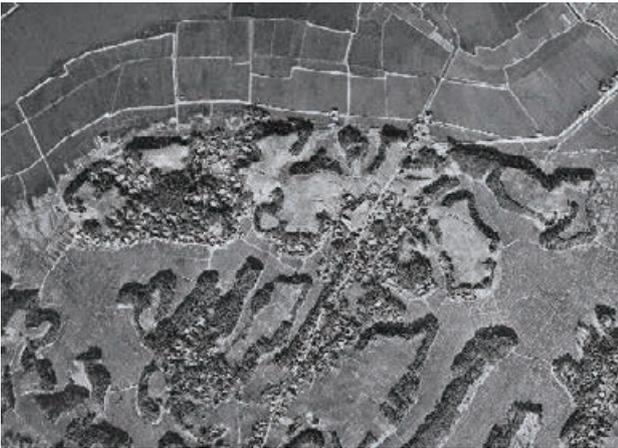


図 航空写真（1949年）国土変遷アーカイブスより



図 航空写真（1984年）国土変遷アーカイブスより

次世界大戦後の食料生産政策をうけて 1945 年に本格的な干拓が行われた。このように明治初期から戦後にかけては生産地に変化はあるものの、1945 年と 1984 年の空撮を比較しても集落の立地や生産地の形には大きな変化は見られない。しかし村域東端の松山下公園の部分を作成している途中であることを見ることができる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

#### ・2-1 集落立地・形態の妥当性

妥当である。

#### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

妥当である。手賀沼や周囲の河川を使っての水運や街道の歴史を踏まえた上で検討が必要だと考えられる。

#### ・2-3 生産立地の妥当性

妥当である。手賀沼の干拓による生産地の変容が生産立地の妥当性にどのように影響しているのか検討していく必要があると考えられる。

#### ・2-4 その後の変容の妥当性

妥当である。集落の密度や手賀沼の干拓等、公園の造成などの変容があったもののそれにうまく対応しており、妥当性は高いと考えられる。

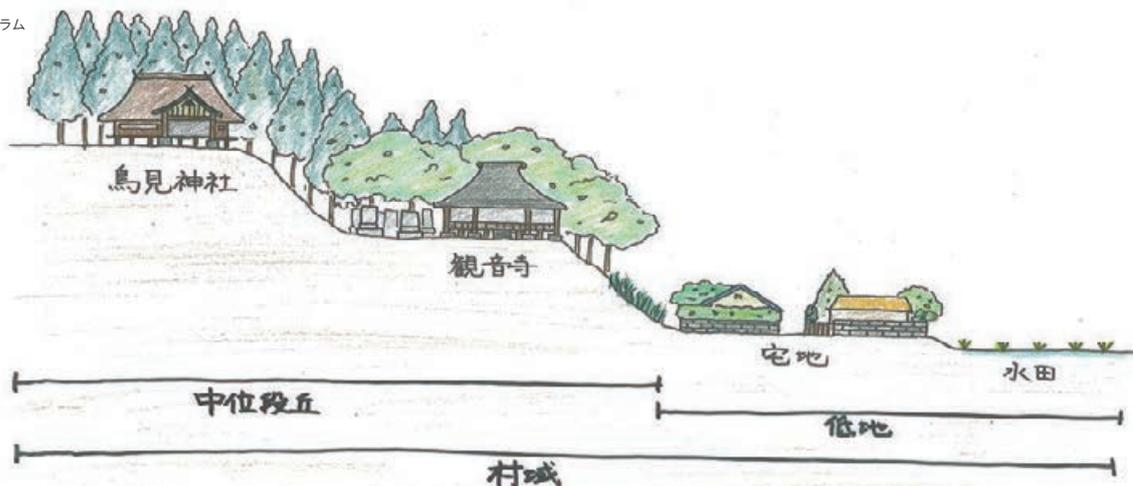
### 参考文献

四街道市ホームページ 市政情報 主な施策・計画・取り組み 土地区画整理 物井特定土地区画整理事業

<http://www.city.yotsukaido.chiba.jp/shisei/torikumi/kukaku/ytoshiseibi-monoi.html>

千葉県ホームページ 土地改良の歴史

断面ダイアグラム



### 03 相馬郷布佐郷／我孫子市布佐

担当：桃井佳奈子



図 村域図



図 白地図 筆者加筆

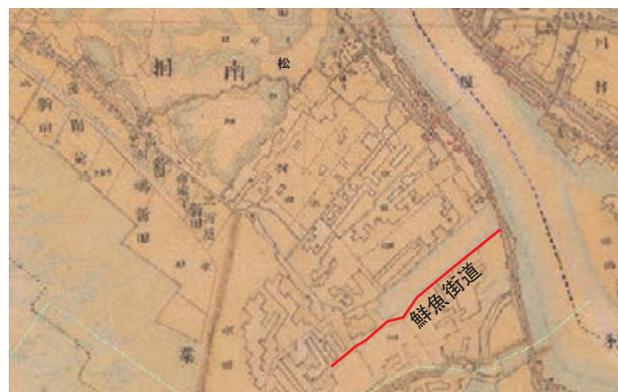


図 布佐迅速測図



図 生垣のある民家 撮影=桃井佳奈子

#### 1) 村域の分析

利根川沿いに立地する集落である。利根川と手賀沼に挟まれた場所に位置しており、利根川の流れによって形成された自然堤防上に古くからの集落が確認できた。かつては漁村であったといわれている。低湿地で地盤の緩い地域でもあるため、東日本大震災では液状化現象の被害も受けた地域である。

現在は、自然堤防上にある集落が拡大して、低地部にあった水田が宅地開発されている。古くからの集落が立地する地域は台地、自然堤防、低地という要素で構成されており、それぞれの土地利用は墓、宅地、水田という用途で成り立っている。(左側の白地図参照)

#### 2) 実見した際の概要

南側の低地から北側の台地へと歩くと国道356号線<sup>1</sup>沿いの利根川側に延命寺という寺院があり、さらに奥には内陸側に八坂神社という神社がある。集落は延命寺のある場所から内陸側の道に入ったところにある。

生垣があるような民家は比較的少なく、古い民家は新興住宅地の中に点在している。集落の最奥には勝蔵院という寺院があり、さらにその寺院の後背の台地上に墓地がある。墓地のすぐ近くに中学校、小学校が建設されており、迅速測図で確認すると、かつては松畑として用いられていたことが分かる。

小学校の西側には新明神社、御嶽神社、竹内神社<sup>2</sup>、稲荷神社がまとまって位置している。四つの神社のなかでも竹内神社が最も規模が大きい。なお、集落の最奥にある勝蔵院は竹内神社の別当寺とされている。

#### 3) 地形(地質)と街道・集落の関係

自然堤防上にある集落である。集落の後背には下総台地が広がり、集落の東側には成田街道が隣接している。

江戸時代には、集落の後背の台地上に、御林があったといわれている。集落からは少し離れているが、成田街道のほかにも鮮魚(なま)街道という街道が存在した。銚子などで水揚げされた鮮魚が布佐の河岸に運ばれ、布佐から内陸を通して松戸まで運ぶ道として、利用されていた。位置は左図の迅速測図の赤線のあたり。現在でも、道あとが残っている。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図、1947年空撮写真を比較して見ると、利根川沿いの自然堤防上に宅地が増加したこと、鉄道が開通したことにより駅から利根川にむかう道が作られ、建築物が建っていることが分かる。台地上にある緑地のボリュームはあまり変化していない。

1975年空撮写真を見ると、宅地化が大規模に進んでいること、1947年空撮写真で確認できる沼地が1975年になると確認できず、跡地には住宅が建てられていることが分かる。この沼地は、明治時代に利根川の堤が切れて形成されたものである。1952年から、河川改修工事に伴う浚渫により埋め立てが行われ、1955年の区画整理事業により宅地化された。この場所は、東日本大震災の際に液状化被害が特に大きかった場所でもある。そのほかにも、1975年の空撮写真から台地上では一部の緑地が削られ、新興住宅地を開発するために区画整理が進められていることが分かる。(後の布佐平和台地区)

<sup>1</sup> 利根川の流れに沿って带状に位置する自然堤防上には銚子・成田・我孫子をつなぐ国道356号線と、我孫子市北新田～茨城県北相馬郡をつなぐ県道170号我孫子市利根線が通っている。



図 布佐1947年



図 布佐 1975年

5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

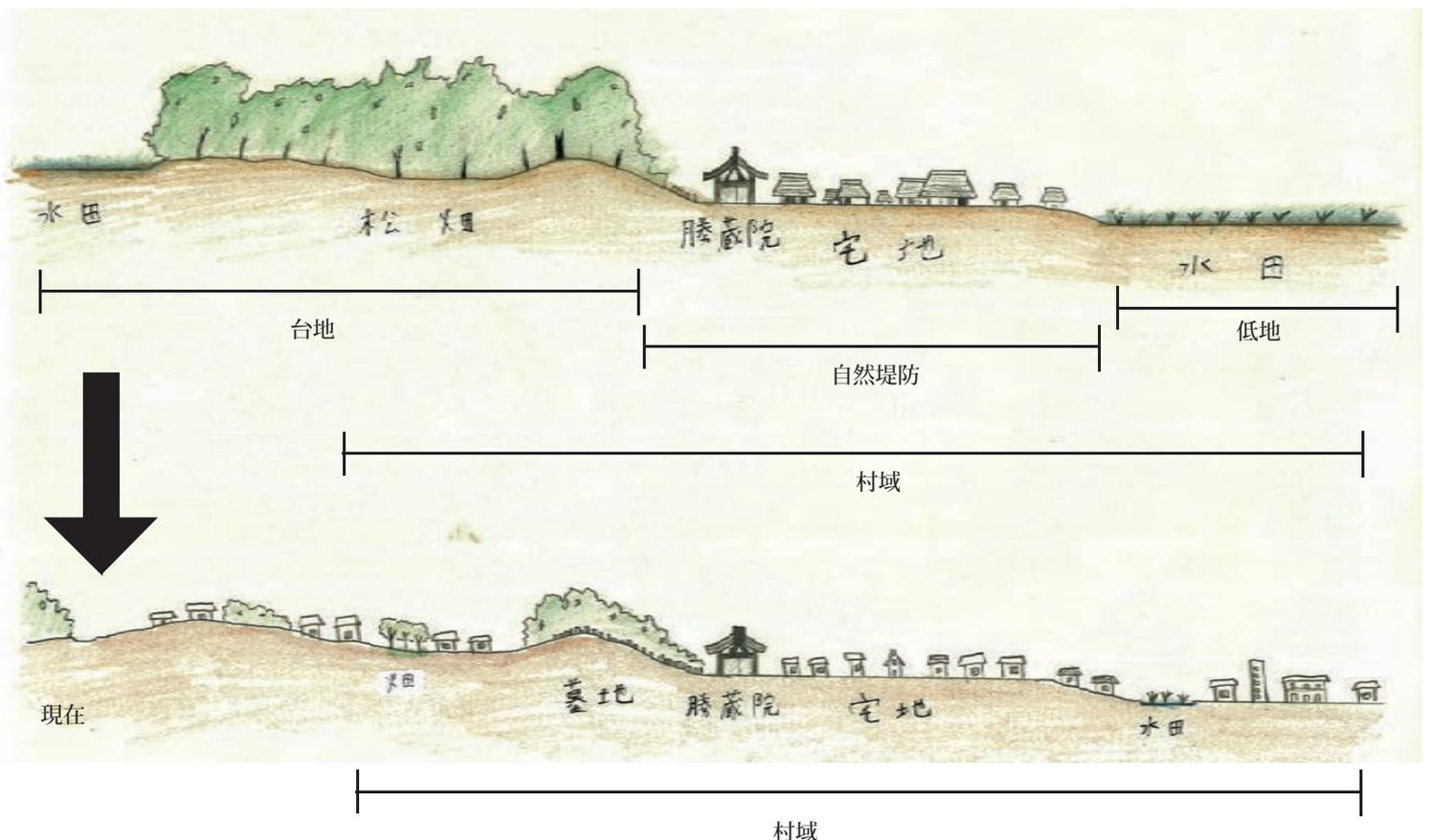
6) 妥当性の検討

- ・2-1 集落立地・形態の妥当性  
古い集落のある立地は妥当であると考えられる。
- ・2-2 交通手段・経路の妥当性  
利根川沿いに集落が形成されていることから舟運が栄えていたと考えられる。
- ・2-3 生産立地の妥当性  
舟運の栄えていた頃は物流の拠点、宿場などにもなっていたと考えられるが、現在の集落の生産地である水田は狭く、その土地も宅地化されつつある。要検討。
- ・2-4 その後の変容の妥当性  
江戸時代に利根川東遷事業が行われたことで物流が盛んになり、その後鉄道に切り替わって、現在は宅地開発地として利用されている。集落を構成する環境は大きく変化していると考えられる。

参考文献

我孫子市史編さん委員会編『我孫子市史 民族・文化財篇』我孫子市教育委員会、1990年  
赤松宗旦著、阿部正路・浅野通有訳『利根川図志』崙書房、1978年

2 竹内神社は創始931-938といわれている。『相馬霊場案内』には「武内神社宮昨と称する処に鎮座してある、祭神天迦具土命にして、文禄2年の創建にかりしものであといふ、毎年例祭9月14、5、6日の3日間を以て、之を行ひ、郷社なるのを故を以て、県より神饌幣帛料の献進がある」と記されている。現在でも毎年九月に祭礼がおこなわれており、竹内神社の氏子である5町内が神輿を担ぎながら町内を周り、五穀豊穰を祈願する。大人、子どもそれぞれの神輿や山車が町内を練り歩き盛大な祭りである。



## 04 印旛郡言美郷 / 印西市平岡

担当：高橋大樹



図 村域および村域に関わる水系図 googleMap より



図 明治初期の迅速測図

## 1) 村域の分析

印旛郡言美郷 / 印西市平岡は、印西市の最北部に位置し、集落の北部を利根川が流れ、それと並行するように国道 456 号線（利根川水郷ライン）が通っている。村域北部の低地面に大規模な水田が存在している。また、集落そのものは村域中央部～下部に位置する下総台地が形成されている。またその境界である台地と低地と際の部分に JR 成田線が通っている。しかしながら、平岡地区には駅はなく、隣の集落である小林・木下には駅がある。どちらの駅ともに平岡地区から約 1.5km 程度離れている。寺社に関しては集落内に一つずつあり、集落中央部にある東大寺と集落の外縁部にある鳥見神社が立地している。また、村域南部には平岡自然公園という公園がある。その中には印西斎場・印西霊園が併設されており、集落の入合地を斎場・墓地に転用した様子が伺える。

## 2) 実見した際の概要

なめらかな斜面に集落が形成されており、集落の中心の道を通ると台地の斜面を登り切った場所に東大寺があり、さらに進むと鳥見神社もある。鳥見神社は集落の外縁部に立地しており、かつての集落と集落の境界の一つになっていた可能性がある。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

集落立地は台地下位面から中位面にかけて小さな谷に沿って、地形コンシャスに住居の配置がなされている。低地には大規模な水田がある。隣の地区である木下・小林ではこの低地部の大規模な水田の一部が新興住宅地として活用しているのに対して平岡地区では開発は行わず、健全に農業が行われていた。また、村の北部を通る国道 356 号線はかつての銚子街道であったと言われている。銚子街道とは木下河岸から安食・滑川・佐原・小見川を通して銚子へと至る道とするのが一般的である。利根川は銚子で水揚げされる海産物や東北諸国から運ばれる物資を江戸まで輸送する大動脈として機能しており、交通手段は水運が盛んであり河岸を持つ港町が多く存在していたため、その町と町をつなぐ機能を銚子街道は担っていたと思われる。銚子街道はその後、江戸時代中期になると庶民の寺社詣でが手頃なレジャーとして流行し、利根川沿いは東国三社や成田山詣で・坂東三十三観音巡りなどの観光ルート・拠点としても認知されていくようになる。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

集落及び低地部の大規模な水田に関して編年的変化は全く見られず、冷凍保存的集落の一つであると言える。



図 集落の端に位置する鳥見神社 撮影：梶尾智美



図 集落中央部にある東大寺 撮影：高橋大樹



図 台地の端の水田 撮影：庄子幸佑

しかし、村域の南部端には印西斎場・印西霊園が平成5年にできておりこの点だけは変化があったと思われる。一般的に斎場や霊園は迷惑施設として捉えられることが多く、また霊園とは別に大規模なグラウンドやキャンプ場なども併設されており、複合的な施設として利用されている。集落の貴重な収入源になったと考えられる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

#### ・2-1 集落地・形態の妥当性

台地をうまく活用している集落であり、妥当であると言える。

#### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

銚子街道の存在からも古くから交通や自分たちの生産物の販売ルート等との関係性も高いと言える。

#### ・2-3 生産立地の妥当性

台地を貫く小さい谷戸を利用した水田から低地部に広がる水田までかなり多くの農業面積があることなどから妥当であると言える。

#### ・2-4 その後の変容の妥当性

集落のその後の変容はあまり見られなかったが、村域の一部入会地に斎場等の施設が建てられている。

### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年  
 銚子街道歩行略図  
 HP(<http://www.geocities.jp/ect28/chousi/chousikaidou.html>) 閲覧  
 20121217)





図 印旛郡船穂郷の比定範囲 作成：大村



図 印西市松崎の構成 作成：大村



図 集落内部に広くとられた水田と畑 撮影：小林千尋

### 1) 村域の分析

印旛郡船穂郷は、印旛沼西岸で神崎川下流左岸に位置する。その比定地は現在の印西市船尾、結縁寺、松崎から印旛村岩戸、師戸にかけてあたりとされている。郷域の北部には北総線が走っており、南は印旛沼の新川に接している。現在郷域の多くがゴルフ場となっている。また、西部には千葉ニュータウンがあるがこれとの関係性は特に見られなかった。

印西市松崎は、地形的に盛り上がった形態をとっており、その際から川に向かってを水田として利用している。

### 2) 実見した際の概要

郷域のうち、木々に囲まれ小高くなった台地に集落が点在していた。この台地は複雑な地形をしており、基本的には台地であるのだが、その所々に谷戸が入り込んでいる。北部にある東から入り込んだ谷戸の北部には墓地があり、この谷戸に沿って竹林が確認できた。

その台地上の集落の内部にも田畑が多く見られ、中には花畑が多く見られた。松崎の村域北東部にある松崎郷の産土様として祀られている火皇子神社（ひのおうじじんじゃ）の周辺では特に多くの花畑が確認できた。この火皇子神社は鳥居から細い参道が30mほど続き、その先に本殿がある。この参道沿いには講の石碑が並んでおり、本殿は最新で平成9年に改築が行われたことを示す石碑も建てられていた。他の千葉で多く見られた神社と同じく、新しい拝殿の裏に本殿と思われる建物が存在している。

住居は比較的大きな農家と思われるものが目立った。どれも敷地が大きく取られ、複数の建物を持っている様子であったが、あまり古い民家は見受けられなかった。

他の典型的農村集落と同じく、周囲に水田を持ち、その内に住居が散在する。しかし住宅の合い間にも広い畑を持つことが特徴的であった。

### 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

複雑な地形からか、幅の広い道はあまりない。しかし、唯一県道4号から県道190号を繋ぐ道が村域の中心部北よりを通っている。この道は幅も広く交通上便利だと思われるが、1970年の地図には見られないことから新しい道である。この道の開通によりいくつかの民家は移動したのではないかと考えられる。

家々は点在している様子であったが、比較的地形の安定した場所を選んで建てられている印象を受けた。実際に住宅地図で見られる等高線の際に民家が多い。

また、台地は低位段丘であり、それを囲むように中段段



図 火皇子神社の本殿 撮影：西吉永一



図 火皇子神社の参道に並ぶ講の石碑 撮影：大高隆



図 集落内部に見られる花畑 撮影：大村麻衣子

丘がある。水田として利用されている場所は堆積岩類であり、印旛沼の影響と思われる。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1947年と1970年の航空写真では、印旛沼の新川が整備されたこと以外に大きな変化は発見できない。しかし、1970年と現在の航空写真を比較すると、前述のように道が開通していることが大きな変化であると言える。この道の通った場所は、東西の谷戸を繋ぐ形を取っているようで、その真ん中には1970年の航空写真では複数の民家が確認出来る。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 妥当性の検討

- ・2-1 集落立地・形態の妥当性  
地形の安定した場所に住宅が多く見られ、妥当。
- ・2-2 交通手段・経路の妥当性  
迅速図で見られる道を今も残し、妥当。
- ・2-3 生産立地の妥当性  
水田や畑を多く持ち得る場所であり、妥当。
- ・2-4 その後の変容の妥当性  
大きな変化は確認されず、妥当。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年



図 印旛郡長隈郷 / 佐倉市長熊 断面ダイアグラム (上：現在 / 下：古代)



図 印旛郡村上郷の比定域 googleMap より



図 七百餘所神社 撮影：小林千尋



図 長屋門のある住宅 撮影：大村麻衣子

### 1) 村域の分析

印旛郡村神郷／八千代市村上は、印旛放水路である新川の砂岩丘陵上にあり、印旛沼より西側である八千代市村上付近に比定される。このあたり、新川の東側の台地では縄文・弥生時代の遺跡も発見され、古代からの人間の生活が確認されている場所である。村域は広いが、中央部がくびれた形をしている。現在この村域を南北に横断する形で県道 16 号が通っている。この 16 号の東には巨大な村上団地・上高野工業団地があり、かつての姿は残されていない。

村域のくびれの部分には東葉高速線村上駅があり、この路線と県道 16 号が交通の 2 軸となっていると考えられる。

### 2) 実見した際の概要

県道 16 号に沿うように西側にある蛇行した道沿いには多くの梨園が見られ、梨がこの地域の大きな生産の 1 つであることがわかる。実見した集落はこの道からは雑木林で見えないようになっており、外に対して閉じた印象を受けた。この集落の入口と言える場所には七百餘所神社(しちひゃくよしょじんじゃ)がある。これはブロック塀で囲われ、そのあたりの集落の中心を向いて建てられていた。

ここから新川へと至る道沿いには大きな民家が密集しており、中には長屋門のある住居もあり伝統的な民家が多く見られた。複雑な地形で、崖となっている場所はコンクリートで覆われている場所もあり、その上には最も大きな住宅が見られた。低地には比較的新しい住居も確認することができた。

新川沿いの水田上には対岸を繋ぐ送電線が走っている。この水田は一部耕作放棄されていた。新川には水管橋がかけられ、新川沿いには整備された歩行者道路もあり、今もなお工事を行なっている最中であつたが全体として良い環境であると言える。

対して、新川の対岸は開発されており、大きな集合住宅が目立った。

### 3) 地形(地質)と街道・集落の関係

村域のほぼすべてが中位段丘で構成され、新川沿いのみが堆積岩類で構成されている。前述のように現在交通の 2 軸が構成されている。しかし集落の内部は蛇行した古い道が存続しており、対照的である。また、村域を横断する成田街道(佐倉街道)は新宿まで伸びており、これも交通の手段としてかつては頻りに用いられたと考えられる。



図 送電線のある水田 撮影：大村麻衣子

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1946年の航空写真と1975年の航空写真を比較すると、新川が整備されて拡大し、更に、県道16号線が開通し、上高野工業団地が完成され、村上団地の開発が開始している。この30年程の間に大きな変化が起こったと考えられる。この県道16号に沿って住居が増えていることも確認できた。対して、1946年の航空写真と迅速図にはあまり差が見られた。

現在の航空写真と1975年当時を比較すると、飛躍的に建築が増加していることがわかる。今回実見した集落ではあまり航空写真上の変化はないが、それ以外はかなりの開発が行なわれたようである。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 妥当性の検討

- ・2-1 集落地・形態の妥当性  
高台に集落があることから、妥当。
- ・2-2 交通手段・経路の妥当性  
現在、古代ともに確保されており、妥当。
- ・2-3 生産立地の妥当性  
新川沿いに水田を広くもち、妥当。
- ・2-4 その後の変容の妥当性  
旧激な開発により、妥当ではない。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年



図 新川にかかる水管橋の工事の様子 撮影：小林千尋

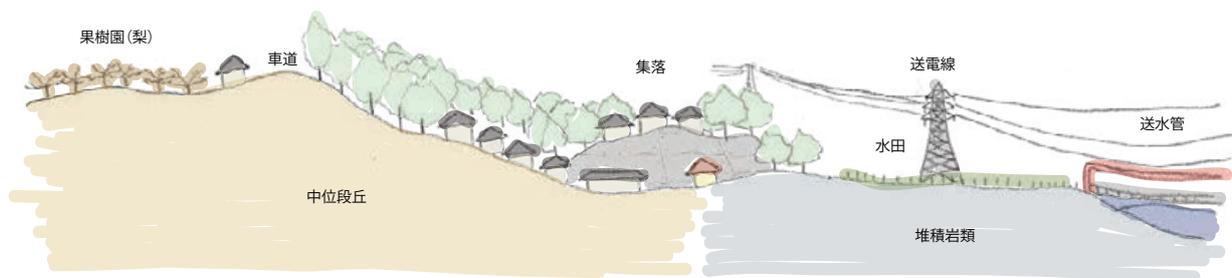


図 印旛郡長隈郷 / 佐倉市長熊 断面ダイアグラム (上：現在 / 下：古代)

## 07 千葉郡物部郷／四街道市物井

担当：小林千尋



図 村域および村域に関わる水系図 googleMap より



図 集落内から畑地を眺める 撮影：大村麻衣子



図 集落内の家屋と生け垣 撮影：大村麻衣子



図 集落内の家屋と台地下へ下りる道 撮影：大村麻衣子

## 1) 村域の分析

千葉郡物部郷／四街道市物井は、四街道市の北東部に位置する。村域の南部を沿うように高速道路（東関東自動車道）が通っている。また村域東部には総武本線が南北に通っており、村域西部には国道136号線が南北に通っており、現状では交通アクセスが良い状態となっている。村域は水田、鉄道、家屋、新興住宅地、畑地で構成されている。旧来の家屋は台地の斜面上、もしくは台地上に立地している。村域西部に造成された新興住宅地群は約95.7ヘクタールの敷地に10000人を計画人口とした物井特定土地区画整理事業によるもので、事業認可を平成4年9月、また事業施行期間を平成31年3月までとしている。上記の区画整理事業の範囲は村域の約七割ほどであり、区画整理事業によって土地利用は大きく変容しているが、迅速図に記されている明治期から存在する集落はその範囲には含まれていない。

## 2) 実見した際の概要

台地斜面上に立地する集落である。新興住宅地（もねの里）は道路も広く区画も整備されているが、旧集落は基本的に直線の道はなく、複雑で道路幅も狭い。新興住宅地から実見ていったが、旧集落へ突然切り替わるような印象を受けた。旧集落は各家が大きく、住居へのアプローチも各家々でとられている他、生け垣もしっかりしている。また小規模の畑が複数見られた。集落の中央には天照皇神社、円福寺がある。台地を下ると水田が広がり、物井駅周辺は新しいアパートが見られた。物井駅周辺は現在も開発が進んでいるが、旧集落への影響はみられなかった。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

集落は台地の斜面上および台地上に密集して立地している。水田は集落の南東部、台地の下に広がっている。集落内の道路は基本的に舗装されているが、北東部は舗装されていない。また道路は台地の地形に沿うような曲線の道で構成されている。

集落を東西に通る道路が集落外への交通の最も主要な経路と考えられ、1947年の航空撮影ではそれ以外の集落外への道路は見られない。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図を見ると、旧集落の立地は変化しておらず、水田、畑の立地も基本的に変化していない。新興住宅地の区画整理された部分は主に「松」「茶」という土地利用が記述されており、後背林がほぼ新興住宅地に取って代わったと考えられる。1947年、1979年の航空写真



図 集落台地下から総武線物井駅高架を望む 撮影：大村麻衣子



図 航空写真（1947年）国土変遷アーカイブスより



図 航空写真（1979年）国土変遷アーカイブスより

の比較では、1979年では集落南部に現行の高速道路が確認できるが大きな変化は見られない。村域の土地利用が大きく変化したのは平成4年からの土地区画整理によると考えられる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

#### ・2-1 集落立地・形態の妥当性

台地斜面上、台地上に立地し生産地との関係も明確であり、妥当。

#### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

集落内に外部と通じる道路を有している。また現在は鉄道が集落近くを通っており、妥当。

#### ・2-3 生産立地の妥当性

低地及び谷戸に水田、台地上には畑を形成している。妥当。

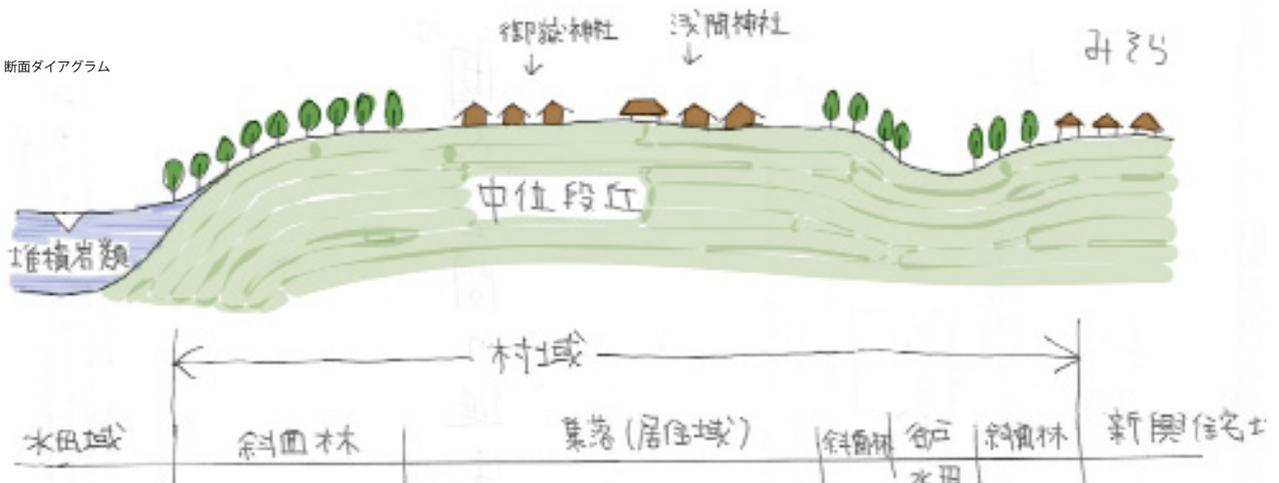
#### ・2-4 その後の変容の妥当性

古くから残る自立的な集落部分に関しては、おおきな変容は見られない。村域の7割近くが区画整理事業によって宅地化しているが、旧集落に変化は見られず、妥当である。後背林の部分の土地を新興住宅地に転売した可能性が考えられる。

### 参考文献

四街道市ホームページ 市政情報 主な施策・計画・取り組み 土地区画整理 物井特定土地区画整理事業  
<http://www.city.yotsukaido.chiba.jp/shisei/torikumi/kukaku/ytoshiseibi-monoi.html>

断面ダイアグラム



## 8 千葉県山梨郷／四街道市山梨

担当：小林千尋



図 村域および村域に関わる水系図 googleMap より



図 航空写真（1946年）国土変遷アーカイブスより



図 航空写真（1984年）国土変遷アーカイブスより

## 1) 村域の分析

千葉県山梨郷／四街道市山梨は、四街道市の中央東部に位置し、北東部から南西部に広がる村域をとっている。村域南部の境界は台地の際であり、北、東、西部の村域の境界は分岐した鹿島川である。村域北部に広大な水田を有している。水田が北部から谷戸状に形成されているが、集落そのものは台地状に立地している。航空写真上では、村域の約4割が水田、4割が斜面林、2割が宅地・畑である。また村域南部には区画整理された住宅地（みそら）が見られるが、当村域には含まれておらず、関係性も低いものと考えられる。

## 2) 実見した際の概要

台地上に立地した集落といえる。集落は基本的に台地上を北東部から南西部に通る道沿いに面して立地している。住宅は古くて大きなものから、比較的新しいアパートまでみられた。細かい畑地がみられ、生け垣の前面に葱を育てている住宅もみられた。村域内に神社が6つ存在する。東から三峰神社、浅間神社、香取神社、御嶽神社、妙見神社、豊受神社であり、このうち三峰神社、浅間神社、御嶽神社、豊受神社は一直線上に並んでいる。また工務店や材木屋がみられ、4tトラックにも2度遭遇した。集落から北部の鹿島川へ降りる道は複数見られたが、南部の団地へ降りる道は僅かであった。住居は寄せ棟造りの大きな住居が数多く見られた。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

集落は台地上の街道に沿って立地し、街道から枝分かれする形で道および住居が形成されている。水田は低地部と谷戸部分に形成されている。他の集落へと続く道も確認できる。現状では集落は台地上にひとまとまりで立地しており、生産地との関係も明確である。迅速測図には「馬」の字が見られ、「馬渡村」という文字が村域西部にわたって確認できるため、過去に多集落との繋がり、もしくは交通の起点のひとつとなっている可能性が考えられる。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

基本的な集落立地・生産立地は迅速測図の辞点から変化はみられない。1946年と1984年の航空写真の比較による比較によると。村域北端を横切る北関東自動車道および村域南部の住宅地群（みそら地区）が造成されている。さらに現在の航空写真においてはみそら地区の住宅地の密度が増加しているが、山梨集落に大きな変化はみられない。



図 生け垣の前の植栽と葱 撮影：小林千尋



図 集落内の道と農地 撮影：小林千尋



図 三峰神社と神木 撮影：小林千尋

## 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

#### ・2-1 集落地・形態の妥当性

台地上に立地し生産地との関係も明確であり、妥当である。

#### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

迅速測図に馬渡村、馬の記述から交通手段経路に関しては更なる考察が必要である。

#### ・2-3 生産立地の妥当性

低地及び谷戸に水田、台地上には畑を形成している。妥当。

#### 2-4 その後の変容の妥当性

村域南部の台地が大々的に造成されているが、山梨集落自体の集落構造には大きな変化がみられない。

#### 参考文献

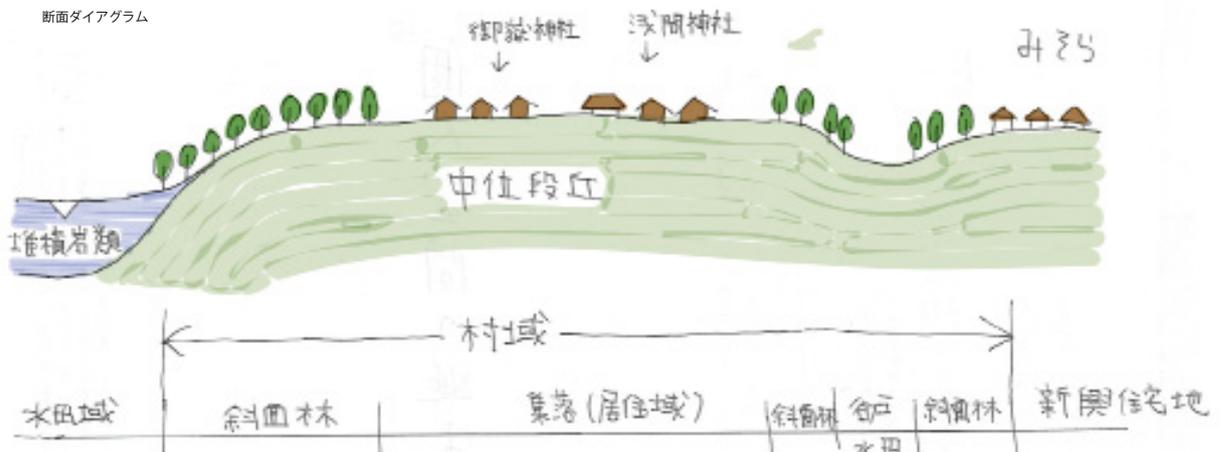




図 村域および村域に関わる水系図 googleMap より



図 航空写真（1947年） 国土変遷アーカイブスより



図 航空写真（1975年） 国土変遷アーカイブスより

### 1) 村域の分析

村域は南北に2kmほどの細長い範囲をとっているが、集落は村域北部に一方所のみであり、戸数も20戸ほどである。集落に接するように関東自動車道が村域内を東西に通っている。舌状台地の舌には台地を囲うように水田が見られるが、面積は広くない。また畑地も見られるが高速道路によって分断されている。村域中央部のは浅間神社があり、背後には森が繁っている。村域南部は砂地であり、江戸川鉄商佐倉工場および西濃運輸佐倉の物流センターが立地している。

### 2) 実見した際の概要

村域東部からアプローチした。集落は台地の斜面上に立地し、道路は基本的に勾配をもつものであった。各戸は立派なものが多く、長屋門を有する住居も二つみられた。谷戸地形を利用した部分は現在は耕作放棄地になっており、籾殻をひとまとめにしていた。斜面を上ると高速道路の上を通る橋が掛けられており、橋を超えると墓地があったが、比較的新しく、高速道路の新設に伴い墓地を移転した可能性が考えられる。台地状には畑が広がっていた。

### 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

集落は舌状台地の斜面上に谷戸状に立地しており、地形を活用した立地形態をとっている。集落が密集している箇所にはこれ以上家を建てる面積がなく、低地の水田、台地上の畑地を含め、集落の戸数と形態が地形と適合している。他集落への主要な街道は見られず、交通を基に発展したとは考えにくいだろう。

### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図では、集落の戸数はあまり変化がないものの、現在の浅間神社を含む一帯の森林が「畑」と表記されている。1947年の航空写真は迅速測図に近い姿をとっているが、1975年の航空写真においては現在の高速道路が既に通っており、景観が著しく変化している。1947年の航空写真によると高速道路が走っている部分は畑地であった。その他大きな変化は見られない。



図 集落内の民家の長屋門 撮影：小林千尋



図 集落内の墓地 土台ど地面に隙間がみられる 撮影：小林千尋



図 村域内を走る高速道路 撮影：小林千尋

## 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

## 6) 妥当性の検討

### ・2-1 集落地・形態の妥当性

台地の斜面上に立地しており、妥当といえる

### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

現在は国道 51 号線とつながっているが、1947 年には主要な交通手段経路はみられず、バイパスが通る以前は自給自足に近い形で生活を行っていたと考えられる。

### ・2-3 生産立地の妥当性

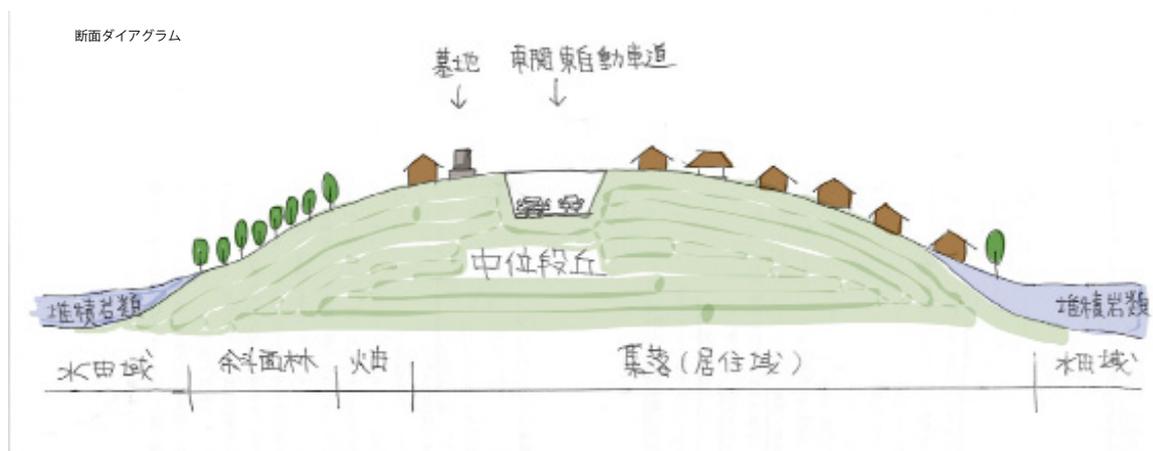
低地が水田、台地上が畑地として利用されている。20 戸ほどの集落戸数を考慮すると妥当であると考えられる。

### ・2-4 その後の変容の妥当性

高速道路に設置に関する開発が景観変容の主たる原因ではあるが、生活形態には大きく印象を与えて印象がみられた。

## 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984 年



## 10 印旛郡長隈郷／佐倉市長熊

担当：庄子幸佑



図 村域および村域に関わる水系図 googleMap より



図 低地部から集落を眺める 撮影：西吉永一



図 集落の際に位置する馬頭観音像 撮影：高橋大樹

## 1) 村域の分析

印旛郡長隈郷／佐倉市長熊は、佐倉市の中で東部に位置し、佐倉とは成田街道でつながっている。村域の中央を国道 51 号線が分断する。また JR 佐倉駅から下る総武本線と成田線が別れるところでもある。村域は水田、鉄道、家屋、水田、後背林で構成されており、家屋は台地と低地の斜面に立地している。家屋群は南斜面に立地し、背後を通る国道 51 号線とは空間的に分断されている。国道 51 号線と並行するように谷戸地形が入り込んでいる。当村域の北限には、五良神社が立地している。20 メートルほど離れた愛宕神社は印旛郡酒々井町本佐倉の町域に含まれる。村域の西側には、白銀ニュータウンがあるが、当村とは関係性が見られない。

## 2) 実見した際の概要

全面に水田が広がる谷戸集落と言える。(村域は水田 - 台地 - 谷戸 - 台地という構成)しかし、その家屋立地は急峻な傾斜地であり、折り重なるように家屋が密集している。家屋は土地の造成も行った大きなものが多い。国道 51 号線からアプローチするが、集落内の道路はあまり舗装整備がされておらず、「スピード出すな」などの立て看板で規制が行われていた。また集落の際には馬頭観音や道祖神が祀られ、集落のまとまりが強く意識されているように感じた。集落の背後を通過する国道 51 号線沿いには、工場や事務所、車屋、定食屋などがあり、ロードサイド的な風景を展開していた。国道 51 号線を超えると、谷戸が入り込みさらに北上すると斜面林に覆われた台地へとつながっていく。谷戸の水田は、昔からの水田を「上代長熊土地改良事業」<sup>1</sup>としてその台地上、村域の北限には五良神社が立地している。五良(御霊?)神社は、隣接する本佐倉町域の愛宕神社の鳥居、参道からアプローチする。愛宕神社の参道の途中で五良神社の参道が現れるが、その参道と神社の向きは 90 度ずれており、神社自体は南面、つまり集落の方を向いている。

## 3) 地形(地質)と街道・集落の関係

集落は、台地の縁から傾斜地にかけて密集して立地している。水田は集落に面する低地と谷戸につくられている。JR 総武本線及び成田線は水田の中につくられ、集落を分断するような位置ではない。国道 51 号線は台地の頂上部に位置している。集落内の道路は、地形にそっ

1 1994 年 10 月に設置された「上代、長熊土地改良事業」による『守土再生』の碑文には、この地の農地がいかにして残ってきたかが記されている。それによると、昭和 33 年にそれまで水不足に苦しんでいた当地の水田のために、長熊、上代で土地改良共同施工を設立し、井戸 2 本を掘った。しかし列島改造の波及により同 45 年ころから成田屋工務店が「宅造開発」を計画し、土地の買い上げを行なっていった。多くの水田が買収されたが、さきの土地改良共同施工を中心に買い戻し、再土地改良を行った。



図 長熊廃寺跡 撮影：大村麻衣子



図 村域の境界 撮影：庄子幸佑

た曲線の道と近年つくられた直線的な道がある。

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図を見ると、現在と同様な台地と低地の縁に集落が立地し、また台地頂上部に街道が通っている。水田の形も現在とはほぼ同様である。総武本線は、1889年に錦糸町から八街まで計画され、1897年に佐倉-成東間が開通している。(長熊町域を通る線路も含まれる)迅速測図と1947年の航空写真を比べると、鉄道が敷衍されている以外、変化が見られない。1983年の航空写真では、台地上の街道が整備され、道路となっており、その道沿いに開発が見られることや村域の南端を流れる水路が整備されていることが分かる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 妥当性の検討

- ・2-1 集落立地・形態の妥当性  
南斜面かつ台地と低地の縁に立地し、妥当。
- ・2-2 交通手段・経路の妥当性  
集落内の道路と国道を明確に分断し、妥当。
- ・2-3 生産立地の妥当性  
低地及び谷戸に水田、台地上には畑を形成している。妥当。
- ・2-4 その後の変容の妥当性  
古くから残る自立的な集落部分に関しては、おおきな変容は見られない。ニュータウンの形成された場所も含め、妥当。

#### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年

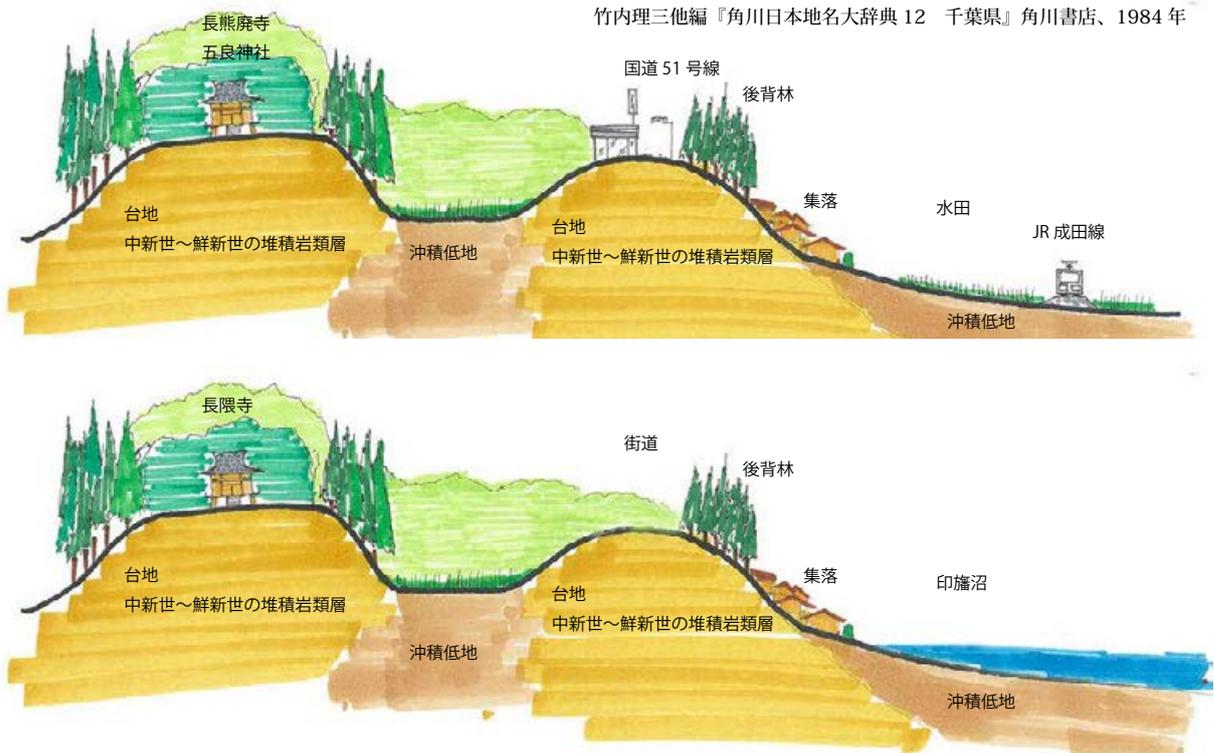


図 印旛郡長限郷 / 佐倉市長熊 断面ダイアグラム (上：現在 / 下：古代)

## 11 印旛郡印旛郷／佐倉市飯田

担当：庄子幸佑



図 村域および村域に関わる水系図 googleMap より



図 塩ビ管鳥居の神社 撮影：小林千尋



図 遠景より集落を眺める 撮影：高橋大樹

## 1) 村域の分析

京成佐倉駅の北西、佐倉市域の北部に位置する。北印旛沼と西印旛沼に挟まれた低地と台地を域とする。低地部は、水田で構成され、台地と低地の際、及び台地上に集落が立地する。村域南部の台地上にはゴルフ場がつくられている。集落は西斜面、東斜面に立地し、北斜面にはない。比定地は、ほかに飯野(西印旛沼東部南岸地域)、大佐倉(飯田の東、村域中央を京成鉄道本線が貫き、その北側に台地上の街道に沿うようにして家屋が立地)、本佐倉(谷戸集落と台地上の集落、村域を国道296号線が貫く)がある。

## 2) 実見した際の概要

広大な水田を持つ谷戸集落と大きな畑をもつ台地上の集落により構成される。集落と水田の境には、大木が一本だけ植えられており、集落の際を表現しているように見えた。低地から台地へ上がる坂道から谷戸集落を眺めると、古い民家や長屋門と同様に、建売の新しい住宅も見られる。台地上の集落も同様であった。台地上にも長屋門を確認できたことから、水田を管理している家が台地上にもあることがわかる。集落中心部にある道祖神社の鳥居が塩ビ管パイプによってつくられており、現在でも神社が、村民の生活に入り込み、更新されていることが分かる。また飯田と飯田台の境、台地の際に麻賀多神社が立地していることを確認した。

## 3) 地形(地質)と街道・集落の関係

集落は低地と水田の際及び台地上に立地。際部の集落は、迅速測図でも確認でき、古くから住んでいたことが分かる。台地に谷戸が入り込むところに密集しているのは、印旛沼が現在の形とは異なり、台地の北側直近まで押し寄せており、その水害を避けるためであろう。集落内の道は古くから変わらない。1980年初頭にできた京成佐倉駅北の宮前新興住宅地から水田を貫くように道路が作られている。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1 集落中心部の道祖神社の鳥居のほかに、集落からもう少し南下したところにある鷲神社の鳥居も塩ビ管パイプによってつくられていることが、Google Earthにアップされている写真によって分かる。こちらは写真を見る限りでは、赤の塩ビ管を使い、縄紐が結ばれている。

2 『延喜式』神名帳に「印旛郡一座 麻賀多神社」とある。旧郷社。印旛沼東岸の台地上に鎮座し、本社と奥宮の二社からなり、本社は成田市台方字稷山に、奥宮は谷津を一つ隔てた北方約八百メートルの成田市舟形手黒にある。日本武尊が東征のためにこの地を訪れ、五穀豊穡の地にした。その後、印波国の初代国造伊都許利命が奥宮を創建した。「麻賀多」は一般に「真濁」の意とされることから推して、当社の神は農・漁両面に関連した水神の性格を持つものと考えられる。旧印旛郡内には麻賀多神社を社名とする神社が十八社あり、これを称して「麻賀多十八社」と呼んでいる。十八社はすべて印旛沼の東岸か南側に位置し、沼を渡った北ないしは西側には一社もない。

『日本の神々 神社と聖地 11 関東』pp.312-316

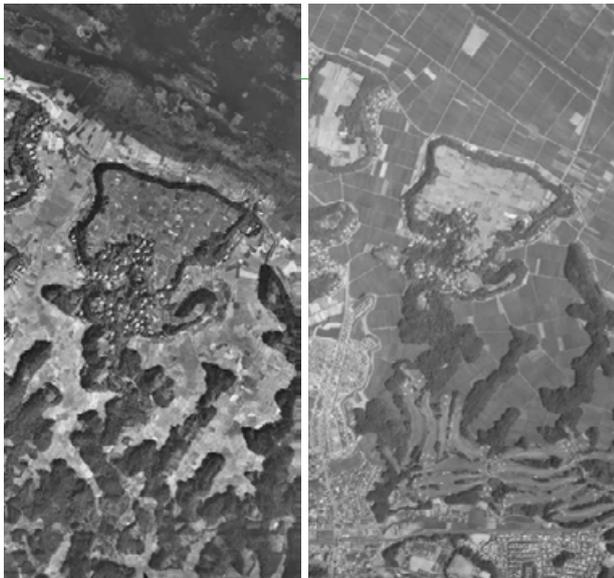


図 左：1948年／右：1983年／下：1989年 航空写真画像情報所在検索・案内システムより参照

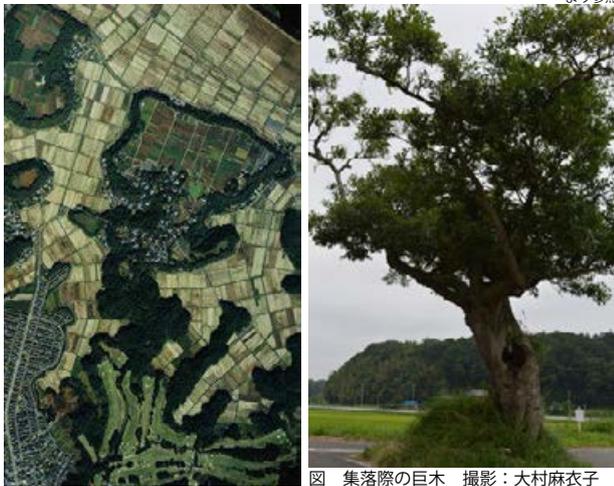


図 集落際の巨木 撮影：大村麻衣子

迅速測図を確認すると、現在と集落立地は大きく変わらない。しかし、集落北の水田は見られず、印旛沼が広がっている。農業だけでなく、沼での漁業も行われていることが考えられる。1947年の航空写真では、集落の北側はまだ干拓事業が行われておらず、印旛沼が広がっている状況であった。集落立地はほぼ変わらない。その後、1979年の航空写真を確認すると、中央排水路<sup>3</sup>が整備されており、干拓事業も行われている。村城南限のゴルフ場<sup>4</sup>もこのころの写真には確認出来る。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

#### ・2-1 集落地・形態の妥当性

印旛沼の水害を避けるように、低地と台地の際、台地上に立地しており、妥当。

#### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

迅速測図で確認できる陸地交通は現代までほとんど変化がない。海上交通は消滅。妥当。

#### ・2-3 生産立地の妥当性

谷戸の低地を水田にしている。また印旛沼だった場所を干拓によって水田としている。台地上には畑。妥当。

#### ・2-4 その後の変容の妥当性

集落内にはおおきな変容は見られない。印旛沼の干拓によって生業や交通に変化があったが、集落の持続性を犯すようなものではなかったと考えられる。よって妥当。

### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年  
 谷川健一編『日本の神々 神社と聖地 11 関東』白水社、2000年  
 佐倉カントリークラブ HP(<http://www.sakuracountry.co.jp/club/club.html>、20120628 閲覧)

3 航空写真の変遷から、1966～1969年の間にかけて完成されている。その後、順次干拓事業が行われている。

4 運営している HP によると、創業は昭和 51 年 11 月である。(平成 23 年 6 月 28 日現在)

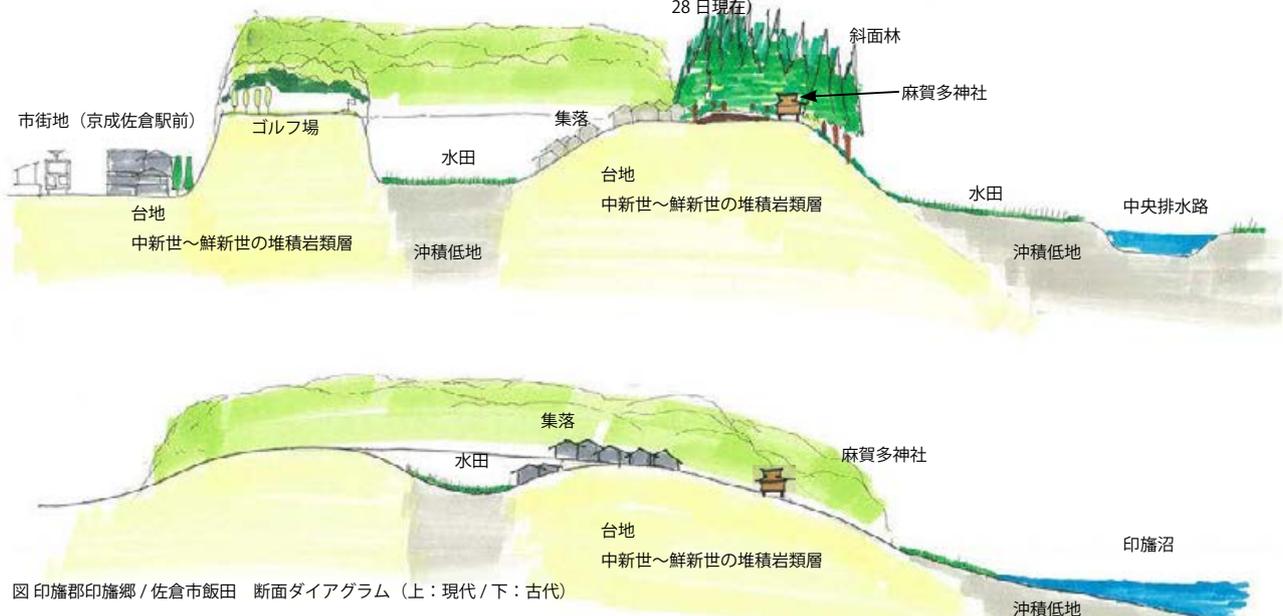


図 印旛郡印旛郷／佐倉市飯田 断面ダイアグラム (上：現代／下：古代)

## 12 印旛郡山方郷／成田市東和田

担当：庄子幸佑



図 村域および村域に関わる水系図 googleMap より



図 台地上から成田山の方を眺める 撮影：西吉永一



図 台地上に立地する長光寺 撮影：庄子幸佑

## 1) 村域の分析

村域の西側には根木名川が南流する。村域北部には国道51号線が、南部には東関東自動車道がそれぞれ南西から北東へ走る。また村域の中央を京成電鉄本線が貫く。集落は第四期洪積期に形成された標高25～40mの北総台地上から低地にかけて立地する。村域は根木名川に沿うように南北に伸び、水田-集落-後背林までを含む。(現在、水田部は開発され、後背林はゴルフ場となっている) 低地部は成田空港の開発に伴い、現在はファミリーレストランや自動車販売店などが立ち並ぶロードサイド的風景を見せている。また隣接する成田市寺台・成田には成田山新勝寺があり、古くから寺内町として栄える。

## 2) 実見した際の概要

集落が立地する台地の頂上には、長光寺という寺社がある。参道がないことや境界が既製品のフェンスで設けられていることなどから、もともとこの場所に立地していたのではなく、移転されたことが考えられる。1974年の航空写真ではその存在を確認出来るが、それ以前では不明である。台地頂上から低地にかけて、急峻な傾斜地に宅地が重なるように立地していた。狭い集落地の中でそれぞれ生垣や高低差などで境界を明瞭にしているようであった。低地部に出る際のところには、簡単な鳥居と祠の神社が宅地よりも高く盛り土された場所に立地していた。集落の際を表現したものだと考えられる。

## 3) 地形(地質)と街道・集落の関係

村域は後期更新世(約15万年前～7万年前)に形成された中位段丘と後期更新世～完新世(約1万8000年前～現在)に形成された堆積岩類の低地部に大別される。迅速側図において確認できる集落は台地から低地にかけて、急峻な傾斜地に密集している。新興住宅街は、低地部に展開されている。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図を見ると、台地から低地へかけての傾斜地に立地する集落は存在する。低地部は、すべて水田として利用されている。1947年の航空写真も同様に、集落立地や低地部の土地利用は変わっていない。成田空港が開港した翌年の1974年の航空写真を見ると、低地の水田の中に国道51号線が敷かれ、京成電鉄が開通している。隣接する成田市寺台において低地部が開発されはじめ

1 1978年5月20日開港、1962年11月に新空港建設の方針が閣議決定され、その後1966年当時の首相佐藤栄作が成田市三里塚を建設地とすることを提案。同年、千葉県成田市三里塚地区の宮内庁下総御料牧場付近に建設地決定。  
(wikipedia 成田国際空港: <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%88%90%E7%94%B0%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E7%A9%BA%E6%B8%AF>, 20120628 参照)



図 集落際（低地部との境）の神社 撮影：高橋大樹

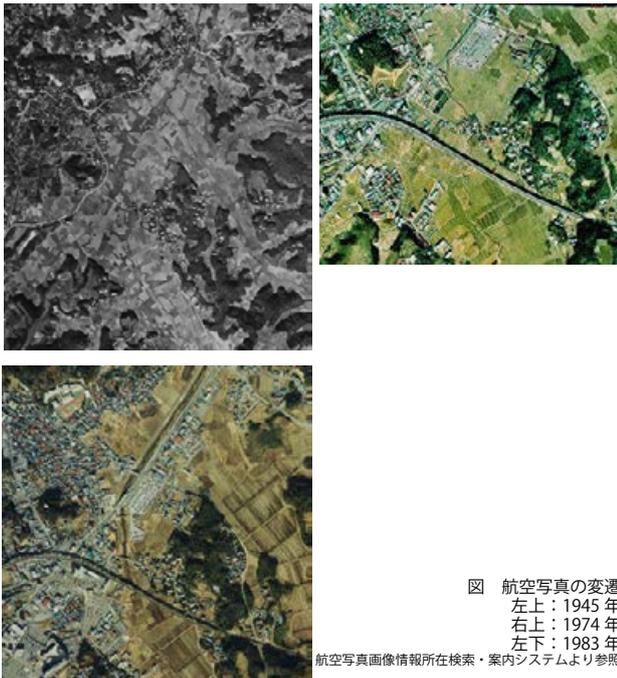


図 航空写真の変遷  
 左上：1945年  
 右上：1974年  
 左下：1983年  
 航空写真画像情報所在検索・案内システムより参照

る。その後も成田空港の開港に伴う開発が進み、水田であった低地部の開発が進行している。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

#### ・2-1 集落地・形態の妥当性

台地から低地へかけての集落地は妥当であるが、低地部に新たに開発された宅地は妥当ではない。

#### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

低地部に新たに通された道路が通されており、生産地を失っている。よって妥当ではない。

#### ・2-3 生産地の妥当性

谷戸が部分的に水田として使われていた。ただ大幅に開発されており、その部分がもたらす収入が抄郷であった地にもたらされているかを検討しなければ判断できない。

#### ・2-4 その後の変容の妥当性

迅速測図で確認できる集落は現在でも存続している。しかし、生産地を宅地や道路、ファミリーレストランなどに開発されており、その部分がもたらす収入が抄郷であった地にもたらされているかを検討しなければ判断できない。

### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年  
 山口恵一郎他編『日本図誌大系〈関東Ⅱ〉』朝倉書店、1972年

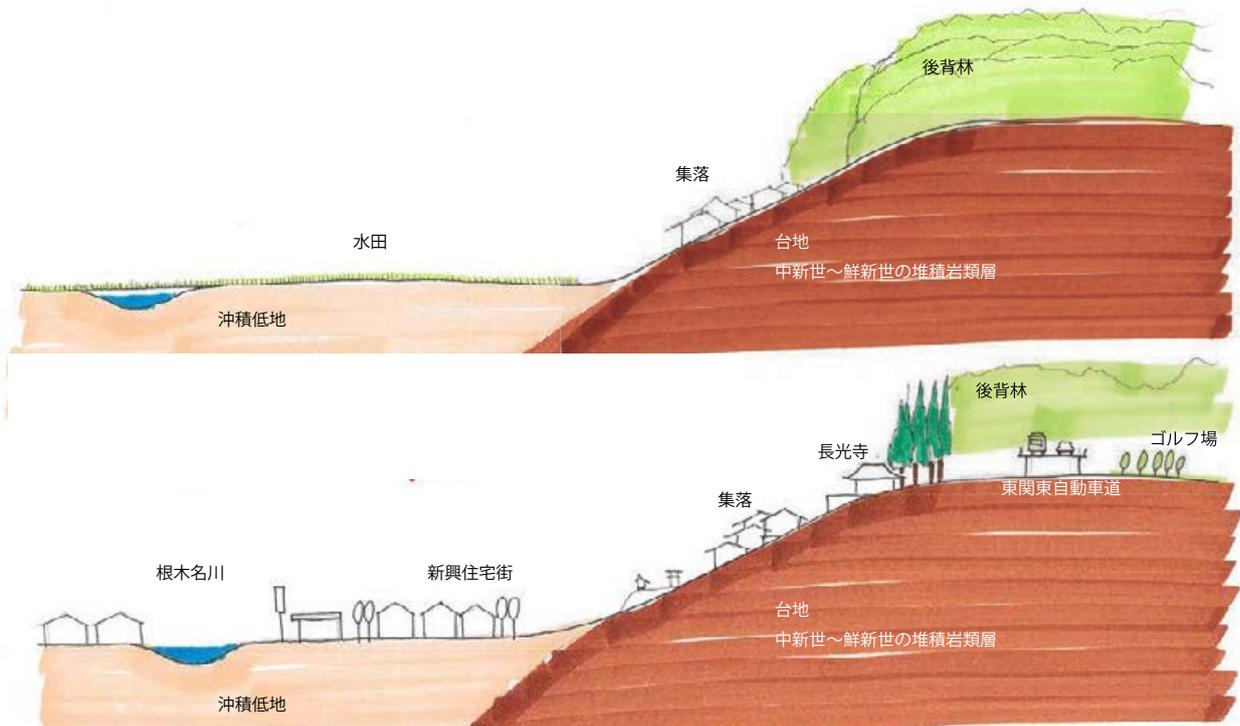


図 印旛郡山方郷 / 成田市東和田 断面ダイアグラム (上：古代 / 下：現代)

## 13 磯部郡磯部郷／成田市磯部

担当：堀井隆秀



図 村域図 googleMapより



図 地形図 筆者加筆



図 半鐘から見た集落の様子 撮影＝梶尾智美



図 台地と集落にはさまれた水田 撮影＝梶尾智美



図 天満宮前の結界 撮影＝梶尾智美

## 1) 村域の分析

磯部は主に水田と台地からなっており、その台地上ではゴルフ場が経営されている。集落は、水田と台地に挟まれた道路沿いに立地している。北部には利根川が流れ、その支流である根木名川が集落西部を流れる。

## 2) 実見した際の概要

国道161号線を北上し、集落を目指した。その道は台地の東側にあたるが、車内から台地の上のネットが見えた。ゴルフ場のネットである。しかし、目的の磯部の集落に着くと、北側の斜面に生えた木々に覆われ、ゴルフ場は見えなくなっていた。また、ゴルフ場に向かい台地を上っていくと、段々と緑が濃くなり、駐車場に着く頃には、下の集落は見えなくなっていた。台地上のゴルフ場と台地の下の集落とは生活の上では見えないようにしてあり、意図的に切り離れた作りなのではないかと思われる。

集落は、台地の北面に沿って走る道路に沿って立地しており、道路の両側に細長く連なる路村（註1）の形態をとっている。道路と住居の境界は、高さ約3Mのイヌマキの生け垣（註2）や長屋門によりつくられていた。集落内には半鐘があり、そこから集落の様子を眺めることができた。北から順に、水田／集落／台地というような構造がみてとれた。しかし、集落内を南に入っていくと、集落と台地の間にも水田が見られ、実際の構造は水田／集落／水田／台地というものであった。

調査中に出た意見として、道路の両側に住宅があること、住宅と台地の間に水田があることに違和感があるというものがあつた。今まで見てきた類例では水田と台地の間の微高地に住宅が一行に張り付くというかたちが多かったため出た意見であつた。今後この場所を詳細に見ていく際には、台地／水田／住宅／道路／住宅／水田というならば検討に値するだろう。

また、台地の際には、天満宮という神社があつた。この神社の鳥居の前に結界表現が施されてあつた。これは比較的新しいものと思われ、この神社が集落内できちんと管理されていることがうかがえた。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

集落の村域内は、ゴルフ場、水田、宅地、街道、宅地、水田という土地利用となっている。集落の地形は、台地、自然堤防、平野の三つからなっている。以上の土地利用と集落の地形は、ゴルフ場が台地と、水田・宅地・街道・宅地が自然堤防と、水田が平野と、それぞれ対応している。

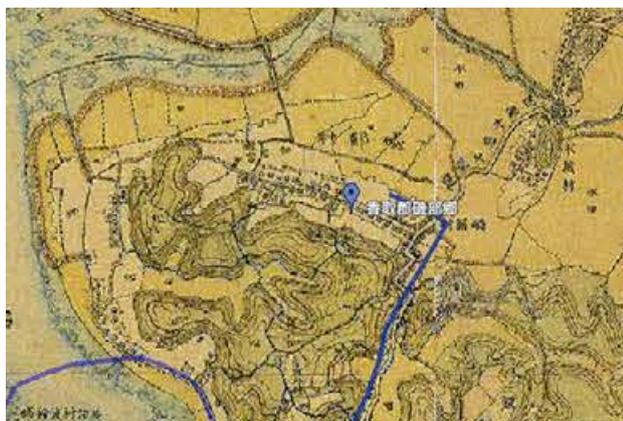


図 迅速測図



図 航空写真（1947年）



図 航空写真（1975年）

#### 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図と1947年の空撮写真を比較すると、利根川、根木名川のあたりが1947年のものでは干拓されていることがわかる。1947年、1975年の二枚の比較では大きな変化は見られない。しかし、1975年のものと現在のものでは台地がゴルフ場として開発されていることがわかる。

#### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 6) 妥当性の検討

- 2-1 集落地・形態の妥当性  
妥当
- 2-2 交通手段・経路の妥当性  
道路に対して両側に配された住居のかたちは要検討
- 2-3 生産立地の妥当性  
妥当
- 2-4 その後の変容の妥当性  
主な生産は水田だと思われるが、村域内部の台地を開発し、ゴルフ場とするなどの変容が確認できる。現状での変容に関しては、生産などの観点から妥当と思われる。

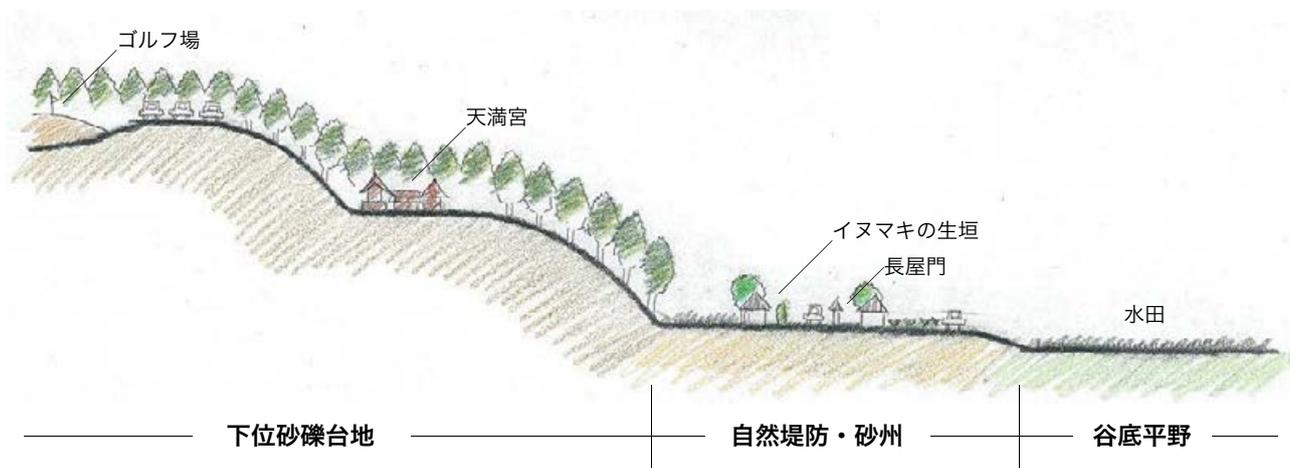
#### 註釈

註1：道路に沿って長く伸びた集落。通常、家屋が道の両側に一列に並ぶ。商業集落的性格をもつ街村に比べ農村的で街路への依存度は低いとされる。

註2：マキ科マキ属の常緑針葉樹。関東南部以西の太平洋岸、瀬戸内海沿岸地方に分布し、特に紀伊半島地方に多く、山陰地方には少ない。耐陰性（日照不足、日光の少ない日陰でも耐えて、生育する性質のこと）が強く、傾斜のゆるい適潤な土壌で生育する。庭園樹、街路樹、生垣、防風防潮林として用いられることが多い。千葉県の木にも選定されている。

#### 参考文献

木内信藏他編『集落地理講座 第1巻 総論』朝倉書店、1957年／竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年／シリーズ自然を読む 樹木の個性を知る、生活を知る ([http://elekitel.jp/elekitel/nature/2007/nt\\_64\\_inumaki.htm](http://elekitel.jp/elekitel/nature/2007/nt_64_inumaki.htm))



## 14 埴生郡酢取郷／成田市北羽鳥

担当：堀井隆秀



図 村域図 googleMap より

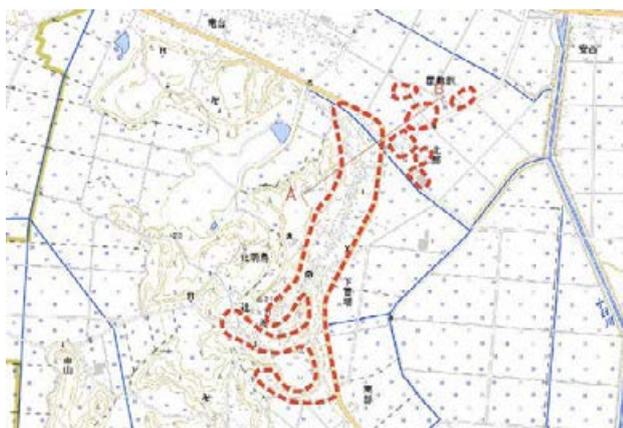


図 地形図 筆者加筆



図 集落内の様子 撮影＝梶尾智美



図 飛び地になっている水塚 撮影＝西吉永一

## 1) 村域の分析

成田市北羽鳥は台地と水田から主になっている。地形図からは台地上は畑、小学校として利用されていることがわかる。集落は台地の東側の街道沿いにある。水田は台地の東側に広がる。北羽鳥の水田は台地とは飛び地であり、台地と水田で集落、県道408号線、下萱場／南部の水田を挟むかたちとなっている。台地の北東には、屋敷割と北部の村域内に飛び地で住居がある。また、台地から南西の中山の村域内には、北羽鳥の飛び地の台地がある。集落北部には利根川が、東部には根本名川が流れる。

## 2) 実見した際の概要

国道408号線の西側に集落が立地していた。そこは台地の東側の際にあたる。街道の両側に住宅が建ち並ぶ列村の形態をとっていた。街道の北側には、酒屋、魚屋、床屋などの商店が並んでいた。屋敷割の村域内に飛び地としてある村域部には、住居が点々と建っていた。それらの中には、母屋よりも2Mほど高さがあり、屋敷林を超えて建物が敷地内に見られた。これらは利根川、手賀沼、印旛沼周辺に多く見られる水塚（註1）と思われる。街道の南端には香取神社があった。ご神木は樹齢700年とされる杉。鳥居は東日本大震災により、かつての木造の鳥居が損傷したため、御影石の鳥居が再建されていた。また、香取神社の祭礼において、五穀豊穡を祈る獅子舞が行われているようであった。（註2）これは成田市の指定無形民俗文化財に登録されている。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

集落の土地利用は、街道沿いの宅地・商店、街道の西に広がる台地上の畑・学校となっている。それらは、宅地・商店は自然堤防上に、畑・学校は台地上に立地し、平野部を水田として利用している。飛び地となっている、水塚を持つ住居も自然堤防上に立地している。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

1947年と1972年の空撮写真の比較をすると、1972年のものには、県道408号が集落の東側に走っていることが確認される。また、1972年のものと現在のものの比較では、台地の北部が開発されていることがわかる。

## 5) 断面ダイアグラム

（図版参照）

## 6) 妥当性の検討

## ・2-1 集落立地・形態の妥当性

台地際の住宅、また、水田内の飛び地も自然堤防上に立地しており、妥当。



図 地形分類図



図 航空写真（1947年）



図 航空写真（1972年）

・2-2 交通手段・経路の妥当性

自然堤防上に道路を通しており、妥当と考えられる。

・2-3 生産立地の妥当性

平野上の水田、台地上の畑などより妥当。

・2-4 その後の変容の妥当性

変容という面では台地の開発が見られるが、その他に大きな変化は見られない。

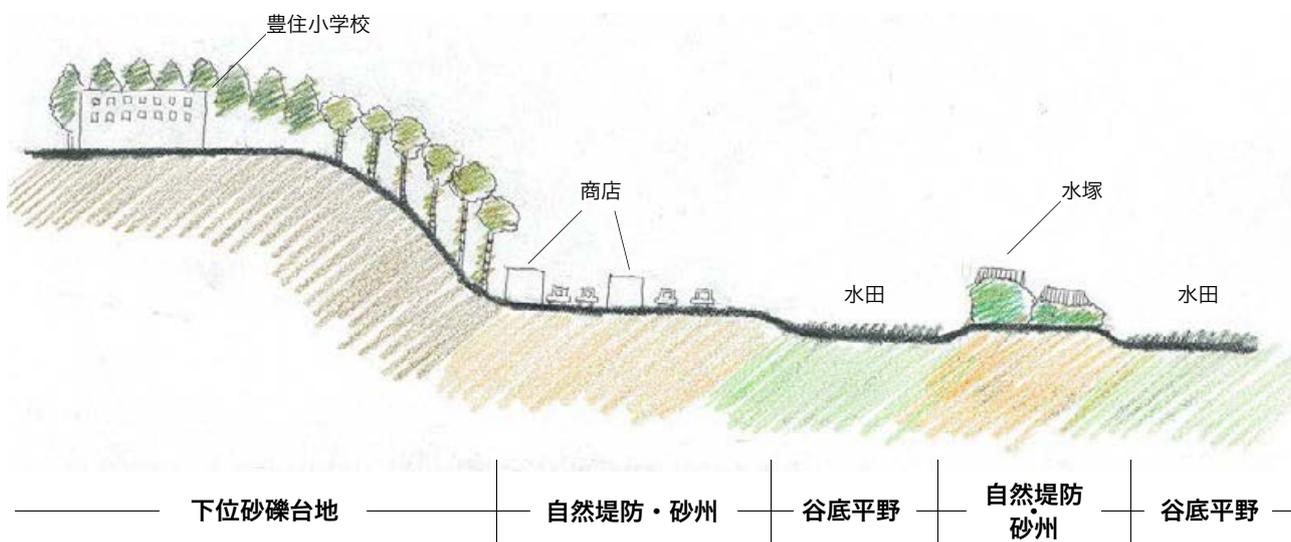
註釈

註1：水塚とは屋敷内にあらかじめ築きあげられた土盛りや、その上に設けられた建物を意味する。水塚の建物内には、水害時の避難生活用に日用の生活道具や食糧、また救助や物資運送のための揚舟を収納していたとされるが、現在は普通の物置となっている。利根川・手賀沼・印旛沼周辺に多く見られる。

註2：北羽鳥の獅子舞は毎年4月5日の香取神社の祭礼に、香取神社獅子舞保存会の人々によって行われているものである。3匹の獅子舞を演じる。これと同様なものが南羽鳥の熊野神社で行われていたが、1960年頃から途絶えている。北羽鳥の獅子舞の由来などを書いた文書や巻物の類は確認されておらず、口伝で伝承されてきたとされる。

参考文献

成田市史編さん委員会編『成田市史 民俗編』第一法規出版、1982年  
 ／竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年  
 ／日本民俗建築学会編『図説 民俗建築大事典』柏書房、2001年



## 15 埴生郡阿佐郷／栄町麻生

担当：堀井隆秀



図 村域図 googleMap より



図 地形図 筆者加筆



図 低地の水田と微高地の住宅の様子 撮影＝西吉永一



図 栄町観光案内板 撮影＝庄子幸佑

## 1) 村域の分析

埴生郡阿佐郷は、現在の栄町麻生に比定されている。麻生は、台地と、台地間に形成されている平野からなっている。台地上は主に畑となっている。また南部の一部はゴルフ場となっている。台地と平野の際に集落が形成されており、平野部には水田がひろがっている。また水田用と思われる水路が多く走っている。

## 2) 実見した際の概要

住宅地が広がる竜角寺台より、北上して、麻生に向かった。台地と台地の間を縫うように道路が走っていた。住居は道路の両側に建ち、その背後には斜面林と台地が広がっていることが確認できた。

住居の立ち並ぶ道を抜けると、台地間に水田が広がっていた。また、水田に使用されると思われる水路も多く走っていた。

集落内では栄町観光案内板を見つけることができた。その中に記載されていた龍角寺は709年建立の県内最古の寺院である。案内板によれば、龍角寺の中心礎の穴の中に水がたまと決して無くなることはなかったと言う。印旛沼周辺の地域は湧き水が多いということで知られている。印旛沼とこの集落の関係については今後検討すべきことだと思われる。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

集落は台地と平野の際に位置しており、自然堤防となっている。平野部には水田がひろがっており、台地上は畑、ゴルフ場として使用されている。街道は台地間の平野、低地部に走っている。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図と1947年、1974年の航空写真の三者の比較では、大きな変化は見られない。1974年と現在の航空写真を比較すると村域南端の台地が、ゴルフ場として開発されていることがわかる。

## 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

## 6) 妥当性の検討

## ・2-1 集落立地・形態の妥当性

集落は、台地と平野の際の部分、自然堤防上に立地しており妥当と考えられる

## ・2-2 交通手段・経路の妥当性

交通経路は谷の底を走っており、妥当と考えられる

## ・2-3 生産立地の妥当性

低地の平野部に水田が広がり、台地上は畑が広がっており妥当と考えられる

## ・2-4 その後の変容の妥当性

台地の一部がゴルフ場として開発されている以外は大きな変化は見られない。印旛沼の治水、開発後の変容など今後検討すべきことだと思われる。

参考文献

成田市史編さん委員会『成田市史 民俗編』第一法規出版、1982年／  
竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年



図 地形分類図

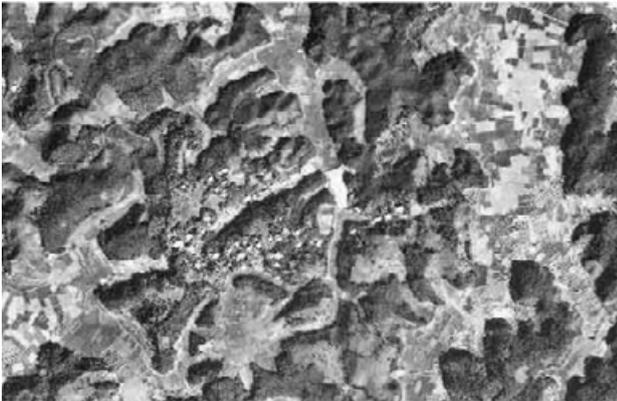
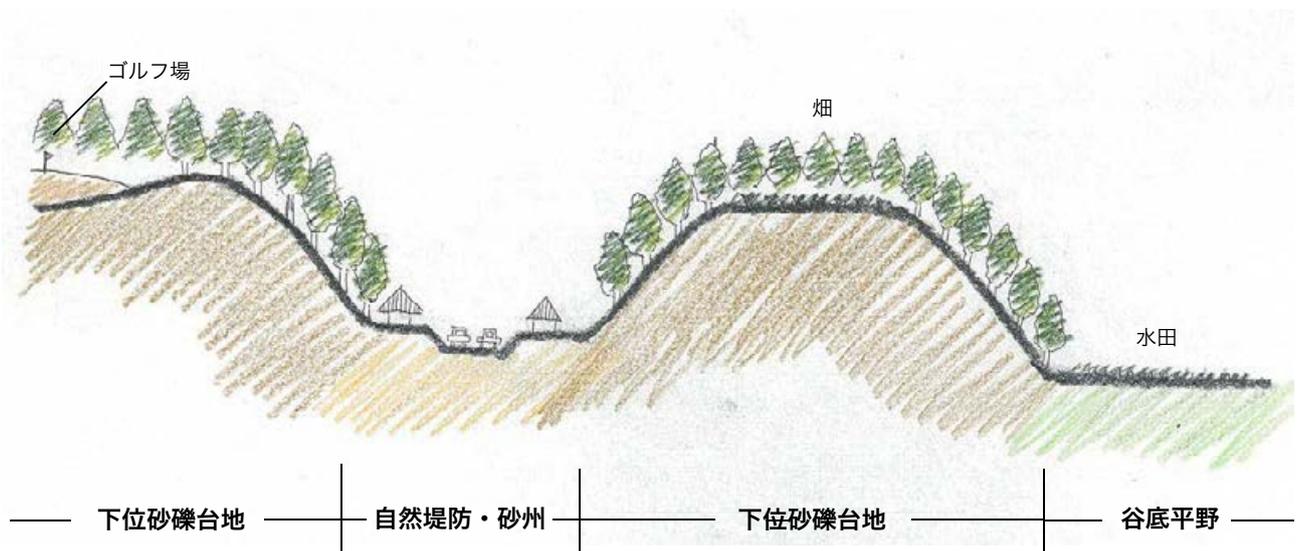


図 航空写真（1947年）



図 航空写真（1974年）



## 16 埴生郡玉作郷／成田市松崎・上福田・下福田

担当：西吉永一



図 村域図 googleMapより



図 集落配置（航空写真） googleMapより



図 辻に建つ神社 撮影：西吉永一



図 辻に建つ神社の神前に供えられた胡瓜 撮影：西吉永一

## 1) 村域の分析

埴生郡玉作郷／成田市松崎・上福田・下福田は、印旛沼の東部に位置し、南部をJR成田線が主要地方道と交差しながら抜けている。地形は下総台地と印旛沼周りの低地に二分され、ほとんどの民家は台地上に密集する。大多数の世帯が兼業農家であり、地方道沿いには小さな商店街が形成されている。下福田は農業地域で、民家は東部の低地に立地する。西部台地は畑に利用されている他は山林である。当地はネギが美味で成田山門前町の蕎麦屋、食堂へよく出荷されたという。

## 2) 実見した際の概要

台地上に発達した集落である。典型的な散居集落であり、集落内に寺院と神社が点在する。神社は比較的集落の中心部に立地し、境界部に寺院が立地しているようである。神社のうち一方は集落を横断する大きな道路の辻に面しており、辻との境界線上には辻札が立てられている。また、その境内を観察すると神前には何者かによって胡瓜が供えられていたことが確認された。（図 写真参照）

また、もう一方の神社（地図記号では神社と表記）は外見としては少々奇異であり、一見神社には見えない。元々は神社であったものが何かに改造されたようである。断定はできないが、本調査中17印旛郡八代郷にて類似例を発見した。そこは近世、寺子屋であったという。故にこの神社も村社から寺子屋のような機能をもった場所へ転用された可能性が考えられる。これについては、もしそうであれば地域の持続に大きく関わる事象であり、今後も更なる検討を要すであろう。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

集落は、台地上に立地している。水田は集落の西側、灌漑された低地と台地東側にそれぞれあるが、西側の水田は感慨によって新たに得られた新田であり、区画整理された地割である。故に東側台地上の水田の方が古来より利用されていた生産地であろう。また低地部で現在は道路となっている場所は過去の航空写真から堤防であった盛土面に道路を通したものと考えられる。またその道から沼側に列状になって民家が並んでいるがこれは過去には舟屋（もしくは納屋）であった可能性が高い。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

既に述べた部分もあるが、1947年時点の航空写真をみると現在よりも印旛沼が大きく広がっており、当郷は水辺に比較的近い地理的条件にあった。それゆえ生産の

1 供え物として胡瓜を神社に献上する慣習は千葉のみならず全国に見られる。通例、夏に収穫された初物を、収穫の感謝と健康祈願の意を込めて神前に供える。



図 奇異な外観をもつ「神社」 撮影：西吉永一

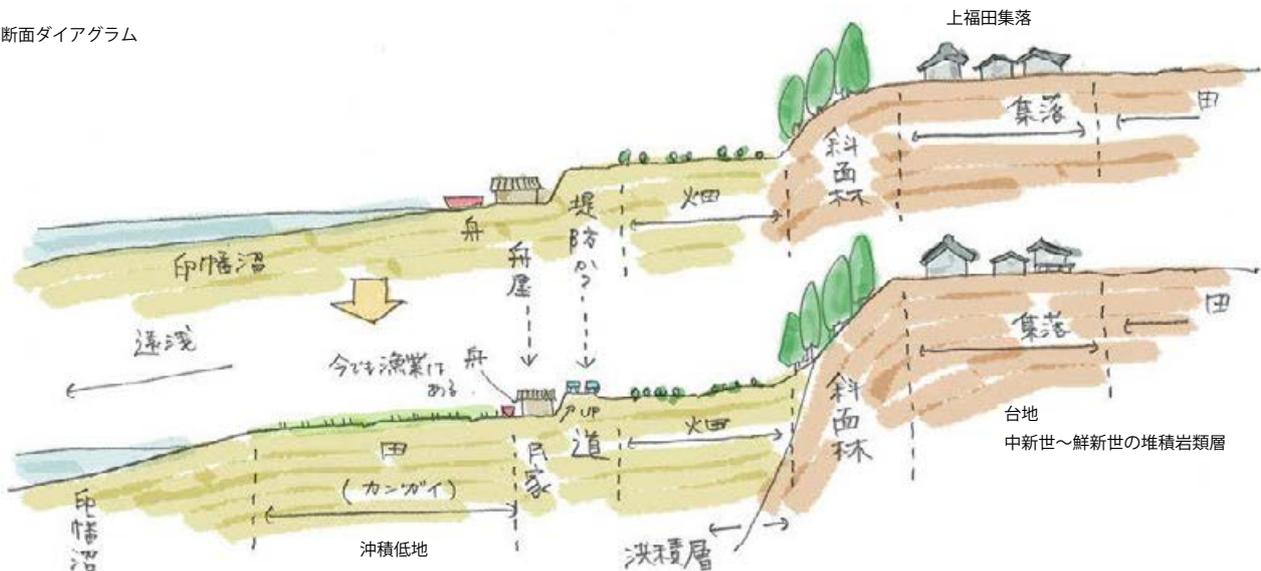


図 一段高い基壇上に建っている 撮影：西吉永一



図 上福田集落 1947年

断面ダイアグラム



いくらかの部分で漁業が担っていた可能性は大きい。現在台地上の集落に漁業の痕跡は見られなかったが、元々農地は持っていたであろうから、半農半漁から徐々に農業を重視していったため感慨による農地化も進んだのであろう。また印旛沼は利根川の氾濫に備えた遊水池としての機能もある。上福田集落が印旛沼の増水から安全な台地上であることは集落立地として妥当であり、現在も安定した生活が営まれていると言えよう。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

- 2-1 集落立地・形態の妥当性  
台地上であり妥当である。
- 2-2 交通手段・経路の妥当性  
集落内を旧道が、台地下を新道が通る。妥当である。
- 2-3 生産立地の妥当性  
低地に水田及び畑地、台地上にも水田を形成している。古くは漁業も営まれていた可能性がある。生産手段は多く、妥当である。
- 2-4 その後の変容の妥当性  
古くから残る自立的な集落部分に関しては、大きな変容は見られない。元は沼地であった部分の灌漑も安定的持続を破壊する開発ではない。総じて妥当である。

### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年

## 17 印旛郡八代郷／成田市八代・船形

担当：堀井隆秀



図 村域図 googleMapより



図 地形図 筆者加筆



図 船形の集落の様子 撮影＝西吉永一



図 北須賀にて祭りの片付けをする人々 撮影＝中谷礼仁

## 1) 村域の分析

印旛郡八代郷は、現在では、成田市八代・舟形の二カ所に比定されている。八代は水田が村域の多くを占める。集落は平野と台地の際に立地している。舟形は台地部分が主な面積を占め、低地部に水田がある。台地の西端の際に集落が立地している。また舟形の村域の最南部には麻賀多神社（註1）がある。

## 2) 実見した際の概要

まず、八代・船形の集落とその周囲を車でまわった。そのまま、八代・船形を含む台地の西部にあたる集落、北須賀を目指した。北須賀の集落内を西に抜けていくと、西端の八坂神社付近で、祭りの後片付けをしていた住民の方々と出会い、話しを伺うことができた。

内容を簡単にまとめると、

- ・台地部はかつてからあった場所であり、それより海側にあたる水田部は干拓された場所として「土手外」として、かつては馬鹿にされていたこと
- ・舟形の歴史は古く、専業農家が多くいること
- ・北須賀では農業を行っている人はほとんどおらず、働きにでていること

などの話を伺うことができた。

土手外には、県立印旛沼自然公園があった。看板には甚平衡渡し（註2）の説明があった。また、公園内には水神社もあり、干拓後の水にたいする意識を表すものだと考えられる。

その後、住民の方々強いすすめもあり、土手上的の道路を抜け、麻賀多神社を目指した。住民の方の話によれば、千葉県内にある麻賀多神社の総社である。神社には、古墳や樹齢1300年の杉などが見られ、古くから存在していることが確認できる。

## 3) 地形（地質）と街道・集落の関係

舟形は平野部、台地から構成されている。平野部に水田が広がり、台地上に集落が立地している。また、北須賀は平野、自然堤防、台地から構成されている。これらには、水田、住宅、畑という構成となっている。住民の方々からお聞きした話によれば、舟形の方が北須賀より古いということである。それらを考慮すれば、より生存する上で安定した場所を、古くからの集落ほど確保していることと考えられる。

また交通経路も、土手の上や、自然堤防上など安全な場所を走らせていたことがわかる。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

迅速測図と1946年の空撮を見比べると、土手



図 地形分類図

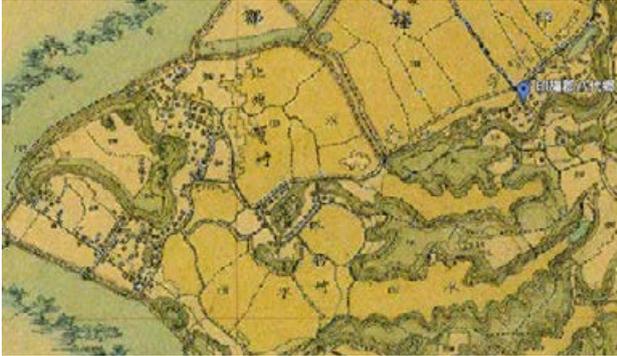


図 迅速測図



図 航空写真 (1974年)

外の水田部が干拓されたことがわかる。1946年と1974年の空撮からは、干拓部が圃場整備されたことが確認できる。1974年と現在のものの比較では、八代・船形の北部に成田スカイアクセスが作られたことがわかる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

#### ・2-1 集落地・形態の妥当性

舟形が台地上に、北須賀が自然堤防上に、集落が立地しており妥当と考えられる

#### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

土手上などを通しており妥当

#### ・2-3 生産立地の妥当性

低地部に水田、台地上に畑など妥当

#### ・2-4 その後の変容の妥当性

干拓した場所での水田の利用、道路の通し方などから妥当と考えられる

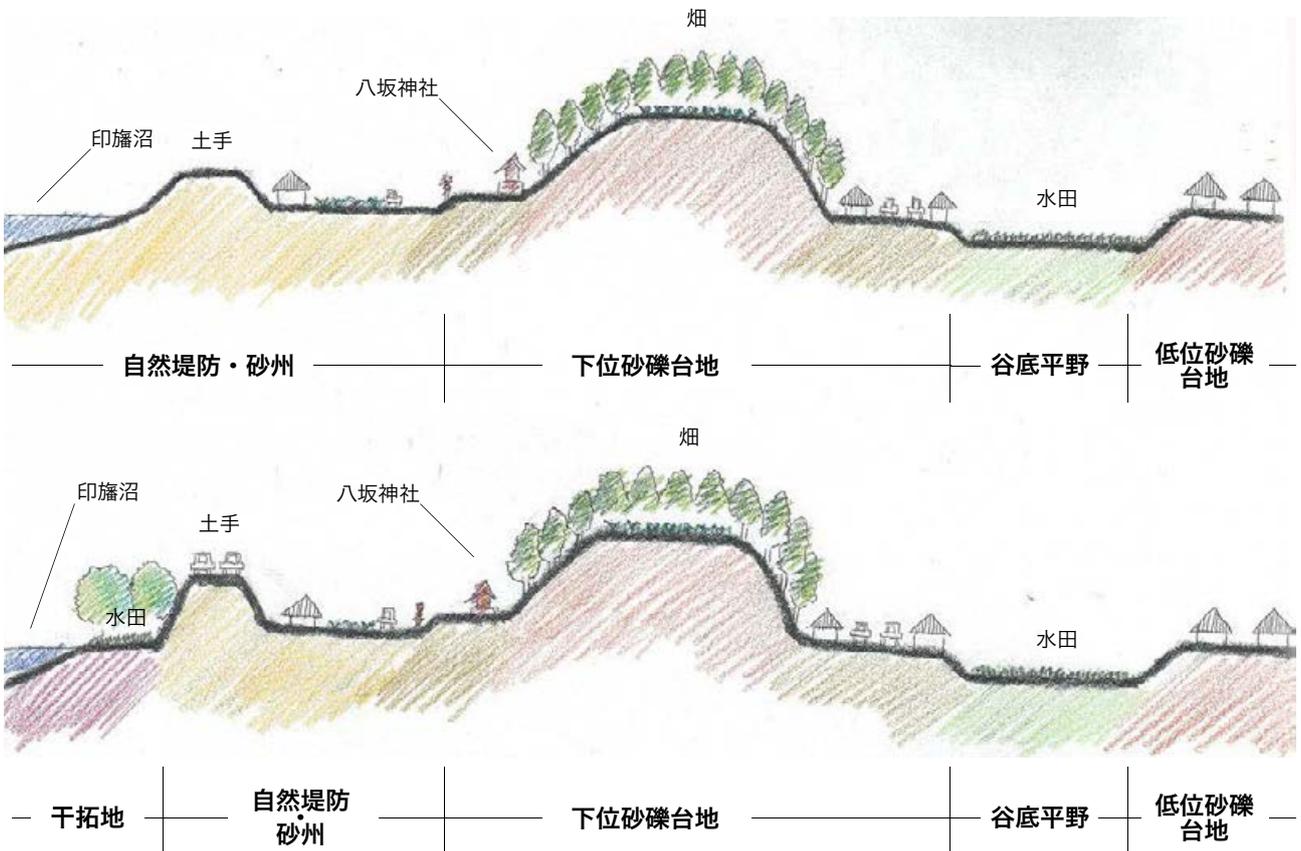
#### 注釈

註1：式内社とされ、延喜式所載の神社である。舟形に隣接する台方に位置している。同様の名称のものが成田市、佐倉市に存在しており、他の地方には見られない神名だとされる。

註2：義民佐倉惣五郎の江戸時代の物語として知られる。農民を助けようとした台方村の名主惣五郎が罰せられ、それを助けた甚平衡が咎められる。その結果捕われた甚平衡が凍える印旛沼に身を投げるという話。

#### 参考文献

成田市史編さん委員会『成田市史 民俗編』第一法規出版、1982年／竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年



## 18 印旛郡吉高郷／印西市吉高

担当：西吉永一



図 村域および村域に関わる水系図 googleMap より



図 村域および村域に関わる水系図 googleMap より (筆者加筆)



図 「吉高の大桜」文化財 撮影：梶尾智美



図 集落道沿いの風景 撮影：高橋大樹

## 1) 村域の分析

印旛沼両側台地は気候も温暖で、古くから人々の生活にとって最良の地であったといわれている。沼周辺の台地は標高 30 メートルほどで、師戸川など小河川が台地の奥深く樹枝状に入り込み、複雑な地形を呈する。沼縁の低地や小河川地域には干拓・土地改良事業によって美田が開け、稲作地帯となっている。鉄道の便に恵まれず、久しく陸の孤島であったが近年には千葉ニュータウンの一角として宅地化が進む。吉高はほとんどが稲作中心の農業地域。県道成田印西線が通る。毎年 4 月中頃に見事な花を咲かせる大桜が天然記念物としてある。村域は印旛沼縁の低地から台地までのびており、斜面林と宅地のほか広大な水田が広がっている。

## 2) 実見した際の概要

低地より台地上の集落へあがっていくと道は林地のへりに沿うように、列状に並んだ民家と並行に走っている。吉高地区内には地域構造改善センターがある。これは公民館のような地域住民の集会所兼農業などの指導センターの役割をもつもので、全国にいくつか存在する。自治体単位で設置されるが全ての自治体にあるわけではないため、この立地が如何なる理由によるものか、今後検討に値するだろう。本稿ではそこまで分析が至らなかった。千葉県では吉高のほか、野木崎、公津などに構造改善センターの存在が確認された。

また同地には中世、吉高氏の城が築かれていたという。しかし、台地状の地形のなか、正確な位置は調査によっても必ずしも明らかでない。

## 3) 地形(地質)と街道・集落の関係

台地上に位置する集落である。集落として明快な構成はとっていないが、概して台地中央の水田用地をよけて、斜面林際に沿って民家が並んでいる。道路はその民家前に沿ってつくられている。

## 4) 空撮写真を主体とした編年比較

印旛沼周囲の集落がいずれもそうであるように、過去の印旛沼であった低地部分が灌漑によって水田となっている。同地は稲作地域であり、その低地部分ほとんどは

1 1984 年刊行の『印旛村史』によると、「城址は掛鼻山と呼ばれる突出台地上にあり、本丸址が宗像神社の裏手(北側)にあったと伝えているが、掛鼻山一帯が土砂採取のため削平されていて、遺構を把握することができない」という旨が記されている。また、1990 年から 1991 年にかけて実施された県教育委員会の悉皆調査(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布報告書 1』)においても調査されているが、現在城跡に関連すると思われる地形が殆ど消失している状況にあり、当時の姿を正確に復原することは困難と思われる。『利根川図誌』に記されているように、千葉勝胤の影響下にあった吉高代介そのものが実在していたのかどうかについては定かではないが、『印旛村史』においても述べられているように、この吉高の地に在地領主的な豪族階層が居住していた可能性も一概に否定はできないのかもしれない。



図 吉高部分 (図上部が南) 『利根川圖志』(1855年)

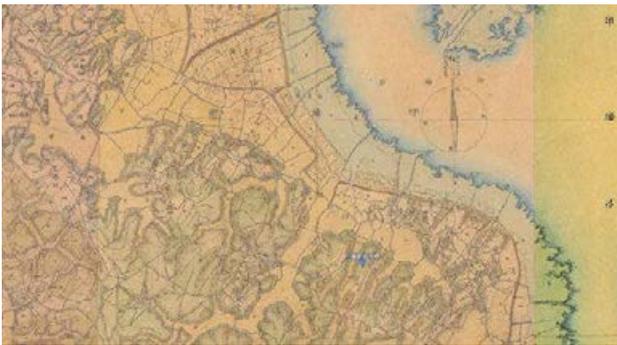


図 吉高部分迅速測図



図 吉高 1947年

水田に利用されている。また台地上は 1947 年の航空写真と較べても、若干の宅地化が進んだ以外はほとんど変化のないことがわかる。また 1947 年当時は低地部よりも台地上の水田の方が面積は大きく、過去には台地上が主要な生産地であったことをうかがわせる。『利根川圖志』にも「吉高」の地名は見られ、また中世には城も築かれていたことから、軍事的な要所であった可能性も考えられる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 6) 妥当性の検討

#### ・2-1 集落地・形態の妥当性

台地上の集落であることは印旛沼周辺の他集落の例にもれず、防災面からも妥当であると考えられる。

#### ・2-2 交通手段・経路の妥当性

過去は陸の孤島であったといわれるが、現在は背後に県道成田印旛線も開通し、その面でも宅地が増加しているのではないかと考えられる。妥当である。

#### ・2-3 生産立地の妥当性

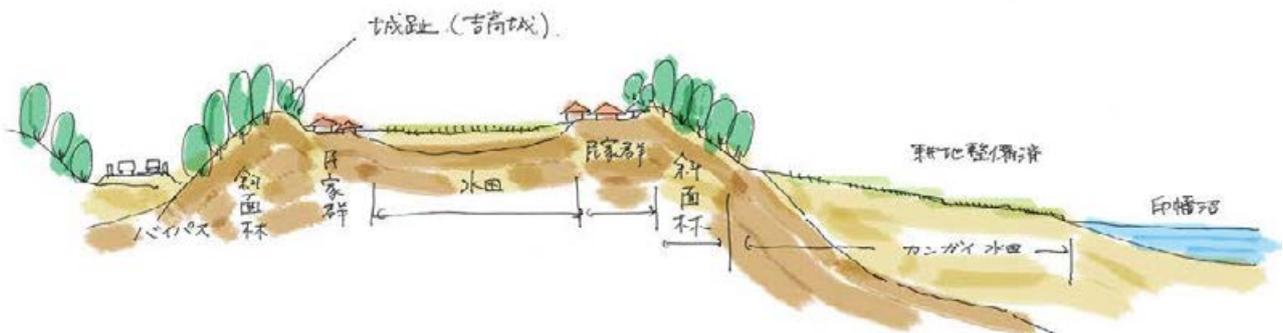
生産地は広大であり、ほとんどは水田に利用される農地である。台地上の水田と低地部分の水田を比較して変遷を辿れば、地域の変容の一面が明らかになるかもしれない。ともあれ、当地の生産立地としては極めて妥当である。

#### ・2-4 その後の変容の妥当性

生産地の増大、また交通網の整備として集落背後、台地の境に県道の開通が見られる他、集落自体に大きな変容はない。生活は農業生産を中心に持続していると考えられ、妥当である。

### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』角川書店、1984年  
『印旛村史』千葉県、1984年



# 千葉県における千年村の地形立地と水系との関係

○梶尾 智美\*  
 高橋 大樹\*\*  
 桃井 佳奈子\*\*\*  
 木下 剛\*\*\*\*

## 1、研究背景・目的

千年村とは、千年を超えて集落が存続してきた可能性のある地域のことで、地形・地質といった集落の基盤としての「環境」と、それに適応する集落の「構造」、またそこに展開される「コミュニティ」を三位一体のものとして捉え、総合的に地域を評価することを意図した概念である<sup>1)</sup>。一般に、「集落の立地には、居住者の生産基盤によっても異なるが、基本的には日当たりがよく、飲料水が得やすく、自然災害が起こりにくく、外的的侵入に対して安全な場所が選ばれる。」<sup>2)</sup>とされており、集落の立地はその環境条件に大きく左右されるといえる。そこで、本研究は、集落の生存・生産基盤となる地形立地と水系に着目し、両者の関係を、千年村を対象に検証することを目的とした。

## 2、研究方法

### 1) 千年村の抽出方法

古代より続く集落を特定する方法として、角川日本地名大辞典<sup>3)</sup>から平安時代に成立した古代律令制における行政区画である国・郡・郷の名称を網羅した時点である和名類聚抄に記載されている地名を抽出した。また、抽出された記載地名をさらに角川日本地名大辞典の地名編で検索し、各郷名の説明文から現在における比定地を特定した。この方法は早稲田大学建築史学研究室中谷礼仁らの研究グループが考案したものである。

### 2) 調査の実施

以上の方法で抽出された千葉県内の千年村89カ所すべてについて図上分析及び現地調査を行った。具体的には、千葉県の一級水系及び二級水系の分水界を特定し、各河川の流域と千年村の位置関係を把握した。次いで、20万分の1の土地分類図<sup>4)</sup>を用いて千年村のマクロな地形分類を把握したうえで現地を調査し、確認された微細な地形の実態について、齋木の分類(図-1)<sup>5)</sup>に従って区分し、水系と地形立地の関係について分析した。

## 3、結果

以上の方法にもとづき調査を行った結果、わかったこととして大きく以下の三点があげられる。

### 1) 水系に近接した千年村分布

千年村は河川や湖沼沿いに分布しており、水系に近接した地形立地という傾向が確認できる(図-2)。

### 2) 地形・地質の際部に位置する千年村分布

\*千葉大学園芸学部緑地環境学科 \*\*千葉大学大学院園芸学研究科  
 \*\*\*千葉大学園芸学部緑地環境学科  
 \*\*\*\*千葉大学大学院園芸学研究科

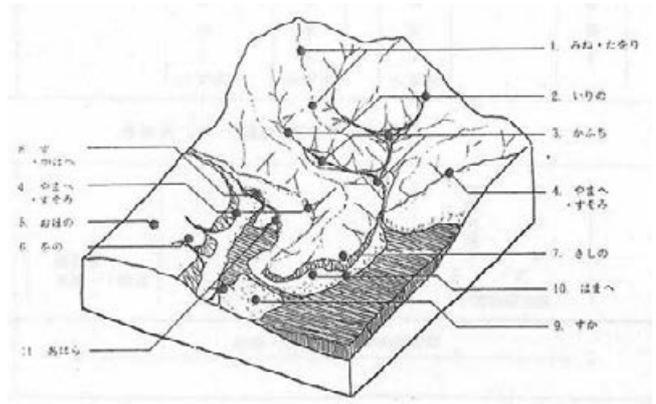


図-1 集落立地のブロック・ダイアグラム<sup>5)</sup>

山地・丘陵地と台地・段丘や低地との境界域、山麓部の扇状地や緩斜面または台地段丘崖端に形成された集落である「やまへ・すそみ」の分布が多く、沖積低地と洪積台地の際に千年村の分布が集中している。また、この際部においては表層地質も異なっている。

### 3) 河川の流路延長と千年村分布数・地形立地との関係

河川の流路延長とその流域における千年村分布数及び地形の多様性には一定の相関が認められた。すなわち、流路延長が長くなるほど千年村の分布数も多く、地形立地も多様となる。同時に、流路延長が長いものほど下流部にまで千年村の分布が広がっており、地形立地の多様性も高いということがわかる。例えば内房・安房地域における小糸川・養老川での流路延長と千年村の分布数や、外房地域での栗山川の地形立地の多様性においてその傾

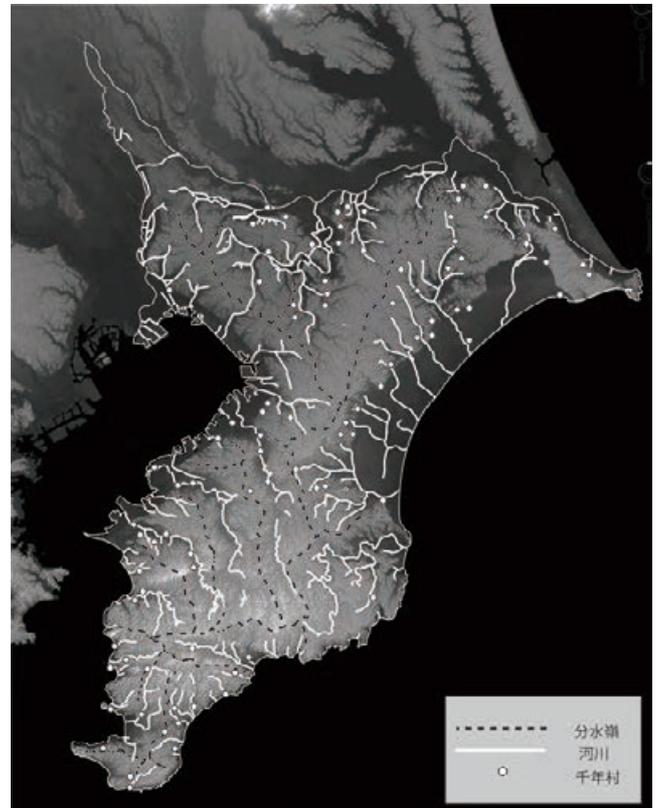


図-2 千葉県の水系と千年村の分布

表-1 千年村の地形立地と水系との関係（外房地域の例）

流域名	支流	流路延長(km)	流域面積(km <sup>2</sup> )	和名類聚抄 郡名	現在の地名	山地・丘陵地			台地・段丘			低地			境界域				
						尾根・山腹型緩斜面	山間谷底平野		中・高位面		低位面	微高地	人口地形						
						1.みね・たをり	2.いり	3.かふら	4.おほの	5.をの	6.きしの	7.す・かはへ	8.すか	9.はまへ		10.あはら	11.やまへ・すそみ		
南白亀川	小中川	17.498	117	1山辺郡高文郷	山武郡大綱白里町大綱											○			
	赤目川			2山辺郡草野郷	山武郡大綱白里町草野												○		
				3長柄郡柏原郷	茨原市本納													○	
一宮川	阿久川	30.327	222	4長柄郡兼松郷	茨原市太田						○								
	一宮川			5長柄郡別部郷	長生郡長柄町別部														
	三途川			6長柄郡車持郷	長生郡長南町長南				○										
	鶴枝川			7城生郡坂本郷	長生郡長南町坂本													○	
夷隅川	落合川	65.063	299	8夷隅郡長狭郷	いずみ市上布施							○							
作田川		18.218	104	11山辺郡菅原郷	東金市家之子											○			
木戸川		20.9	72	12武射郡大蔵郷	山武市松尾町上大蔵						○								
				13武射郡新居郷	山武郡芝山町新井田													○	
栗山川		33.743	292	14武射郡片野郷	山武市松尾町猿尾												○		
				15武射郡長倉郷	山武郡横芝光町長倉													○	
	高谷川			16武射郡押原郷	山武郡横芝光町下吹入							○							
	高谷川			17武射郡加毛郷	山武郡芝山町大里								○						
				18匝理郡幡間郷	山武郡横芝光町原方														○
				19匝理郡石室郷	山武郡横芝光町小川台														
新川	大判椀	20.4	121	20匝理郡須賀郷	匝理市横須賀												○		
				24海上郡神代郷	香取郡東庄町大久保													○	
				25海上郡石井郷	旭市岩井					○									
				10山辺郡阿山郷	東金市東金														○
その他				26海上郡横根郷	旭市横根											○			

向が顕著である（表-1）

#### 4. 考察

水系に近接する千年村の立地は一見すると水害に見舞われ、生存基盤という視点からは危険なように思われる。しかし同時に水は生存・生産基盤に欠かすことができないものである。そのため、千年村は水資源を得ることができる水系に近接して分布しているのではないかと考えられる。例えば養老川流域の旧海上郡島穴郷や栗山川流域の旧匝理郡幡間郷は河川の下流域に位置する千年村であるが、そのような場所に分布している千年村は自然堤防や砂州といった微高地部分に立地していた。従って、その地形立地により水害の被害を免れ現在まで持続してきたのではないかと考えられる。

沖積低地と洪積台地の際部に千年村の分布が集中している要因としては、地質・地盤が安定しており、山地・丘陵地と台地・段丘や低地との境界域、山麓部の扇状地や緩斜面または台地段丘崖端では比較的水を得やすく生産にも適しているためではないかと考えられる。

短い河川ほど千年村の分布数が少なく中～上流部に分布している傾向がある要因としては、河川の堆積作用が小さいため地形立地の多様性が小さく生存・生産基盤の安全を確保しにくいこと、生産基盤を支える水資源を得にくいことが考えられる。

例外として、夷隅川流域の夷隅郡長狭郡をあげることができる。夷隅川流域は延長距離が65.063kmと長いにも関わらず、分布している千年村は1つしかない。これは、夷隅川流域は断層地帯に位置しており地殻変動が激しいと考えられる地域であるため、生存・生産基盤の安全を確保しにくいのではないかと考えられる。

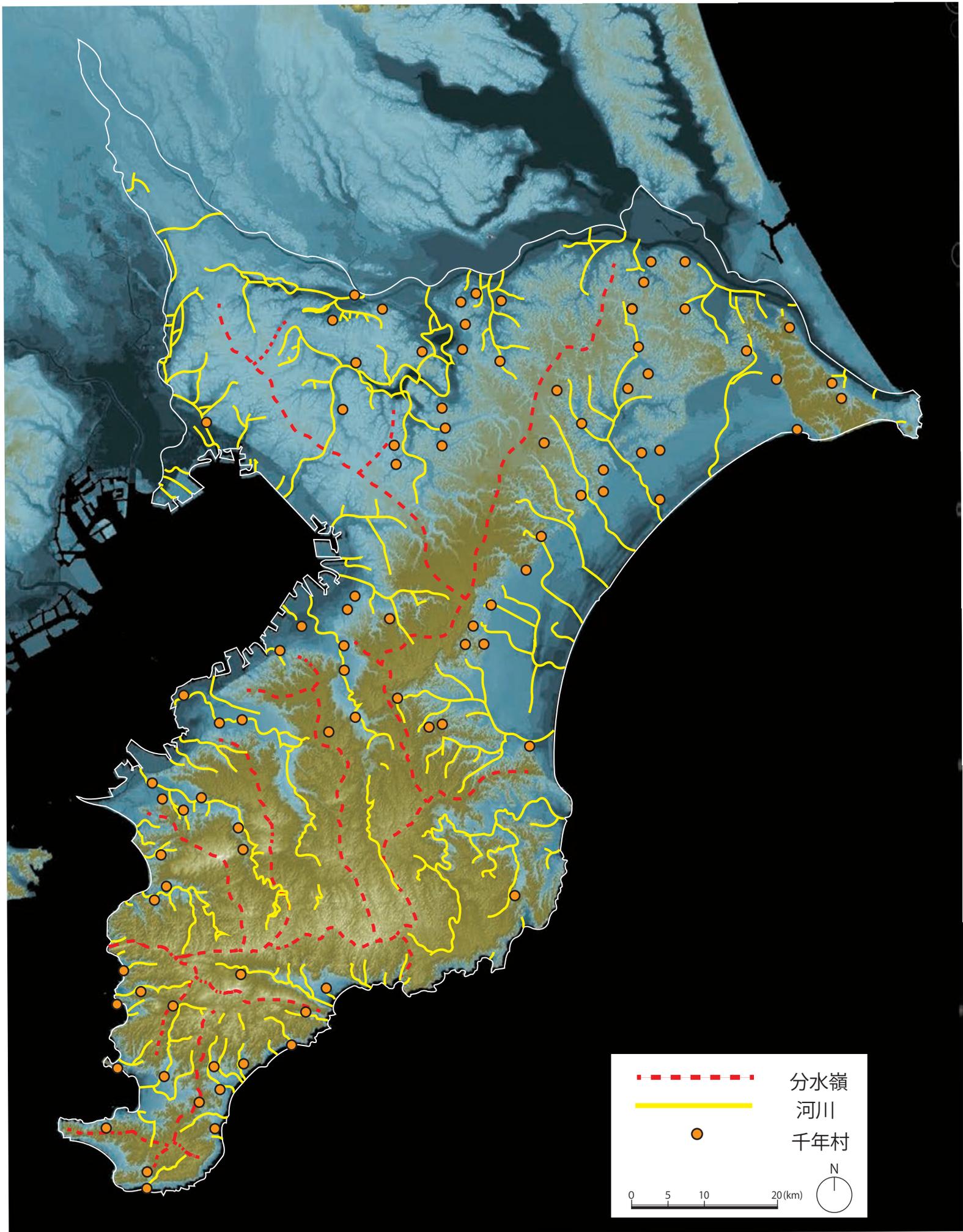
流路延長・流域面積の大きな河川は川の浸食・運搬・堆積作用も大きく地形立地の多様性が大きい。そのため多様な生存・生産

基盤と生活様式が生まれ、古くから集落が持続してきたのではないかと考えられる。

今回は20万分の1の土地分類図を用いて中地形で大きく分類し、さらに斎木の研究に照らし合わせて小地形で分類する方法をとった<sup>6)</sup>しかし、水系及び地形立地は今回扱ったものよりも大規模な平野、台地といった大地形や微地形、極微地形といった異なるスケールで考察することもできる。そのため、スケールの違いによる生存・生産基盤となる水系及び地形立地と集落の持続性との関連性についても調査・研究を進めていく必要があるだろう。また考察内容の裏付けをとっていくことが今後の課題となる。

#### 補註・引用文献

- 1) 千年村の調査研究は、早稲田大学建築史研究室の中谷礼仁を中心として組織された研究グループにより、文化庁の助成研究「文化財の確実な継承と地域活性化活用のための防災指針の作成と普及」（座長：長谷見雄二）の一部として開始され、本研究も同助成を受けて実施した。東北地方の千年村の所在地同定とその存続条件に関する調査を端緒として、その後、筆者らの研究室も参加して千葉県内の千年村に関する同様の調査を行ってきた。現在、関西地方の研究者らの参加も仰ぎ、全国の千年村の所在地同定を開始したところである。詳しくは以下のウェブサイトを参照のこと。http://rhenin.wordpress.com/2011/09/16/古凡村調査開始（文化財の確実な継承と地域活性化/
- 2) 建築大辞典：彰国社（1974） p.696.
- 3) 角川日本地名大辞典12：角川書店（1984）
- 4) 土地分類図（地形分類図）千葉県（1972）：経済企画庁総合開発局（1972）
- 5) 斎木崇人（1986）：農村集落の地形立地的条件と空間構成に関する研究
- 6) 日本応用地質学会（2000）：山地の地形工学 p.7,8



図．千葉県の水系と千年村の分布

## 1. はじめに

千年村としての現東金市（下図右）は下総台地から九十九里へとくだる地域の上中流に位置している。木下剛「下総台地・九十九里平野における抄郷の地形立地類型」（Kinoshita 2012、下図左）における同地の4つの立地類型、

I. 谷戸または中位段丘面

II. 台地のふもと

III. 低地の砂丘上または自然堤防

IV. 海岸後背の砂丘上のうち、I、IIの特性に見合った地域である。

現東金市は、古代から、中世、近世をへて現在に至るまで下総の代表的都市として存続してきた。

この論においては、以上のような性格を持つ東金市を例として、都市の編年的展開と立地との関係について考察することを目的とする。



## 2. 分析の視点

千年村の悉皆調査である「疾走調査」の途上より、成員の間から〈セット〉という言葉が使われはじめた。これは「村落の定常性を保証する自然環境から工作物にいたるまでの決定的な生存連関」として定義づけることができるであろう。村落には必ずその継続的生存を決定づけるセットが存在している。

また成員の検討によって、村落は中心部のみならず、その中心を支えている一定の下部構造的地域が存在していることが指摘された。村落／都市における境界（旧村域、その集合体としての現行政区画）は、実は生存連関を地域としてもっともよく規定するという見解は、今後も重要な指標となろう。

このような地域としてのセットをここでは〈生存連関域〉と称することとする。

村落／都市の編年的展開と立地との関係について考察するにあたって、以上のような生存連関域が、編年的整理によっても可能か否かを検討することが、今後の千年村の評価手法をめぐって重要なものとなっている。

本論は以降、二つの検討を試みる。

一つは生存連関域の編年分析である。ここでは幕末から現在までを試みに対象とした。

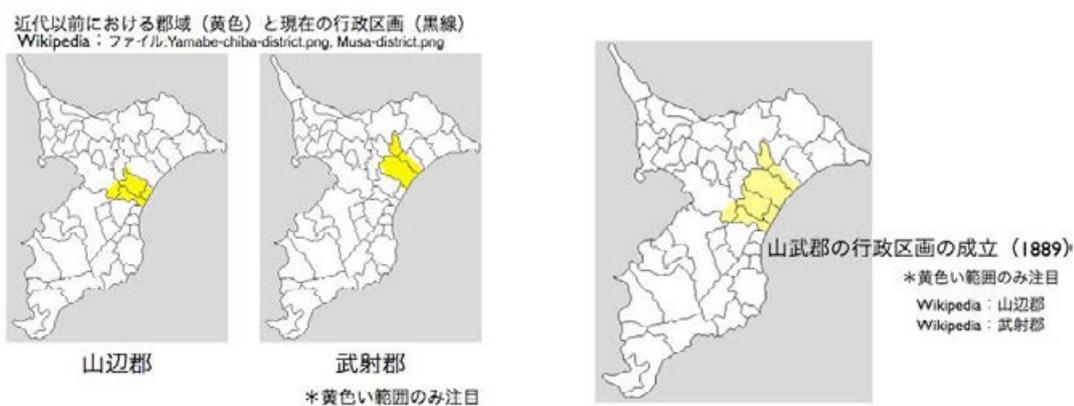
もう一つは以上の生存連関域を前提とした、具体的なセットの編年的分析である。

### 3. 現東金市における生存連関域の編年分析

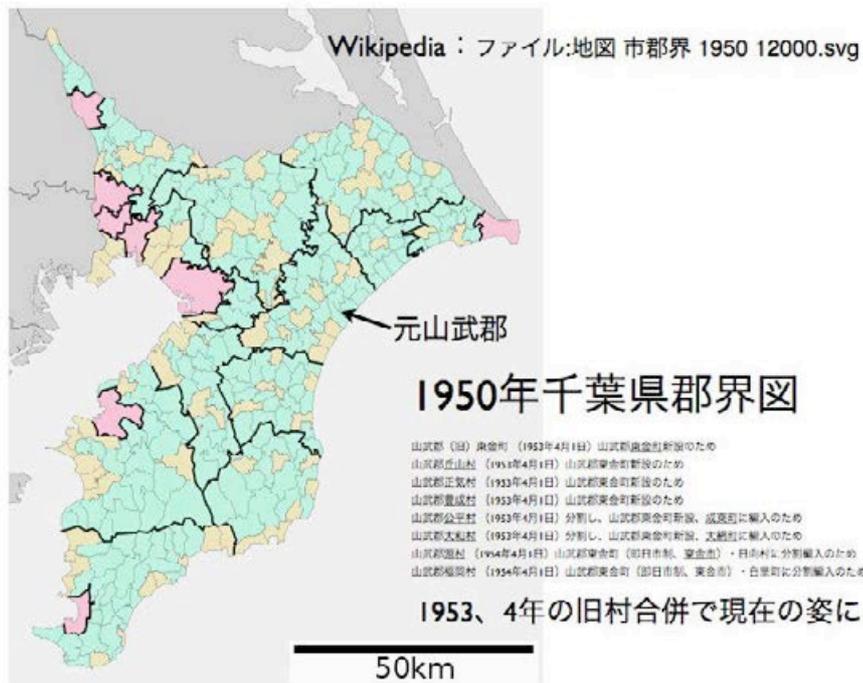
現東金市は、東金市は、東京都心まで約 60 キロメートルであり、東関東自動車道～京葉道路～千葉東金道路、あるいは JR 京葉線直接乗り入れの東京行き快速電車等により都心への交通利便性も高く、現在でも発展中の都市である。人口は約 6 万人である（2011 年現在）。

現東金市は、1954 年に市制を開始した。その近代における生存連関域の歴史をふりかえると、1889 年（明治 22 年）4 月 1 日 - 町村制の施行により東金町、台方村、田間村、北之幸谷村、川場村、堀上村、押堀村、大豆谷村が合併し、山辺郡東金町（初代）が成立した。以降の合併の過程を図示することとする

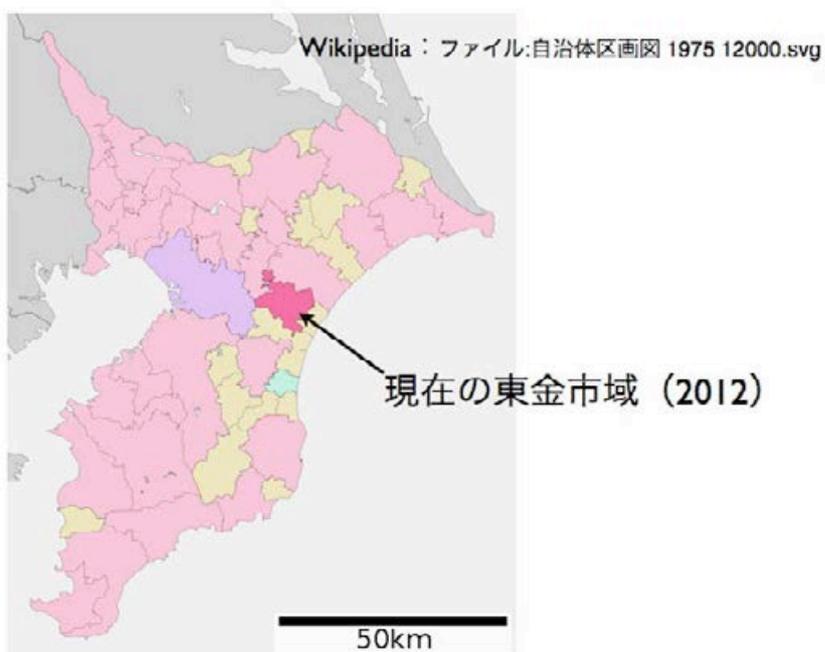
この合併の過程を図示することで、東金市の生存連関域としての特徴を挙げることにする。

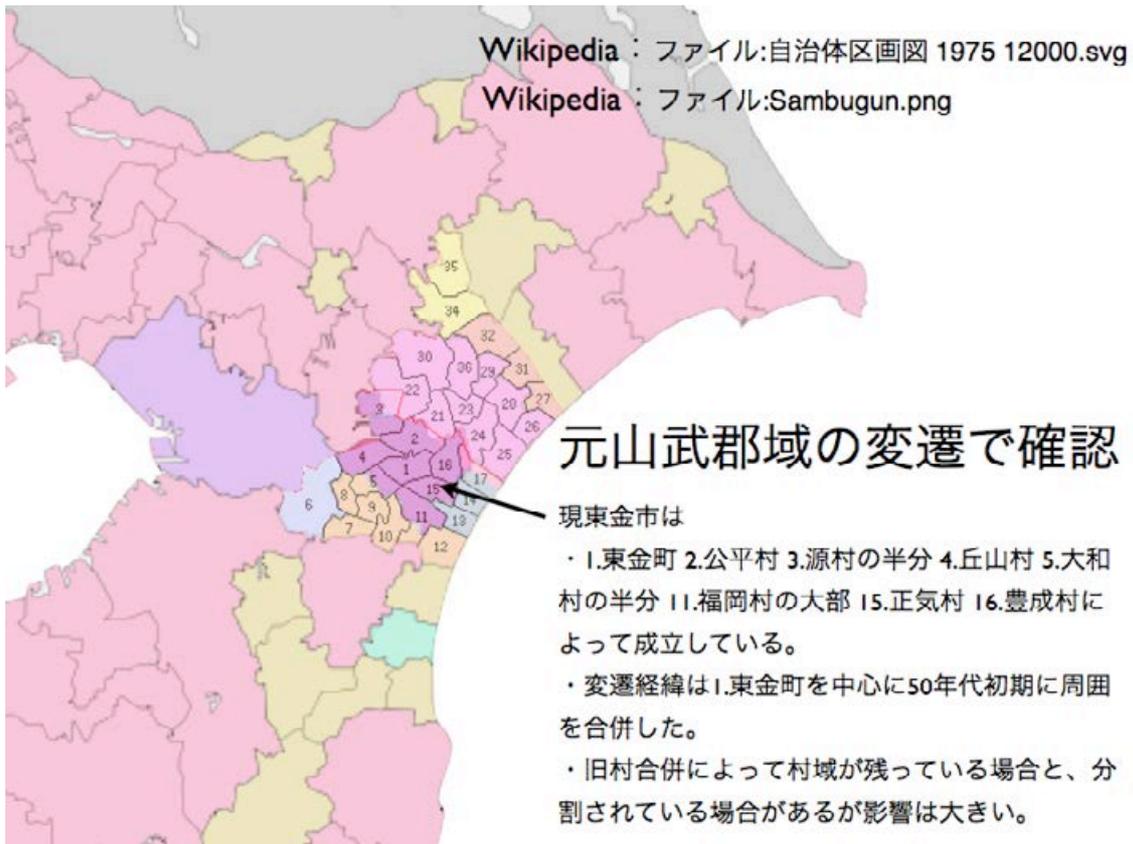


・1897 年（明治 30 年）4 月 1 日 - 山辺郡が武射郡と統合して山武郡となり、その郡界は次図のように 1950 年初頭まで変化しなかった。



その後の、1953年（昭和28年）4月1日 - 丘山村、正気村、豊成村、公平村の一部（道庭、家之子、求名、松之郷）、大和村の一部（田中、福俵、山口の一部）と合併し、改めて東金町（2代目）が発足した。さらに1954年（昭和29年）4月1日 - 東金町が源村の一部（上布田、極楽寺、三ヶ尻、酒蔵、滝沢）、福岡村の一部（下谷、上谷、東中島、一之袋、二之袋、大沼田、小沼田、砂古瀬、依古島新田、西中）を編入のうえ市制を施行し、東金市となった。（以上 Wikipedia 東金市より）





試しに、1950年代前半までの山辺郡の郡界と現在の行政区画を重ねたのが上図である。図のように、東金市が旧東金町を中心に、周囲の村を合併して現在の姿にいたった連関域のかたちの経緯が判明する。

ただしその合併には、旧町村域をそのまま合併したものの他に、新たに別の市と切り分けて合併する過程を辿ったケースもある。

図中の各村の名称にしたがえば、現東金市は1950年代の合併前における・1. 東金町 2. 公平村 3. 源村の半分 4. 丘山村 5. 大和村の半分 11. 福岡村の大部 15. 正気村 16. 豊成村によって成立している。その特殊な性格を次に推測した。

興味深いのは、3. 源村の半分を合併させた例である。町制施行前の明治初期の山辺、武射各郡の境界線をさらに重ねあわせた地図を作成してみると、同村の分割合併は、以前の山辺、武射各郡の境界線にほぼ同一に分割されたことが推察された。この先祖帰りのような現在の分割がいかなる理由によるものなのか判然としない。生存関連域上の理由による境界線の引き直しの推測は可能であろうし、今後検討に値する課題である。小結として、東金市は中世、近世以来の政治文化的中心であった東金町を中心として1950年代に周囲の町村を合併するかたちで誕生した。その際に、若干の郡域の境界引きが変更され合併されるにいたった。その理由については興味ある検討課題となるだろう。(下図)



#### 4. 現東金市における各時代におけるセットの特徴

政治文化の一翼を担っていた同地域の歴史は複雑である。今回いくつかの年代に分けて、それら時代のセットを描こうとしたが、その全貌については、現調査段階では無理であった。行うべき時代区分と調査可能であった時代の分析結果について以下記す（…以下は東金市に該当する事象）。

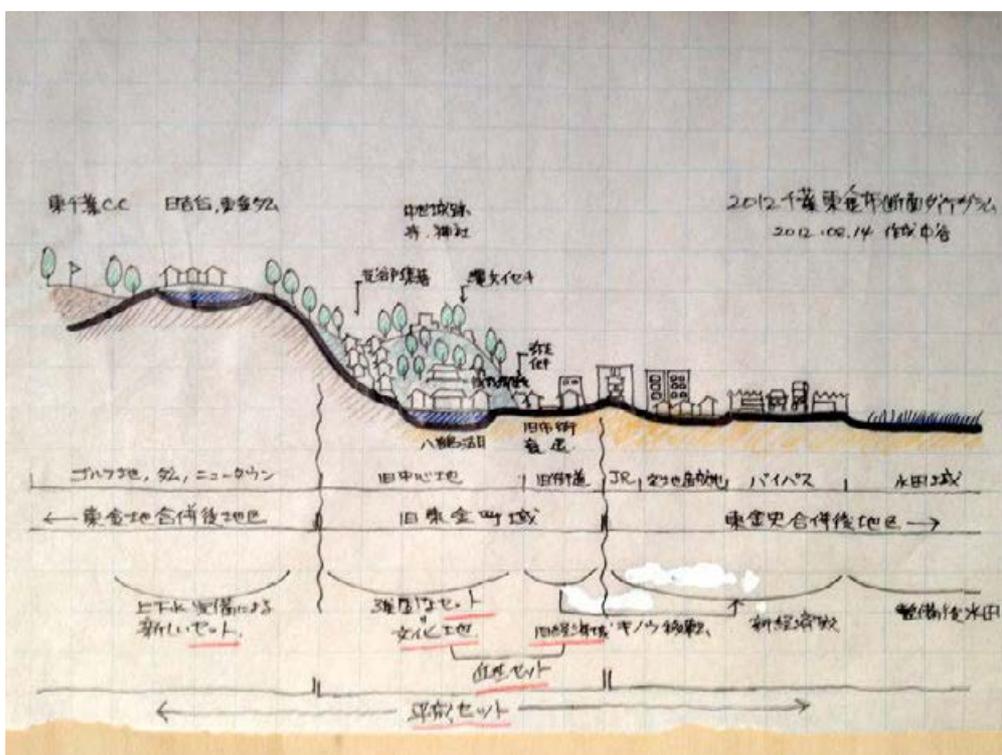
##### 4-1. 行うべき時代区分

なるべく社会と環境と生産経済活動における基本的な時代区分を考える際には、

- ・ 縄文時代 狩猟生存+肥沃な限られた丘陵地
- ・ 弥生時代・古墳時代・古代 耕作生存+台地と平地での灌漑活動の開始+村の開始  
 …東金市においては道庭遺跡、家の子古墳、油井古塚古墳群、平安時代集落跡、鉄製産跡
- ・ 中世から近世 交換経済/文化の台頭+街道の発達+農水産の生産力の増加+町の開始  
 …溜池開発、寺跡、城跡、東金御殿、御成街道、御成新道、宿場町の形成
- ・ 近代 資本主義経済の完成+産業構造の変革+各種インフラトラクチャの大刷新+都市の開始  
 …鉄道の開通（明治42年）、昭和30年代の両総用水事業の進捗に伴う農業基盤の整備、昭和40年代の国道126号東金バイパスの整備、ダム開発開始、昭和50年代の東金駅東口土地区画整理事業の完成による新市街地の形成、千葉東金道路の開通、東千葉カントリー倶楽部（現クラブ、昭和52年）開設、昭和60年代以降の大規模住宅開

発、公共下水道の供用開始、平成の城西国際大学の開学（4年）、日吉台住宅地の完成（4年）利根川の水を安房へ運ぶ（房総導水路）中継池・東金ダム（ときがね湖）完成（6年）、千葉東テクノグリーンパークの完成（9年）が地形ならびにその開発と生存の変容を関連づけるためには大きな指標であると思われる。

4-2. 近世から1950年代までと60年代以降の東金市におけるそれぞれのセットについての分析  
 ここでは現段階で立地場所が把握しやすい近世から近代にかけてのセットを編年し、それらの組み合わせが当時においてどのように妥当性をもっていたか、過去のセットが現在のセットとどのような関係にあるのか、を検討する。

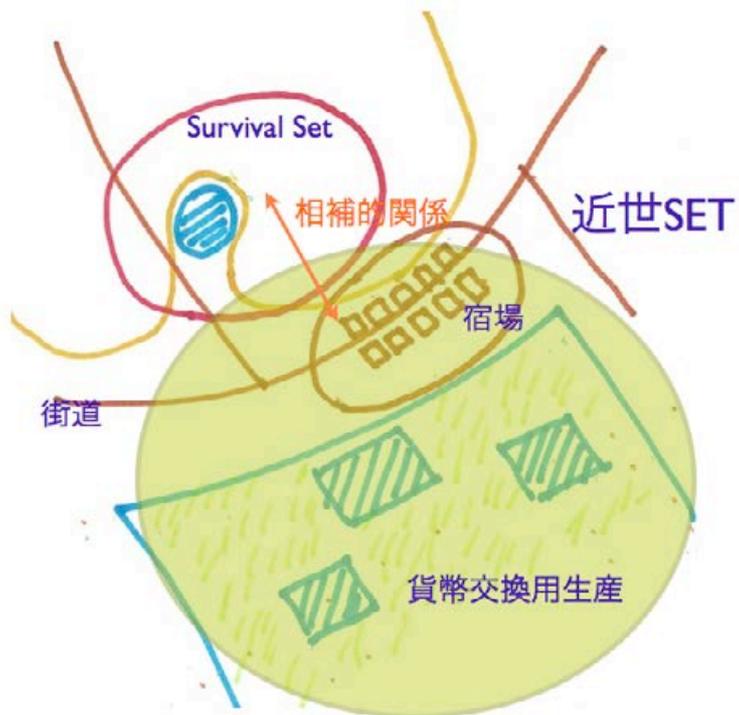


上図は東金市中心部を中心とした断面ダイアグラムである。台地部、中心部、低地部よりなっている。それぞれの地域の施設の存立年代とその関連性の強さをおおよそ眺めてみると、編年的特徴を読み取ることができる。

#### 4-2-1. 中心部セットの特性

幕末までに完成していた中心部の旧東金町域は、遡行的に推測すれば、二つの時間層の異なるセットによって構成されていたと思われる。一つは、縄文以来の古くからの文化的遺構（縄文遺跡、弥生遺跡、中世城址、御成御殿跡、寺社施設、溜め池、谷戸集落）であり、そこに近世による街道開発による交換経済地である街道筋が組み合わせられた。つまり

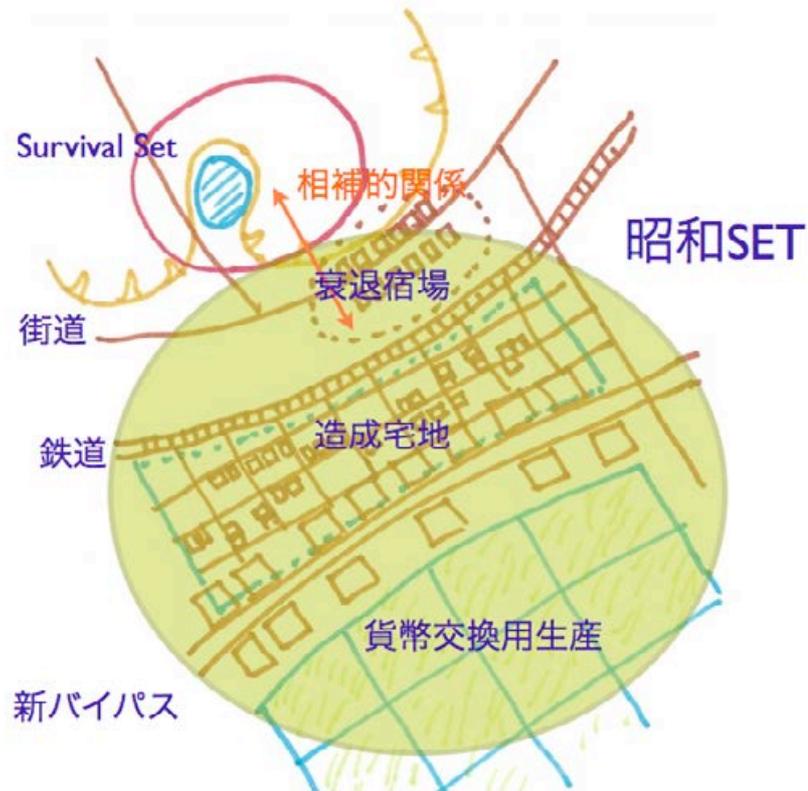
中心部（旧東金町）＝近世セット＝完結可能な自給経済的セット＋交換経済セットである。



4-2-2. 低地部の特性

中心部東 (図右部分) では JR (オリジナルは明治後敷設) → 圃場整備後の水田 (昭和30年代)

→バイパス完成（昭和40年代）宅地造成地（昭和60年代）によって構成される。これらはいずれも東金市成立以降に開発されたものである。交換経済用農作物の生産地（圃場後水田）、交換経済地（バイパス）と都心通勤用造成宅地によって構成される。いずれも交換経済の発展をベースとしたもので、この地域だけではセットとしては成立せず、中心部もしくは他の地域とのセットによって成立している。



#### 4-3-3. 台地部の特性

中心部西（図左部分）はもっとも新しく開発された地域である。千葉東金道路の開通し、昭和40年代には東金ダム計画が進行し、昭和50年代に東千葉カントリー倶楽部、平成においてニュータウンと工業用地が整備された。この地域も低地部と同じく、交換経済の発展をベースとしたもので、この地域だけではセットとしては成立しない。低地よりさらに、その関連性をより広域の遠隔地の関係において成立させている。



#### 4-3-4. 小結

以上を要するに、現状の東金市は歴史的文化的セットの緊密な八鶴湖の周囲をプライマリーな自立的セットとし、

近世以来の経済発展のもと他の地域との結びつきを生み出すための交換経済セットとの組み合わせによって構成されている。

そして交換経済セットは時代によって移行していることが明らかである。近世セットにおける交換経済の場であった旧街道筋は衰退し、その代替が、市制施行以降、低地部の開発に求められた。

さらに平成期において開発が進んだ台地上の開発は、東金市を間接的に潤すようなより遠隔地的な交換性を強めている。その自立性はもっとも低い地域といえるだろう。

#### 5. 結論

今回の目的は、千年村分析のために二つの編年的方法を考えることであった。

一つは、村域分析をベースとした生存連関域の編年であり、もう一つは、具体的セットの編年的考察であった。

特に後者については、筆者の検討素材収集能力の限界があり、近世までに出来上がったセットと近代以降の新規開発物件との組み合わせの妥当性を検討するまでで終わってしまったが、詳細調

査における各地の評価分析手法として提案してみたものである。

以上

## 疾走調査に関するまとめ

庄子幸佑

### 1 目的

点在する千年村を悉皆的に調査する。抄郷の立地傾向や集落構造を複数の千年村の通覧を通して把握することが目的である。

### 2 方法

#### ●調査準備

##### ・調査担当者

調査担当者を決定する。調査担当者は、中谷先生、木下先生とよく相談の上、調査地や調査日程、宿泊場所、レンタカーの手配など調査全体の統轄を行なう。早稲田大学・中谷研究室と千葉大学・木下研究室から一名ずつ選出するのが好ましい。

##### ・調査地の決定

2012年度は、千葉県千年村を対象に疾走調査を行った。千葉県全体には、明確に比定できる千年村として、89の村を数える。それらを地形や地勢、水系、おおまかな文化圏などから3つに分割した。「内房・南安房」「九十九里」「印旛沼」である。

※調査前の動き方については、別資料「疾走調査作業フロー表」（千年村ゼミ中谷研究室作成）に記した。

#### ●調査中

##### ・調査員の動き

調査員は、複数の車に分乗する。班の編制に関しては、おもに調査準備の段階で編制された班をベースとしている。各員は、調査中にGPSを所持し、移動ログを記録する。また、調査中に撮影した写真とGPSデータを、時間を軸に照合することで、調査後にそれらの写真の撮影地を判定できる。

各自、適宣記録写真・映像メモなどは取るが、それとは別に当日の大要的な調査記録として、車載カメラを用いて、車前方の風景を撮影する。本ゼミでは、

HERBERT RICHTER社製の「RICHTER SUCTION MOUNT MINI 2 VIDEO SET」を利用した。これを前面ガラスに設置し、iPhoneアプリ「Gorillacam」を利用し、10秒毎にシャッターを切る設定にする。撮影しているiPhoneが着信すると、アプリが停止し撮影が中断されてしまうので、航空モードにする。

またこれらとは別に、フリーカメラマンの大高隆氏も調査記録映像を撮影している。そのデータに関しては、カメラアーカイブの状態千年村ゼミで購入したハードディスク内に保存されている。利用方法については、今後検討を要する。

##### ・調査対象

一度の疾走調査で実見する千年村は、広域的に近接する村を選定する。おもに移動経路としては、古くから確認できる街道を選ぶことになる。

一日に実見する千年村は、水系をキーワードにグルーピングする。一日に余裕を持って実見できる千年村の数は、およそ8~10村。

その日に実見することを決めた千年村に対して、それぞれ住所を設定しておく。設定しておく場所に関しては、おもに集落の中心となる神社や寺などである。とくに神社や寺には参拝者用の駐車場が設置されてあることが多いので、便利である。

### 3 調査野帖

#### ●調査目的

#### ●調査行程および参加者

#### ●各千年村野帖

##### ・1枚目

-古代郷名／比定される現在の市町村名

-千年村に関するメモ

-迅速測図

-千年村選定基準／調査記録記載項目

##### ・2枚目

-現在の地図

-断面ダイアグラムスケッチ用スペース

##### ・3枚目

-村域図

-現在の衛星写真

##### ・4枚目

-過去の衛星写真

#### ●旧版地図

『日本図誌大系 関東Ⅱ（普及版）』を用いる。

#### ●参考文献

各千年村の調査野帖を準備する段階で調べた文献から重要とおもわれるものを採用する。野帖全体が厚くなりすぎるのを避けるために、2~3文献程を収録する。

### 4 調査結果

今年度は、千葉県千年村を対象に3度の疾走調査を行った。

疾走調査①安房・南房総

疾走調査②九十九里

疾走調査③印旛沼

それぞれの調査成果については、調査記録として千年村ゼミのメンバーがまとめている。

ここでは、その記録のフォーマットについて記しておく。

#### ●調査記録

#### ●調査に関するデータ

それぞれの調査に関するデータは、古凡村サーバーdata→「2012調査のフォルダ」に、「20120511-13\_千葉〈古凡村〉疾走調査①内房・南安房」「20120615-17\_千葉〈古凡村〉疾走調査②九十九里浜」「20120721-22\_千葉〈古凡村〉疾走調査③印旛沼」と明記されたフォルダにまとめられている。また中谷研究室の千年村ゼミ棚に、各調査で持参したLAWフォルダが収められている。LAWフォルダの中には、調査中に手に入れた資料や、会計に関する領収書などが入っている。

# 11. 印旛郡印旛郷 / 佐倉市飯田 ナンバリング 古代郷名 / 現在市町村名

0 100 500 1000M

## 千年村に関するメモ。

西印旛沼東部南岸の東西に延びた地域で、内郷台南側の崖下に位置する。純農村地帯。地形的特徴や生業。変容など地図・地誌などからわかる情報を記す。佐倉城主所替の御用荷物積場で、印旛沼岸の交通要衝であった。

は近世に佐倉城が築かれ、この一帯の政治・経済の中心地として栄えた。昭和40年飯田で耕地整理中、印旛沼の水を谷津の上手に汲み



- 2. 地形・地質による集落・交通決定の妥当性の有無
- 2-1. 地形・地質からみた集落立地・形態の妥当性

- 2-2. 地質・地形からみた交通手段・経路の妥当性

### 千年村選定基準

- 2-3. 地質・地形からみた生産立地の妥当性

- 2-4. 集落の形態及び交通手段・経路のその後の変容の妥当性

- ・村域の分析

### 調査記録記載項目

- ・実見した概要

村域の分析

実見した概要

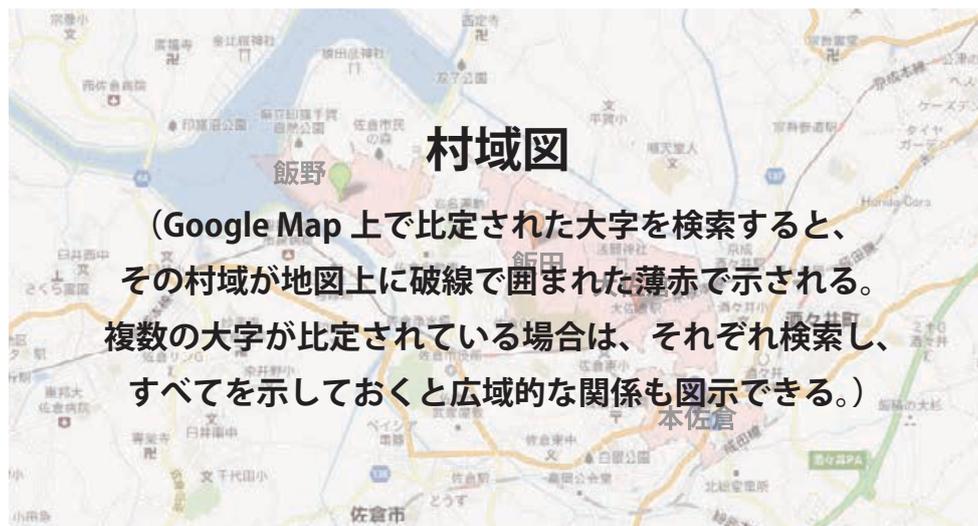
- ・地形(地質)と街道・集落の関係



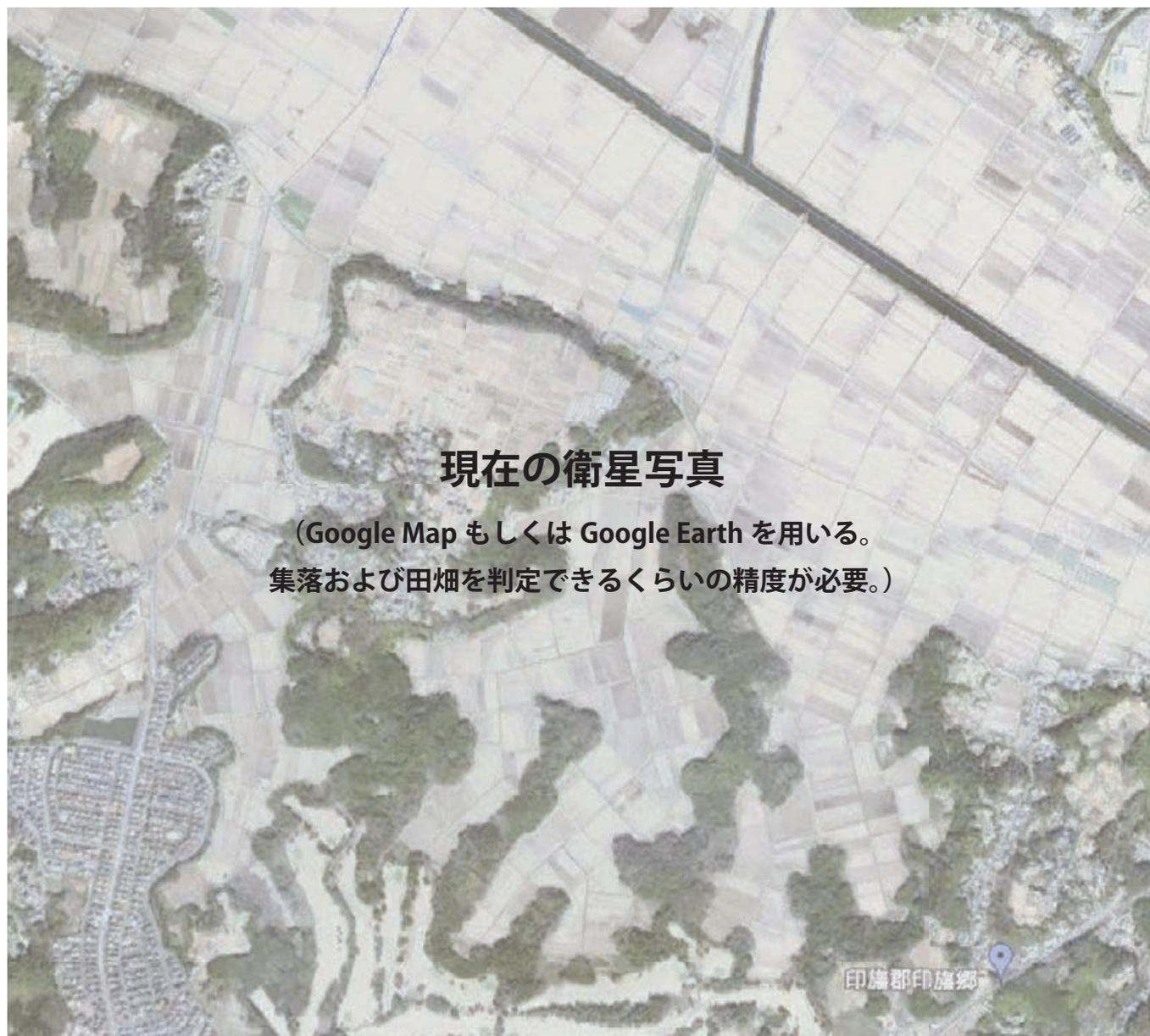
断面ダイアグラム

メモ

断面ダイアグラムスケッチ用スペース



村域図



現在の航空写真



### 過去の航空写真

1947年

(国土地理院が web 上で展開する航空写真画像情報所在検索・案内システムを用いて、戦後間もなくと国土開発が盛んに行なわれた 1970~80 年代の写真を採用する。)



1979年

# 調査作業フロー表（暫定）

調査担当者は本フロー表を逐一確認し、作業を効率的にすすめること

※本フロー表は必要に応じて改訂可能、ただしゼミ員へ確認を取ったのち、データは新しいバージョンとして別名保存していくこと

